

アルファベットと発音 (2008 年 12 月 27 日版)

Alphabet and pronunciation (always under construction)

辻野匠 / TuZino Taqumi (*family personal*) / [tsüz̥/z̥ino̥ tak^w(u)m̥j̥i]

目次

I.	はじめに	5
II.	ラテン文字と発音記号	5
III.	ラテン文字の歴史	6
IV.	いろいろなラテン文字	6
IV. 1	もっとも初期のラテン文字とアルファベット輸入の法則 1 既存のアルファベットで表現できない時にそれらしい字を連 ねてとりあえず対処する	6
IV. 2	そもそもの起源および法則 2 完全に適合する文字体系はないので、近いもので転用する . . .	7
IV. 3	ラテン文字前史および法則 3 借入した文字から転用ができない場合に至って既存の文字か ら作成する	9
IV. 4	補足	10
V.	発音概論	10
V. 1	音声と音素, 音韻	12
V. 2	音節	13
V. 3	モーラ	14
VI.	子音 consonant	15
VI. 1	k	15
VI. 2	g と ng(鼻濁音)	16
VI. 3	硬口蓋化 palatalisation	17
VI. 4	シと sh	18
VI. 5	サ行の歴史	19
VI. 6	ジと j	20

VI. 7	Burg, Bury, Burgh	21
VI. 8	ザ行	22
VI. 9	チと ch	22
VI. 10	英語でも tya がチャ, dya がヂャ, sya はシャ, zya はジャ . .	24
VI. 11	ツと ts	24
VI. 12	ヒと h	26
VI. 13	フと f	27
VI. 14	ホ, ハヒフヘホー	29
VI. 15	ハ行転呼音	30
VI. 16	ニと ni	30
VI. 17	ン N	31
VI. 18	L と R	34
VI. 19	日本語にない th [θ]	37
VI. 20	X	38
VI. 21	p と q—循環する子音	39
VII. 母音 vowel		42
VII. 1	母音の分類	42
VII. 2	ア	43
VII. 3	イ	43
VII. 4	ウ	44
VII. 5	エ	44
VII. 6	オ	45
VII. 7	発音記号の限界	45
VII. 8	日本語における母音の無声化	46
VII. 9	大母音推移 Great Vowel Shift (GVS)	47
VII. 10	母音交替	48
VII. 11	上代特殊假名遣	49
VII. 12	漢字音が導入した拗音 (憶測)	50
VIII未稿		51
IX. 正書法と発音		52
IX. 1	現地語尊重主義と漢字の読みかた	52
IX. 2	外来語・外国語のカナ書き	53
IX. 3	日本はニッポンかニホンか	54
IX. 4	ローマ字 (日本)	55
IX. 5	黎明期のローマ字 (日本)	63
IX. 6	「おう」を ou とするのは間違ひか?	64
IX. 7	ローマ字文の読み難さと情報量あるいは冗長性	65
IX. 8	フランス語正書法改革とその失敗	67
IX. 9	正書法論争の特徴	70

IX. 10	韓国語のローマ字表記	71
IX. 11	固有名詞ローマ字の分類	73
IX. 11.1	エンドニムとエクソニム	73
IX. 11.2	転写と翻字	74
IX. 12	日本語におけるローマ字の分類	78
IX. 13	秩父丸と群馬	81
IX. 14	私の推薦するローマ字: 復古假名遣翻字の日本式ローマ字綴	82
IX. 14.1	表記の保存的特性	83
IX. 14.2	文字は第一に語を示すのであって音はその次	84
IX. 14.3	Y と W 日本式へのささやかな不満	86
IX. 14.4	変則日本式 ジャ=Zja は親へボン式? 実は反へボン式	89
IX. 14.5	歴史と現在	89
IX. 14.6	外来語の表記と新しい発音	90
IX. 14.7	音図	92
IX. 15	カナ表記	95
IX. 16	誰のためのローマ字か	97
IX. 17	イタリア語風ローマ字 (私案)	98
IX. 18	オランダ的ローマ字	100
IX. 18.1	蘭学式ローマ字	100
IX. 18.2	オランダ語風ローマ字	101
IX. 19	変音符付日本式ローマ字 (思考実験)	101
IX. 20	変音符付へボン風ローマ字 (思考実験)	102
IX. 21	Tokyo は日本語のローマ字表記か英語か	102
IX. 22	真正英語式ローマ字	104
IX. 23	へボン式ローマ字およびポルトガル式ローマ字の擁護	108
IX. 23.1	発展へボン式 (私案)	108
IX. 23.2	通用へボン式—その強さの源	112
IX. 24	日本のローマ字表記が統一されないわけ	113
IX. 25	日本のローマ字表記が統一されない深層	115
IX. 26	IPA 風ローマ字 (試案)	117
IX. 27	通用へボン風翻字 (案)—もっとも広まりさうなローマ字案	118
IX. 28	現代かなずかい用へボン式翻字の長音 (案)	121
IX. 29	長音表記の逆転的発想: 長音が主 (案) 思考実験	123
IX. 30	フランス語風ローマ字表記	125
IX. 31	ギリシャ文字による日本語のローマ字表記	126
IX. 31.1	古典式ギリシャ語準拠の日本式音韻転写規則	126
IX. 31.2	現代式ギリシャ語準拠のへボン流単音転写規則	128
IX. 32	ローマ字表記 revisited	129

XI. 発音記号の表記方法 ($\LaTeX$ による)	131
XI. 1 付 $\LaTeX$ における発音記号表記	131
XI. 2 TIPA のインストール	132
XI. 3 主な記号	132
XI. 3.1 子音	132
XI. 3.2 母音	133
XI. 3.3 Misc	133

起筆 2006-07-15

I. はじめに

本稿では [1] 発音と綴り (ラテン文字) についての蘊蓄と [2] 正書法についての意見を述べる. また, [3] 巻末に L^AT_EX における IPA 発音記号の記述方法を述べる.

II. ラテン文字と発音記号

ラテン文字は言葉を表記する文字としてヨーロッパでは古くから用ゐられてをり, 現在ではヨーロッパのみならず世界中に広く普及してゐる便利な文字である. ところが便利な一方¹で, 文字と発音との関係は各言語ごとに異なつてゐる. であるから, 「ラテン文字で, かう綴ったから, かう読んでくれるだらう」といふことは期待できないのである.

ラテン文字は, あまりに広範囲に, そして古くから使用されてゐるために, 発音と文字との関係が言語を越えて一意に決まつてゐない. ラテン文字を使用する言語の話者は, ラテン文字で書かれたトークン (綴り) を, その言語の読み方で読むため, 同じ綴りなのに発音は全然違ふといふことがよく起きる. たとへば jo といふ字に対して, 英米人とフランス人はジョに近い音を発し, ドイツ人やオランダ人, イタリア人は, ヨーに近い音を発する. スペイン語話者ならば喉が鳴るやうなホーの音で発声する. jo といふ綴りで, ある特定の発音を示すことはできない. ch も悲惨である. chi はドイツ語では喉が鳴る「ヒ」(cho だと喉が鳴る「ホ」), フランス語では「シ」, スペイン語では「チ」, ポルトガル語では「シ」(種子島時代は「チ」だった), 英語では多くの場合, 「チ」であるが仏語借入語は「シ」, ギリシャ語借入語は「キ」となる.

このやうにラテン文字は言語によって発音が異なる. そのため発音を表記するために特別な記号を用意する必要がある. IPA(International Phonetic Association, 国際音声学会) では IPA(International Phonetic Alphabet) を設定し, 発音に対しては IPA の発音記号で記述することになつてゐる.

しかし, この IPA の発音記号を計算機上で書くのは, たいへん面倒で, なかなか綺麗に印字できないといふ欠点をもっている. いつて見れば, 新しい外国の文字で書くやうなものだからである. しかし, L^AT_EX を使えば多少は楽に記述できるようになり, しかも, とても綺麗に印字できるといふ長所をもつ. L^AT_EX での印字方法を巻末に記載する.

¹あるいは逆に, 便利だからこそ, みんなが使ふので, それぞれ独自の進化を遂げて分化してしまふ.

III. ラテン文字の歴史

ラテン文字はアルファベットのことでローマ字とも呼ばれる。英語に限る場合は英字とも呼ぶ²。ちなみに、英語の alphabet は (表音の) 文字といふ意味で、たいていは英字の ABCDEF... を意味するが、必ずしも英字だけを意味しない。たとへば、ギリシャ文字は Greek Alphabet だし、ロシア・ブルガリアなど東スラブで用ゐられるキリル文字は Cyrillic Alphabet (発音はキリリックではなく、[sírɪlk]) といふ。カナは Kana Script と呼ばれることが多いが、ハングルは Hangeul Alphabet と呼ばれることもある。英語では英字は明示的にラテン文字 Latin alphabet, ローマ字 Roman alphabet と云ふ。Alphabet はギリシャ文字の最初の二文字 Alpha と Beta に由来する。

IV. いろいろなラテン文字

いろいろなラテン文字 (1-2 段は ASCII に含まれる, 3 段以降は諸言語のラテン文字)

Aa	Bb	Cc	Dd	Ee	Ff	Gg	Hh	Ii	Jj	Kk	Ll	Mm	Nn
Oo	Pp	Qq	Rr	Ss	Tt	Uu	Vv	Ww	Xx	Yy	Zz		
Āā	Áá	Àà	Ââ	Ää	Ãã	Åå	Ææ	Ćć	Čč	Êê	Çç	Chch	CsCs
Đđ	Ðð	Ďď	Dzdz	Dzdz	dzs	Ēē	Éé	Èè	Êê	Ěě	Ĝĝ	Ġġ	Gygy
Ĥĥ	Ħĥ	Íí	Ìì	Îî	Ĭĭ	IĴj	Łł	Ll ll	Lyly	Ńń	Ññ	Ňň	
Ōō	Óó	Òò	Ôô	Öö	Õõ	Ŏŏ	Œœ	Řř	Ŕŕ				
Śś	Şş	Ŝŝ	Šš	ß	Sz sz	ƆƆ	Ūū	Úú	Ûü	Ůů	Űű	Ųų	Ŵŵ
Ŷŷ	Ÿÿ	Žž	Žž	Žž	Zs zs								

変種の多さに注目。これら変種の成因はラテン文字の便利さゆゑか不便さゆゑか？
 なほ、ラテン語で云へば J や W も変種に類する。どこに基準を置くかで変種が異なる。
 古期ラテン語だったら G だって変種である。上の 2 段は単に英語の基準に過ぎない。
 また、残念ながら、字音や音価は言語により様々なため一々記すことができない。

IV. 1 もっとも初期のラテン文字とアルファベット輸入の法則 1

既存のアルファベットで表現できない時にそれらしい字を連ねてとりあえず対処する

ラテン文字としてもっとも初生的なそれはローマ帝国時代の確立されたと云へる。下記のやうに字母が現在の英字より少ない。小文字は当時存在しなかった。

ABCDEFGHIJKLMOPQRSTUVWXYZ

²英字は 26 文字であるが、ラテン文字は言語によって文字数が異なる。たとへば、ä や é, æ, œ, ß, ç を用ゐる言語があり、逆に本家のラテン語においては J, U, W, Y は含まれないし、K は Calender の略語としてのみ使用される。

I と J, U と V は区別されなかった。現在は IU は母音で, JV は子音にしか用ゐられないが, 当時は文脈や単語にしたがって読みわけてゐた。この他, Y, Z もあったがギリシャ語転写用であった。ギリシャ語転写用には th, ch, ph, rh といった重字も考案された。これらは当時, ギリシャ語が読めるものは, $\theta[t^h]$, $\chi[k^h]$, $\phi[p^h]$, $\rho[r^h]$ として読み, さうでないものは, そのまま [t], [k], [p], [r] として読んだ。このやうな字の使ひ方は日本語で「キャ」とか「ツァ」と書いて, もともとのカナでは表現できない音価を拡張するのに似てゐる。この方法—既存のアルファベットで表現できない時にそれらしい字を重ねてとりあえず対処する方法—は後世にいたるまで重宝される (英語では sh, ch, tr など)。

また, ae は 厶 と合字になる場合もあった。長音には $\bar{A}$ のやうに字の上に横線 (マクロン) が引かれた。おもしろいのは, ET といふ合字である。et は日本語でいふと「と」, 英語の 'and' に相当する単語だが, 頻繁に使はれるので合字になってゐた。後世, 筆記体の et から & になった。ちなみに @ は, ad (英語の at, in) の合字に由来する。

IV. 2 そもそも起源および法則 2

完全に適合する文字体系はないので, 近いもので転用する

ラテン文字, ギリシャ文字, キリル文字は親戚の文字で, それらはフェニキア文字に由来する。フェニキア文字はアラム文字, アラビア文字, ヘブライ文字そしてギリシャ文字の母体となった。ギリシア人がフェニキア文字を輸入する時に, 音韻表記上の一大改革が起きた。フェニキア人はセム語族, つまり現在のアラビア語やヘブライ語の親戚で, 母音を表記する必要がなかったが, ギリシャ語においては母音を表記することが必要である。だから, ギリシア人は, フェニキア文字のなかでギリシャ語で使用しない文字を母音表記に用ゐることにした。たとへばギリシャ語で [a] の音価をもつ alpha/ α は, フェニキア語では aleph に相当するが, 音価は声門閉塞音の [ʔ] (強いてカナで云へば強く一気に息を吐「ハ」の子音) だった。ギリシア人は [ʔ] はいらないので, aleph を [a] の音価を示す語として転用したのである。この転用は重要である。文字の歴史において, 自分の音韻体系が輸入先の音韻体系と完全に整合することはないので, 輸入元は文字を転用するのである。そして, 転用はしばしば, 相手の音韻体系の中で自分の音韻体系に一番近いものが充当される。[ʔ] は口を大きく開けるのでまだ [a] に近いと云へる。これが口を閉ぢる [n] だったら, [a] には転用しにくいだらう。

諸言語のアルファベット (出典はすべて稲垣 (2003)³による)

³ 出典元の全ページにわたって素晴らしい異国の文字がカタログされてをり, 文字に興味のある諸氏は一読の価値がある。これらは全て L^AT_EX のバビロンプロジェクト (Babel) によって組版されてゐる。

フェニキア文字

Phoenician abjads fonts [http://user.dtcc.edu/~berlin/font/hierogly.html]

𐤀 𐤁 𐤂 𐤃 𐤄 𐤅 𐤆 𐤇 𐤈 𐤉 𐤊 𐤋 𐤌 𐤍 𐤎 𐤏 𐤐 𐤑 𐤒 𐤓 𐤔 𐤕 𐤖 𐤗 𐤘 𐤙 𐤚 𐤛 𐤜 𐤝 𐤞 𐤟 𐤠 𐤡 𐤢 𐤣 𐤤 𐤥 𐤦 𐤧 𐤨 𐤩 𐤪 𐤫 𐤬 𐤭 𐤮 𐤯 𐤰 𐤱 𐤲 𐤳 𐤴 𐤵 𐤶 𐤷 𐤸 𐤹 𐤺 𐤻 𐤼 𐤽 𐤾 𐤿

s n m l k j t h z w h ð/d b g ' samekh nun mem lamed kaph yod teth heth zayin waw he deleth gimel beth aleph

𐤀 𐤁 𐤂 𐤃 𐤄 𐤅 𐤆 𐤇 𐤈 𐤉 𐤊 𐤋 𐤌 𐤍 𐤎 𐤏 𐤐 𐤑 𐤒 𐤓 𐤔 𐤕 𐤖 𐤗 𐤘 𐤙 𐤚 𐤛 𐤜 𐤝 𐤞 𐤟 𐤠 𐤡 𐤢 𐤣 𐤤 𐤥 𐤦 𐤧 𐤨 𐤩 𐤪 𐤫 𐤬 𐤭 𐤮 𐤯 𐤰 𐤱 𐤲 𐤳 𐤴 𐤵 𐤶 𐤷 𐤸 𐤹 𐤺 𐤻 𐤼 𐤽 𐤾 𐤿

t š r q š p ' taw shin resh qoph sade pe ayin

北西セム語の一つで、紀元前 9～西暦紀元ごろまでシリア、パレスチナで使われた文字。フェニキア文字はギリシア文字、古ヘブライ文字など西方アルファベットの基礎となる。

ギリシア文字

Greek fonts [CTAN:greek]

Α α Β β Γ γ Δ δ Ε ε Ζ ζ Η η Θ θ Ι ι Κ κ Λ λ Μ μ Ν ν Ξ ξ Ο ο Π π Ρ ρ Σ σ ς Τ τ Υ υ Φ φ Χ χ Ψ ψ Ω ω

a v g/j d e z i θ i/j/ç k/g l m n ks o p/b r alpha beta gamma delta epsilon dzēta ēta thēta iōta kappa lambda mȳ nȳ ksī omikron pī rhō

Σ σ ς Τ τ Υ υ Φ φ Χ χ Ψ ψ Ω ω

s t/d i f h ps o sigma tau ypsilon phī x/ç psī omega

α β γ δ ε ς ζ η θ ι κ λ μ ν ξ ο π ρ ς σ τ υ φ χ ψ ω ς 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 200 300 400 500 600 700 800 900

フェニキア文字から発達したギリシア文字は大文字・小文字の区別があり上記の 24 文字からなる。ギリシア語はアテーナイを中心とするアッティカ方言が紀元前 3 世紀以降に東地中海の共通語となる。

エトルリア文字

Etruscan fonts [CTAN:archaic]

A B Γ D E F I Θ K L M N O P Q R S T Y X Φ Υ 8

a b g d e v/f i h th k l m n š o p q r s t u ks ph kh f

X Y T 3 4 9 1 0 1 1 2 3 4 5 6 7 8 A

ks u t s r q p o n m l k h i v/f e d g b a

古代イタリアのエトルリア地方で紀元前 1000～300 年頃に使われた文字。墓石、壺、鏡などに残っている。右横書き、左横書きが併用された。象牙板に書かれたアルファベット文字表（前 700 年頃）がある。

ロシア文字

Cyrillic fonts [CTAN:cyrillic]

А а Б б В в Г г Д д Е е Ё ё Ж ж З з И и Й й К к Л л М м Н н О о П п Р р

a b v g d e ё ž z i j k l m n o p r a bc ve ge de je jo že ze j i kratkoe ka el' em en o pe er

С с Т т У у Ф ф Х х Ц ц Ч ч Ш ш Щ щ Ъ ъ Ы ы Ь ь Э э Ю ю Я я

s t u f h c č š šč ' y ' é ju ja es te u ef xa ce če ša šča jer jery jer' e ju ja

キリル文字から発達したロシア文字は、ギリシア正教とともに広がり、印欧語族、アルタイ語族などの言語を含め、約 80 の言語で使われている。ロシア文字には、立体・斜体、大文字・小文字の別がある。

IV. 3 ラテン文字前史および法則 3

借入した文字から転用ができない場合に至って既存の文字から作成する

かうしてギリシャ人がフェニキアから文字を借入して再構成した後, イタリアに住んでゐたエトルリア人がギリシャ文字を借入し, エトルリア語にあはせてエトルリア文字として再構成した. 後に, ローマ人がエトルリアを滅ぼし, エトルリア文字を自分の言葉を記述するために使用した. これがラテン文字である. 数学の授業等でギリシャ文字を使った記憶のある読者なら, ギリシャ語とラテン語には奇妙は不整合があることが気になってゐたかもしれない.

たとへば, ギリシャ文字の $P(\rho, \text{rho}, \text{ロー})$ は恰好は P に似てゐるのに音価は $[r]$ で, 逆に $[p]$ の音価は p と似てゐない $\Pi(\pi)$ になってゐる. また, Γ の恰好は強いて云へば C に近いのに音価は $G[g]$ であり, χ は x に近いのに音価は $[k]$ に近い (正確には $[k^h]$, $[k]$ の帯気音 $\approx$ 息を強く吐く $[k]$), X と同じ音価 $[ks]$ はギリシャ文字では $\Xi(\xi)$ といふ変な文字になってゐる. もちろん大部分は似通つてゐる. だから, 同じ系統の文字だと認識できるのである. Δ と D , Λ と L , $\mu(M)$ と m などは筆記方法の違いと見做せるし, o と $\omicron$, τ と t もほぼ同じである. $\Upsilon(v)$ は u にも y にも似てゐる. 次に, 互ひに素に見える文字もある. ラテン文字には F や Q があるのにギリシャ文字にはない (f の音価 $[f]$ は, $\Phi(\phi)$ phi に対応するやうに見えるが, ここらへんの事情はややこしい). 逆に, ギリシャ文字では ψ とか θ は対応するラテン文字がない.

これらの不整合は, エトルリア語を経由したことに起因する. まづ, エトルリア語にはカ行に有声音がなかった (ガ行がなかった). そのため, ギリシャ文字を借入する時に Γ は $[g]$ の無声音 $[k]$ の音価を担ふことになった. そのため, ラテン文字の C は $[k]$ の音価になってしまった. 後に, C の有声音 $[g]$ を示す字母がほしくなったローマ人は C に細工をして, 新しい時 G を作りだした. これも文字の歴史には大事なことで, 借入した文字から転用ができない場合に至って既存の文字から作成するのである. 前述のたくさんの拡張ラテン文字はほとんど既存のアルファベットに細工をして作成されてゐる. 細工の方法もほとんどが字母の上に帽子のやうなアクセサリー (diacritical mark 分音符/といふ)⁴をつける簡単なものが主流で, まったく新しい字を作ることはまれである. これは文字の保守性を示してゐる. 勝手にこれまでの歴史的経緯を無視して新字をこさえると, これまでの文書が読めなくなったり, 既に教育を受けた人たちが混乱するためである.

さて, P と R , Π と $P(\rho)$ の関係はややこしいが, エトルリア語が借入したギリシャ文字は, 今ギリシャ文字といはれてゐる東部系の文字ではなくて, 西部系の文字である (イタリア半島に近い). 西部の π は足 (ルの部分) が左右非対称で, 右が短く, 左が長かった. そのため $\rho(P)$ と形態がまぎらはしかった. そのため, 本家ともいえる $\rho(P)$ に追加でヒゲを加えて, R にしたのである. r は中世の筆記のために変化した書体である (当時は小文字といふ概念はなかった). χ と ξ もやはりギリシャ語の文字の音価が東部と西部で異なつてゐたため, 西部では ξ が $[ks]$ だったのである. (現在の情勢から見れば) マイナーな西部の音価をエトルリア語・ラテン語は採用し

⁴カナの濁点や半濁点が近いかもしれない.

てしまったのである。西ギリシャ語では χ は [k^h] であったが、帯気音の [k] はラテン語にはなかったので、用ゐられなかった。θ もラテン語にはない帯気音の [t] だったので用ゐられなかった⁵。ψ の示す [ps] といふ重子音はラテン語には存在しなかった⁶ので、これも捨ておかれた。F と Q は最初期のギリシャ語では存在した⁶が、古典ギリシャ語以降は受けつがれることのなかった字母である。ラテン語は西ギリシャ語と通じて、これらの字母を借入した。

IV. 4 補足

なほ、キリル文字もギリシャ文字に由来してゐるが、母体は東部ギリシャ文字だったので、ラテン文字に見られるやうな $\pi\rho\rho$ のやうな不整合はない。また、軟音(硬口蓋化音、後述)の多いスラブ語のために文字が改良され追加されてゐる。追加された文字は、ギリシャ文字を変形したのではなく、ギリシャ文字から別途に発展したコプト文字の借入によると考へられてゐる。

ギリシャ文字の字音(alpha, beta, gamma)はフェニキア文字の字音(aleph, beth, gimmel)をそのまま借入にしてゐる。もともとはそれぞれ(雄牛(の頭), 家(の扉), 駱駝/cf. cammel/)といふ意味であつたが、ギリシャ語においては字音の名前の意味は忘れられてしまった(言語が違ふので当然だが)。ラテン語にいたっては字音の名称自体が[a:], [be:], [ke:]のやうに音価を示すだけの簡素なものになった。ラテン語以降の言語では、字音はその言語での音価を示す一音節の名称([ei], [bi:], [si:]等)になってゐる。

フェニキア文字はその後、アラム文字に発展したが、アラム語もセム語族だったので母音の表記はなかった。アラム文字は当時の中東で広域に使用される言語で、アラビア文字、ヘブライ文字をはじめペルシア文字、梵字の母体となる。つまり、世界の主要な表音文字はみな親戚関係にあるといふことになる。

パピルスや羊皮紙、紙などに書かれる文字は、アラビア文字やローマ字の筆記体のやうに流麗である⁷が、字の形態が収斂して読みにくくなる傾向がある。古代ギリシャ人は碑文用に字を整形することによって、アルファベットに幾何学的な美しさをもたらした(ギリシャ文字の小文字はビザンチン帝国時代の発明)。ギリシャ人がGeometry(幾何学)が好きだったことがよくわかる。また、アルファベットがこれだけ世界を席卷してゐるのは—いろいろな原因の総合的結果であるが—この幾何学性によるところも大きいであらう。

V. 発音概論

音は母音と子音に区分できるが、母音・子音といふのは程度の差である。実際、j(英語、仏語、葡語以外の西ヨーロッパの言語)やy(スペイン語を除く西ヨーロッパの言語)、w(ドイツ語を除く西ヨーロッパの言語)などは[j]や[w]の音価をもってをり、母音とも子音ともはっきりしないので半母音とか半子音と称されてゐる。自然のも

⁵現在の英語および現代ギリシャ語では [θ](think の th) といふ歯摩擦音になってゐる

⁶それぞれ digamma, qoppa と呼ぶ。

⁷草書もこれに該当するだらう。

のは概してこのやうに境界を定めにくいものではあるが、区別をしないほうがよいのか？ それも同じく愚かな極論である。たしかに境界ははっきりしないが、境界がはっきりしないといふことは違ひがないといふことを意味しない(虹の色の境界ははっきりしないが、赤色も青色も存在する)。端成分を取り出してみると明らかな違ひがある。その違ひがなにかを理解しようとする時に、あえて区別してみることが役立つのである。

子音と母音の境界が[w]や[j]であるなら、端成分はどうか。もっとも母音らしい母音は日本語では「あ」である(但し、音の出るところが喉の奥まで広がりすぎると喉音といふ子音になる[h]。もっとも母音らしい母音は「え」かもしれない)。もっとも子音らしい子音は閉鎖音と呼ばれる音で、日本語では「パッ」や「ック」や「ット」(の子音)であらう。

発音とはなにか？ 発声のメカニズムを理解するためには、人体を管楽器にたとえるのがよい。管楽器といってもいきなり複雑なものを考える必要はない。最初は単純な喩へがよい。管の下部にポンプ(といっても海水浴の浮輪を膨らませる蛇腹ポンプのやうなもの)がついてたものを想像してほしい。ポンプをヘコヘコさせると、管から音が出たり入ったりする。ポンプは肺であって、管は肺から口までの管を指す。ポンプをヘコヘコさせることは、横隔膜をつかって肺の容積をかえることに相当する。この状態でポンプをヘコヘコしてみると風が空気を切るシューシューといふ音がするだけで、声とは程遠い。そこで、管に振動板を設置してみる。管を流れる空気は振動板を通過する時に振動が加えられて、ブーとかズーといふ音になるだらう。振動板は人体では声帯(vocal folds)のことで、振動板で振動が加えられた音を有声音(voiced sound)といひ、さうではなく管を空気が流れるだけの音を無声音(voiceless sound)といふ。有声音は声の音であるが、無声音は息の音である。

また、管の直径を大きくしてみると音はより低周波(低い音)になり、逆に径を狭めると高周波(高い音)になる。管の径を変えることで音の高低を調整できる。大きい管楽器は低音がだしやすく、小さい管楽器は高音が得意なのと同じである。これは共鳴箱の大きさを変えることに相当する。更に、管に空気が流れるいろいろな障害物を置くことによって、噪音(noise)を加えることができる。どういふことかといふと、単に管を空気が通過するだけではシューシューといふ音にしかない。しかし、管の空気を一旦止めてから破裂させるやうに解放すると、「パッ」といふラッパのやうな音が出せる。あるいは、空気が流れにくい狭窄部を設けると、空気がそこを通り抜ける時に空気が摩擦する。その摩擦のされ方によって違ふ音が出せる。これはサキソフォンに相当する。前述のシューシューといふのも空気の摩擦で生じた音(もし管を抜ける空気に摩擦が生じなければ音にはならない)だが、狭窄部により摩擦のされ方をかえることにより、ヒューヒューやフーフーといった変化を与えることができる。このやうに管を抜ける間に、音を調整することができる。これを調音(articulation)といひ、調音をする場所(狭窄部)を調音点と呼ぶ。これは point of articulation の訳語である。ただし、点といふには実際、面積がありすぎるので調音域(area of articulation)と称されることも多い(英語では)。このやうに噪音をなんらかの形で加えて生じる音を子音といひ、加へない音を母音とふ。

母音・子音は「母韻」、「子韻」と表記してゐたが、漢字制限で「韻」が「音」に

ちなみに父音といふ言葉は現代音声学ではない。過去には子音を指す言葉として使はれたこともある。その場合、子音は、日本語の一拍の音(現在の意味での子音+母音、か、さ、た、など)を指した。つまり、父音+母音=子音(父と母が結婚して子供が生まれる)である。

音素はある時間断面で見た時のラング内ではただ一通りしかないが、時間的には変化するものである。たとえば、英語における f と v がある。[f] と [v] はともに唇歯音(後述)で似た音であるが無声音か有声音かの違いがある。現在の英語ではもちろん [f] と [v] は異なった音であるが、千年前の英語では [f] と [v] は同じ音素に属してゐた。母音と母音の間では有声音の [v] と発音され、それ以外では無声音の [f] と発音されてゐた。当時の英語では f と v の違いは単に前後の音に依存して使ひわけられてみただけで、それで意味がかはることはなかった。ドイツ語では今でもそれと

同じような現象があり, *könig*(ケーニツヒ, 王) と無声音の *ig* が複数形で *e* が語尾につくと *könige*(ケーニゲ) と有声音の *ige* になる. これは日本語の連濁 (大川 [おおかわ] は濁らず, 無声音のままなのに対して小川 [おがわ] は濁って有声音になる. [かわ] と [がわ] に意味の違いがなく前後の音に依存して濁ったり濁らなかったりする) に近い現象である. しかし, 現在の英語では例えば *fail*[feil] と *veil*[veil] のやうに [f] と [v] とで意味が異なる. 英語ではこれ以外にも *th* の音 ([θ] と [ð]) など過去において同一音素であった音声であったのに現在は異なる音素へと移行したものがいくつかある. *th* で云えば, *cloth*[klouθ](布) と *clothe*[klouð](服を着る) とでは意味が異なる. 似た例は韓国語でもある. 韓国語では有声音と無声音はほとんど全て同じ音素に属してゐる. たとえばソ・チャングム (徐長今: 韓国ドラマ「大長今」の主人公) のチャングム (現代仮名遣いではジャングム) のやうにチャ音は語頭では無声音のチャ, 語中では有声音のチャになってゐるが, チャングムであることには違ひない.

V. 2 音節

世の中の言語は開音節 (open syllable) と閉音節 (closed syllable) に大別できる. 開音節といふのは音節が母音で終はる音節で, 閉音節といふのは音節が子音で終はる音節を指す. 今, 子音 (Consonant) を C, 母音 (Vowel) を V で表記すると, 開音節は CV, 閉音節は CVC で示される. 単語は CVCVCV といふやうに開音節から構成される単語が主流の言語を開音節言語といひ, 単語が CVC や CVCCVC といふ閉音節から構成される言語を閉音節言語といふ. 日本語は開音節言語であつて, 英語は閉音節言語である (たとえば *strength*[streŋθ] は CCCVCCC). 日本人の英語が苦手の理由のひとつに, 発音の難しさがある. たとえば, 英語で *kick* といふ語がある. これは極めて発音しやすい単語であるが, これを日本語話者が発音しようすると, キック [kiQku] と余計なウの音がついてしまふ⁸. *But* はバット [baQto] であり, 日本人英語でバットーと言つてゐるのもよく聞く. これでは *but* には聞こえない. 日本語は開音節言語なので, 子音で単語を終はれないため母音がくつついてしまふのである. なほ, 韓国語は文法では日本語にかなり似てゐるが, 閉音節言語である.

閉音節言語は開音節言語に比して発音しづらくなるが, 子音が母音から独立してゐるといふ強みがある. 閉音節言語は子音だけ複数重ねて単語を形成できる (CVCCVCV のやうに) ので, 必ず CVCV... といふシーケンスを守らないといけない開音節言語に比べて組合せの数が多く, 同じ文字数あたりの伝達効率が開音節言語より高い.

逆に開音節言語は閉音節言語に比べて発音しやすい. 英語話者は日本語の発音が容易である. もし国際語といふものを設定するなら, 誰にでも発音の容易な開音節言語にすべきかもしれない. ただし, 開音節言語は日本語がさうであるやうに, 発音が簡単であるが, 伝達効率が悪いので語が冗長になりやすい. 会話で許容できる冗長さには限度があるので, 同音異義語が多くなる. 会話ではお互ひの暗黙知で同音異義語から正しい候補を撰択できるが, 文章ではさうはいかない. 同音異義語による混乱を避けようとするとは複雑に書きわけなければいけない. まさに日本語の状況がそれである. 日本語では漢語の同音異義語が多い. 閉音節言語で子音の数が多

⁸[Q] は促音を示す符号である. 後述

い中国語では話言葉として弁別できる音節も日本語に漢字の音がとり入れられた時点で辨別できる特徴がかなり減ってしまい, 同じ読みの漢語があふれるようになる。たとえば, 「科学」と「化学」は日本語ではどちらもカガクになり, 弁別できない語であるが, もととの古代中国の漢字の発音は両者を弁別できた⁹。日本語では時に「化学」をバケガクと読んでわざわざ音節を追加して弁別してゐる。音の種類が減ったら音節の数を増やさなければいけない。情報量一定の法則のやうなものがある。

日本語が開音節言語であり, 音の種類が少ない(音素が少なく, 音素の領域が広い)ことは, より音の弁別を減らすやうに発展してきた言語であることを物語ってゐる。これは日本人が外国語を修得する際の大きな障害になってゐるが, これこそが日本語の核心かもしれない。阿吽の呼吸や, ツーカーの仲, 以心伝心, 腹芸などよくもわるくも場を読む力が日本文化で発達してきたのは言葉の伝達効率の悪さを補ふやうに発展した能力かもしれない (speculated speaking)。

V. 3 モーラ

音節と似た概念にモーラ・拍といふものがある。モーラと拍も厳密に云へば違うものであるが, ここでは簡単のために同じものとして説明する。モーラは端的に云へば, 俳句や和歌の時の字の数え方である。これは拍の等時性といふ定義による。1拍にかかる時間がどの単語でもほぼ同じといふのが拍の等時性である。

音節との違いは次のとおり。たとえば, Nippon といふ促音を含む文字列は2音節 Nip-pon である。ところがモーラで見ると, Ni-p-po-n と4拍になってゐる。長音を含む kyōto は音節で見ると kyō-to の2音節, ōsaka はō-sa-ka の3音節になるが, 拍で見ると kyo:-to の3モーラ, o:-sa-ka の4モーラになる。拍は音韻の単位であり, 音節は音声の単位と云へる。

モーラ概念を用いると, 先程の促音や撥音のやうにローマ字で子音を重ねて表す音をうまく説明できる。日本語は開音節言語であるから, 閉音節言語の英語(や漢語)から言葉を輸入する場合には無理にでも開音節化しなければいけない。たとへば, cap[kæp] といふ言葉がある。語末の p は英語では ca に附属する音だが, 日本語では CVC の配列は認められない。だから次の音節に まはさなければいけない。さすれば ca-p となるが, p 一音だけで音節を構成することも日本語ではできない。だから, 適当な母音 u を足すと, ca-pu になる。今度は, pu がプになってしまつて, 母音がついてゐることがあからさまになってしまふ。母音のない p 音をどうしても導入したい。かういふ時に促音は活躍する。kappu とすれば音節としては kap-pu となり, 母音のない p 音を表現できる。それはモーラで見れば ka-p-pu のやうに3拍になるが, 促音の部分は p 音になってゐるのではなくて, 「キャップ」の「ッ」の部分は無音で舌も顎も固まってゐる。促音の本質は, この無音の時にある。次の発音の子音の形をしながら固まってゐるのである。だから, kappu といふのはあまり正確な表記ではなくて, 促音専用の表記が必要になる。IPA では促音は [kaQpu] のやうに [Q] で表記されたり, [kap:u] と子音に [:] を付加した表記になる。なほ, 「さっさと

⁹科学と化学: 現代北京語の拼音では kē-xué と huà-xué, 韓国語でも kwa-hak と hwa-hak で異なる。

せんかい」の場合では促音は [s] の形で停止しつつも息がもれて、スーといてゐるので [s:] のやうに [s] が伸びてゐるといふ表記は内容的に意味をもつが、「キャップ」の場合は、[p] の形で停止し、息はもれてゐないので、[p] が長くなってゐるわけではない(破裂音を長くできない)ので、[p:] は表記上の意味しかない。「一通(イツウ)」の場合は、[t] の形で停止し [ts] の形で停止するのではない(ツは破裂した瞬間、摩擦音に移行する破擦音なので、破裂音の格好で停止する)ので、この例では [ts:] は表記としても変になる。

VI. 子音 consonant

子音は空気の流れを乱すことによって得られる音である。空気の流れを乱す場所のことを調音点といひ、子音は調音点の場所によって分類できる。子音の分類は他に、調音の方法(ラッパかサキソフオンか)、無声音か有声音かによっても分類できる。IPA では、調音の場所を横軸に、調音の方法を縦軸にとったマトリックで子音を分類してゐる。consonant の語源はラテン語の con-共に、sonāre 音響(ソニーの語源)、-ant(現在分詞化語尾)の、といふ成立ちで「共に響く、共鳴する」といふ意味である。

子音は調音点の位置によって下記のやうに分類できる。左が唇側(心臓から遠い方。前)、右が喉側である。同じセルの中に2符号ある場合は右が有声音、左が無声音である。1符号の場合は有声音である。

器官	唇		歯			硬口蓋		軟口蓋		口蓋垂	声門
調音点	両唇	唇歯	歯	歯茎	硬口蓋歯茎	歯茎硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	両唇軟口蓋	口蓋垂	声門
破裂音	p b			t d				k g			?
鼻音	m	ɱ		n		ɲ	ŋ			ɴ	⊗
震音				r							⊗
弾音				ɾ							⊗
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ç ʝ		x ɣ			h ɦ
破擦音				ts dz	tʃ dʒ	ʈɕ					⊗
接近音							j	ɥ	w		⊗
側面音				l			ʎ				⊗

⊗ は解剖学的に発声不可能な領域を示す。

k ^j	硬口蓋化. j を子音字の肩に載せる.
k ^h	有気音.
t ^w	円唇化
t ^y	軟口蓋化
d ^ʕ	喉頭音化

VI. 1 k

[k] は無声軟口蓋閉鎖音で、後舌面と軟口蓋とで閉鎖が作られる。この音は地中海地方の人々には発音しづららしく、ラテン語では [k] であった発音は多くが後期

ローマ時代の人々には俗ラテン語化のなかで硬口蓋化(後述)により別の発音に変化してしまった。ラテン語で [k] の発音を示す字母は c である。イタリア語では ca はカのままだが, ci はチになったし, フランス語では c の音価は全面的に [s] になった。ラテン語ではあまり用ゐられない k は [k] の発音を維持したが, それは単に使はれる頻度が少なかったためである。q は単独では用ゐられず, qu[kw] として, k に似てゐるが別の音価を担ったために硬口蓋化から免れた。円唇の u が k を護ったのである。ラングとしての日本語では k は硬口蓋化の程度は少なく, キの子音はカの子音とあまり違はないが, 琉球語ではキは硬口蓋化してチになる(ウチナー=オキナワ)。話がややこしくなるが琉球語では, 日本語のイとエが同じイの音に収斂し, ウとオが同じウに収斂した。だからオキナワのオはウチナーのウになるのである。そして, キはチに硬口蓋化した。日本語のケは琉球ではキになったが, このキは硬口蓋化しなかった。

VI. 2 g と ng(鼻濁音)

日本語でガ行に対応する音は二種類あって, 鼻濁音(正確には軟口蓋鼻音)の [ŋ] と有声口蓋閉鎖音 [g] とがある。この二種類の音の違いは, 鼻腔へ抜ける穴が開いてゐるか閉ぢてゐるかである。普通, [g] は文節の頭に, [ŋ] はそれ以外の位置で現はれる。このやうに音声(音響学的音声)が使ひわけされてゐることを相補分布と呼び, 両者は同じ音素に属してゐることを示してゐる。たとえば, 学校は [gaQko]/(Q/は促音を示す符号。促音は IPA では子音を重ねるか子音に長音符を付けて表現する。[gakko] や [gak:o]) であるが, 小学校は [co:ŋaQko] となる。専門学校の「学校」は [gaQko] であるから専門学校は一語ではなくて, 専門+学校の複合語であることがわかる。

現在の日本語では [g] と [ŋ] の使ひわけが崩れつつあるが, この二つの違いは日本語母語者であれば認識することはないのであまり知られてゐない。たとえば, 鍵(かぎ)は上記の規則で云えば [kaŋi] であるが, 最近では [kagi] と発音する人が増えてをり, 日本語のガ行は [ŋ] から [g] に移行してつつあると云える。また, 西日本のいくつかの地域, すくなくとも京都では [ŋ] は出現せず, 代りに語中のガ行は [ɣ] 軟口蓋摩擦音(有声)となる。呼気が鼻に抜けないのである。[ɣ] が摩擦音なので, [s] と同じやうに, 長く子音を継続できる(スー)。[g] は閉鎖音なので, [p] と同じやうに一瞬で発音が終了する(プッ)。

ちなみに, 鍵 [kaŋi], 蟹 [kaŋi] と簡易 [kaŋi] は文字で書くと全然違ふが音を見るとよく似てゐる。見るといふのは重要で(上記のは字を見てゐるのであって音を見てゐるわけではなく, 音を波形分析や周波数解析, 解剖学的に見ることを指す), 日本語のフィルターでは鍵と簡易は聞き間違えないが, 別の言語の人は別の言語の音韻体系の中で解釈するので, 同じやうに聞こえる人もゐる。たとえば, ロシア語話者では日本語の「ちがいます」が「ちないます」といつてゐるやうに聞こえる人もゐる(東郷, 1966) やうだが, それは鼻濁音 [ŋ] に由来してゐるのかもしれない。

VI. 3 硬口蓋化 palatalisation

硬口蓋化は日本語の子音を理解する上で重要な現象であるから詳しく述べる。口蓋といふのは上顎の歯茎から喉までの領域を指す。口蓋の遠心(口先)側は骨があつて硬いので硬口蓋といひ、喉に近いところは骨がなく、やはらかいので軟口蓋と呼ぶ。硬口蓋化は、子音の調音点が硬口蓋に移動する現象である。ちなみに硬口蓋化を略して口蓋化といふが、口蓋は軟口蓋と硬口蓋とあつて一緒にすべきではないので、口蓋化といふ言葉は適切ではない。たとえば、軟口蓋の音(例:カ)も硬口蓋化により調音点が硬口蓋に移動するが、口蓋化といった場合、軟口蓋音がどう変化するのか明示的ではない。

どうして調音点が移動するのかといふと、次の母音を発音しやすいやうに舌の位置をあらかじめ移動させて子音を発音するためである。具体的に述べる。硬口蓋化を起こす母音はイのやうな口の開きは狭くなる前舌の母音である。イを発音する時には舌が硬口蓋にむかつて盛りあがった状態になってゐる。イの音の前の子音がたとえばサ行の子音だったとしよう。サ行の子音の調音点は歯茎であるから、舌を歯茎に近づけて発音する。次の母音がイのやうな前舌音の場合、サ行の子音を発音する時に次の母音のイの発音に適合するやうに舌を位置を移動させておいたほうが、子音の後にすぐに母音を発音できて省力化になる。そのためイの前の子音の調音点は硬口蓋のほうにずれてしまふのである。硬口蓋化しない場合は、子音を発音したあとに、舌を硬口蓋に一旦、移動させてから母音を発音しなければいけない(硬口蓋化しないサ行のイ段の音をあえて假名書きするとスイとなる)。これはワンクッションおくことになり面倒であり、省力化の流れの中で廃れていったと考えられる。なほ、発音はしばしば、省力化つまり横着する方向に移行する。これを音声学的な省力化の傾向といふ。

この移動は、調音に舌と使ふ子音全てにおき、サ行、ザ行、タ行、ダ行、ナ行で著しく、ヒの音も硬口蓋化した音である。カ行/[k]は日本語では硬口蓋化は著しくない。[k]の調音点は軟口蓋にある。軟口蓋は広いので、多少舌の位置が硬口蓋側に移動したとしても軟口蓋から出にくいためである。硬口蓋化したkの発音はIPAでは[kʲ]と表示される。もし[k]において完全に舌が硬口蓋に移動してしまった場合、カ行の音といふよりはチャ行の音にやうに聞こえる。ラテン語では完全に[k]の発音であったcがイタリア語になると、母音によって音価がかはる。イタリア語ではcは次の母音が、aやu,oの場合は[k]であるが、iやeの場合は[tʃ]となる。イタリア語ではカ行はca, chi, cu, che, coであつて、チャ行は, cia, ci, ciu, ce, cioである。これは硬口蓋化が著しく進んだためである(更に進んだフランス語は[s]になった)。子供の言葉で「かーちゃん」を「ちゃーちゃん」といふのは、ラテン語からイタリア語への変化と似てゐて面白い。

マ行/[m]も舌がどこにも触れないが硬口蓋化は起きてゐて、IPAでは[mʲ]で示される。

硬口蓋化が進んでゐる言語は他にロシア語がある。日本式ローマ字でチはti, もし英語読みするならtiはティだが、ロシア語ではtiと書いて日本式ローマ字綴りと同じチに近い発音になる。ロシア語では非口蓋化音と硬口蓋化音とが別音素になってをり、それぞれが子音だけで発音される。それぞれ別々の文字を当てられるが、別

の文字がない場合は硬口蓋化音 (軟音ともいふ) を示すのに *b* を当てる. ラテン文字表記では, 「*ʹ*」を当てる (Yel'tsin: 前ロシア大統領; Kril'on: サハリンの南西の岬).

英語でも硬口蓋化は中世に起きてをり, fortune[fɔ:tjun] から [fɔ:tʃjun] のやうな変化が起きて, [ʃ] や [tʃ] の音が生じた. 綴り字はそれ以前に固定されたものも多く, それらの綴り字はそのままである. たとえば fortune も表音主義 (音響音声学) 的に「[tʃ] は *ch* なので *forchune*」となったりはしない.

VI. 4 シと sh

ヘボン式では, シを *shi* と綴る. 日本語のシの子音の発音と英語の *sh* の発音とは非常に似てゐるが, 厳密な発音に基づけば日本語のシと *sh* とは調音点 (*sh* は後部歯茎, シは歯茎硬口蓋) 以外に, 唇の形が異なる (日本語のシは 英語の *sh* は唇を丸め後舌面がより高まる). 要するに, 日本のシはスの子音が硬口蓋化し, 別の音になったものである.

英語の *sh* は, IPA では [ʃ] と綴られ, *esh* と書く. 日本語のシの子音は, [ɕ] と綴る. 両者は厳密には異なる音で, [ʃ] は硬口蓋歯茎音, [ɕ] は歯茎硬口蓋音と調音点が若干異なる. その違ひは「中の上」と「上の下」に喩へられるかもしれない. 実用上は, 日本語のシを [ʃ] で記しても差し支えないとする意見が大勢であり, ヘボン式の *sh* の綴方は, シの音響学的音声をよく捉えてゐるものと言える. なほ, 日本式ローマ字綴りではシは *si* であり, ヘボン式支持者や英語よりの論者により「発音が綴りと一致してゐない」「*si* はスイだ」としばしば批判されてゐるが, 英語でも *tension* のやうに *si* をシと読む単語も存在してをり, 英語は例外が多いので, 英語よりの論者はしばしば自己矛盾に陥いつてゐる (後述).

英語の *sh* はしばしばドイツ語の *sch* に対応 (例: *fish* と *Fisch*, 魚) してをり, もともと *sh* と *sch* は同じであつたことが推測できる. この文字の音価は現在ではどちらも [ʃ] であつて, 日本語のシの子音のやうに硬口蓋化してできたものではない. 例にあげた *fish* は OE や古高地ドイツ語では *fisc* と綴つてゐた. 発音は *sc* と書いても [ʃ] だつたやうだが, もともとは [sk] だつたと推定されてゐる. ラテン語では魚は *piscis* (発音は文字に従ふ) なので, 古い英独語の魚はラテン語と似てゐたことがわかる. 綴り字では (発音がいつ変つたのかは正確にはわからない) 英語では *sc* の *c* が *h* に交替して *sh* となり, ドイツ語では *sc* に *h* が付加されて *sch* となつた. 英語の *sh* は 13 世紀 ME のフランス写字生がフランス語風 (当時の, ノルマン方言の) に綴つたのが由来である.

英語でもっともよく目にする *sh* を含む単語は, *she* かもしれない. *she* の語源には諸説があるが, 古英語の三人称代名詞女性主格は *hēo* (男性は *hē*) であつて, これは語源ではない. OED によると古英語 (OE) の指示代名詞¹⁰の女性形 (昔の英語にはドイツ語と同じやうに性があり, 明示的な格があつた) *sēo* が硬口蓋化し, *she* になつたとしてゐる. Bradley (1904) によれば ON (古ノルド語: 5C くらいのバイキングの言葉) の指示代名詞の女性形 *sia* の硬口蓋化と推定されてゐる. いづれにしても, 日本語の古語の「(しま)せう」*seu* が「(しま)しょう」*shō* のやうに変化したことと似

¹⁰現在の英語の *the*, *that*, *this* に相当. *sēo* は *the*, ドイツ語の *die* (女性主格) に相当する.

てゐて面白い。本来の hēo が廃れた原因は hē との違いが明瞭ではないためと推定されてゐる。つまり、hē といつてゐるのか、hēo といつてゐるのか明確ではないので、云ひ換へてゐたら、云ひ変へのはうが本当になってしまったといふことだ。

京都訛では「シ」はしばしば「ヒ」になる。「シ」が「ヒ」になる東京辯と逆である。京都では「七条」は「ひちじょー」となるが、東京では「火が強かった」が「しがつようかだ(四月八日だ)」になる。また、京では「ス」は場合によっては「フ」になり、サ行はハ行に浸蝕されつつあるといへる。なほ、京でもなぜか「嫌なお人」は「いやなおしと」である。

上のやうな極端な例—それも方言は別としても、現代日本人はシを [si] や [θ] のやうに発音してゐる人が多いといふ(大野・柴田, 1977a など。th の項で後述)。英語が定義する音韻にくらべて日本語の音韻は広いので、[s] に近い音はすべてサ行に聞こえるし、実際の日本人も標準である [s] 以外のサ行を喋つてゐるのである。なほ、私は後述するやうにシを shi で表記することは、むしろ英語学習の妨げになってゐるのではないかと考へてゐる。

VI. 5 サ行の歴史

奈良時代までは、サ行は、[tɕ] または [tʃ](チャチイチュチェチョまたはツアツイツウツェツォ)の発音であつたと考えられてゐる。それが室町時代には、[ɕ](シャシイシュシエシヨ)に変はり、現在の [s]+[ɕ](サシスセソ)に変化したと考えられてゐる。シは生きた化石なのである。

五十音図(音韻配置表)は、奈良時代の仏教研究・梵語研究(悉曇学といふ)で得られた知見を日本語に適用して作成されたと考えられてゐる。梵語の音韻配置表では、母音の次に子音が喉音 [k,g](日本語になじみのない音は省略する。以下同じ)、口蓋音 [tʃ,ɕ], 背舌音 [t](日本語にはない)、歯音 [t,n], 唇音 [p,f,b,m], 半母音 [j,r,l,w], 摩擦音 [ʃ,s,h] の順に調音点が近心(喉奥)から遠心(口先)になるやうに配置されてゐる。その音の大分類の中 [...] で、更に無声無気音、無声有気音、有声無気音、有声有気音、鼻音の順で細分され配置されてゐることがわかる。これを日本語と比べてみると、喉音 [カ], 歯音 [タナ], 唇音 [マ], 半母音 [ヤラワ] とよい対応してゐることがわかる。成立年代からも、五十音図は悉曇学の影響を受けて作成されたことは確かである。五十音図と梵字の配置表とを比較すると、日本語にない背舌音は別としても不整合が2つある。すなはち、ハ行とサ行の位置が異なつてゐることである。五十音図を梵字と対応づけて作成したといふ前提が正しいのなら、ハ行とサ行だけ、わざわざ対応をはづして配置したといふことは考えにくい。むしろ、五十音図を作成した時代のハ行とサ行は現在の音とは違つてゐたと仮定するとうまく説明できる。つまり、ハ行もサ行も当時の音として、正しい順で並べて五十音図を作つたのだが、後になって音が變つてしまい、不整合が生じたのだと考えるほうが自然である。ハ行は詳しい解説はハ行の項目に譲るが、ナ行(歯音の最後)とマ行(唇音の最後)の間にあるので、当時は唇音であつたと推定できる。サ行も同様に、五十音図と梵語の配置表との比較から、当時は口蓋音(チャ、ジャなどの音)であつたことが推定できる。それが時代を経て、摩擦音のシャ、サに変化したと考えられてゐる。シャの音

は戦国時代～安土桃山時代の宣教師の記録にある。

「鈴木さん」の「さん」の子供言葉が、サを拗音にしたシャンではなく、チの拗音のチャンであるのは興味深い。

現在ではイ段の音シにしか、[ɕ]の音が残されてゐないが、シャ⇒サの変化は現在も引き続いてをり、このシの音も [si](スイ)に変化しつつある。たとえば、vitamin Cは日本語ではビタミンシーだが、最近はビタミンスィーと発音する人が増えてゐる。そのやうな人は、「おいしい」もオイスィーと発音する傾向があつて、単に英語カブレだからではなくて、シャ⇒サ⇒スアの歴史的変遷をなぞつてゐるものと考えられてゐる。

硬口蓋化の項目で、イ段の子音は硬口蓋化すると述べたが、サ行に関しては、硬口蓋化した音 [ɕ] のほうが祖先的形質で脱硬口蓋化した [s] のほうが派生的発音である。

VI. 6 ジとj

ヘボン式ではジをjiと綴る。これは英語の子音に合せたもので、ラテン文字をもともと使用した言語(≈欧米の言語。つまり中国語やベトナム語、トルコ語のやうに近世・近代以降ローマ字化したものは除くといふ意味)では、jは日本語のヤユヨに近い音をもつてゐるものが多い。しかも、それがもともとの音価である。ジをjiと表記して、それらしい発音をする言語は、英語 ([dʒ]), フランス語 ([ʒ]) およびポルトガル語 ([ʒ]) である。英語と仏葡語とは音価が異なるが日本人には違いがよくわからないことが多い。スペイン語はjを[x](軟口蓋無声摩擦音; T_EXのフ, Bachのハの音, Joseはホセ)と発音する。西語では日本はJaponを綴りハポンのやうに発音する。それ以外の欧州の言語では、ほとんど全てjは[j](ヤユヨの子音)である。たとえば、Japanはドイツ語でヤーパンのやうに発音する。蘭語や北欧のゲルマン諸語、ポーランド語のやうなスラブ語族でも同様である。ロシア語で日本人はヤパンスキーのやうに聞こへる。

ちなみに明治屋はもともとヘボン式でMeijiyaと綴られてゐたが日本式にMeidi-Yaに綴りなほされた。福永恭助によるとヘボン式のMeijiyaにはかへって国際性がないので日本式に変更したといふ説が紹介されてゐる。実際、Meijiyaを綴った場合、英仏圏以外の大部分の欧州人はメイイイヤとかメイイユア(西語ではメイヒジャ)のやうに発音してしまひ、日本人には理解しがたい発音がされる上に、そもそも発音しにくいといふ欠点がある。戦前ドイツに留学した神保博士¹¹はその名前をヘボン式でJimboと綴ったが、それをインボと呼まれて困惑し、ではといふのでZimboにしたら、チンボ¹²と呼まれて一層困惑し、遂にDsjimboと書いてやっと自分の名前を正しく呼んでもらったという話は有名で、戦後すぐの参議院(昭和23年5月來馬琢道氏)でも話題になった。今日、似たやうな例として「じゅんこ」さんといふ人がJunkoと綴つて、スペイン語系の人に「フンコ」さん、ドイツ語系の人に「ユンコ」さんと呼ばれるやうなことがあげられる。

¹¹地質学者神保小虎東大教授か？

¹²ドイツ語ではZはツィのやうな音価

なほ、中国語や韓国語、チベット語のローマ字綴方では j はチャやヂャに近い発音を示す。アラビア語のローマ字綴りでも同じ表記をする。J のもともとの音価は [j] (ヤ行の子音) であるが、英仏葡語では音価がかはってしまひ、それが英仏葡語の話者の多さと相俟って、デファクトスタンダードになってしまったものと思はれる。

IPA の発音記号では、[j] の有声音は [ɟ] で示される。この字は Yogh(ヨッホ/ヨーク [jox/jouk]) といふ名前で、ME(中英語) で用ゐられたが、後世の復興版で活字がない場合は g で印字されることもあった。口蓋摩擦音を表はし、有声音の場合には、ȝestern(英 yesterday, ドイツ語の gestern) や weȝ (英語の way, ドイツ語の weg), dæȝ(英語の day, ドイツ語の tag), ȝarrant(英 guarant, warrant) のやうに y や w となった。無声音の場合は後には gh と綴られ。発音は niȝt(night) のやうに黙字または touȝ(tough) のやうに [f] の音価をもつ。ちなみに、ドイツ語では night は nacht と綴って [naxat] と発音するし、英語の king は独語では kenig と綴って [ke:nix/ç] である。スペイン語の j を [x] と発音することも、あながち突飛な音価ではなく、長い間の自然な音の推移のひとつとして理解できる。

J の音価が [j] から [ɟ] や [dʒ] と推移したのはフランスにおいてである。綴り字 dju の発音が [dju] から [dʒu] となり、[dʒu] となった。この時点で英語に伝はり、j の音価は [dʒ] となったが、フランスでは更に音の移行が進み [d] の音が取れて単に [ɟ] となった。強いて云へば、英語の j はチの有声音ヂの子音、フランス語の j はシの有声音ジの子音といふことになる。なほ、ヘボン式は英語の子音体系に則ってゐるので j は厳密にはジの子音ではなくヂの子音といふこととなるが、ヘボン氏が来日した明治時代にはジとヂは同じ音に収斂してゐたので、ヂジ両方とも ji で示される。

日本語でも「やかましい」が訛って「じゃかましい」といふ変化があり、日本の漢字音では「じゅきょう」と読む儒教も韓国語では「ユギョ」になるので、あながち [j] → [ɟ] の変化は変ではないのかもしれない。

シと sh との関係の時と同様に、ジは [dʒ] ではなく厳密には [d͡ʒ] である。英語の j[dʒ] は日本語のジの子音 [d͡ʒ] に極めて近く ([dʒ] 硬口蓋歯茎破擦音と [d͡ʒ] 歯茎硬口蓋破擦音)、シと同様、実用上、ジを [dʒ] で表記しても差し支えないといふ意見が大勢である。しかし、シと sh との関係以上にジと j[dʒ] の関係は複雑である。ジは様々な発音をされる。たとえば地震は [d͡ʒi:ɛin] であるが掃除は [so:ɹi] である。地震は地(ち)の濁音だから d がつくといふ語源的・意味論的理由を考えてしまふが、鼻血は [hanazi] と発音することからわかるやうに、純粹に音の並びだけで決まる現象である。日本語では語頭や撥音・ンの後のジは [d͡ʒ] と発音し、語中(母音間)では [z] として発音される。

VI. 7 Burg, Bury, Burgh

[ɟ] の余談。ドイツ語で城(城塞都市)を Burg と呼ぶ。ハンプルクやペテルブルクなど。低地ドイツ語では Borg(スタートレックの城塞都市生物の名前みたいだが)といふが、これは英語の Bury(カンタベリー)や Burgh(エジンバラ)に相当する。標準ドイツ語では Borg/Burg を [burk] と読むが、低地ドイツ語では [burç](ブルヒ)と読む。これがブリテン島では Buri となり、その後、語尾の i は y で書くといふ正書法

が確立したので Bury となった。一方, Burg から Borough と派生したものもあり, それ後に Burgh と綴りを変えた。中世の英語・ドイツ語はルーン文字からの借字が多数あり (æ, þ など), Borg も Borȝ と綴られてゐた。

ちなみにブルジョア階級といふのは, 城 (都市) の人と意味する Burger に由来する。ハンバーガーは Hunberger (ヨハンの城の人) といふ意味。ブルジョアといふと小金持ちの印象があるのに対し, ハンバーガーといふとまったく金持ちの印象がない。

VI. 8 ザ行

ジで見られた変化はジだけにとどまらず, ザ行全体にわたった認められる。簡単にいえば, ザ行はサ行の濁音ではない。ザ行はジを除いてヘボン式では z で綴られ, 確かに語中では [za][zu][ze][zo] (ザズゼゾ) と聞こえるが, 語頭や子音の後では [dza][dzu][dze][dzo] (ヅァヅヅェヅォ) のやうに聞こえる。一番典型的な例が, 象と印度象である。前者が [dzo] であるのに対して後者は [indo:zo] である。この現象もジと同じく意味や語源に関係なく, 単純に音の配列だけで決定されてゐる。

実はこの現象も, サ行がもともとチャ行またはツァ行であつたといふ推測を支持する証拠の一つである (五十音図を想起されたし)。もともと, サ行はチャ行やツァ行のやうに発声したいために濁音にヅァが残つてゐるといふ論理である。

なほ, 京言葉 (京都弁) ではいつでもザ行は [z]+[z]([ʒ]) であつて, 京都弁には [dʒ] や [dz] の音はない。逆に, 高知弁では, 意味や語源によって, ジとヂ, ズとヅを発音として使ひわけてをり, このやうな方言は四ツ仮名弁と称されてゐる。一般に, 日本人には摩擦音 [z] と破擦音 [dz] との区別が難しい。

ḏ は D-Yogh ligature (D と Yogh の合字/リガチャ) と呼ばれる。[dʒ] で代用することも多いが, 合字にしないなら破擦音であることを示すために, [ḏ] または [ḏ̣] で結び, [dʒ] とすべきである。かうしておかないと, 原理的には [d] と発音してから [ʒ] と発音するやうに解釈されかねない (tsu の項を参照されたし)。

VI. 9 チと ch

チはヘボン式綴り方を批判する際 (あるいは日本式を批判する際) によく引き合ひに出される例である。ヘボン式ではチは chi と綴るが, ch は言語によって様々に発音される典型的な音節で, 英語では [tʃ] (China, church) もあるが例外も多い (machine, chimera, charisma, Christ... 後述)。フランス語では [ʃ] (シャルル Charles のシャ) で, ドイツ語では [ç] (ハインリッヒ Heinrich のヒ), イタリア語では [k] (che: 「ケ」何/what. ラテン語の que 由来, 英 quest と同じ語源だが, 発音が変わつたので綴りも変わってしまった。que だとイタリア語では「クエ」のやうになる。(フランス語ではそのまま「ケ」)) と言語によってまちまちである。たとえば, 地球 chikyu をフランス語風に読めば「シキユウ (支給? 至急?)」, イタリア語風に読めば「キキユウ (気球?)」, ドイツ語風に読めば「ヒキユウ (秘球?)」である。英語では「カイキウ (階級? kikiu と同じ発音)」または「チャイキウ」かもしれない。ちなみにこれらの言語には長音といふものがないので, 日本語のやうに「チキュー」と伸びない。強いて云へばこの

綴ではドイツ語とイタリア語では第一音節にアクセントがあり「ヒーキウ」, 「キーキウ」になるかもしれない。フランス語では語末で「シキーウ」, 英語は本来は第一音節で「カイキウ」だが, 英語的でない綴の場合はアクセントが定位置から外されるので, 「カイキウ」

さて, IPA ではチの子音は [tʃ] で綴られる。英語の ch [tʃ] とは厳密には異なるが, これで表記しても実用上差し支えないといふ意見が大勢である。実用上といふのは, 組版印字で [tʃ] を揃えることが難しいが, [tʃ] は英語で使用するので印刷屋が持つてゐることが多いといふことと, [tʃ] と [tʃ] の両方を説明するのが面倒だといふことを意味してゐる。前者については L^AT_EX で組版してゐる限り問題にはならない。

上で少し触れたが, 実は英語でも ch の発音は安定してゐない。英語は外来語が多いので, ch の音価はもとの言語のそれを引き継いでゐる。たとえば, chrome はギリシャ語由来で [k] の音価だし (私は, 道路へボン式で chome と書いてあるのをよく chrome と読み間違える), ch をチのやうな音 [tʃ] で読むのはノルマンフレンチの読み方で, 中央(パリ)のフランス語では英語の sh を同じ音 [ʃ] になった。英語における ch の綴り方も ME のフランス写字生の綴り方に由来してをり, それ以前は, c の一文字だけだった。また, 英語でもノルマンフレンチではないパリフランス語 (中央) 由来の単語 machine, mustache, chef などでは [ʃ] と発音する。Chicago などインディアンの地名を転写したものもある (シカゴを含めイリノイ州は最初はフランスの入植地だった)。都合のわるいことに英語にはノルマン・パリ含めてフランス語の借入語が多い。また英語の本来語であってもフランス語風に綴りを変えられたもの, 変えられたけれど元に戻ったものと, それぞれの規則がモザイク状になってゐてまるで不規則に見える (だからこそ研究のし甲斐もあるのだが)。

ch よりも tch のほうが安定して [tʃ] の発音を示すが, チを表現するのに 4 文字も費やす (しかも子音が 3 文字続く) ことになり, 他のローマ字に対して文字数が突出してゐて実用上不便であつてかつ美観を損ねる。なほ, 英語の tchi に対応するドイツ語の綴りは tschi で 5 文字も使つてゐるが, zi でもチになる。

日本語のチの音はツの子音である破擦音 [tʃ] がイの母音の影響で硬口蓋化されて後半の [s] が [ʃ] になったため, [tʃ] になったものと解釈されてゐる。へボン式でシと sh と表記するのであれば, チは ch といふよりは, tsh と表記する方が妥当である。ところが, tsh と綴つてチの子音になるやうな単語は英語にはない。へボン式では英語の子音の綴り方を日本語の子音の表記に用ゐるといふ暗黙の前提があるので, チを tshi とすることは, 表記の統一性には貢献するが, 英語的といふ観点からは受け入れがたい。

さて, 日本式綴方への批判のひとつに『「ち」の綴り方 ti は「ティ」であつて「チ」ではない』といふものがある。ローマ字は発音記号ではないので, この批判はそもそも的はづれで, 議論の対象になりえないが, 更に的はづれな批判(?) に『ti と書いて「チ」と読む国(言葉)がどこにあるか(どこにもないだらう)』といふものがある。前述の硬口蓋化で紹介したやうに, ブラジル系ポルトガル語では ti は「チ」に近い発音をしてをり, ロシア語も軟音の ti は「チ」である。ドイツ語でも ti は [tʃi] である (例:Nati=ナチ, Nationalsozialistische の頭 4 文字であるが, 破擦音を明瞭に示す Nazi と子音を入れ替えて綴られることが多い。ナチ自体は NSADP と呼ばれる

ことの方が多い). スウェーデン語にいたっては, -tion と書いて, [xo:n](あえてカナ書きすれば, ホーン) である. また, 英語では ‘fish’ を ghoti と綴り得るくらい発音と綴り方に対応がないので, 発音通りであって, かつ英語風に綴るべしといふテーゼには限界がある (正書法で詳述). sure は [sjʊə], nation は [neɪʃən], suture[sju:ʃə].

C の起源: C はもともとギリシャ語の Γ であった. 45 度反時計方向に回転させ, 角をまるめれば C になる. ギリシャ語からアルファベットを学んだエトルリア人には [k] の有声音つまり [g] がなかったので, Γ を [k] の音を表記するのに使った. のちにローマ人がエトルリア人からアルファベットを輸入した時には, C は [k] の音価であるといふ理解であった. しかし, ローマ人も [g] の音価を示す文字を必要としたので, 文明化が進むと C に細工をして G にした. G が発明(?) されるまでは, 文脈で [k] か [g] かを読み替えてみたが不便であった. G の発明者は Spurius Carvilius Ruga である. もともとのギリシャ語には [k] を示す κ があったがローマ人は黎明時には輸入せず (エトルリア語を仲介したためもある), 文明開花の際も [k] と [g] が混乱してゐるからといって今さら κ を再輸入はしなかった. C を [k] として使用する頻度が高かったためでもある. K > [k], C > [g] は書記体系を大きく変えることになり, それまでの著述が読めなくなる恐れがあった. またローマ人は C を愛してゐたのかのかもしれない (speculated).

xxx 未稿

VI. 10 英語でも tya がチャ, dya がヂャ. sya はシャ, zya はジャ

オモチャは日本式・訓令式では Omotya となる. ヘボン式では Omocha である. ヘボン式愛好家や英語流の綴り字を提唱する立場からは「日本式の Omotya はオモトヤのやうに見える, tya はチャではなくテャであって日本式はよくない」といふ主張がある. しかし, 英語においても ty はチャとなる場合があるので, このやうな指摘は自己矛盾に陥つてゐる.

たとえば, “Don’t you..” は米語ではしばしば単語間が結合し更に音がし [dɒntʃu:] (再綴すれば donchu) のやうに発音される. “meet you” も [mi:tʃu] となる. Dy についても同様で Dya はヂャ [dʒa] ぢゃなくてデャ [dja] だと思つてゐたら, 英語でも “would you...” では [wʊdʒu:] となる. Sy も “this year” では丁寧な発音では [ðɪs jɪə] だが, しばしば [ðɪjɪə] となつてゐる. 他に miss you もさうだ. Zy も “As you know...” では [æzju:] から [əʒu] になる. “Because you” も同じ.

VI. 11 ツと ts

tsu といふ綴りは英米人には馴染みがなく, 発音がわからない (わかりにくい) 綴りである (もっとも, 2003 年スマトラ大津波 (Sumatra Tsunami) や松井選手 (Matsui) の影響で, tsu といふ綴りの読み方も普及したやうだが). 英語辞書で調べてみても, tsu を含む単語は Fujitsu や Matsushita のやうに日本語がほとんどであって, 英米人に発音上ヒントになる綴りはロシア語の tsar (皇帝, caesar が訛つたもの) くらゐで, cats, its のやうに, t に s がくつついた音はあるが, ts に更に母音が接続する綴り

はほとんどない。pantsuit のやうに一見接続してゐるやうに見える綴りであっても、発音は、pant-suit とわけて行はれる。ホームズの友人の Watson はワトスン(またはワトソン)のやうに、wat-son と切って発音され、ワッツォンとはならない。また、ヘボン式でも当所はツは tsz といふ母音のない綴りになってゐた。ポルトガル系宣教師には「ツ」を tcf¹³と記述した人もゐる。u が f として聞こえたのだらう。

音韻学的研究によると、古代の日本人はツを [tʷ](トウ) と発音してゐたと推定されてゐる。それが破裂音 [t] で音をはじめて直ちに摩擦音 [s] に移行する破擦音に推移した。現在のツの子音は、IPA では [ts] と綴る (t と s の合字リガチャ) が [ts] と表記されることも多いが、[t]+[s] ではないこと示すために [t͡s] と書くほうが望ましい。このやうな変化はなにも日本語だけに限ったことではなく、ゲルマン古語が高地ドイツ語になる時も [t] の音が [ts] になった。ゲルマン古語の音価を残してゐる英語の tide(潮, 転じて時)[taɪd] がドイツ語では Zeit[tsait](なほ英語の d はドイツ語の t にほぼ対応する)、英語の to はドイツ語では zu であつて、この変化もよくあることである。ただしドイツ語の t=>z の変化は語頭のみで語中は t=>ss(water/wasser)、語尾は heart/Herz, what/was, that/dass などいろいろ変化してゐる。

ヘボン式はチを chi, シを shi, スを su と表記してゐるので、これに習えばツは cu とするのが表記の統一性からすると妥当である。つまり、[s] 音の硬口蓋化した音と sh で表現し、ツの硬口蓋化した子音を ch で表現してゐるのであるから、チは ch から h を取り払ったものであるべきだといふ論理である。問題は cu をツと読む習慣はヘボン式が範とした英語にはないといふことである。中国語のピンイン(撥音*正確には撥の偏と併の傍の合字である)では cu はほぼ日本語のツである。ポーランド語、チェコ語、ハンガリー語などラテン文字を用ゐる東欧の言語(大部分はスラブ語族だがハンガリーはウラル語族)では、cu といふ表記はそのまま日本語のツと同じである。チの子音にはč(ポーランド語), č(チェコ語), cs(ハンガリー語)を當ててゐる。なほ、これに一番近いローマ字表記が服部四郎の新日本式である。

さて、破擦音には [pf] といふのもあり、ドイツ語の Apfel(英語の apple) が代表的な例である。一概に発音が楽なドイツ語の中で例外的に、しかも極端に難しいのがこの [pf] である。日本人がこの綴りを見て発音しようすると、[p] と言ってから [f] と言えればいいんだらうかを考えるしかないで、発音は「アップル」の(プフはプフの子音)やうなものになるだらう。しかし、[pf] は [p][f] ではないので、「プフ」の子音ではない。ドイツ人には当たり前のことも、[pf] 破擦音を知らない日本人には難しい。

ツ (tsu) も同じやうに、[ts] の破擦音を知らない英米人にとっては、[t][su](強いて假名書きすれば、ト(の子音)ス)と発音するしかない。その場合、津波はトスナミ、辻野はトスジノになる。しかも大体においてト (t であつて to に非ず) は発音されないため、スナミ、スジノになる。t が発音されないのは、心理学 psychology がプサイコロジではなく、サイコロジになるのと同じである。彼らは破擦音の最初の破裂音をしばしば発音できない。フランス語のやうに、ch[tʃ] の t が発音できなくなつて [ʃ] になるのも時間の問題である¹⁴。

外国語に関心のない英米人は [tʃ],[dʒ] 以外の破擦音が発音できない。したがって英

¹³c (正確にはç) は s と同じなので、tc は ts になる。

¹⁴といつても、現在 [ʃ] と [tʃ] の音韻は対立してゐるので、このままでは t はなくなるならない。

語話者にとって, 松田 matsuda と増田 masuda の発音の辨別は困難である. マスダとマツダを交互に聞かせて辨別できるかどうか試してみるとよい. また表記をヘボン式で書いてある限り, どちらも読ませてもマスダになる¹⁵. 日本式で松田を matuda と書けば, まだましかもしれない¹⁶. しかし, ここにも落とし穴がある. 後述するが, アメリカ英語では母音と弱母音に挟まれた t は弾き音化といって, 日本語のラ行頭子音 [ɾ] と同じ音に変化する. Water がワラーになる現象である. matuda の u にアクセントがない場合は, maruda になる. 日本語話者にはマルダ (丸だ?, 丸田?) に聞こえる. 幸ひ, matuda は matúda と u は強音節になるのでマルダは回避されるが, 最後の音節の da は弾き音化する可能性は避けられない. その場合は, マチューラとなって松浦と紛らわしい. 英米人には長音もモーラもないので, matuura としたところで ma·tu·u·ra ではなく, [mətju:rə] マチューラである. Matsuura にしてもマシューラ (摩周ら?). 更に, Matuyama の場合は ya に強音節がくる確率が高い (マトウヤマ) ので, 弾き音化により maruyama となって日本語話者にはマルヤマ (丸山) と区別ができない. Matsuyama にしたところで, マスヤマ (増山) である.

宣教師のローマ字綴り方に「ツ」を tcf といふのがあると紹介したが, 私はこの表記には合点がなくて, 「ツ」は「フ」に近いと感じてゐる. 実例がある. 私は酔ふと自分の名前ツジノをトフジノと発音してしまふ¹⁷. ツ tsu がなまってフになるのである. ただし, このフは残念ながら fu(φω) ではなくて [xu] である ([x] は Bach のハ, TeX のフ). トフは [txu] といっているつもりである. おそらくこれは京言葉の音韻変化で「ス」を [xu] として発音することがある (いつもではない) のと関係してゐると考える (speculated). 京では「です」「ます」「どす」「おす」に「ね」「な」「か?」がついた場合 (例, 「よろしおすな」よろしいですか) の「す」は [xu] になりやすい. 「ツ」は [tsu] なので, これに [su] > [xu] と変化を適用すると [txu] が導出できる. 世間では似たような例もあって, ノルド系統語 (北ゲルマン語, ドイツ語の親戚) のスエーデン語では -tion をフォン ([x]) と発音し, 私の訛や京言葉と同じ音韻変化をしてゐる.

VI. 12 ヒと h

ヘボン式ではハ行は ha, hi, fu, he, ho と綴られてゐるが, ヒの子音の発音とハヘホの子音の発音とは同じではない (フの子音はヒともハヘホとも異なる. さういふ意味では他のハ行と違ふ文字 f を子音に当ててゐるのは的確だが, f はフの子音ではない. 後述). ヘボン式ではサ行を sa, shi, su, se, so のやうに音にあはせて綴ってゐるが, 同じ設計思想からいふとハ行も書きわけが必要であらう.

さて, 日本語のヒはヘボン式では h と綴られるが, 英語の h の発音とはかなり異なる発音で, ドイツ語の ich (イッヒ/私は) の発音と等しい. IPA では [ç] と綴る. この音も硬口蓋化と関係してゐて, もとの音から硬口蓋化が進んだ結果, 別の音素とし

¹⁵ 実際は英語の phonics に従ふので, マスダとも読まれない, といふオチがつく. 第一アクセントが (t)su にあると話者が思へば, [məsju:də], もし ma を第一アクセントにするなら, [meisju:] となって最後の da は発音しづらい.

¹⁶ 英語の phonics に従へば [mətju:də]

¹⁷ トは云ってゐるつもりだが, 周囲には聞こえない

て認定し得るくらゐに違ったものである。人によって場合によっては, [xʲ] や [hʲ](硬口蓋化した [x] や [h]) として発音されることもある。

日本のローマ字綴ではヘボン式, 日本式, 訓令式ともに「ヒ」を hi と綴るが, これは英語の hip[hɪp] や he[hi:] とは子音が異なっている。「ヒ」は [ç] だが, 英語の hip, he は [h] である。これは, 英語話者には時々誤解をまねく日本語風発音のひとつであって, 英語としては, [ç] は [j] のやうに聞こえる。つまり, he といったつもりが she と聞かれてしまふのである。つまり, he も she も日本語で云ふ限りでは英語話者には同じ she に聞こえる。日本語風発音を知っている英語話者には理解可能な発音であるが, 日本語話者のクセを相手に予め知っておいてもらえとは限らないので注意すべき発音であることには違ひがない。

ハ行は奈良時代はファに近い唇音であったことが推定されている(ハ行転呼音)。これは, 「母には二度あって, 父には一度もあはないものはなあに?」といふ当時の謎々(「後奈良院御撰何曾」1516 または豊原総秋著「体源鈔」1512: 答え, 唇)からも推定できる。現在のハハは一度も唇があはない。唇をあはせるやうに発音すると, パパないしはファファになる。それが当時の発音であったと考えられてをり, ハ行はファフィフフェフォであったのだらう。

VI. 13 フと f

日本語のフはヘボン式では fu と綴られるが正確には英語の f ではなく, IPA では [ɸ] と綴られる別の音である。日本語のフは, 膈をフーフーする時のフの音(日本語のフは説明しなくても普通にフと言えよ, 原則(後述)で, 英語の f とは大きく異なる。この違ひはシと sh の違ひよりも顕著で日本人は練習しないと [f] として聞きとれる発音はできない。英語の f は下唇と上歯の間に隙間をつくる唇歯音であるのに対して, 日本語のフは唇だけで隙間をつくる両唇音で, しかもその隙間は英語の f より小さい。ちなみに, フを fu と当てたヘボン氏自身は英語の fu と日本語のフが同じ音ではないことに気がついてをり, それだけでなく音の違ひや調音点の違ひも正確に認識してゐた。かといってフの子音には他によい字母がないので, 英語でもっとも近い f を当てた。

話がややこしくなるが, 日本語のフの子音 [ɸ] は英語の [f] ではないが, 英語の [f] の音は日本語話者にはフの子音として認識される。ちょうど, th の [θ] が日本語ではサの子音 [s] に聞こへるのと同じで, 日本語話者が話すフの子音でないが, フとして聞こへる。

ある程度英語を理解する日本人が英語話者に “Tea or Coffee?” と聞かれたとしよう。日本人はコーヒーがほしいと思って “コーフィー, プリーズ (Coffee, please)” と返す。しかし英語話者は日本人がなにをいっているかわからない。なぜか。その日本人はコーフィーの「フィー」の音を日本語の「フィー」(ヘボン式では fi と表記)で替えたためである。前述のやうに, 英語または他の多くの欧州の言語の f の音 [f] は日本語の「フ」の子音 [ɸ] とは異なる。日本語の「フィー」は両唇音で口の形だけだと歯茎音「ティー」と同じである。だから, 英語話者にしてみれば, 日本人が “Co-Tea” といっているやうに聞こえる。英語話者がわからないのは当然である。

余談：外来語の不正確なカナ表記や日本式ローマ字綴りが英語教育に悪影響を与えてゐるといふ論説があるが、筆者は、外来語の「正確な」カナ表記やヘボン式ローマ字綴りも同じくらゐ外国語教育に悪影響を与えてゐる、と考へてゐる。両方に共通するのは、外国語を(情報の欠損なしに)日本語表記できる、その逆もまた然りといふ錯覚である。カナやローマ字が世界共通の「音」を表し得ると思ひこんでゐるところに錯誤の元がある。外国語と日本語は多少は共通の音や規則があるが、完全に通訳可能な互換物ではない。であるから、外国語を日本語の延長線上で考えることには大きな誤りがある。日本語の枠組の中で外国語をとらえるのなら、外来語として日本語の音韻・文法体系のなかでとられるのが正しいし、外国語としてとられるのであれば日本語の都合は関係ない。たとえば、外国語としての ticket はチケットでもティケットでもない。どちらに表記してもそれは英語にはならない。(詳しくは「正書法と発音」で述べる)

更に話はややこしくなるが、少なくとも京と大阪の一部ではフの子音には二種類あつて [ɸ] と [h] とある。両者は異音(同じ音素)で注意しないと違いがわからない。自分自身ならびに京大阪人の発声の観察によると、どうも単語によって使ひわけてゐるやうだが、人によって異なつてゐて私自身よくわかつてゐない。また、京では「ス」も「フ」のやうに発音されることがある。この「フ」は T_EX のフ [xu] である。京都人としては「フ」を fu で表記することには納得がいかない。もっとも、正書法に対しては方言は考慮の他で、個々の地方の発音を云々していくと収拾がつかなくなる。そのため、標準語といふ理想を想定してそれに準拠するわけである。それでも何が標準かといふところで問題は残る。標準化は標準に洩れてしまった対象に排他的圧力を与へる。たとえば、京のフ [hu] は排除されたわけである¹⁸。なにが標準かを決定することは学術的といふよりは政治的な問題で、政治性を避けるためには標準語ではなく共通語といふ名称も使はれる。この場合の共通語(の発音)といふのは、どこにいつてもそれなりに通じる発音といふ意味である。

なほ、[h] は声門摩擦音で、知り合ひのアメリカ人には hu は [u] と同じに聞こえるらしい(ちなみに彼には [ɸu] は fu には聞こえなかった)。ウに近いハの音は、ハ行転呼音 ([pu] => [ɸ] => [w] => [(無子音)]) の音の遷移の一断面を見てゐるのかもしれない。

Coffee の話題でもうひとつ。Coffee, Cafe のカナ書きで、日本語はヒとフを同じ子音の音韻と思つてゐるが完全ではないことが推定できる。Cafe はカフェと書くが、Coffee はコーヒーと書く。もし、チとティを書くわけのやうな方針を徹底するならば、コーフィーと書かねばならない。マーフィーといふカナ書きはあるが、コーフィーはなかなか気取つた人でないと書かない。似た例にヒューズがある。もとは fuse であるからフューズとすべきだが、ヒューズと綴る人が大半である。このことからヒとフは同じ子音の音韻と思つてゐることがわかる。逆に、まったく同じ音韻であるなら、コーヒーと書くと同時に、Cafe をカヘと書くべきであるが、かういふカナ書きはまったく目にしない。どこかにあるのかもしれないが... たとへば醤油をショイ油と書く人がゐた。そこでは方言でショウがショイになつてゐたのである。強制されなかつたら、そのとほりに書く、その例といへる。だから、Cafe も本当は

¹⁸ それでも、京都人の中には、自分のフはローマ字では fu と書くので、[fu] だと思つてゐるかもしれない。それは二重の錯誤である。まづ、京都人のフは [xu] である。そして、ヘボン式のフは [ɸu] であつて [fu] ではない。

カへと書きたい人もあるが、書かないのは教育と文化、社会生活といふ強制の御陰かもしれない。筆者の内省では、cafe をカへと書くのは、テレビをテレヴィと書くより奇妙に感じる。筆者のなかでは、カフェのへとフェは違ふ音韻となつてゐる。不完全に区別されてゐるわけだ。なほ、フィールドといふ語はフィールドと書くが、多くの人はヒールドのやうに発音してゐるやうに聞こへる。

F の文字は、もともと Y と同じで「ウ」に近い音 [w] を示してゐた。羽根の方向が左右に拡がってゐるのが Y、右だけなのが F である。もともとの名前を Digamma といひ、ガンマの羽根がふたつ (di) ついてゐるのでダイガンマである。

VI. 14 ホ, ハヒフヘホー

Glenfiddich はスコットランドのウキスキーの名である。カナ書きでは「グレンフィディック」と表記されてゐる。ここで実験をしてみる。「グレンフィディック」といふカナ書きを知つてゐる人とカナ書きもスペルも知らない人を被験者として、スコットランド人にゲール語 (現地語 Mackinnon, 1971) として Glenfiddich を発音してもらい、どう聞こえるか聞いてもらふ。

カナ書きを知つてゐる人は「グレンフィディック」のやうに聞こえることが多い。しかし、カナ書きもスペルも知らない人は「グレンフィディック」ではなく「グレンフィディッフ」または「グレンフィディッハ」のやうに聞く。この場合の「フ」は日本語のフよりもっと喉の奥が響くフである。ドイツ語を知つてゐる人ならば Bach 「バッハ」のハと同じだと気がつくかもしれない。また、スコットランドにあるネス湖 (英語では Lake Ness) も Loch Ness と表記するが、ch は喉の奥で調音する「ホ」であつて、日本語の「ホ」(子音は [h]) とは厳密には異なつてゐる。聞き方によっては「フ」または「ハ」のやうに聞こえるかもしれない。TeX をテフと発音した場合¹⁹の X も同じ音である。IPA では [x] と表記するが、X については後述する。

つまり、Glenfiddich はゲール語であるから「グレンフィディッフ」または「グレンフィディッハ」のほうが正しいカナ表記であつて、「グレンフィディック」は英語風に発音した時のカナ表記と云える。それでも一旦、「グレンフィディック」といふカナ書きを受けいれると、さう聞こえるからおもしろい。英語では、この「ホ/フ/ハ [x]」の音がないので、「ク [k]」で代用してゐるのである。意外かもしれないが、ハ行とカ行は近い関係にある。調音点で見れば、[k] は軟口蓋であつて喉の奥の手前の上のやはらかいところである。[h] や [x] はその奥の喉 ([x] は喉のさらに奥) であつて調音点が近い。

ところで、韓国語で東海は dong hai (あえてカナ書きすれば「トンヘ」), 中国語でも同様に dong hai 「トンハイ」であるが、日本語では「とうかい」である。韓国語・中国語の h が日本語ではカ [k] になつてゐる。これは上述の [k] と [h] の調音点の近さと平安時代の「ハ」行の音韻とで説明できる。漢字を受け入れた当時の日本ではハ行は「ファ」行または「パ」行であつた。「ハ [h-]」行はまだ日本語になつたのである。だから、当時の日本人は海 [hai] を「ファイ」や「パイ」ではなくて [kai] 「カイ」のやうに聞いた。丁度、Bach 「バッハ」や Glenfiddich の ch がない英国人が

¹⁹ テックと発音する人もゐる

[x] を [k] と聞き, 彼等にしては聞こえたまま Bach をバックのやうに発音するのと同じである. 別に, 当時漢字を伝へた人達が「カイ」と発音してのではなく, 当時の日本語の音韻体系の中で聞こえたやうに海を「カイ」と表記しただけのことである.

同様の語に, 「華」や「化学」や「科学」がある. どうして °F (Fahrenheit: ファーレンハイト) がどうして華氏「カシ」になるのか? セルシウス度が摂氏なのだからファーレンハイトは「ファシ」か「ハシ」ではないのか? それは, 中国語で [fa] に近い音韻は [hua] であり, それに「華」をあてたためである. 日本語では「華」を「カ」と読むのは当時の日本語には [hwa] や [hua] の音がなかったため, 軟口蓋音「カ」のやうに聞こえたのである.

「化学」や「科学」は日本語では音で区別できない語彙の一つである. であるからしばしば化学と「ばけがく」, 科学を「さいえんす」²⁰と呼んで区別する. もととの中国語では「化」は喉音「ハ」, 「科」は軟口蓋破裂音「カ」で区別されてゐたが, 日本語ではどちらも「カ」の音に収斂してしまったので同じ音になってしまった. なほ, 韓国語では科学は kwahak, 化学は hwahak と区別されてゐる.

VI. 15 八行転呼音

起きたことは確実だが, いつ, どこで, どこまでが変化したのか, 詳細はまったくわかってゐない.

xxx 未稿. これは唇音退化として説明できる. 唇音退化とは口をちゃんと閉ぢなくなる傾向のことである. 発音の省力化のためと考へられる. 「すみません」が「すいません」になるのが例である. 唇音退化の結果, ハ行はワ+ア行になった. ハ行の次に転呼するのはマ行か?

xxx 未稿. ヒはシと同化して, [ç] がなくなり, ハ行イ段はシと同じ [j] になる? それにともないサ行イ段は [j] から [s] 「スイ」に戻る?

xxx 未稿 日本語がちよつと話せるイタリア人は「はい」と「ワイ」のやうに云ふことがある. ハ行転呼音をみてゐるやうだ. イタリア語などのロマンス語には [h] の音はなく, 彼等には日本語のハ行は発音しづらい.

VI. 16 ニと ni

ナ行もヘボン式綴り方と実際の音素との間の乖離が著しい. 日本語のニの子音に最も近い外国語の音は, イタリア語の gn の綴り (sogno/ソーニョ/夢) やスペイン語の ñ で示される発音 (El Niño/エルニーニョ/The Boy=キリストのこと), ポルトガル語の nhi(senhor; セニョール) である. この音は IPA では [ɲ] と示され, 湿音の n と云はれる. 日本語のニが舌先と歯茎, 歯で調音するのに対して, この音は前舌と硬口蓋で閉鎖を作ることには違ひがあるが, 同じと見ても差し支えない. ニ以外のナ行は [n] で示し, ニの子音については調音点がもう [n] とは違ふところまで硬口蓋化

²⁰筆者は大学の学部の名前のやうに理学とすべきと考へてゐる. 「理科学/りかがく」も悪くはないが, それでは理化学と区別できない.

したので別の発音記号 [ɲ] で表す。ただし、二の子音は [n] の硬口蓋化した音だが、[ɲ] の音の中にあると考えて [ɲ] で表はす考え方もある。

もし、ヘボン式は音声に従ってわけてみると主張するのであれば、二の発音と二以外のナ行の発音とは同じではないので、ナ行も書きわけが必要であらう。その際には、硬口蓋化した音に h が使はれる傾向がある (sh, ch) ことを考えると nh とでもすべきだろうが、これは英語では一般的でない綴り方である。英語では硬口蓋化した n つまり [ɲ] と [n] の違いは区別されない (同一音素) ためであらう。つまり、ヘボン式は発音に従って書きわけてゐるのではなく、英語の音韻体系に基いて書きわけてゐるのである。

さて、別の綴り方として、イタリア語の gn やスペイン語の ñ を導入する考えもあるが、これらは難しい。ñ は別に文字を作らないといけないが、たたでさえ長音記号 (ôsaka など) が普及せず、ASCII または英字で表記したいといふ風潮に反してゐる²¹。gn は、日本語では子音+母音で拍になってゐるので、前の母音と g とか結合して見えてしまい混同の元になる。たとえば、カニは kagni と綴ることになるが、カグニとも読めてしまふ。「親日」は shingnichi となつて shing-nichi とも shin-gnich 読めてしまふ。shing'nichi とか shing'gnichi, shin'gnichi といった書きわけが必要になる。

なほこの湿音の n はフランス語 (オイル語) ではイタリア語と同じで gn と示されるが、オック語 (南フランス語) では nh (葡語と同じ) で、vinea (葡萄) > vigne (オック語 vinha), seniore (主君) > seigneur (オック語: senhor), agnellu (子羊) > aignel (オック語: ainhel) となる。仏語・伊語では vinea は vigna, 葡語はオック語と同じで vinha である。スペイン語は viña とチルダ (tilde) のついた n となる。湿音の l も n と同じで、ヤ行に近いので (正確には l の調音でヤを発音する [j]), ヤ行は ll で示すこともできる²²。たとえば, palea (わら) > paille [paʎ] (オック語: palha), oricla (耳) > oeil [œʎ] (オック語: aurelha) が参考になる。ちなみにこれはイタリア語では paglia のやうに gl で示し、スペイン語では paja と j [ç] と綴り字が大きく変ってしまったものも多いが、ll の綴り方も残ってをり、仏語を同じ発音である。葡語では palha とオック語と同じに示す。

VI. 17 ン N

「ン」は日本語では撥音といふ。日本語は CV の開音節からなる言語だが、例外的に「ん」は子音だけで音節を為す。では、「ン」の子音はなにか? 単純に [n] だと思ひたいところだが、ほんたうにさふだらうか。たとえば, Shim-Matsudo (新松戸) といふ駅名の綴りがある。駅名のローマ字綴りでは Shimbashi (新橋) のやうに「ン」の音 (正確には音韻) を時々 m で綴ってゐる (なほ, 道路表記の新橋は Shinbashi である)。時々といふのは同じ鉄道会社の看板でも新幹線は Shinkansen であつて、いつでも m ではないためである。新幹線の「ン」は同じ新の「ン」であるにも関らず, n と綴られてゐる。これは日本語の「ン」に当たる音が英語 (を範とするヘボン式)

²¹ 計算機資源が潤沢になった今, ASCII で表記しなければといふ方針の方が時代錯誤ないし強迫観念の産物に思えるが, 「ASCII に文字化けなし」といふ格言で示されるやうに (?) 一番, 底辺にあはせなければいけないことが多い。

²² ジャ行にも聞こえるのがミソ。

では二種類に聞こえるので書きわけてゐるためである。厳密なヘボン式(なにが厳密かは正書法の項で詳述)では p, b, m の前に来る「ン」は m で記すことになってゐる。たとえば, サンパイは Sampai, サンバイは Sambai, サンマは Samma である。それ以外は n で記す。n と m, どう違ふのか, 実際に, 新橋(shimbashi)と発声してみるとシンのンでは口が完全に閉じてゐるが, 上新(jōshin)と発声してみるとシンのンの口が開いて舌がだらんとしてゐることことがわかる(と思ふ)。確かに音は違ふ。この違ひをヘボン式綴りは表現してゐるのである²³。

しかし話はこれで終はりではない。続けて今度は, サンマ(saNma), サンドル(saNdaru), サンニュー(参入, saNnyu), サンコー(参考, saNkō), そしてただのサン(三, saN)と発音してみる。それぞれンの発音をする時の口の形が異なつてゐる。サンマは新橋と同じで [m] の形, サンドルは [n](ナの子音), サンニューはニの子音 [ɲ], サンコーは鼻濁音のガの子音 [ŋ]。ただのサンは, これまでの子音とは違ふ音である。口が開いたまま, 舌は平らで口蓋垂が舌の根にくっつき鼻に呼気が抜ける。これを口蓋垂鼻音(口蓋垂で調音する鼻音だから)といひ [N] で示す。次に, サンセキ(山積), サンイン(山陰), サンヨー(山陽)と発声してみる。これらのンの音はどれも同じ形で, 鼻に抜ける音であるのがわかる。フランス語のママン mamam, スペイン語のパン pañ, 葡語のサンバ samba[sāba] が近い音である。これを鼻母音といひ, サンセキ[sāseki]の[ā]のやうに「〜」で示す。一般的な表記は [Ṽ] である。どの母音がくるかは場合による。この鼻母音と口蓋垂鼻音以外は, 前の子音と同じ調音点になってゐる。ンの子音をまとめると下記のやうになる。

後続の子音		ンの発音
両唇音	p, b, m (パバマ行)	両唇鼻音 m
	但し p ^j , b ^j , m ^j (ピビミ)	硬口蓋化の m ^j
歯茎音	t, d, n, ɾ, ts, dz (イ段以外のダタナラ行)	歯茎鼻音 n
歯茎硬口蓋音	tɕ, dɕ, ɲ(チヂニ及びチャチャニヤ行)	歯茎硬口蓋音 ɲ
軟口蓋音	k, g, ŋ(カガ行)	軟口蓋鼻音 ŋ
	但し k ^j (キ)	硬口蓋化 k ^j
語末		口蓋垂音 N
母音; 半母音	V(ア行); j, w(ヤワ行)	鼻母音 [Ṽ]
摩擦音	s, z, ɕ, ʑ, h, ç, φ; (サザ*ハ行)	鼻母音 [Ṽ]

*注: ただし, 標準語では撥音の後のザ行は [dz], [dʑ] の破擦音に転呼するので, ザ行の前の撥音は鼻母音ではない。

これらの「ン」の音は全て(音響)音声学的には弁別できる音であるが, 日本語の音韻としては全て同じ音(音韻)として扱はれる異音である。ヘボン式では子音の弁別については(母音はまた別)英語を範とし, 英語では日本語のいろいろな「ン」のうち, ム(m)だけを特別視するので, Shinbashi, Shinkanasen と書きわけるのである。その他の「ン」は英語では聞きわけないので, 書きわけず全部, n の文字で代表

²³ヘボン式では群馬は Gumma, 関門は Kammon になるが, 私は促音「グッマ」「カッモン」に見えてしかたない。

させてゐるわけである。

ただし、ヘボン式と称されるものには亜流がいくつかあり、一概ではない。駅名および外務省旅券のヘボン式は n/m を書きわけてゐるが、道路標識のヘボン式は「ン」は全て n で表記してゐる(道路標識のヘボン式は厳密ではない。正書法の項で詳述)。ヘボン式の眼目は子音は英語で弁別できる限り書きわけるのであるから、「ン」も m/n の範囲で書きわけるときである。もっと言えば、英語でも $[ŋ]$ の音は弁別するのであるからカ行の前のンも書きわけるときであるが、英語は発音の解釈規則として k/g の音の前の n は自動的に $[ŋ]$ になるので一々表記に反映させない。丁度、日本式ローマ字で i の前の s は自動的に sh (正確には $[ɕ]$) の音になるやうなものである。英語の $[ŋ]$ の解釈規則は日本語のンの解釈規則と一致してゐるので書きわけなくてもいいかもしれない。

ところが、解釈規則を持ち出すことは両刃の劔となる。ンを示す n は後続の子音によって発音が異なるけれど、解釈規則により、いちいち書きわけなくてもよいといふ書記法に最初に到達する。それが「ン」を n で一括表現する道路ローマ字の考え方といってよいだらう。しかし、解釈規則の適用を敷衍していくと、言語にはそれぞれ固有の解釈規則があるのだから、いちいち音の違いで書きわけず、文字は語の違いを示せばよいといふ考え方に究極的には到達する²⁴。「ン」を n で一括表現する道路標識のヘボン風ローマ字は、基本的には英語風の発音に従ひ、「ん」だけは日本語の音韻に従った表記をしてゐることになる²⁵。 m/n を書きわけるとローマ字は日本人には「ン」の弁別ができないので道路標識の製作が難しいので避けたのかもしれないが、「ン」は音韻に従って全て n にしてるのに、それ以外の音、例えばサシを sa, shi と書きわけるのはおかしい。どちらも同じ音韻なのだから。

表音(音響音声学)的に書きわけることがどういふ意味をもつのか、更に研究する。三万(サンマン)は $samman$ と表記するが三輪は $sanrin$ である。新幹線 Shinkansen と新橋 shimbashi が同じ「新」なのに綴り字が異なるのと同様である。ヘボン式ではンを含む語の同一性が崩れてゐる。更に書きわけてみるとどうなるか試してみる。三一(サンイチ)は $sāichi$, 三二(サンニー)は $sajjī/saññī$, 三三(サンサン)は $sansan$, 三四(サンヨン)は $sāyon$, 三五(サンゴ)は $sanjō$, 三八は三八六(サンハチロク, 386)の場合は $sāhachiroku$ であるが、三八式(サンパチシキ)の場合は $sampachi-shiki$ となる。綴り方を見ただけでは同じ三を意味してゐるやうには見えない。結論、表音主義だと語の同一性が保てない。これを気にすべきかどうかは場合による。音を示すのが目的なら当然、書きわけるときであらう。語を示すのが目的なら書きわけるときではない。文を示す文字は当然文の意味を伝えるのが目的であるから語を伝えるために文字はある。であれば書きわけてはいけなからう。

とはいえ、英語で否定を意味する $in-$ (もともとはラテン語)は後続の子音によって $incapable, impossible, illegal, irregular$ と n に相当する子音を書きわけてゐる。これは $in-$ の元々の形は $iS-$ (S は子音)だからかもしれない。日本語はどの促音も「ん」の一字で表記することになってゐる。

補足：厳密なヘボン式の n/m の書きわけは英語の発音上の区別(音韻)を借用して

²⁴それを満たすものは日本式ローマ字である。

²⁵完全に音韻に従ふと日本式になる。

ある。しかし、英語であっても唇音 (pbm) の前の n は発音上は自動的に m になる。“can be” は一語一語を区別して発音すると [kæn bi] だが、通常は [kæmbi] となる。

VI. 18 L と R

日本語のラリルレロの子音は、r でも l でもない。「日本語は [l] (または [r]) の発音がないので、l と r を区別できない」といふのは音声学や音素論からみるとあまりに簡略化しすぎた説明—つまり横着な説明である。論理的に考えてみてもこれは明らかである。つまり、[l] の発音がなく [r] の発音がある (その逆も然り) のなら、[l] は [r] とは違ふ全く別の音として認定されるので、l と r は区別できることになる。実際には、日本人は l と r を区別できない。これは「[l] の発音がなく [r] の発音がある (その逆も然り)」だからではなく、ラ行の子音は [l] と [r] の両方の特徴をもつ別の音と考えるほうがはるかに説得力がある。日本語のラ行は音素として l も r も含んでゐる。言語学では「ある言語において全ての音は体系化される」といふ言ひ方をする。つまり、どんな音も聞いた人が自分の言語に照して解釈して、どこかの音素 (もっとも近い音) に分類するのである。

[l] や [r] のやうな音を一般に流音を称する。日本語は流音が一つしかない言語で、だからこそ、「L と R が聞きわけられない」とか「L と R が聞きわけられる教材、教育方法 (0 才からの... ?)」といふ文言が頻出するのであるが、流音がひとつしかない言語はなにも日本語だけではない。カムチャッカの人々の言葉やアイヌ語、韓国語²⁶、中国語 (後述)、チベット東方語、ミャオ語、カダイ語、オーストロアジア諸語、オーストロネシア諸語などで、北米においてもイヌイトのアリュート諸語と介して環太平洋域に分布してゐる (松本, 1998)。一方、ユーラシアからアフリカにかけては流音が複数ある言語が分布してゐる。

L と R は音声学的には、はなはな対称的なグループをもっている。R 系の音は音価にばらつきが多く、変種がたくさんあるが、L 系の音は比較的単一である。具体的には、[l] は歯茎側面接近音の音価をもち、欧米の l は全てこの [l] の音価である。英語では dark l と clear l が存在するが、これらは相補分布を示し、英語音韻としては同一である (後述)。clear l を含めて一般的な l の調音方法は、舌をもりあげて歯茎に接し、そこは閉ぢるが、舌と頬の間に隙間をつくるのである。その隙間 (側面) は摩擦にならないくらい空間で、接近音になる。丁度、[s] が歯茎と舌尖の間だけ開けて、そこから呼気を逃がすのと反対に、[l] は歯茎と舌尖の間だけ閉ぢるのである。舌の形は [n] と同じであるが、[l] は呼気は頬と舌の間を伝はるのが違ひ。[n] は鼻音で、鼻に呼気が逃げる。

dark l といふのは IPA では [ɫ] と表記される、軟口蓋化した [l] である。clear l では舌をもりあげて歯茎に接することで調音するが、[ɫ] においては舌をもりあげるだけで歯茎に接することはしない。これは調音の省力化 (横着化) として説明でき、dark l は一種の後舌母音的な音になってゐる。日本語で近いのはウになる。dark l の cool をあへて假名書きすればクールではなく、クーウとなる。dark l はイギリス英語では語末のみに出現し、語頭・語中では clear l となるが、アメリカ英語では語頭以外

²⁶ 初聲と終聲のとで発音は異なるが、音韻としては同一で、バングルも同一文字である (後述)

は常に dark l [ɫ] となる。しかし、イングランド北部からスコットランド南部にかけての地域やオーストラリアにおいては l は常に dark l になる。

日本語のラ行の子音は IPA では [ɾ] と綴られる歯茎弾き音である。舌が歯茎を一度だけ弾くことで発声される音である。韓国語の「ㄹ」の音が非常に近い(ただし、パッチム(終聲)²⁷に來た時は [ɭ])。英語でも日本語と同じ弾き音もあるが、r の典型的な音(異音がある。後述)は歯茎接近音 [ɹ] で、有声歯茎摩擦音 [ʒ] の調音の構へをしながら、摩擦音にならないやうに、つまり狭めすぎないやうに呼気を逃がす音である。もし曖昧母音 [ə] や [œ] ができるから、それと同じ調音で子音として発音すればよい([i] の口で子音として発音すれば [j] になるやうに)。[œ] が最も近く、[ɹ] をそのまま伸ばして母音化すれば [œ] になる。英語の r を日本語でもっとも近い音で表せば皮肉にも dark l と同じウとなる。もちろん英語話者にとっては dark l と r は違ふ。また、英語の r[ɹ] は [ʒ] や [s] と調音点が近いので、二重子音 tr は t の発音をした後に、すぐ [ɹ] の調音の構へをしなければいけないが、この [ɹ] が [s] に似てゐるので摩擦音化して、tr は [tʃɹ] 的な発音(あへて假名書きすればチュウ)になることがある。

イタリア語ではいはゆる巻舌の r で、歯茎震え音の [r] といふ。もっとも正統(?、より正確には祖先的)な r といへる。歯茎震え音といふのは舌が震えて歯茎についたり、つかなかつたり振動をくりかえす音である。フランス語では巻舌が極端になり、調音点が口蓋垂まで後退し、震えが摩擦に移行してしまつてゐる(口蓋垂摩擦音。[ʁ])ので、「ハ行」の子音っぽく聞こえる。葡語は全体的には英語に近い子音の発音体系をしてゐるが、r(厳密には重子音の rr)について云へば英語よりも先にいってゐて、フランス語のやうに「ハ行」に聞こえ、[x](Bach バッパのハ)で表記されることさへある。でもイタリア語の [r] で発音しても通じるから不思議である。つまり、葡語では [r] と [x] は同じ音韻なのである。スペイン語は r は日本語と同じ [ɾ] で、rr と重子音の時、lr, nr, sr や語頭の r はイタリア語と同じ [r] となる。ドイツ語の r も調音点が口蓋垂まで後退してゐるが、震え音は維持(口蓋垂震え音。[ʀ])してゐる。日本語では「ラ行」に聞こえるが、喉の奥が鳴つてゐる感じがするだらう。r の字音はむづかしいことが伝はつたことと思ふが、ダメ押しは中国語の r である。中国語(ピンイン)の r は、[ɹ] にも [ʒ] にも [n] にも聞こえる音である。IPA では [ɹ] と表記し、背舌接近音といひ、舌先で英語の r を発音すればよい。たとえば日本の日は、呉音でニチ/nit/, 漢音でジツ/zit/であるが、現代中国語(ピンイン)で ri になる。ウェード式綴り方では ji である。ウェード式はいってみれば中国語のヘボン式で、英語の子音として読めばよいから、英語人としては、日は「ジ」に近い発音に聞こえることがわかる。どの音(呉音漢音は当時の中国音として)も、音声学的には大きく違はない²⁸が、日本語として聞いた場合、それぞれが、まったく違ふ音に聞こえるのがおもしろい。実は、中国語の R は中国の歴史からすればごく最近の出現で、[ʒ] から派生したと考へられてゐる。漢音の日「ジツ」はそれを反映してゐると云へる。漢字の日本語読みで「ラ」行のものは、中国本土においてはほとんどが [ɭ] の音価である。

また、アメリカ英語では matter をマラー [mæɾə], water をワラー [wæɾə], forty をフォーリ, little をリルルと訛る²⁹ことがあるが、この時のラの子音は [ɾ] である。

²⁷韓国語は CVC で 1 音節をなし、後の C をパッチムと呼ぶ。

²⁸もちろん、漢字の音も歴史とともに変化してゐる。

²⁹筆者はイギリス英語の立場から見えてゐる。

これをアメリカ英語の t/d の弾き音化といふ³⁰。弾き音の原因は、音声学でおなじみの省力化(つまり横着)である。説明のため、まづ [t] の発声を分析する。[t] は歯茎破裂音であるから、発音するには舌の先を歯茎にかかるく当て、舌で呼気をせき止め、一気に破裂させればよい。ここで、急いで発音すればどうなるか、横着に発音すればどうなるか考へてみる。歯茎に舌をあてるところを省略して、単に舌で触るだけにすればよい。それは舌で歯茎を弾くやうなので弾き音と云ふ。[d] の場合も有声音といふだけで歯茎破裂音であるから、横着時にはまったく同様の变化をする。プリンの綴り字が pudding(あへてカナ書きすれば「プディング」)になってゐることに不思議を感じた人も多いだらう。これは、[d] の弾き音化したラ行を聞きとった人が、聞いたままに「リ」と書いたためである。

このことからわかるやうに、t の音はラ行の音に非常に近い。子供は舌たらずな発音になりがちで、たとへばピノコ(手塚治虫作 BlackJack)がよく、自分のことを「レリィーなのよ」と云つてゐる。これは手塚の独断ではなく実際に起り得る現象で、舌たらずなためにダ行がラ行に転呼してしまつてゐる。アメリカ英語のワラーは横着の産物、もとゐ、音声学的な省力化の産物なのである。ラテン語のロータシズム(Rhotacism, 歯茎摩擦音 s が母音に挟まれる時に、r に変化する現象。cf. tempus > temporal 英語の動詞 is が複数形になると are と R 化するのも Rhotacism で説明されることがある)もこれに近い原因なのであらうか? 少なくともアメリカ英語では、r の文字で示される正当な R の発音と歯茎音の弾き音化の [ɾ] とは区別してゐて、同じ音韻とは思つてゐないやうだ。つまり弾き音化の [ɾ] は、あくまで本人は歯茎音の t/d/n のつもりで発音してゐるといふことだ。ロータシズムはまったく別の音韻に転呼してゐるところが違ふ。音韻論的には違ふが、音声学的には同じ原理にもとづく現象かもしれない。

dark l や t/d の弾き音化の現象は安直な言葉で云へば「弱化」である。英語、特にアメリカ英語は L も R も弱化の傾向があり、音節の省略など音声学的な収斂現象が発現してゐる。それは丁度、フランス語の歴史に似てゐる。フランス語もラテン語から俗ラテン語を経てフランス語にいたる変化の中で、弱化や音節の省略が頻発し、音声学的な収斂がおきてしまった。そのため、逆に綴り字は複雑なものにしておかなければ書き言葉で意味が通じなくなつてしまふ(フランス語の綴り方については正書法の項で詳述する。漢語の熟語をカナ書きすると同音異義語ばかりになつてしまふことを想起されるとよい)。英語も綴り字を表音的に短縮したものにすると同様に音声学的な収斂を反映して表記も収斂し、読むに耐へなくなる(理解できない。誤解を招く)可能性が高い。

表音主義的綴り方: もし、綴り字を発音に対応させる(表音主義)のであれば、アメリカ英語の弾き音化した t/d は r として記さなければならなくなる。しかし、これに賛成する人は表音主義の人でも少ないだらう。アメリカ英語とイギリス英語の綴り字が回復不可能なまでに乖離してしまふためである。color と colour, gray と grey くらゐは読み換へ可能である。しかし、warer とか forry と綴られるともう理解できないといつてもよい(逆に、アメリカ英語をイギリス英語から分離させて違いを極立たせるためには都合がよいかもしれない)。それにアメリカ英語においても弾き音

³⁰tanner のやうに n も弾き音化することがある。

が出現する場所は決っている。丁度、日本語において [ts] が出現する場所がタ行ウ段の「つ」に限定されてゐるやうなものである (それよりは、出現パターンが複雑である) ので、いちいち表記をわけする必要はない、とも云える (ただし、日本人はどれが弾き音になるか知らないことが多いので、かなり混乱する。)。下記に、アメリカ訛りの典型的な弾き音のパターンを示す。

1. 母音 + t(d) + 弱母音 — 例 water, matter, forty
2. 強母音 + t(d) + l — 例 little
3. 強母音 + lt(ld) + 弱母音 — 例 culture
4. 強母音 + nt(nd) + 弱母音 — 例 winter, environmental

日本語の固有語では「ラ」行は語頭に立たない。国語辞典でラ行を見ると薄さに気がつくだらう。「ラ」行で始まる外国語であっても、古い時代に輸入された語は硫黄「りゅうわう」を「ゆわう」と読むのやうに「ラ」抜きになる。凌霄「りょうぜん」も「のうぜん」のやうに「ラ」抜きになる。韓国語で盧泰愚氏「ノテウ」や李氏朝鮮「イシチョソン」のやうに「ラ」抜きになってをり、それぞれ「ラ」音のかはりに、[j], [n] が用ゐられてゐるのはおもしろい。

VI. 19 日本語にない th [θ]

[θ] は英語の think の th で、舌と歯で調音する音で、歯摩擦音といふ。日本語ではサの子音に近いが、サの子音は普通は歯茎摩擦音であつて調音点を異にする。[θ] は普通にサといふかはりに、舌を出して上の歯にあはせて息を吹けばよい。歯と舌の間で息がシューといつて摩擦音をたてるのが [θ] である。普通のサの子音は上下の歯に狭い隙間を設け、舌をだらんと持ち上げて (でも口蓋にはつけない。つけると t になる) 息を吐く。

日本語には [θ] の音がないといふ。しかし正確には日本語では [s] と [θ] とを区別しないのである。つまり同じ音素として解釈してゐるのわけだ。大野晋氏によると近年ではサ行を [θ] の子音で発音する若者も都市部で増えてゐるといふ。ただし、さういふ彼等が [θ] の発音ができるやうになったからといつて [θ] と [s] の区別がつくやうになったわけではなく、[θ] と [s] を混合してゐるけれど自身は [θ] の発音をする、といふことである。日本語として [θ] と [s] の区別をつけないと通じない単語がないので、今後も [θ] と [s] を日本語の発音上区別できるやうにはならないと考えられる。

実は私は音声学の学習をするまで、自分が語つてゐるサ行は [s] だと思ひ込んでゐた。シも shi[ji] だと思ひ込んでゐたのだ。発音の波形分析をして、実際にどの音声を出してゐるかを分析するソフトで自分の発音をテストしてみると、私は英語の sh[j] が発音できないことがわかった。それだけではない。サ行を全て [θ] で発音してゐたのだ。私がどんなにがむばつて英語の sh になるやうに発音してみても日本語のシ [ɕ] どまりだった (そのソフトは日本語のシの子音と英語の sh を別の音韻と考へて設計されてをり厳密に区別する)。なほ、私は L と R は聞きわけできなかったが発

音しわけはできた。[f] と [p] は聞きわけも発音しわけもできた。私は sh に対してなんの疑問も抱かず問題意識をもって取り組まなかったためかもしれない。

ちなみに、ギリシャ語の θ はラテン翻字では th と綴られるが、現在の英語の th の音 [θ] とは随分と異なり、t の帯気音 (有気音) である。韓国語の 「ㄷ」 (t の激音) が近いかもしれない。日本語では有気音/無気音の違いはなんの弁別的要素も果してゐない (意味に違いがない) ので、日本人は意識してゐないが、日本語に有気音がないわけではない。語頭に立つ子音は多くは有気音になる。たとえば、高い「たかい」は [tʰakai] になるが、硬い「かたい」は [kʰatai] となる。日本人には「たかい」の「た」と「かたい」の「た」、あるいは「たかい」の「か」と「かたい」の「か」に違いはないと思つてゐるが、有気音か無気音かといふ違いがあつて、有気音と無気音を聞きわけける言語の話者には違いがある。音がないわけではない。音の違いがわからないだけである。

VI. 20 X

X は言語によって音価にバリエーションがある文字の一つで、英仏では文字自体は共通の ks の音価をもつてゐるが、フランス語では [z] と呼ばれる (黙字のことを多いが)。英語でも時々 [z] である。たとへば、xanadu は現代英語では [zænədju:] であるが、古語では ksanadju のやうに発音された。ドイツ語は ks のままだが外来語専用で文字自体ほとんど出番はない³¹。イタリア語でも外国語 (主に古典ラテン語ギリシャ語) にしか使はない。ラテン語で x だった語はイタリア語になると音は s になり綴り方も s に変更された。たとえば、木琴のことを、西洋語では一般に xylophone³² と綴るが、それぞれの言語で読み方が異なる。英語では、ザイロフォンのやうに発音するが、ドイツ語ではクシュロフォン (y はヒュッテ hütte の ü と同じ発音) となり、イタリア語ではシロフォンとなる。伝統的に西洋音楽の母語はイタリア語なので、日本語でも木琴をシロフォンと云ふことが多い。イタリア語の綴り方は語源よりも現在の発音を優先してゐる³³ので、xylophon は silofon と綴りなほされることが多い。

ポルトガル語では室町時代は [j] で、宣教師が用ゐたポルトガル式ローマ字³⁴でシは xi だったが、現在の葡語では [s] またはその有声音化した [z] である。x を [s] または [z] と読むのは最初の k は落ちたものと考えればよい。x の音価で一番著しいのはスペイン語で、だいたい [s] または [j] であるが、南北アメリカ大陸の固有名表記では [x] の音価で j と同じである。たとえば Mexico は英語ではメキシコと呼ばれるが、スペイン語ではメヒコである。拼音はこれらとは系統が違ふが、x には [ç] の音価を担はせてをり [j] に類する。

ラテン語の X はギリシャ語の χ (カイ。大文字では X。ラテン翻字では chi, khi) に由来してゐるが、ギリシャ語の χ は方言によって音価が違ふ文字で、東部ギリシャ

³¹ 出番がない文字ほど流行の影響を受けないのでもとの音価が残りやすい。

³² xylo は木 (xylene キシレンは木の化石/石炭から抽出したから、xylitol キリシトル)), phone は音の意 (cf. telephone)。

³³ 語源的な綴り方では発音がわからないほど音韻変化が著しいため。

³⁴ 体系化されてゐるが十分に整備されたものではない。

語のイオニア方言では [k^h] (ラテン翻字は kh, ch) で k の帯気音を意味した。西部ギリシャ語のカルキス方言では [ks] である。イオニア方言で [ks] の音価をもっているのは ξ (大文字は Ξ, ラテン翻字では xi, グサイ) である。普通ギリシャ語といふのはコイナーと呼ばれるイオニア方言とベースにした人工的な共通語³⁵なので, X はカイの音価である。一方, ローマ人は西部ギリシャ語の系統からエトルリア語を介して文字を借りたので X は [ks] の音価であった。ラテン文字の音価はそこに由来する。しかし, 初期キリスト教は東部ギリシャ語で書かれたので, キリスト教の固有名詞では X が kh の音価である。たとえば Xmas (X'mas は語源的には間違い) はキリストのギリシャ語翻字である χριστός をラテン翻字した Christós に因んでゐるので, X は ch の音価を担ふ。XP は Windows のオリジナルではなくて³⁶, もともとギリシャ文字で Christ の最初の二文字 χρ のことである。

英語の綴り方で表音的でないと云はれるものの例に anxious と anxiety がある。これを表音的に綴り方を改むと, anxious と anxiety の意味の関連性が見えなくなるから表音的に改めれない。ただし, anxious と anxiety の発音は不規則なのではない。まず, x は ks の音価を担っている。そして x は強音節の頭 (声母?) に来た時, 有声音の gz になる。この規則で綴り字と発音は整合に対応する。ánxious はアクセントがない音韻の韻頭の x だから無声音の ks のままで, anxious と同じになる。nk の文字列は [ŋ] の音価になり, si の i は s を硬口蓋化し sh と同じ [ʃ] に変え, 母音としての音価を失ふ。結果, anxious は [aŋʃəs] になる。一方の anxíety は x が強音節にあるので x は gz となり全体としては angziety になる。ng はもちろん [ŋ] で, i は開音節の韻尾であるからアルファベット読みの [ai] であり, 結果, [aŋzaieti:] となる (同様の説明が上西俊雄氏「英語の振仮名」現代英語教育 p.38-39 にある。同氏の「英語は日本人教師だから教えられる」羊泉社にも再掲されてゐる。)。

フランス語では -aux やら -eaux といふ語尾の単語がとても多い。ワインのラベルを見ても, Bordeaux (ボルドー), Coteaux (コトー), Margaux (マルゴー) と -aux の目白押しである。この -aux といふ綴りは古フランス語 (10C 後半から 14C 前半ぐらいまで) の綴り方に由来する。古フランス語では -us といふ語尾を -x で代書してゐた。-us は, たとえば次のやうな場合に出現する。ラテン語の travaux (仕事) の l が英語の dark l 化が行きすぎた格好で, 母音化して u になってしまった。これを travaus と綴ったが簡単に travax と綴った。13 世紀にもなると, -x が -us の代書だといふのが忘れられてしまつて³⁷, travaux と -u が挿入され, travaux となった。ちなみにこの単語は英語の travel と同根である。英語では旅は一仕事なので, travel になった。

VI. 21 p と q—循環する子音

これまで見てきたやうに, 子音文字の音価にはいろいろある。ある時代に, ある言語である音価をもってきたものが, 別の時代, あるいは言語の地域化 (方言) により音価が変化 (遷移) していく。その子音の変化には

³⁵ NHK 標準語のやうなものを想像するとよい

³⁶ eXtreme Programme の略でもなくて

³⁷ x が s の代書といふならわかるが, us だと行きすぎて, ついていけなかったのだらうか。

T(歯音)系 → C(硬口蓋音)系 ← K(軟口蓋音)系

のやうな系統的な変化が認められる。ここではそれぞれの子音を代表的な音で表はしてゐる。たとへば [s] は T 系に含まれる。日本語では、タ行のチに見られるやうに、T 系から C 系に移行したが、ロマンス語では K 系から C 系への移行が顕著である。上の配置は調音点の順に並べたものであり、T から K に向つて調音点が前歯のうから喉の奥に移行してゐるのがわかる。実はこの図は拡張できる。まづ、歯の前には唇がある。唇音 [p] である。唇音の類には英語の [f](唇歯音) やヘボン式ローマ字の [f][p](両唇音, 日本語のフの子音), b や m も含まれる。これらを唇音 (P) 系と称す。また、軟口蓋の奥には喉があるので、これを H(喉音) 系と称す。

P(唇音)系-T(歯音)系-C(硬口蓋音)系-K(軟口蓋音)系-H(喉音)系

隣りあふ音同士は調音点が近いので時間的にも空間的にも変化しやすい。時間的とは歴史的な変化であり、空間的とは方言としての変化である。また、この配列は外国語を聴く時に、母語にない音は近い調音点の音として聴く時の候補もあらはしてゐる。たとへば Bach(ch は H 系) を英語人が Back(軟口蓋の k) のやうに聞いたり、Prague(プラハ, gue は H 系) をプラグ (g) のやうに聞く等である。これらの音は日本人がカナからイメージするほど隔たつてゐない。英語の th を日本人は s と聞くのもこれに相当する。これも英語話者が綴り字から期待するほど違つてゐない(日本人なら容易に理解できるだらう。日本語を基準とすると理解しやすいものもあるし、逆に理解しがたいものもでてくる)。

更に、音の変化・類似性はこの配列からイメージされるやうに一系列に並ぶものではなくて、実は循環する関係にある。つまり、両端の P と H は近い関係にあるのである。その例としてはハ行転呼音があげられる。これは奈良時代に [p] を子音としてゐたハ行が歴史的に [ɸ], [h], [w], 母音 (ア段を除く) と変化してきた現象である。[p] と [ɸ] は同じ唇音系だから遷移(転呼)するのは妥当としても、[h] は喉音系であつて調音点は口(口腔)の出口(唇音)と入口(喉音)くらゐ異なつてゐる。上の配列でいへば両端に相当してゐる。しかし、よく考へてみると、出口で狭窄するのも入口で狭窄するのも口腔内が共鳴箱として機能してゐることには違ひがない。P 系の音のつもりで横着して、唇を閉ぢなければ容易に H 系に移行してしまふ。そして、H 系は共鳴に力を入れると母音になつてしまふ。最初に、もっとも典型的な子音は [p] であらうと書いたが、[p] は [p] である限り子音だが容易に母音に変化し得るといふ点では、典型的な子音かどうかは疑はしい。むしろ、T-C 系のはうが典型的かもしれない。

日本語では他に「二葉亭四迷」の例がある。「二葉亭四迷」は明治時代の小説家長谷川辰之助のペンネームで、小説家を志すといふことを父に宣言したところ、父に「くたばつてしまえ(めい)」と罵倒された(当時、小説家は生活破綻者・反社会的思想家・退廃思想家・破廉恥な人の仕事(にすら値しない)と考へられてゐた)。では、なぜ「くたばつてしまえ」が「二葉亭四迷」になるのだらう。問題は「く」の [k] が「ふ」の [ɸ] になることである。これも P 系と K-H 系の近さを物語るものと云へやう。五十音図をしばし忘れて、「ふたばつてしめい」と「くたばつてしめい」を繰り返してみてほしい。類似性に気がつくと思ふ。

他の例として, ケルト語の p/q がある. ケルト語族は大別して P ケルト語と Q ケルト語にわかれてゐる. 最初, もととのケルト語祖語にあった P 音は消失してしまった(これは日本語のハ行転呼のやうなものと連想してもいいし, フランス語やイタリア語に堪能な人は子音の弱化で脱落したと思ってもいい). そして, ケルト語の中であるものでは, もともと q([kʷ] または [kw]) の音が p に変化してしまった. これを p ケルト語といひ, q 音がそのまま残った(正確には k 音として残った)ものを q ケルト語といふ. これは, 下記のやうに理解できる.

[kw]→[k]: q ケルト語. 例 cia (ゲール語, 英語の who/羅語の qui)

[kw]→*[hw]→*[ɸ]→[p]: p ケルト語. 例 pwy(ウェールズ語. 意味は同上)

q ケルト語のはうが言語の進化史的に保存的と云へるだらう. 同様の例は, ラテン語の qui 等の疑問詞を作る qu 音と英語の who 等の疑問詞を作る wh の対応にも認められる. これらは同語源であるが, ラテン語では [kw] 音が保存されたの対し, 英語では [k] が脱落し [w] だけになり [hw] に変化した.

フランス語では, ラテン語の rabia が硬口蓋化により, rabja[rabja] を経て, rage(怒り, フランス語では [ʒ], 英語では [dʒ]) となった. ここでも P(B の無声音)-K(G の無声音)の変化が認められる.

P-T の唇音歯音の相互変化は日本語ではあまり見かけないが, 京都の「す」は「フ」と発音する場合があることや, 北欧では, tion や sh(sj) が「フ」に音韻変化することが該当するかもしれない. ただしこれらは唇音ではなくて, 喉音の [x] や [h] への変化である. マニアックな例だが, ギリシャ文字の Θ「シータ」は, キリル文字では θ「フィータ (fita)」と読む. もともとはギリシャ語と同じく, 歯破裂音 [t] の帯気音 [tʰ] であったが, 英語のやうに歯摩擦音に転呼し, それが更に唇歯摩擦音 [f] に転呼した. θ は現在, キリル文字として使はれてゐない(同音の Φ に置換)から, キリル文字使用者であっても知らない人も多いかもしれない. ロシア語でも文字そのものが θ から Φ に変換されてしまつてをり, 英語でいふ Timothy(ティモシー; ギリシャ語の Timotheos に由来, theos は神, timo は名誉のこと)はロシア語では Timofej(GOST 16876-71 による翻字), むりに假名書きすればチモフェーイとなる. 同様に, 英語の Theodore(セオドア)も, 露語では Fjodor(フョードル), 英語の Thomas(トーマス)は露語では Foma(フォマー)となる³⁸

多少身近な例では, 現代英国の Estuary English では th を [f] として発音してゐる. つまり, three は free となるわけだ. 時も場所も違ふスラブ語と同様の現象が起きてゐるのである. もっとも身近かには, 日本語で「コーフィー (coffee)」といふと英語話者は「Co-Tea」といつてゐるやうに聞こえる例がある. 身近だが実感はわからないかもしれないが, これも P-T の近さを物語るものといへる.

このやうに全ての子音は循環の中に位置付けられ, 相互に変化し得るものである. だから, これらの遷移の規則を ad hoc に適用すれば, どんな子音でも任意のどの子

³⁸が, 英語の Catharine(キャサリン)は, 露語では Ekaterina(エカテリーナ)となり, th→f の変化を来してゐない. これはギリシャ語の aikaterine の語源が katharisis(cleaning) と誤分析(?)されたことによる. もともとは t で, 英語ではこれを th の変化と解釈し, もとの th に戻したが, 露語ではもともとの t がそのまま入ったと考へられる.

音にでも変化させ得るであらう。しかし、それが科学的に正しくないのは明らかである。遷移の規則を適用する上で重要なのは、歴史記録に対する整合性(証拠)と論理的な整合性である。

VII. 母音 vowel

母音は、喉を共鳴箱にして声帯の振動を共鳴させることで得られる音である。母音は口の開きかたと舌の位置で大きく分類できる。たとえば口が狭く舌が前にあるのが「イ」であって、口が開ききったものが「ア」(日本語では舌の位置にかかはらず口が開いてゐれば「ア」と聞こえる)、口は狭いが舌が後にあるものが「ウ」である。そして、それらの中間に「オ」と「エ」は位置する。vowelの語源はラテン語のvox(voice)に-alis(形容詞化接尾語)で、「聲の」といふ意味である。

VII. 1 母音の分類

Diagnostic feature: 共鳴箱には限界があつて、あまり小さい大きさになると共鳴ではなくて狭窄になってしまう。狭窄で得られる音は子音なので母音ではなくなる。であるから、母音であるためには共鳴箱はある一定容積以上の大きさをもつことが条件となる。境界を母音の限界点といひ、箱の大きさで第一次元の分類の軸が得られる。また、舌の位置が前にあるか後にあるかで音が変はるので、舌の位置も母音の分類に重要な特徴であり、これを第二元目の分類軸とする。かうして得られたのか下の表である。口を狭く開けた時と口を大きく開けた時とでは舌の可動範囲が異なり、口を広く開けてしまふと舌はあまり前には出れないので、表の左は斜めになってゐる。また、唇を丸くする(円唇)か、丸くしないか(非円唇/平唇)で分類できるが、これは3次目の要素なので、平面図では表現できず、別表として表現される。

非円唇	前舌	中舌	後舌
狭	i	ɪ	ʊ
半狭	e	ə	ʏ
半広	ɛ	ɜ	ʌ
広	æ	a	ɑ

ただし、æは半広前舌の ɛ と広前舌の a の中間に位置する。

円唇	前舌	中舌	後舌
狭	y	ʉ	u
半狭	ø	ɵ	o
半広	œ	ɐ	ɔ
広		œ	ɒ

英語で有名な曖昧母音 ə は母音図の重心(中舌で半狭/半広付近)に位置する。母音関係の記号は下記の通り。

- u 無声化した音
- e 有声の母音
- e 開口した (広がった) 音
- e 狭まった (閉口の) 音
- ɔ 舌が前よりになった音
- e 後 (奥) よりになった音
- ë 中舌母音化した音

VII. 2 ア

日本語のアは表の半広～広で中舌～後舌の範囲の音である。英語のアに近い音は大きくわけて3種類ある。[a] と [æ] と [ʌ] である。

[a] は開口 (広) のアで、アメリカ英語では body や hot のアの音である。同じ綴りでもイギリス英語では [ɒ] となり別の音であるが似てゐて、[a] の音を円唇にしたものである。

[æ] は cat のアである。IPA を見ると A と E の合字であって、A と E の中間的な音を示唆してゐる。実際は中間といふより、[e] といつてかすぐに [a] に移行する音といふ方が正確である。イギリス英語では同じ綴りで [a:] と発音する。英米ともに、ストレスがない場合は [æ] は曖昧母音の [ə] となる。

[ʌ] は cut のアである。[ʌ] は他のアと違って口を開けない。

[ə] 曖昧母音はカナ表記では「ア」になってゐるが、この音は「弱母音である」といふ以上の意味を持たない。どの母音でも限りなく弱く発音すれば曖昧母音になるといってもよいからである。だから聞きやうによつては、アではなく、エとかイとかウにも聞こへる。ただし、どれにも実際は該当しない。口を半開きにして、舌をだらんとして、母音を発声すれば、それが曖昧母音である。

余談：ヘボン式綴方の支持者は「日本式は綴り方が英語と違ふため英語教育の防げになる」と批判するが、英語教育者の中にはローマ字自体が英語教育には混乱をまねくといふ考え方がある。たとえば、英語の [a] は日本語の [a] とは違ふ。また、比較的、綴字と発音が対応してゐる body や hot をローマ字風によむとボディやホットとなる。これはアメリカ英語の発音と随分と異なつてをり、ローマ字で読むことに慣れた学習者はアメリカ英語読みできない、あるいはアメリカ英語風にバディ、ハット等と読んでゐても時々別の単語たとえば shop をシャップと読まずにショップと読んだりする。

VII. 3 イ

日本語のイは表の狭～半狭の前舌母音で、英語の [i] の発音とは違ひ、日本語話者には英語の [i] の発音はむしろ「エ」のやうに聞こえる。英語の [i:] のほうがイに近い³⁹。また、日本語のイは必然的に硬口蓋化を引き起こすが、英語の [i] は硬口蓋化を

³⁹ 正確にはイーといふべきか。しかし、英語では [i] と [i:] の根本的違ひは長短でない。

起こさない。ただし、英語の綴り字 *i* は硬口蓋化を起こし得る。その場合は、*vision* の *si*=[ʃ] のように *i* の字の音価がなくなることが特徴である。

VII. 4 ウ

日本語のウは [u] ではなく、IPA では [ɯ] と綴られる別の音である。英語の *look* の *oo* やフランス語や *ou* は円唇の *u* であるが日本語の *u* をもっと口をまるめた格好で日本語のウは平唇なのが大きな違いである。もし、英語の [u] をらしく発音しようと思ったら、口をまるめて突き出したやうに「ウ」と云へばよい。ちなみに、京では「ウ」は円唇の「ウ」[u] である。この円唇の「ウ」が西日本では広く発達してゐる。

さて、この [ɯ] といふ音はやや中舌寄りであるが、[s], [z], [ts], [dz] に続く場合は、子音の調音の位置が影響して、中舌母音の [ɯ] になる。ヘボン式が準拠してゐる表音主義の場合⁴⁰、日本語の「ウ」段の音を表記するにあたって、おなじ「ウ」の母音に聞こえるものを理論上、書きわけねばならなくなる。しかし、ヘボン式はタ行やサ行、ハ行などの行については鋭敏に書きわけてゐるのが、段(ア段、イ段、ウ段)については発音が違ふからといって書きわけてゐない。これは英語では母音は軽視される(地域差も大きい)のと、そもそも英語の [u] と日本語のウとは円唇と平唇で違ふので、気にしなかったためかもしれない。ただし、オリジナルのヘボンはヒトを *Hto*、イマスを *imas* のやうに発音の弱い母音は書かず、書きわけてゐた。つまり「聞こえたやうに書」いてゐたのである。これは知らない言葉を書き記すにあたってもっとも基本的な態度である。逆にいえば、その言語を知つてゐる者は聞こえたやうには書かない(書けない)。心で聞くからである。*Hto* と云はれても頭の中でヒトと再構成するためである。

田中館愛橘が「なんでも音の通りに表記すべし」(発音主義・表音主義)といふ人のことを「オウム論者」、逆に「なんでも語源や意味に従つて表記すべし」(語源主義・音韻主義)といふ信念をもつてゐる人のことを「万葉論者」と呼び、そのどちらもつきつめれば破綻することを示したが、これは表音主義の好例といえやう。究極的には、発音は人によって異なるのであるから、人ごとに発音体系を整備しなければいけなくなる。さうなると表記は破綻する。表記はテープレコータではないのだ。

VII. 5 エ

英語でエに対応する音は表に示すやうに半狭の *e* と半広の *ɛ* にわかれてゐるが、日本語のエは半狭～半広の前舌～中舌母音でどちらも含んでゐる。アルファベットはもともと子音が多く母音が少ないセム・ハム語(母音は3種類)の表記のため開発された文字なので母音が多い印欧語の表記には苦労があつた⁴¹。

たとえば、ギリシャ語では、エに二種類あつて、*ai* 型のエ (*αι*) と *e* 型 (*ε* epsilon) と表記をわけてゐた(エの音は口の開きかたと舌の位置で見た場合、アの音とイの音の中間に位置するのでエを *ai* と表記することは理にかなつてゐる)。Epsilon(イプシ

⁴⁰ なんども繰り返すが、ヘボン式は完全な表音主義ではない

⁴¹ とはいへ、印欧語ももともとは母音は一種類しかつたのだが

ロン) といふ名前自体, e-pilon(単純な E) といふ意味(中世の命名)であり, 複雑な E つまり A+I の E と区別しようといふ意味である. ヨーロッパ諸言語によく見られる á, â, ä, ã のようなアクセント様記号(これを diacritical mark とふ)付き母音は, 少ない母音体系で生まれたアルファベットを無理に母音の多い自言語に適用した結果である. なほ, 英語ではアクセント付きの母音は作らなかった. たとえば ME では ee と ea とで広い口のエと狭い口のエの発音の違いを表現しようとした.

日本語でもエはア+イならなってをり, たとえば, 嘆き「ナゲキ」はもともと長い息「ナガイキ」で, 「ア+イ」が「エ」にかはった. 「咲きあり」の「イ+ア」が融合して「咲けり」の「エ」になった.

VII. 6 オ

英語でオに対応する音はエと同じやうに半狭 [ɔ] と半広 [ɒ] にわかれてゐるが, 日本語のオは半狭～半広の中舌～後舌の広い範囲を含んでゐる. ギリシャ人の「エ」表記の苦勞は「オ」でも見られる. ただし, オの場合はギリシャ人は文字を発音にあるやうに二種類に分化させた. すなはち, *o*, *O* と *ω*, *Ω* である. 文字の名前に違いがあらはれてゐる. O-micron(ミクロな O: 小さい O) と O-mega (メガな O: 大きい O) である.

英語 (ME) では oo と oa で二種類のオ (広狭) の区別をした.

日本語でも江戸時代は [o] と [ɔ] の音韻は区別されてゐた. 復古假名遣の「あふ」系統は「おう」となって [ɔ:] となり, 「おほ」系統は [o:] となつてゐた. これは方言に一部残されてゐる.

VII. 7 発音記号の限界

発音記号を使ひませうといふ本稿で, その限界を述べてゐるのは不適當かもしれないが, 物事は何事も限界がある. 限界を知つて正しく用ゐるのが重要であるから, あへて限界を述べる.

発音記号はラテン文字の音価の曖昧さを克服するために制定したが, 発音記号にも限界がある. 冒頭で述べたやうに発音は無限に異なるものであるから, 如何なる記号によつても無限の弁別は不可能である. またその必要もない. それで, いくつかの発音をカテゴリーに区分して必要なだけ弁別したのが発音記号である. ここに発音記号の限界その一(弁別の上限)がある.

限界その二はカテゴライズの限界である. 日本語のエを例にとると, 日本語のエは [e], [ɛ], [ɐ], [ɐ̃] など, 表で弁別した母音の広い範囲にまたがった音である. これを日本語においては普通, 弁別する必要がなく, もっとも典型的なエは [ɐ̃] であるから, これで代表させる. 一旦, [ɐ̃] させることになると, 他のエ類は出て込ないし, わざわざ特殊文字で表現するのも面倒で印刷も大変になるので, 表記を節約して, ただの [ɐ̃] で表記することにする. ここで日本語のエは [ɐ̃] といふことになったが, この [ɐ̃] はたとえば英語の [e] とは意味が異なる. 日本語の [ɐ̃] は [ɛ] を含むが, 英語の [e] は [ɛ] は含まない. もっと極端な例では英語の [ɪ] は日本語のイ [i] といふよりはむ

しろ日本語のエ [e] に近く聞こえる. sit はシットといふよりはセットなのである⁴². 発音記号も究極的にはラテン文字と同じやうにそれぞれの言語でそれぞれに都合のよい, つまりそれぞれの言語固有の弁別のクライテリア, カテゴリに従って記号を使ふ. だから, その言語を知らないで発音記号がどうだから発音はどうといふことは云へない. つまり, ある記号がどんな発音をするのか, どの範囲までかといふことは記号には書かれてゐない. それは, その言語の規則に則つてゐる.

たとえば, 日本語のアイウエオは基本母音表のそれぞれある範囲に分布してゐるが, それを [a][i][u][e][o] と表記してゐる. それは表記の約束なだけだから, [aiueo] といふ文字列を外国人がどのやうに解釈するかは, その外国人の話す言葉に依存し, 日本語のアイウエオを指すとは限らない. もちろん, だからといって発音記号は無意味といふことではない. それは文字が無意味ではないのと同様である. 記号といふものは, それを示す内容に対して十全であればよいのである. 完璧でない分は, 人間が工夫すればよいことである.

VII. 8 日本語における母音の無声化

日本語は開音節言語なので子音の後には必ず母音がつく. しかし, たとえば「倉敷(クラシキ)」といふ語を発音してみると, *krashiki*(ヘボン式) といつてゐるやうに聞こえる. 最初のクの母音はあたかもないやうに聞こえる. これを母音の無声化といふ現象で, ポルトガル人やオランダ人には母音の脱落(といふか彼等にしてみれば子音の後に必ず母音にくるはうが変なのであるが...) として知られてゐた. 明治期のアメリカ人宣教師ブラウン氏が, これは母音が脱落してゐるのではなく, 母音が無声化してゐる(声になつてゐない, 声帯が振動してゐない) といふことを解明した.

母音の無声化は前後が無声子音にはさまれたイ段とウ段の音に起りやすく, 語末でも無声子音に続くイ段・ウ段の音は無声化しやすい. これが, 英語を日本語(カタカナ)に直す時に, 子音をどの音であてるかの原則になつてゐる. たとえば, 英語で *X(eks)[eks]* といふ言葉がある. *ks* は無声子音で子音+子音の形になつてゐる. これを子音+母音の日本語のカナで表記する時に, エックスと *k* をウ段の音で受けてゐる. 少し前の世代ではエッキスとイ段の音で表記してゐた. ここで, エッカスとかエッコスといふカナ表記にしてみると *eks* には聞こえない. 母音の無声化は常に誰でも起きてゐる現象ではなく, たとえば蓮(はす)の *s* は関東では無声化して発音されてゐることが多いが, 京では無声化してをらずスウのやうに発音される.

無声化した母音は母音がないかのやうに聞こえるが, 完全に母音がないわけではなくて母音自体はあり, 閉音節言語の人には母音があるやうなないやうな変な感じに聞こえるやうだ(日本語話者が英語を喋るのはやはり難しい). IPA では [ɤ̥] や [i̥] のやうに示す.

⁴²では, *set* は? といふ質問はご勘弁いただきたい. 英語の音韻体系を日本語で表記することにはもともと無理があるので

VII. 9 大母音推移 Great Vowel Shift (GVS)

英語学習者がしばしば頭を悩ませるのは発音と綴りの不一致である。オスカーワイルドは, fish は ghoti を綴るべきだと (冗談で) 主張した (らしい)。つまり, laugh, cough の gh は [f] であり, women の o は [i] で発音される。station では ti は [ʃ] と発音されることが理由である。彼はもっと統一的な綴り方を開発したものに遺産を譲ると遺言したが, これを手にしたものはみない。

英語のスペルと発音の不一致には二種類あって, 系統的な不一致と完全な無秩序とがある。完全に無秩序なスペリングと発音は, いろいろな借入語に由来する。特に, Norman French からの借入語は英語に不規則な綴りをもたらした。またフランスかぶれの正書法により, もとから英語だった言葉の綴りもフランス風に変更させる事件があった (cwick をフランス語風に quick)。かと思へば, フランスでの橋頭堡ノルマンディを失った時, 反動としての反フランス運動やイギリス愛国主義はフランス風綴りの衰退させ, 更に綴り字が混乱した。

なほ, 現在のフランス語もスペルと発音は不一致だが, これは単純なローマ字読みではない, といふ意味で不一致であって, 系統的にスペルと発音は対応してゐる (たとえば, oi は必ず [wa] ウア)。ただ, その対応がドイツ語やイタリア語, スペイン語のやうにローマ字読みではないだけである。

系統的な不一致は, たとえば, name を [naim] を読み, 決して [name] とは読まないことである。ドイツ語では Name とまった綴りは同じなのに (ドイツ語では名詞は大文字にする), 読みはローマ字読みでよく [na:me] である。

この系統的な不一致は ME(Early 15C) から ModE(Early 17C) にかけて起きた大母音推移に由来することが多い。大母音推移といふのは, ME(中英語) のストレスがある長母音の舌の位置が1段か2段高くなる方向に一斉に移動した現象で, もともと一番高い位置にあった [i:] と [u:] は二重母音 [ai] と [au] に移行した。大母音推移の前は英語も綴り字と発音がローマ字のやうに対応してゐたことがわかる。残念なことに, 15C の印刷技術の向上により次々と本が出版された。これは大母音推移の前の綴り字で固定されてしまったことを意味する。かうして英語は綴り字と発音との関係が不規則になってしまったのである。

アイの系列

[a:] → [ɛ:] name[na:m] → [nɛ:m] → [neim] や age[a:ʒ] → [ɛ:ʒ] → [e:ʒ]
→* [eiʒ] *18C の二重母音化 (GVS とは別)

[ɛ:] → [e:] sea[sɛ:] → [se:] → [si:]

[e:] → [i:] feet[fe:] → [fi:t] や green[gre:n] → [gri:n]

[i:] → [ai] child[tʃi:ld] → [tʃaild]

オウの系列

[ɔ:] → [o:] old[ɔ:ld] → [o:ld] →* [ould] *二重母音化

[o:] → [u:] noon[no:n] → [nu:n] や foot[fo:t] → [fu:t] → [fʌt]

[u:] → [au] hu(u)s(OE の綴り方, ME ではフランス風に hous と綴られた) [hu:s] → house[hau:s]

大母音推移は席替えと同じやうなもので一斉に動かねばならない。最初に動く人がある。動いた先の席に座ってゐる人は移動しないといけない。移動先で、また人を動かさなければいけなくなる。かくして、一斉に移動がはじまる。といふのは、これまで違ふ発音としてゐた言葉を同じ発音にすると混乱しコミュニケーションできないから、どういふ発音をするかはともかく、「違ふ」ことは保存しなければいけないためである。

英語にはこれ以外にも規則(といふか歴史的経緯)があつて、綴り字の歴史を紐解くだけでも十分研究として楽しいが、綴り字としては混乱してゐることは否定できない。

save は [seiv] となる。これは GVS から明解に導くことができる。しかし、have は違ふ。GVS をそのまま適用すると、[heiv] になるはずだが、[hæv] となる。しかも、文脈によっては [hæf] と無声化したりする (cf. You have to give me an answer.). 日常語は慣用音といふべき特殊な読みになることが多い。それは非日常語は、たとえそれが本来、独特の発音をしてゐても、すぐに忘れられてしまふから、発音はなんらかの法則にしたがつた(つまり機械的に算出できる)読み方に落ち着きやすい。一方、日常語は逆に法則に則つてゐるとかへって弁別的ではないので、あえて変な読み方になり、使用頻度が高いので、そのまま残りやすい。

VII. 10 母音交替

英語で不規則変化動詞といふのがある。喩へば、sit-sat-sat, get-got-got である。同様に foot-feet, mouse-mice のやうに名詞の単数-複数形も不規則な変化を示すことがある。これは、もともとの英語では動詞の活用や名詞の単複を母音の変化で示してゐたことの生きた化石なのである。これを母音交替とふ。現在の英語ではほとんどの動詞は-ed の語尾を付加することにより過去形過去分詞を導出するし、複数形は-s の付加で示すが、印欧語族においては古典語のラテン語ギリシャ語はもとより現在でも母音交替は文法的に重要な役割を果すのである。

では、日本語では母音交替はあるのだろうか。答へは「ある」。現在の日本語では「固まる」と「コチコチ」は無関係に思はれてゐるが、/kata-maru/と/koti-koti/は母音交替になってゐる。意味の主体をなすのが、/k-t-/であり、母音は活用を示してゐると理解することができる。同様の例を示す。なほ、音韻の表記には日本式ローマ字(後述)を用ゐ、復古假名遣(歴史的假名遣)で翻字した。

語る /kataru/	言葉 /kotoba/
挟む /hasamu/	細い /hosoi/
なだらか /nadaraka/	のどか /nodoka/
割る (わる) /waru/	折る (をる) /woru/
燃やす /moyasu/	燃ゆる /moyuru/
落とす /otosu/	落ちる /otiru/
脅す /odosu/	怖ぢる /odiru/

「落とす」－「落ちる」, 「脅す」－「怖ぢる」は語尾変化の例かもしれないが, 「割る」－「をる」, 「燃やす」－「燃ゆる」との境界は漸移的である. また, 母音交替を考えると現代語の「燃える」の「え」はや行の「イエ」/ye/由来ではないかといふ推測ができる (/moyuru/).

このような例は復古假名遣の和文を日本式ローマ字で記述すると随所に散見することができる. ローマ字入力のワープロの場合, 現代仮名遣いであるがほぼ日本式でローマ字をタイプしてゐるので, 同様の構造が—やや劣化しながらも—捉へられるはづだが, 假名漢字に覆はれて気付くことは少ない. ローマ字として見ると—日本語としては至極読みにくい—構造は歴然とする

母音交替の極めつけは四段活用 (現代国語では五段活用) である. 上二段, 下二段活用にも母音交替が認められる. 上一段 (下記の「見る」) には認められない.

云はない	云ひます	云ふ	云ふ時	云へども	云へ
ih·a·nai	ih·i·masu	ih·u	ih·u·toki	ih·e·domo	ih·e
勝たない	勝ちます	勝つ	勝つ時	勝てども	勝て
kat·a·nai	kat·i·masu	kat·u	kat·u·oki	kat·e·domo	kat·e
見ない	見ます	見る	見る時	見れども	見ろ
mi·nai	mi·masu	miru	miru·toki	mire·domo	miro
答へない	答へます	答ふ	答ふる時	答ふれども	答へよ
kotah·e·nai	kotah·e·masu	kotah·u	kotah·uru·toki	kotah·ure·domo	kotah·e·yo
答へない	答へます	答へる	答へる時	答へども	答へよ
kotah·e·nai	kotah·e·masu	kotah·eru	kotah·eru·toki	kotah·e·domo	kotah·e·yo
戀ひず	戀ひます	戀ふ	戀ふる	戀ふれども	戀ひよ
koh·i·zu	koh·i·masu	koh·u	koh·uru	koh·ure·domo	koh·iyo

五十音図は悉曇学の音声分析の学術成果であるが, もともと日本語にあった統語論 (文法構造) を標識化してゐるとも云へる.

VII. 11 上代特殊假名遣

現在の日本語は5母音体系 (アイウエオ) であるが, 上代 (奈良時代) にはもっと母音の数が多く, 8母音体系であった, といふ説 (橋本進吉による説) がある. 8母音体系は現行のカナでは簡潔に表記できないが, ア・イ甲・イ乙・ウ・エ甲・エ乙・

オ甲・オ乙と表現する。添え字が使えるのなら、ア・イ_甲・イ_乙・ウ・エ_甲・エ_乙・オ_甲・オ_乙とすることもある。甲を i, e, o, 乙を i, ë, ö と表記することがあるが、これは借字であって発音記号ではない。オ_乙が Göte と同じオの音であったといふことではない。研究によれば è は [ai], ö は [ø] が推定されてゐる。

この説には続きがある(ここからは大野 晋の説)。上代には8母音体系だったが、その前は4母音体系だったといふのである。4母音から8母音が生成し、それが収斂して5母音に整理されるといふ歴史をたどったらしい。4母音から8母音の作りかたは

$$\text{エ}_{\text{乙}} = \text{ア} + \text{イ}_{\text{甲}}$$

$$\text{エ}_{\text{甲}} = \text{イ}_{\text{甲}} + \text{ア}$$

$$\text{イ}_{\text{乙}} = \text{オ}_{\text{乙}}(\text{またはウ}) + \text{イ}_{\text{甲}}$$

$$\text{オ}_{\text{甲}} = \text{ウの交替音}$$

これらを生成するのに必要な要素は、「ア」「イ_甲」「ウ」「オ_乙」の四母音となる。

VII. 12 漢字音が導入した拗音(憶測)

xxx 未稿

日本語には平安時代から明治時代まで合拗音と開拗音といふ二種類の拗音があった。開拗音は今普通に拗音といつてゐるものでローマ字で kya のように y を子音を母音の間に夾むもので、その本質は硬口蓋化音である。拗音の5音図にはイ段が欠落(例. きゃ, □, きゅ, きえ, きょ)してゐる, 別の表現では, 直音のイ段を同じ(例. きゃ, き, きゅ, きえ, きょ))であることからわかるやうに, イの音それ自身に硬口蓋化される作用がある。ここでイを開拗音母音といふことにする。世界中の i の音には硬口蓋化の作用があるとはいえ, 英語の i のやうに硬口蓋化しにくい i もある。なにが違ふのだらうか?

もともと(奈良時代まで)には拗音は日本語になかった。拗音は漢字音の輸入により日本語にもたらされたものである。開拗音は現在でも漢字音で広く使はれてゐる(例. 教養/キョーヨー)やうに日本語として, すっかり定着した。一方の合拗音は火事「くわじ」, 怪談「くわいだん」のやうな少ない事例にしか用ゐられず, しだいに廃れていった—明治時代以降に西洋の文物が輸入されるまでは(例: ファクシミリのファはハ行合拗音である。合拗音が使えない人はハクリミリといふことがある。FIFA はヒハとなる)。

ここでこのやうな仮説が考へられるのではないか。もともとの日本語の「イ」には硬口蓋化される作用はなかった。だから開拗音といふものも存在しなかった。上述のやうに「イ」が二種類あった時代には拗音がなかったことから, どちらの「イ」も開拗音母音ではなかったと考へられる。二種類の「イ」が一種類になり, それと同時期に開拗音も日本語に取り入れられた。飛躍して, そのふたつの出来事を関連づけるならば, 開拗音を取り入れることで日本語の8母音体系が再構成されたので

はないか, といふことになる. あってるのか間違ってるのか検証したいことである.

後日談

森 博達「唐代北方音と上代日本語の母音推定」では, 万葉假名にあてられた漢字の音韻(推定)から, 万葉假名の母音を推定した. イ段について云へば上代特殊假名遣のイ段甲は口蓋的な前舌狭母音であり, 乙は非前舌だった.

未稿

VIII. 未稿

本居宣長は, 50音のみが正当な音で, 漢字音の拗音とか鳥の鳴き声とかはある意味邪道な音で本来必要なかった旨, 記してある(xxx 出典を書く, 記述を正確に). また, その学祖にあたる契沖は, 「種々の音声あり」といへども, その数五十に過ぎず. 唯人間のみならず, 上は仏神より下は鬼畜に至るまで, 此声を出す. 又唯有情のみにあらず, 風の木にふれ水の石に触れるたぐひの非情の声までもこれより外に出る事なし」(和字正濫抄)と, 50音で全ての音が表記できるといつてゐる. これは理解しがたい. 50音しか知らない人が, ある音を聞けばそれは50音のうちのどこかには分類される. 50音で音は体系化されてゐるからである. しかし, 契沖は漢字音韻の広韻を知つてゐたであらう上, 悉曇学は当然本業であるから知つてゐたであらうに, どういふことか. それらは50音より桁を越えて多い音韻からなる.

本居の発言は, 契沖を踏まへた上で, 50音以外の音の存在を認識してゐるが, 逆に50音以外は本来必要ないと排除の方向に行つてゐる. 本居の発言は國學の学問ではなく政治的方向性だらう⁴³が, 最近, 契沖の発言も理解できるようになってきた. 現代の言語学者である杉本つとむも同様に, 「かな」はどんな音でも表記できる優れた文字(xxx 出典を書く, 記述を正確に)を記してゐる. これも変な話である. カナで子音のみを表記することはできないのは, 和蘭語をはじめ外国語をも研究した杉本ならよく知つてゐたであらうに. う行はLとRを書きわけのために濁点のごときを開発すればよいと書いてゐるが, それは将来開発し普及した暁にはLとRを書きわけられるといふ意味であつて, 現在どんな音でも表記できるといふ意味ではない. あへて云へば, 将来どんな音でも表記できる優れた文字といつてもいいかもしれない. だとすれば, どんな文字でも将来どうなるかはわからないから, どんな文字にでも云へることである. 契沖にしても杉本つとむにしても, カナで全ての音韻を書けないこと, 全ての音は50音を越えること(数へきれない)ことくらゐちゃんと知つてゐたであらうに, どうしてかかる事実に着しく反する言明が出てくるのであらうか. 発言には企図があると考へなくてはならない.

⁴³言語学のむづかしいところは, 「さうである」といふ事実認識(to be)と「さうあるへし/あるへからす」といふ規範(ought to be)としばしば混乱することである. 「言葉はかはる」と事実を語つてゐた人が, 「言葉を乱してはいけない」とか逆に「どんどん変へていくべきだ」とか規範を述べはじめ. 事実を研究する人と規範を研究する人とが別々であればいいのだが, 言語政策に必要な言語学の知識は言語学者が提示する以外になく, 人的資源はいつも不足してをり, それ政策専任の言語政策研究家といふわけにもいくまい.

ちゃんと書いてあるわけではないので結局、本人でないとわからない⁴⁴が、私は、契沖や杉本つとむの真意を、かう考へる。

日本語においては假名で十分、音を表記することができる。日本語においては、假名そして50音は優れた文字であり、体系である。

これは事実認識の言明ともいへる(契沖、杉本つとむ)し、規範意識も反映にも見える(杉本つとむ)。

IX. 正書法と発音

IX. 1 現地語尊重主義と漢字の読みかた

現地読みを尊重するといふアイデアが最近流行ってゐる。しかし、このアイデア、漢字圏で実行しようとするとう問題がある。たとへば、揚子江は日本語では「ヨースコー(現代仮名ずかいではヨウスコウ)」と読む。それはあくまで日本語読みなので、中国の人の読み方にしようとする。とたんに問題が生じる。揚子江は長い。上流と下流では漢字は同じなのに、読み方が違ふのだ⁴⁵。上流も下流も中国人。さらに、方言によって漢字の読み方が違ってしまふ⁴⁶。さあ、どうする？

現地語尊重の考へかたは国内問題とも無縁ではない。たとへば、関ヶ原の近くに新幹線停車駅で「米原」とふのがあり、「まいばら」と假名が触られ Maibara とローマ字綴りされてゐるが、実際の読みは「まいはら」と「は」が清音であつた(その後、間違いにあはせる格好で、地名の米原も「まいばら」と読むやうになった)。これはおそらく看板を書いた人が現地の読みの確認を怠りたり、自分の言語(笑)で、迂濶にも表記しただけだらうが、全国にはこのやうな勘違ひも多いだろう。もっと高度な問題もある。京都では烏丸と書いて「からすま」と読む。「からすまる」ではない。これは広く知られてゐるし、交差点の標識でもローマ字で“KARASUMA”とある。同様に、京では知恩院は「ン」を読まずに「ちおーいん」または「ちおいん」と読む。しかし、表記は「ちおんいん」のままである。なぜ、「からすま」は認められて「ちおいん」やは認められぬのか私には不思議でならない。単に、地名を看板にする(地名を固定する)人が意外に思ったかどうかで決つてゐるのではないか。意外に思へば、それなりに表記し、さうでない場合は見過ごす。これも他に例がたく

⁴⁴明確に書いてあつたとしても、実は意図が書いてあるとほりかどうかは本当はわからない。私は記号論的立場をとるが、悲観的不可知論者ではない。読んでさう思ったことを(とりあえず)正しいと思ふ他ないからだ。

⁴⁵揚子江の例では更に名称も変はる。揚子江は下流の名称で上流は金沙江と呼ばれる。中国での川全体の呼称は「江」または「長江」である。「揚子江」は外国人の呼称にすぎない。「江」を北京語として無理に假名書きするとチヤンになるか？ なほ、「長」川としてチヤン川とするのは語の成り立ちからするとおかしい。「江」が固有名詞なので、むしろ長(なが)チヤンとでもすべきだ(冗談)。

⁴⁶揚子江：北京語、ヤンツィチアン？。上海語、ヒアンヂガアン？。台湾語、ヨンチューカン？。広東語、ユィウンチコン？。なほ、假名はかなり不正確にして信用すへからず。もし現地語といふなら揚子江の河口がある上海語が採用されるべき。揚子江をヤンツェと読んで現地語読みと思つてゐるのは実際は英語名称 Yangtse River にひきづられてゐるにすぎない。しかも、Yangtse は現在の中国大陸で行はれてゐるローマ字綴(Yangzi, 拼音とは異なる)。

さんあると考へられる。私が学生のころ地質調査をした岩手県では浄法寺といふ地名があり、大塚弥之助といふ昭和初期の地質学者は「Zyobunzi」⁴⁷と記載してゐるが、表記は「じょうほうじ」である。知恩院は「ん」がなくなったら、浄法寺は「ん」が付加された。

IX. 2 外来語・外国語のカナ書き

日本語では運送用のトラック (truck) と競技場のトラック (track) の違いは日本語では表記できない。L と R はいふに及ばず。もっと重要なのは、日本語では子音で終はる言葉を正確に音写できないことである。日本語は開音節言語であつて常に子音+母音で音節が形成される。子音だけの音節、子音で終はる言葉は存在しない。であるから、正確に表記する、といつても程度問題になつてしまふ。まづ、どんな外国語も開音節言語にあふやうに、かつてに音節化しなければならない。

たとへば、トラックは英語としては [k] で終はるが、日本語では [ku] で終はる「ク」に変更されてゐる。しかも、もとの英語は1音節であるのに、日本語では勝手に2音節に分離されてゐる。日本語の音節は開音節でなければならぬので、子音では終つてはいけないためである。それが嫌といふのなら日本語を使ふことはできない。ある言葉を日本語として使ふ以上、日本語の文法と音韻規則に従ふしかない。Truck と track が区別できないからといつて、カナ表記でトラ ヌ クとかトラ æ クといふ風に書きわけする人は居まい。強いて表記すれば、truck はトルウク、track はトリヤクになるか。Ticket も日本語では「チ」の音と「ティ」の音を音素として区別しないので「チケット」と綴らうと「ティケット」と綴らうと単に好みの問題にすぎない。日本語として「チ」の音と「ティ」の音と音素として区別するかしないかは、「チ」を含む言葉の「チ」を「ティ」に変へたら意味が通じなくなる言葉があるかどうかで判別できる(要するに、その違いが意味の違いを伝達する上でクリティカルか、その音が意味の弁別に対応してゐるかどうかといふことである)。まづ、「ティ」といふ音をもつてゐるのは日本語では外来語しかない。しかも、その外来語は「ティ」を「チ」と書くこともできるものがほとんどである。たとへば「ティーム」と「チーム」と書いたところで意味はかはらない。しかし、tea「ティー」は「チー」と書くとおじなくてしまふものも存在する。「ティ」は推移の途中にある。

同様のカナ表記の問題として、なるべく外国語(たいてい英語)の発音に近いやうにカナを当てるのがよい、といふ論がある。ここでは英語起源の外来語の英語風表音表記法と称す。たとへば、case はケースではなくケイスにするなど、である。これを支持する論者は英語の正確な発音と日本語のカナ英語風発音との落差を嘆く人が多い。それに従つて、英語由来の外来語をいくつか英語風表音表記法を示す。

⁴⁷Otuka, 1937, Tertiary Structures of the Northwestern End of the Kitakami Mountainland, Iwate Prefecture, Japan. Bulletin of the Earthquake Research Institute, Tokyo Imperial University, vol. 12, pt. 3, pp. 566-638, pls. 44-51. 表記からもわかるやうに大塚は日本式ローマ字で記載。

従来表記	英語綴	英語風表音表記法
ケース	case	ケイス
ケーキ	cake	ケイク
ハッピー	happy	ヘヤピ
エラー	error	エウル
ガス	gas	ゲヤス
グレート	great	グルエイト
ジョーク	joke	ジョウク
フラワー	flower	フラウウ
ボーイ	boy	ボイ (ボウイは bawty?)

ちなみに、この英語風表音表記法では、internet は最悪(?), エヌアネットになる。日本語と英語はまったく異なる音韻体系の上で成立してゐるものであるから、正確に音を模写したいといふ野望は満されることがない。そして、正確に音を模写しようとするほど、日本語の側に音韻的矛盾が押しつけられる格好になる。実際問題として、カナから英語の発音を起こさうとするには無理がある。カナはむしろ英語の綴り字と発音の特徴から機械的に日本語の音韻体系あふやうに翻字したものにしておいたほうが実害が少ない。それを英語にする時に英語の綴り字を思ひ出して、その綴り字から発音を想起したほうが話者にとっても読者にとっても幸福なことであらう。

IX. 3 日本はニッポンかニホンか

日本はニッポンかニホンか

といふことがしばしば話題に登る。どちらが正式な呼称なのかといふこと、そしてどうして二種類の言ひ方があるのかといふことである。後者については、言語学的な分析と心理学的な効果が見積られてゐる。すなはち、日本のホンはハ行転呼音で、強く云ふとき古形のパ行のポになり、弱く云ふときは転呼音のハ行のホになる。強く云ふときは促音になるので結局、日本はニッポンになる。弱形がいきつくところはニオンである。これも時々耳にする(おそらくニオンと云っている本人はニホンと云つてゐるつもりだらう。それが音韻といふものである)。同様の例は一本、二本、三本をイッポン、ニホン、サンボンといふことでも理解されよう。

心理学的な効果は強勢のメリットである。世界スポーツ大会などで日本の国威揚々といった雰囲気の中なかでは強い感じのニッポンが愛用される。ニホンは落ち着いた雰囲気を示すために用ゐられるやうだ。もっともニッポンとパ行促音で強勢を示すといつても、日本語母語の人間に無意識に伝はる「強い感じ」にすぎず、外国語話者にとってはニッポンもニホンもたいした違ひはないだらう(それでも、多くの言語で h はしばしば脱落しがちであるため、h を含むニホンは弱めに感じられる可能性が高い)。

どちらが正式名称なのかについては、福田恒存は Nippon にすればよいと一蹴してゐた。福田が述べるには、1) 「ニッポン」も「ニホン」も日本語としてどちらも

正式な呼称である。2) 正式な呼称は一種類であるべきだといふ前提を受け入れる必要はない, といふ。どうしても一種類に絞りたいのであれば, ニッポンとニホンと同時に標記し得る Nippon がよいだろうと。

IX. 4 ローマ字(日本)

よく勘違いされてゐることであるが, ローマ字は日本語である(もちろん, 日本語を表記するローマ字の話)。ローマ字にした瞬間, 英語になったやうな錯覚をもつ人もゐるが, ローマ字は英語でもないし, 他のどの言語でもない。ローマ字化(Romanization)はアルファベットでその言語を表記することを意味する。だから, 中国語のローマ字(主要なものが2つある。【甲】拼音[ピンイン]。【乙】ウェード式)もあるし, チベット語のローマ字, トルコ語は近代になってローマ字で表記するやうになったし, モンゴルでもローマ字でモンゴル語を表記することを標準とした(これまではキリル文字)。キリル文字やアラビア文字のローマ字表記法もある。

日本語のローマ字表記には大きくわけてヘボン式(平文式)と日本式の二系統がある。それぞれの系統の中でいくつかに分かれてをり, 百家争鳴の観がある。目に見えてわかる大きな違いはサ/ザ行とタ/ダ行, そしてハ行である。

サザ行	サ	シ	ス	セ	ソ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
平文式	sa	shi	su	se	so	za	ji	zu	ze	zo
日本式	sa	si	su	se	so	za	zi	zu	ze	zo
シャジャ行	シャ	シ	シュ	シェ	ショ	ジャ	ジ	ジュ	ジェ	ジョ
平文式	sha	shi	shu	she	sho	ja	ji	ju	je	jo
日本式	sya	syi	syu	syé	syo	zya	zi	zyu	zye	zyo
タダ行	タ	チ	ツ	テ	ト	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
平文式	ta	chi	tsu	te	to	da	—	—	ze	zo
日本式	ta	ti	tu	te	to	da	(di)	(du)	de	do
チャヂャ行	チャ	チ	チュ	チェ	チョ	ヂャ	ヂ	ヂュ	ヂェ	ヂョ
平文式	cha	chi	chu	che	cho	—	—	—	—	—
日本式	tya	tyi	tyu	tye	tyo	dya	(di)	(dyu)	dye	dyo
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ					
平文式	ha	hi	fu	he	ho					
日本式	ha	hi	hu	he	ho					
ファ行	ファ	フィ	フ	フェ	フォ					
平文式	fa	fi	fu	fe	fo					
日本式	hwa	hwi	hwu	hwe	hwo					

註. 訓令式では()は発音がザ行ジャ行に収斂してゐるとして書きわけない。

ヘボン式系統は英語の音韻体系で辨別可能な発音(≠音声学的な発音)を表記しわける綴り方で, 英語の子音表記を模範にしてゐるのに対して, 日本式系統は五十音図上でどの行にあるか, ある行はどの音韻で示されるかといふことに基いて制定さ

れてゐる。日本式の考へ方は音韻論に基いてをり、ヘボン式の考へ方は強いていへば英米語風表音主義と云へる。表音主義は、ヘボン式の名前にも表はれてゐる。ヘボンは Hepburn, James C.(人名) のことで、現在の假名表記ではヘップバーンになるが、聞こえたやう(表音主義的)にヘボンと記してゐる。なほ、彼は開国まもない日本にキリスト教を広めにきた篤信家で日本語で平文と称した。

ヘボン式系統は日本語のローマ字表記のデファクトスタンダード⁴⁸になってゐる綴り方で、ヘボン氏が自著の英和・和英辞書(和英語林集成第3版, 1867)で使したものをも元祖⁴⁹し、国内規格としては外務省式(パスポートに用ひる)と呼ばれるものと道路標識用ヘボン式、鉄道用とにわかれてゐる。これらには微妙に差異があり、北海道の門別(太平洋側の町)/紋別(オホーツク海側の町)は道路用では Monbetsu だが、外務省式では Mombetsu になる。道路用が地名を表記⁵⁰し、外務省式が人名を表記するものとすれば、難波(大阪)は地名としては Nanba だが、人名としては Namba となる。

道路用、外務省式どちらの規格も長音を無視してゐるが、原典のヘボン式では長音は母音の上に「-」(マクロン/macron, 例; kyōto)を乗せることで表記する(規格の不徹底があつて、サーカムフレックス/circumflex, ハットも使はれる。kyōto)。鉄道用のヘボン式は長音を表記し、m/n も書きわけてをり、もっともオリジナルのヘボン式に近く、かつ、もっとも音を書きわけてゐる(Kyōto)。ローマ字ひろめ会の「標準式」もオリジナルのヘボン式に近いが、長音を「^」で示し⁵¹(Kyôto)、撥音と母音半母音の区切を「'」でしてゐる点異なる(この点は日本式と同じ)。鉄道省式はその点でもオリジナルのヘボン式と同じである⁵²。和英語林集成第三版式、鉄道省式、標準式以外のヘボン式綴り(外務省式、道路式など)を通用ヘボン式といふことがある。

ヘボン式とその亜流たち。

\	長音	大野	小野	撥音	新橋	原因	下人
鉄道省式	マクロン	Ōno	Ono	唇音は m それ以外は n	Shimbashi	Gen-in	Genin
「標準式」†	ハット	Ôno	Ono	唇音は m それ以外は n	Shimbashi	Gen'in	Genin
外務省式	無視	Ono	Ono	唇音は m それ以外は n	Shimbashi	Genin	Genin
道路式	無視	Ono	Ono	常に n	Shimbashi	Gen-in	Genin

†はローマ字ひろめ会の「標準式」

⁴⁸ 正確には、デファクトスタンダードではない。なぜなら、系統といふ通り、複数の方式があるからだ(撥音や長音)。スタンダードといへるのはシを shi, チを chi, ツを tsu とするところだ。その表記をしてゐるローマ字表記を世間では、なんとなくヘボン式と云って使つてゐる。

⁴⁹ 和英語林集成の初版は第三版以降の綴り方と若干異なる。づ=dz など

⁵⁰ 地名を示すものに鉄道の駅名がある。道路標識が地名のローマ字を決定してゐるわけではない。地名のローマ字は誰が決定するかといふのは複雑な問題である。東ドイツは西ドイツの地名を認めなかったし、ベルギーではフランス系ベルギー人はオランダ系の地名を認めない。

⁵¹ 当時のタイプライターではマクロンは印字できなかったが、フランス語に対応してみたため、フランス語のアクサンは印字できた。サーカムフレックスはフランス語のシルコンフレックスである。

⁵² 「音訳」を hon-yaku とハイフンで区切る。

長音の例は他に, 小判/交番 (koban/kōban) など.

鐵道省式は国鉄 (現在の JR) に引き継がれてゐるが, 私鉄等の各鐵道機関のローマ字表記は各会社により異なる. だいたいにおいて長音符は省略されることが多い
(Kyoto, not Kyōto nor Kyôto)

これらの規格は基本的に日本語の人名や地名をローマ字で表記する簡便法で, 日本語から漢字と假名を廃してラテン文字化する意図も能力もない. 外国規格では英国と米国 (現在は廃止) に日本語のローマ字表記があり, これらはヘボン式の流れを汲む. ヘボン式支持者は少なくとも敗戦まではヘボン式といふ名称で呼ばれるのを嫌い, 標準式と自称してゐた. ヘボン式では, シを shi, チを chi, ツを tsu のやうに綴り, 英語風の綴り方とされるが, 英語風なのは子音についてであつて, 母音はアイウエオを a, i, u, e, o のやうにラテン語やイタリア語・スペイン語・ポルトガル語・ドイツ語風 (要するに英語風ではない. 仏語風 (ウは ou) でもなく蘭語風 (ウは oe または œ) でもない) に綴る. であるから, ヘボン式を英語風といふのは正確ではないし, 英米人がそのままでヘボン式を (日本人が読むやうに) 読むことは不可能であつて, 英米人といへどもヘボン式ローマ字の読み方の習得を要す. 英米語の phonics (発音と綴り字の関係) では, 佐藤 Sato はセイトウのやうに読まれるし, 加藤 Kato はケイトとなつて, まるで Kate みたいだ. 町田 Machida に至つては Mac Hida マックハイダのやうな読みかたさへされる (皮肉なことに, 一般的英米人は ch の発音については一定の見解がなく, ヘボン式を知つてゐる英米人だけがローマ字の ch が常に church, each のチであることを知つてゐる). ヘボン式は子音母音ともにポルトガル語の綴り方に近いので, ポルトガル人やブラジル人なら日本語風に読めるかもしれない. ヘボン式の考へ方も種子島時代の宣教師式の後継として位置づけられる. ヘボン氏は宣教師資料で日本語を自習したと伸べてゐるから, それがヘボン式に反映されてゐるのかもしれない. いづれにしてもどんなローマ字表記にしても, その言語を知らないで, その言語のトークン—たとへラテン文字で表記されてゐよう—の発音を正しくできることはないのである.

日本式は 1937 年に近衛内閣で告示された規格 (訓令式と呼ぶが戦後の訓令式と区別するためここでは近衛訓令式と称する. 正式には内閣訓令第三号官報第 3217 号掲載) の原案となつた綴り方で, もともとは 1885 年の田中館愛橘の発案による. ただし, 日本式の素案自体は田中館が提唱する以前から電報等で明治時代を通して使はれてゐた (田中館, Toki wa Uturu). ヘボン式が宣教師式の思想的後継者といふならば日本式は蘭学式⁵³の後継と位置づけられるかもしれない. 後述するやうに, 蘭学式も日本式同様に発音それ自体よりも音図での位置付けを重視してゐる.

ヘボン式が実務家の支持を受け, 明治以来, 日本の地名人名のローマ字表記のデファクトスタンダードであつたのに対し, 日本式は田中館愛橘や寺田寅彦のやうな物理学者や言語学者等の学者⁵⁴の支持を受けてをり, トルベツコイのやうに欧米の

⁵³ 蘭学式はオランダ語 (蘭語) 風ローマ字表記をベースに日本人が作成したもので, 蘭語式とは別もの.

⁵⁴ 田中館 (館) 愛橘: Tanakadate Aikitu. 寺田寅彦著: Umi no Buturi. 朝永振一郎: Tomonaga Sin-itorô. 和達清夫 (地震学); Wadati-Benioff Zone. 大塚彌之助 (地質学): Ôtuka Yanosuke. 松山基範 (地球物理学): Burnhes-Matuyama Boundary. 藤岡和男 (古植物学・層序学): Huzinoka Kazuo. 山田尚勇 (計算機科学): Yamada Hisao (記名が日本式ではないが Tatuoka-Hiroshi 氏との共著論文 1995,

言語学者にも支持された。日本式では子音がどの音韻に属するかによって決定される。たとへば、タ行の子音はtであって、ta, ti, tu, te, toと綴られる。音声学的な表記では、ta, chi/tshi, tsu, te, toの綴りの方が音に近い(同じではない)かもしれないが、日本式は、音声と音韻は概念として異なることに注目し、文字は音声ではなく音韻を表記すべきであるといふ考へ方に立ってゐる。したがって日本式では音声学的な表記ではない。欧米人が自分たちの言語の音韻にあはせてアルファベットを当ててゐるやうに日本人も日本語の音韻にあはせてアルファベットを当てればよいといふのが日本式の主張の眼目である。日本語としての音韻はあくまでタ行はtで示される。たとへば、「勝つ」といふ動詞を活用させてみると未然形「勝たない」katanai, 連用形「勝ちます」kachimasu... とヘボン式あるいは音声学風の綴り方では、「勝つ」の語幹がkat-にならず、kat-/kach-/kats-といふ複雑な形になる。言語としてより本質的な表現はkat-であり、それを実装する日本式が優れた綴り方であるといふのが支持者の意見である。これは現代言語学の言語をラング(イデア的な言語)とパロール(実際に使はれてゐる言語)にわけると考へ方を先取りするもので、この考へに基づくところある言語の音は音韻(その言語でのイデア的な音)と音声(実際に発される音)とに区別される。明治時代の日本人がこのやうな先験的考へ方を考案したことは日本人としては誇らしい⁵⁵。

日本式系統には変則的なものが2種類ある。第一の変則的な日本式は、新日本式と称し、服部四郎氏により提示された。これはタ行のチ、ツをci, cuと表記するもので、他は日本式と同じである。日本式が行と段の整合性を重視し、行ごと段ごとに字母を与へたのに対して、新日本式はその点では一部不整合である⁵⁶。

もうひとつは訓令式といふ。ヘボン式と日本式はどちらがあるべきローマ字か論争してゐたが、文部省の臨時ローマ字調査会で審議した後に、訓令式として1937年に近衛内閣で告示される。これは主に日本式をベースにしたものであるが、日本式そのものではない。主な違いは旧假名(正假名/支持者自称)と新假名の違いに由来するもので、基本的には表音的な日本式といへる。

ローマ字綴り方は吉田内閣によって1954年、近衛訓令式を主にする規格として再制定された。ここでは区別のため吉田訓令式と称する。正式には官報第8382号掲載の内閣訓令第一号といふ。吉田訓令式は主に近衛訓令式で、やむをえない場合にはヘボン式綴り方でもよいといふ規格である。ヘボン式綴りを容認する別表2 footnote 別表2は日本式のdiやwoなども許容してゐる。は日本を占領してゐたアメリカの圧力で付け加へられてゐる。そもそもアメリカはヘボン式を日本国の正式なローマ字綴り方にしようとしてゐた。GHQは敗戦直後の1945年9月にヘボン式のみを可とし、日本が独立をした後もヘボン式を横断してゐたが、日本人の反対でこのやうな折衷案になったといふ俗説がある。ただし、筆者の知る限り、それを裏づける一次資料も、否定する一次資料も得られてゐない。

吉田訓令式は実はヂ di, ヅ duなどの近衛式では否定された日本式のオリジナルな

1996; 論文「情報化社会の国際化と日本語」1997; 著書「日本語をどう書くか」2000; 「田中館愛橘博士とタイプライタ」2002から推測)

⁵⁵単に筆者は学生時代、田中館の郷里である岩手県二戸に地質調査のため暮してゐたので特別な思ひ入れがあるためかもしれない。

⁵⁶念のため註記するが、整合であればよい、不整合はダメといふ単純な判断はしてゐない。

表記も別表として認めてゐる。このやうに近衛訓令式を本則としつつ、ヘボン式も完全な日本式も認めた吉田訓令式は、抜け穴ばかりの規格で規格としては破綻してゐる。端的には、この規格ではヘボン式と近衛訓令式の交ぜ書きを容認してゐることである。たとへばツジノは近衛式では tuzino, ヘボン式(鐵道省)では tsujino であるが、吉田式では tujino でもよいことになってしまつてゐる。促音ではヘボン式ですらない場合がある。「坊っちゃん」はヘボン式(鐵道省)では Botchan であるが、吉田式では Bocchan となつてしまうのだ。また、日本式支持者は、本表の近衛式に従ふべしと主張してゐるし、普通に規格を読めば本表が正統で、別表は例外処置で置いてあるはずなのに、「やむをえない事情」が限りなく拡大解釈されてゐることである。また、旅券のヘボン式は「ん」を唇音(mbp)かさうでないかで区別し、唇音の前の「ん」は m で表すとしてゐる。これは吉田式からは導けない規則で、この点において旅券式は内閣訓令に違反してゐる。道路標識のヘボン式は「ん」を n で表現しており、吉田式の第2表の適用と解釈でき、内閣訓令には違反してゐないのと対照的である。日本式はその後、ISO 規格として制定される。

欧米ではヘボン式系統一色と思はれがちだが、さうでもない。1987年に Eleanor Jordan は日本語を紹介する書籍“Japanese: The Spoken Language”を発表した(正確には日本語の教則本)。これには近衛訓令式に近いローマ字綴りを使用してをり、JSL 式と称される。これの特徴は長音を母音字のダブリングで示すところにある。京都は Kyooto, 大坂は Oosaka となる。これは近衛訓令式で代書法とされた方法である。撥音のンは n̄ で示すため、sinyo が信用か屎尿かといふ問題は生じない。信用は siñyo となる。チは ti, ツは tu となつてをり、文法書として「立つ」の活用 (tat-i-masu, tat-a-nai, tat-u, tat-u-toki, ta-t-eba...) が整合的に説明されてゐる。日本語は高低型のアクセント(ピッチアクセント)をもつてゐるが、JSL では á, à, â は音の高低を示す。そのため長音符を使用しない(できない)のである。この書法ではガ行頭子音のうち鼻濁音 [ŋ] を区別するときは g̃ で示す(not required)。

教育過程で正規に教へられるローマ字は訓令式で、小学校の国語の時間に教へられる。一方、ヘボン式は英語の時間に教へられることもあるが必須ではない。みんななんとなくヘボン式風のローマ字綴りをどこかで修得するのが常である。ただし、ちゃんと理解してゐないからヘボン式にしようとして誤つた綴り方になることもある。これを誤用ヘボン式と呼ぶ。もっとも多い例は、ザ行の拗音の間違ひで、たとへば新庄=Shinjyo, 千住=Senjyu がさうである。Shinjō, Senju が正確なヘボン式である。j は硬口蓋化(≒拗音)したザ行(正確にはダ行)イ段の子音であるから更に拗音の y を加へることはしない⁵⁷。ちなみに、近衛訓令式の場合は Sinzyō, Senzyu, 日本式復古假名翻字の場合 Sinzyau, Sendyu となる。促音は次の子音字を重ねると説明されてゐるが、ヘボン式には例外があつて、ch は cch ではなく tch となり、j は jj ではなく dj となる。ch は [tʃ] の破擦音なので子音字は t となり、j は [dʒ] なので子音字は d となるためである。マッチは macchi ではなく matchi, ドッジボールは dojjibōru ではなく, dodjibōru となる。これも正式に教へられることもないので間違つてゐることが多い。長音は日本語において出現頻度が高く重要だがマクロンは ASCII で使へないため、通用がまかりとほつてゐる。たとへば、「耕作」のやうにヘボン式(真

⁵⁷ 本人が jy だと主張するならそれは尊重されるべきだが。

正)では kōsaku だが, kousaku のやうに翻字的に綴られることがある. koosaku というダブリングで表記する方法もあって, むしろこちらのほうが表音的には正しいが, あまり使はれない. むしろ h を用ゐて, kohsaku と長音を表記する場合が多い (詳しくは後述) が, これはどこの規格にもない⁵⁸し, 大矢=Ohya=おひゃ? のやうに誤読のもとにもなる. 長音表記は重要で, 「そごう」が Sogo 「齟齬?」, 「浩三」が Kozo 「小僧?」, 「観光」が Kanko 「閑古?」, 「交通」が Kotsu 「骨?」のやうに違ふ意味 (それも悪い意味) になることを嫌ふ人が多いため, なんらかの形で長音を (ASCII で) 表記することが求められてゐる⁵⁹.

一方, ローマ字綴りに興味をもつ人達は日本式支持者とヘボン式支持者をわかれて, はげしく対立してゐる. 対立は田中館愛橘が日本式を提出した時から始まってゐるから, かれこれ百年以上にならうか. G.M.Weinberg はかう云ふ.

議論が何十年も激しい場合は, おそらく議論が的外れだったか議論が空疎であったか, モデルが間違つてゐて解 (結論) に収束しなかったためか, それとも単に私達が議論好きなのである. G.M.Weinberg (システム思考入門)

私はこれに, 「答へを出すまでもない些細なテーマであつたからか, あるいは解を引き出すだけのデータがなかったからだ」を付け加へたい. これらは的外れと空疎の具体的表現かもしれないが.

・前者について理解するにはまづ逆のことを考へればよい. 重要なテーマは影響も重要だらうし, 放置しておいた時の影響も重要だらうから賛成派, 反対派ともども真剣に参加するし, 母数も多いだらう. やがて議論も出尽す. あくまで納得できない人もゐるだらうが議論としては終つてゐる. 支配的な見解ができてゐるので異論も出てこない. また, 重要な議論だったために, 人々の記憶に強く残り, また手近な所に記録されるため, 同じ議論を蒸し返すことはない. 些細なテーマでは全てが裏目に出る. 個々の人は真剣かもしれないが, 関心をもつ人自体が少なく, 散発的に議論に参加する人もゐるが, 前に繰り返された質問や提案を繰り返す. 支配的な見解がないのでそれについて体系的に学ぶ機会がなく, 人々は思ひつきで発言する. しかも, その思ひつきは, 前にあつたものと同じだ. 人間の思ひつく範囲は限られてをり, 新規な思ひつきは滅多にない. 特に戦後の議論 (といふよりちょこつとした意見表明) の多くは戦前の議論 (たとへばローマ字調査会での議論) と同じ論点で且, 劣化したものが多い. 真剣に議論するなら研究史 (それこそロドリゲス以来の) から追求すべき筈で, それをしないのは, どうでもよいと思つてゐるか

⁵⁸最近, 外務省はオ段の長音に限り認めるやうになった. 祐二はウ段なので Uhji には出来ない.

⁵⁹日本式復古假名翻字の場合は耕作は Kausaku, 祐二は Iuzi, 大矢は Ohoya, そごうは Sogahu, 浩三は Kauzau, 小僧は Kozou, 観光は Kwankwau, 交通は Kautuu となる

らとしか思へない。実際, どんなローマ字表記であっても, たいていの日本人には通じてしまふ(例 Sinjitu, 石川啄木)。国内問題としては「どうでもよかった」のだらう。なほ, 戦前の議論については私見では, 表音式にしようといふ前提がそもそも曖昧でトラップになってゐたと考へる。音は見えないし人によって発音も聞こえ方も違ふので, 坂上の雲のごとく追ひ掛ければ追ひ掛けるだけ逃げていくところがある。

・後者についても逆のことを考へればよい。必要なデータが揃つてゐたら, 理性のある人ならだれでも同じ解を引きだすだらう。「神は議論せず」である。神は全てのデータを持つてゐるが故に議論することはない。天動説か地動説かについて人間は長い間, 論争をしてきたが, 神からすれば「見たらわかるやん」でおしまひである。恐竜が隕石落下で絶滅したのか論争があつた(今もある?)が, 神からすれば, 現場を見てゐるのだから議論にならない。もし, 必要なデータが全て揃つてゐたら, 論争や議論など生じない。限られたデータの中から, なんとか最善の解を引き出さうとするために議論は生じる。

完璧な表記体系といふものはない。言語は絶えず変化しつづけてゐる。ある言語全体に対して矛盾なく統一的な表記方法はない。「ら」抜き言葉が言語の乱れではなくて現代日本語文法の完成への途すじであるやうに, 言語はその状況状況に応じて自己に内在する隠されたルールにもとづいて自己を再構成する。変化速度の遅い中世以前ならともかく, 近世以降では自己の再構成が終はらないうちに, 次の目標ができて, それに向かつて変化しはじめる。動的平衡といつてもよい。変化してゐる時には, ある目標があるのだが, 変化していくうちに, 目標も変化してしまふ。表記が今ある現実に対応したものになつても, それが定着する前に今ある現実が違ふものになつてしまふ。かくして, ほんの少し前の時代の文章が読めなくなる。世代の断絶である。

日本語の本来語や血肉となつた漢字音の音韻体系においては日本式が妥当であっても, 外来語の音韻を表記する際には, 日本式で対応するには苦慮する場合がある⁶⁰。たとへば「ティー」(紅茶の意)をどう表現するか。「ティー」は「チー」とは違ふ表記であるべきだ⁶¹。おそらく, 「ティー」は母音交替や曲用などの活用をすることは当然あるいは永遠にないだらう。しかし, 日本人の総意(これも曖昧な概念であるが)として別の音(音韻)になつてゐる, といふ合意はあるやうに思ふ。別の音韻であるからには, 日本式であっても別の表記にしないではいけない。日本式の表記の拡張のため, いくつか書法が考案されてゐる。文部省の学術用語集に採用された, もっとも公式(?)な書法ではティを *tʲi* としてゐる⁶²。なほ, 「ティー」といふ表記は戦前からあるし, *tʲi* といふ表記法も戦前からあるもので, とつてつけたものではない。

このやうに, 新しい音韻に対して別途, 音を示す符号を割りあてていけばよいで

⁶⁰漢字假名を捨ててローマ字一本にするのでない限り, ローマ字は補助か飾りなので, 外来語は原語表記のままになるだらうと思はれる。その場合は外来語の音韻の表記を考案する必要はない。

⁶¹ただし, 明治期(もっと前では江戸時代蘭学者の間)において既に「ティー」の音韻の帰属は問題になつてゐた。日本式はそれでもタ行の頭子音は *t* と主張してゐたわけで, 日本式は明治期の発音だったら通用したといふ論法はあやまり。

⁶²ちなみに外務省へボン式では *Tei* となつてゐる。

はないか—しかし、事はさう簡単ではない。表記といふのは基本的に変化しないことを前提にしてゐる。ところが、音韻や発音といったものは、変化させまいとしても勝手に変化しまふ。日本語は、この先どうなるのか、未来は誰にもわからない。既に起つてゐる未来ならばわかる。It was a foregone conclusion. とドラッカーは云ふ⁶³。

いくら言語学者に支持される日本式とて完璧な表記体系とはいへない。それはどの表記法であっても表記と発音を完全に整合的に対応づけることは不可能なためである。ひとつの理由は発音が完全ではないからである。シを [si] と発音する人もゐれば [ʃi](shi) と発音する人だつてゐる。セも [se] だったり [ʃe](シェ) だったりする。このやうに発音には幅がある、アナログなものである。それをデジタルな文字で表記することには限界がある。もう一つの理由は、文法(統語論)的整合性、発音の整合性、および歴史的経緯のそれぞれは互ひに関係はしてゐるが挙動としては独立で、それら三者全てを満す書記体系は存在しないためである。たとへば、wished, begged, wanted は語尾は同じだが発音は全部違ふ。これを wisht, begd, wantid とすると、表音の上では整合だが、統語論的には整合性が損はれてしまふ。

だから、「表記の優れてゐる度合」といふものは、どれだけ整合的に表記体系を構築できるか、の程度によって計量することができる(逆に云へば、程度問題を定量することによってしか表記の優劣を議論できない)。完璧にできないからといって、いいかげんでよいといふことほど愚かな両極端はない。

ローマ字の大きな課題は、わかち書きのルールを明確にすること、モーラ、長音、撥音、促音をどう表現するかであつて、ヘボン式か日本式かといふのは、美しさや可読性はともかく、書かれたものの意味を理解する際に決定的誤解を招く違ひではない。たとへば日本語で si といへば、嫌応なく「シ」であり、日本語で chi とあれば、嫌応なく「チ」である。日本語に関して云へば、ヘボン式と日本式を交ぜ書きしたところで決定的な矛盾はない。ただし、わかち書きも地名や人名などの固有名を表記してゐる限りでは必要ないので、現在のやうに固有名の転写に限っていへば解決する必要のない問題である(だから解決しなかつたのであるが)。

長音表記の難しさ:「大通り」といふ地名を長音を無視する道路ヘボン式で表現すると、“odori”となつて、「踊り」と区別がつかない。長音は日本語にとって重要な弁別要素である。日本語の表記では、二種類の違ふ長音表記法がある。たとへば、逢坂(おうさか、あふさか)と大阪(おおさか、おほさか)は発音は同じだが現代仮名遣いでは書きわけてゐる。これはもともとの語源や歴史的仮名遣(復古仮名遣)に起因する違ひである。これらを翻字的ローマ字にすると逢坂は Ousaka, 大阪は Oosaka になる。

もちろん、これらは現代日本語において同じ発音であるから、書きわけは必要ないと考へることもできる。表音主義の考へ方である。表音的ローマ字綴りでは、どちらもオーサカなので Ōsaka ? になる。ローマ字の目的を表音的用途と見るか翻字的用途と見るかによって綴り方も変はる。

⁶³ドラッカー(ピーター・フェルディナンド・ドラッカー)は社会経営学者で、人からは未来学者とも呼ばれ、社会情勢を予言してゐたことで知られてゐるが、本人は「未来のことは誰にもわからない、ただ、既に起きてゐることはよく見ればわかる」といって、未来学者と呼ばれることを嫌つた。彼は世界経済が発展することを論文にした次の週に世界恐慌が起きたことに懲りてゐる。

オの長音に oh で表現することの是非: 長音を OH と表記する人が多い. 確かにオーノ (大野, おおの, おほの) とオノ (小野, おの) は日本語にとってはまったく別の指示内容を指す. これを ohno, ono と区別することはできる, しかし, 大矢 (おおや) の「オー」を oh で表記すると, Ohya 「オヒヤ?」となってしまふ. h の後に母音や半母音がくると h がそれらと結合してしまふ. 同様に, 耕平 (こうへい) の「コー」を同じやうに oh で示すと Kohhei (コッヘイ?) になってしまふ. コウヘイは他に, Kouhei, Koohei, Kōhei などの表記が考へられる. 最初の Kouhei は現代仮名遣いの翻字, Koohei は長音を母音のダブリングで示してをり表音主義の代書法と見なされる. Kōhei は真正の表音主義的表記である (あるいは Kōhē). ダブリングで示す方法の欠点は, 音節の切れ目がわからなくなることである. たとへば, kooni の綴り字では「子鬼」と「高2」の区別がつかないことである. 発音では「子鬼」は「子」と「鬼」に少し間があき, 「高2」は間があかない. 表音主義では, 音で区別ができるものは書記で区別できるやうにしなければいけない. ダブリング法では音節の切れ目が区別できないので表音的には不完全である. 音節の切れ目に「'」のやうな区切り符合を入れて, ko'oni で「小鬼», koo'ni で「高2」のやうに書きわけを工夫する必要がある.

一方の翻字法の欠点は漢字假名が音節文字であるのに対してラテン文字は子音と母音を別に表記する音素文字なので音節の単位がわからなくなる. たとへば「子牛」と「格子」がともに kousi になり区別できない. 発音ではコ・ウシとコーシといふやうに区別できてゐる. 形態素の切れ目と音の切れ目が対応してゐるのである. これも「'」のやうな区切り文字を形態素の切れ目に入れて, ko'usi で子牛, kousi で格子 (又は kou'si) とする工夫が必要になる.

余談: 日本式は五十音を行と列に分解した簡単な構造をしてゐるのに対して, ヘボン式は shi, chi, tsu, fu など例外処理がいくつかある. 日本人は一概に「奥が深い」ことを熱愛する傾向があつて, 簡単なものはかへつて歓迎されない. 多くの日本人がヘボン式を実用上用ゐるのは, その奥の深さゆゑなのかもしれない (非合理的な故に我愛す?) ヘボン式がもっと変な用字, たとへば, ニを nhi, ヒを hji, ジを zhi, j はズのみ示すとでもしてゐればもっとヘボン式は揺ぎない支持を得てゐたかもしれない. あるいは復古仮名遣 (旧假名, 歴史的假名遣) で日本式を翻字すれば日本式も流通するかもしれない (訓令式は表音主義に則してゐるので無理な相談だが).

IX. 5 黎明期のローマ字 (日本)

明治大正時代にはいろいろなローマ字が開発された. その中で残ったのがヘボン式と日本式であるが, それ以外のローマ字も田丸卓郎「ローマ字文の研究」にしたがひ簡単に紹介する. 複雑なものが多いので記載したのは定義の一部だけである.

南部式ローマ字: 南部義籌 (よしかず) による. 南部式の最大の特徴は翻字式であることである. また, 假名遣と発音のずれは, 假名遣のほうにあはせると主張してゐる. ほとんどのローマ字表記は日本式と共通だが, 漢字の「ン」の音を n, m, ng の三種類にわけて表記してゐる (「ンの表記」参照) ところが違ふ. さらに漢字音のイ段は全て yi と表記する. たとへば, 口 (クチ) は kuti だが, 一 (イチ) は ityi となる.

左近式ローマ字：左近義弼の発案。左近は複数のローマ字綴り方を公表してゐる。最終版では、イ段とウ段に母音を添へないことを最大の特徴としてゐる。たとへば雀を szme と表記する。Gai はガイになるが、グアイ (具合) にしたい場合は Găi と表記する。この綴り方は文字数の短縮に貢献してゐるが、問題もある。カ行でいふと、ク=k, グ=g, キ=q となるが、ギに対応する字がないので、q にバーを書けた新しい字を創成してゐる。このような変形字は5種類ある。

片山式ローマ字：片山国嘉の発案による。その特徴は復古假名遣とローマ字との間に対応関係をつけてゐることにある。対応をつけるために字音符を多用する。たとへば「えう」「えふ」「ゑう」「ゑふ」は現代語ではいずれも「ヨー」と発音するが、それぞれ、eu, eü, ëu, ëü と書きわける。南部式のやうに eu, ehü, weu, wehü とすると綴り字と発音の間にズレが生じ、解釈規則が必要になるためである。実際には片山式でも、eu はヨーと読むといふ点では発音の間にズレがあり、完全な解決にはなつてゐない。

鳴海式ローマ字：鳴海要吉の発案による。鳴海は雑誌 Akatuki を発行してをり、発行当時は日本式であつたが、だんだん綴り方がかはっていき、Akutki と名称を変更するに至つた。鳴海式は語源を重視し、復古假名遣を摂り入れた書き方となつてゐるが翻字式ではない。基本的には日本式翻字に似てゐるが、イーは iy, エー (エイ) は ey と書く。ウーについては、假名遣がウウの場合は uw, ウフの場合は uh と書きわける。活用するイ段の音は i で、活用しないイ段は y で書くなどの特徴がある。

IX. 6 「おう」を ou とするのは間違ひか？

もちろん、翻字であれば間違ひない。しかし、翻字でないにもかかはらず、「おう」を ou とするのが正しい場合がある。

一般的には「おう」といふ読みは「オー」を長音で発音せられるので、ローマ字表記では ō (ヘボン式), ô (訓令式) と表記しなければいけない、といふことになつてゐるし、これまでもさう扱つてきた。しかし、「おう」といふカナの表記を、「オ・ウ」と活舌よく短音の連続として発音するのであれば、ou になる。

たとへば、「思う」は「オ・モ・ウ」と発音するのが一般的なので (くだけた口語では「オモー」かもしれないが)、これはヘボン式でも訓令式でも omou と書かなければいけない。では「当番」はどうか？ 当番や耕作や京都などの漢字音のオ段は長音で発音することが普通であるが、「思ふ」のやうに活舌よく発音したところで通じる。社会的に合意のあるこれらのオ段の発音は長音であるから、一般的には長音で表記しなければいけないが、人名の場合は本人が、「私は耕作と書いて、假名ではコウサクと書き、発音もコ・ウ・サ・クなのだ」と主張するのであれば、Kousaku となるだらう。世の中には「騎士」といふ名前をつけて、「ナイト」と読ませる親さへゐるのである。耕作を Kousaku と綴ることを禁じるのなら、まづ騎士にナイトといふ読みを与へることを禁止してもらひたい。

IX. 7 ローマ字文の読み難さと情報量あるいは冗長性

ローマ字の話をしたからにはローマ字運動の話は避けて通れない。ローマ字運動とは日本語から和漢混交文(漢字まじり假名文)を廃して、ローマ字だけで文章を書くことを国の政策としようといふ運動のことだが、本稿ではそれについては詳しく述べない。看板などにはローマ字は氾濫してゐるが、日本語としてローマ字で通信するものはほとんどゐない。携帯電話のメールだつて和漢混交文である。

ここでは、ローマ字文はなぜ読みにくいかについて「慣れ」以外の原因を考へてみる。ここでとりあげるのは情報量あるいは冗長性である。

日本語の文字列としてもっとも情報量が多いのは、(1) 和漢混合文で、漢字にルビが振ってあるものである。自分の名前をなにか(クレジットカードの会員でも履歴書でも)に登録する際には、たいてい、自分の名前を漢字で書き(漢字の人は)、それに「ふりがな」を振る。場合によっては住所にも振假名を振る必要があり、面倒だったり、字を書くスペースがなかったりして難儀するが、この方式だと、読みも漢字も伝はるので、もっとも情報量を多くもってゐる書き方だと云へる。もっとも書くのが面倒なので冗長性(余分さ)とも云へる。

次に冗長性が多いのは普通の和漢混交文(2)であり、(3) 歴史的假名遣(ここでは復古假名遣と称す)が次に続き、(4) 現代仮名ずかいがそれに続く。その次は(5) 真正の表音的カナ表記(わたしわ がっこうえ いき、しゅくだいお しました)⁶⁴であるが、カナ表記は和漢混交文にくらべて、格段に情報量が減つてゐることがわかる。それでも、これら(1)–(5)とローマ字と比べてみると、ローマ字文は格段に情報量が少なくなつてゐる。同じ発音であれば意味が異なつても同じ綴りであらはずといふのは書く側にとってはまことに結構だが、読むほうからすれば、同じ綴りで意味がいろいろあると、そのうちのどれが筆者の意味するところか一々文脈から考へなければいけなくなる(そうかん、相関、壮観、創刊、総監...)。全部ではないにしろ、いくつかでも意味の違いが綴りに表されてゐれば読む方としては楽である(さうかん、さふくわん、そうかん、そうくわん)。冗長性は読む方からは歓迎すべき項目である⁶⁵。この観点から見ると、つまり、和漢混交文は書くほうが苦勞して読みやすくする、読む側にやさしい書きかたなのである。結果は(1)がもっとも読みやすい文で、(2)はやや劣るがそれでも読みやすい文となる。(3)、(4)、(5)はどれも和漢混交文に比べると読みにくい、それでも、語を同音であつても書きわけ(3)がまだ読みやすく、(4)は(5)に比べると、「は」「へ」「を」の助詞を同音のそれから書きわけてゐる分、読みやすい。

これらをローマ字化を実行しようとする、どの段階でローマ字化⁶⁶するかによつて、若干の情報量に違いがでる。もちろん、(1)や(2)をそのままローマ字化できないし、(3)–(5)にしてもローマ字化したことによつて情報量が低下するには違いがない⁶⁷のだが、情報量の観点から(3)、(4)、(5)に対応するローマ字を比較する。一

⁶⁴カナで表音するので、もはや假名遣いとは云へない。

⁶⁵だからといって、漢字で一杯の文章は逆に読みにくい。情報量が多いと逆に情報の海に埋没してなにか重要な情報かの差別化がなくなる。また情報量=冗長性とは違ふ。

⁶⁶Romanise といふ。これぢやローマ(帝国)化になつてしまふ

⁶⁷音が子音と母音に分離されることは情報量が増えてゐるとも考へれるが、日本語はモーラ言語だといふ前提に立つとローマ字はモーラの切れ目がわかりにくくなつてしまふので情報量が低下した

般的なローマ字論者が主張してゐるのは表音的ローマ字なので(5)に対応するものと云へる。また、翻字式ローマ字はローマ字論者は認めてゐないが、それぞれ(3)や(4)をローマ字で翻字することはできる。それらは(5)に対応するローマ字よりは、冗長性が高いため、若干は読みやすくなつてゐる。なかでも、復古假名遣翻字式のローマ字は、同音異義語を綴り方で書きわけてゐるため、ローマ字としてはもっとも可読性が高いと云へる。ヘボン式か日本式かの違いはあまりローマ字の可読性には影響を与へないやうに思はれる。若干、語の認識の上では日本式が優り、音の認識ではヘボン式が勝つてゐる。問題なのは長音である。外務省のパスポートや道路標識のやうに長音を表記しないローマ字システムでは(5)よりも可読性が落ちてしまふ。假名にも戻れないのは勿論のこと日本語の音にも戻れない⁶⁸。Onoといふ綴をみて、大野さんか小野さんかは文脈で判断しなければならない⁶⁹。空港で呼び出す場合は、ヤマカンで「オーノさま、オーノさま、8番搭乗口まで至急お越してください」とするか「オーノさま、あるいはオノさま…」と両方で呼び出すか。

上の考察をまとめると復古假名遣翻字式の日本式ローマ字がローマ字の中では、もっとも弁別性がよいといふ結論になりさうである。とはいへ、どのローマ字文の可読性も和漢混交文の比ではなく、人に読ませる文章としては和漢混交文の可読性は揺ぎない。書く方は楽をできても、読む方で苦勞するならば、単純に表記が簡単とはいってられない。また、文章はゴミのやうなものはともかくとして、だいたい、書くことよりも読むことの方が多い。だから読むことを効率化することには意味がある。もっとも、これらの議論は本稿の範囲を越えるし、実証的証拠と妥当な推論によって決定されなければいけない。

ローマ字は地名や人名、固有名詞をラテン文字世界で表現する手段や日本語の新たな表現として(TOKIOなど)の利用方法が取まるべきところと思はれる。ただし、ローマ字文や、カナモジで作文してみることはお勧めする(それを人に読ませるのはお勧めしない)。音の切れ目や語感についてのセンスが向上することをお約束する。

とも考へられる。ただし、ここでの議論は複数のローマ字コーディングの比較なのでカナと比べて情報量があがらうとさがらうと問題ではない

⁶⁸これを日本語の表記と云つてよいかどうかはとても疑問である。長音を辨別した明治時代のヘボン氏はおろか種子島時代の宣教師よりも後退してゐる。

⁶⁹長音表記に無頓着な立場を擁護する argument に「長音を表記したところで文脈依存であるところはかわらない。程度問題だ」といふものがある。たとへ長音を表記しても、大野さん同士、大島同士は辨別でゐない。ユウコといつても裕子に友子、祐子、優子、夕子いろいろある。それらは全て文脈依存であるといふ論理である。それは確かであるが、それでも情報量が減少してゐることは確かである。その情報の欠損が納得できるものかどうかといふところが争点となる。英語だけで考へるなら、英語では長音短音を区別しないので、その情報の欠損は気にならないだらう。そもそもそこに情報が存在してゐたことすら英語話者の人が気がつかないだらう。英語をカナタナに変換した時にLとRは同じになるが、日本語話者にとってはその辨別の欠損は気にならない(といふか気にしても仕方がない)問題なのと同じだ。カナに転記した英語はもはや英語ではないやうに、長音表記をしないローマ字はもはや日本語ではない。英語としてのローマ字であれば長音表記は無用であつて、英語話者がどう表記しやうと日本人のとやかく云ふことではない。しかし、カナがほとんど日本語話者だけのものであるのに対し、アルファベットは英語話者だけのものではない。更に、外国語は英語だけではない。長音/短音を辨別する言語の話者にとっては長音が欠損してゐるのは、LとRが区別できるのでにう行で書いてあるやうなもどかしさがある。それにローマ字綴は自国の表現のために自国(ドナー側)が決定すべき(ドナー原則)で、誰かの言語の音韻にあはせてアルファベットで書いたものではない。

IX. 8 フランス語正書法改革とその失敗

フランス語の綴り方は, Monet, Renoir, eau[o](水) のように黙字があったり, 読みがむづかしい言語として知られている. しかし, フランス語は英語と違って基本的に例外はなく, 規則的に普通の読み方から逸脱しているに過ぎない. 逸脱の仕方に規則性があるので, 規則さえ覚えれば読み方自体は一意に決まる (ただし, 個々の語の文法的役割がわからないといけない: たとえば主語と動詞の間はリエゾンしない). ただし, フランス語の綴り方はそれでも多くの不合理があり, 綴り字改革は提案され廃案になってきた. その経緯は日本のローマ字正書法や仮名遣いにも共通するところがある. 本章ではフランス語の綴り方の成立と正書法を考察する.

フランス語の正書法は公式には Académie française が 1673 年に制定したのがその始めである. この正書法制定の目的は「無知な人々や愚かな女たちと学識ある人々とを区別するため」であるというのが当時の当局の公式見解であった. しかし, 正書法は本来そのような目的ではない. まだ自分の言語を書く手段をもたぬ人が, 表音文字を与えられて自分の言語を写しとる時には表音的以外にはありえない. 蝶々を「てふてふ」と綴るのは当時の人にとってはそれが表音的に自然であったため, なにもカッコつけて変な仮名遣をしているのではない. しかし時が経つにつれ, だんだん発音が違うものになっていき, 昔は違う発音だったものが同じ発音になったり, 別の音ができたり音が消失したりして, 混乱が生じる. そこである語をどう書くか取り決めをする必要が生じる. さういふ意識が生じる前は綴り方そのものがなんでもよいので, 時とともに移りかはり, 個人の裁量で諸々の綴り方になるだらう. そこには正しい綴り方というものはない. 正書法はそれとは違って通時的, 地域的, 個人的に様々な変異がある綴り方に対して, 混乱を避けるために規範を提供するものである. もっと単純化すれば, 正書法は音を文字で示すための規範ではなくて, 語を文字で書く場合の規範なのである. 正書法を制定し遵守しはじめた時に, フランス人が自分が用いている語がフランス語であることに目覚めたと云へやう.

最初にフランス語の歴史をレビューする. ローマ帝国 (西) が崩壊し, 書き言葉としてのラテン語を支持する政治基盤が雲隠する前から口語としてのラテン語は地域化していった (俗ラテン語化とふ). これが後にイタリア諸方言, イスパニア語, ポルトガル語, フランス語になっていくのであるが, それぞれの言語で, 口語を文字表記する際には, 当然ながら表音的に綴られていった. 俗ラテン語化の一般的特徴のひとつに音節の減少があるが, フランス語ではそれが特に著しかった. 中世には, 音声上の収斂 (convergence) により, ワインの vin, 20 の vignt, veni (来る) の過去形 vint は同じ発音になってしまい, 全て, uin と綴られていた (ローマ時代は u と v はもともとと同じ文字だった. 中世に子音を v, 母音を u と書きわけるようになった). このように当時のフランス語は一音節か二音節の似たような音が並ぶ語ばかりに収斂していた. つまり同音異義語ばかりになってしまったのである.

話し言葉は, 会話の文脈から対手が何を (同音異義語の中でどれを) 言っているのか理解できる. 会話に占める言葉がコミュニケーションに果す役割は 30% 程度しかないのである. あとの 70% は言葉以外のものが担っている. しかし, 書き言葉はまったく異なる. 書き言葉は書かれたものだけが頼りである. 口語に比べて著しく同音異義語の弁別がわるい. それは日本語で考えても同じで, 口語で漢語ばかり連発し

でも大体通じる(あるいは通じた気がお互いする)。しかし文章で漢語を、たとえば半角カナで書くと文章の長さは変わらないが著しく読みにくくなる。それだけ弁別可能な特徴が減るためである。フランス語もそれと同じで音節が脱落した語からなる文は元の語に比べて文字数自体は少なくなっているのに、読みづらいものになる。それは視認に有用な弁別要素が減じたためである。

そこで文章を読みやすいものにするために、逆説的にわざと語を冗長にする必要があった。語を冗長する時に、語源にかなった子音を付加することにした。たとえば、vin(来るの過去形) ラテン語では viginti だったので、vingt と書くことにした。これがフランス正書法の起りである。このように、フランス語の語彙の多くはラテン語の語が単純に文字数が減少することによって成立したのではなくて、一旦、表音的に絶対必要な最低の文字数まで減じた後、可読性のため文字が増加されたのである。また写本業は一行いくらずで支払われていたために、語を長くすることに執着したことも、文字数の増加に貢献した。

可読性を増すためには、語源に関係のない文字も付加された。たとえば uile(ville 町) と uile(英 oil), uilt(il vit で彼は生きる) と uit(英 eight) のような同じ発音の語同士を区別するため uile に無音の h を加へて huile, uit に無音の h を加へて huit のようにした。これらの h はもともと(ラテン語にも)存在しなかったが弁別のために付加されたのである。

フランスの綴り字改革とその失敗の例に ph を f にするという案がある。現在のフランス語や多くのヨーロッパの言語では ph と f は同じ音価を担っている。ph はもともとのギリシャ語では p の帯気音で、f とは関係がなかった。また th と t もフランス語では同じ音価であるが、th もギリシャ語では t の帯気音であった。このように同じ音価の音は同じ綴り字にすべし、というのは表音主義的綴り方では当然のことである。たとえば現代仮名遣いでは、「わいうえお」と発音される「はひふへほ」は助詞の「は」以外「わいうえお」と綴られる(現代仮名遣いは表音主義を標榜しながら完全に表音主義にはなれなかった。「そういう」を「そーゆー」と綴ることは表音的かもしれないが現代仮名遣いには反する)。話がそれだが、フランス人はこの表音的に綴り字を頑強に拒んだ。

フランス人がどうしてこうまで綴り字改革に反対するのは、もとの綴り字を改めることでローマ・ギリシャ文明から遠くなり、洗練されていないように感じるからであると Walter (1994) は分析している。私も大学でしかラテン語とギリシャ語の勉強はしていなかったが、後にイタリア語を学んでたとえば foto(photo) と綴るのを見るとなんとも野暮ったい感じがしたものである。もっとも英語化されたギリシャ語・ラテン語に接しているだけでもイタリア語の綴り方は野暮ったく感じるだろう(但し、私自身はイタリア語は大好きである。念のため)。

フランスで開催される綴り字選手権(1992)に出場した学生へのアンケート(Walter, 1994)によれば、ミスが最も多かったグループでさえ、現在のフランス語の綴り字に魅力を感じていて、自分たちを苦しめている正書法を支持し、綴り字改革には反対している、という結果が得られている。もっとも選手権に出るような学生はもとから現行の綴り字に対するシンパであるかもしれないからなんとも言えない。たとえばもし歴史的仮名遣(復古仮名遣)コンテストがあれば出場する人は、私がそうである

ように歴史的假名遣支持者であろうし, だとしたら, たとえ成績が悪くても支持は変わらないし, 現代假名遣いには反対するだろう. さういうことは応募した時点でだいたい定まっている. 綴り字選手権が強制的に実施される試験であれば, 支持者の層が厚いという結論は妥当かもしれないが, Walter (1994) の簡単な紹介では選手権の詳細についてはよくわからなかったので, この結果は私には考察不可能であった.

フランス語の綴り字改革の歴史. 半数以上の単語は 16 世紀以降, 一度は綴り方が変更になっている. 5 万語級の辞書のうち 5 語に 1 語は 2 種類以上の綴り方がある. lis と lys (百合), tanin と tannin, alèse と alaise (防水), mille-feuille と millefeuille (ミルフィーユ) のように, 古い綴り方がフランス語の誕生以降ずっと同じであったわけではなく, 変遷にもそれなりの歴史がある.

とはいえ, ここ 100 年での綴り字改革はほとんど失敗した.

- 1901 寛容の布告 無視される
- 1905 メイエ/ブリュノの計画 拒絶された.
- 1940 ダムレットの提案 計画倒れて実施されず.
- 1948 ペルノ=ブリュノ報告書 公表されず.
- 1952 ベレの計画(その一) 没になる.
- 1965 ベレの計画(その二) 反対的な報道キャンペーンで潰える.
- 1973 フランス語国際評議会報告書 失敗
- 1977 1901 と同じ内容.
- 1990 ペレ計画のやりなおし. 縮小版.

長年の綴り字改革の中で達成されたのは eaux 等の語末の x の廃止と二重子音を単一子音にすることくらいであった.

これらの綴り字改革は, 非常に不規則なものの僅かな修正や面倒で綴りのうち明らかに不都合なものに対するいくつかの修正でしかないのにフランス人は冷静さと分別をなくして反対してきた. その一つは語源を失う綴り字は反対だという意見がある. ただし, この意見は現行の綴り字には語源に反した綴り方も多いという事実を認識していない. poid(重さ)の d(発音しない)が語源的な綴り方ではない. ラテン語では重さは pensum である. dompter(抑える)の p も語源のラテン語の domitare とは関係がない. それでも反対派はこれらの黙字を落すことに反対している.

綴り方戦争

- 1988 小学校教師の 90% は綴り字改革に賛成である.
- 1989-90 改革に反対するジャーナリズム.
(文字数=原稿料が減ることへの恐れ? 註)
- 1990 改革に対する Académie française の支持.
首相の絶賛. 官報に修正案の公表.
- 1991 ジャーナリストたちのネガティブキャンペーン (改革反対運動)

註: 日本では新聞は漢字制限に積極的に賛成していた. 揃えるべき活字が減らせるため, 文字数は変わらない. むしろ仮名書きするので増えることがある (珪藻=>ケイソウ).

ph の音価は f と同じで, ギリシャ語起源の語に使われると考えられている。確かに純正の *philosophí* もあるが, アラビア語やペルシャ語の f の翻字に ph を宛てたものもある (*netphar*, 睡蓮)。この現象はギリシャ風でかつこよく見えるからかもしれない。たとえば, 旧仮名風に現代人あるいは江戸時代の人 (江戸時代には古典教育を受けた人でないと定家假名遣ができない) が「いとしひ」と書くのに似た現象である。形容詞の連体形の「いとしき」のイ音便なので「ひ」ではなく, 「いとしい」が正しい。*netphar* の例も, よく知らないで外国語だから f は ph だろうということで ph があてられたのかもしれない (外国語=ギリシャ語のような短絡した図式? 日本人の多くにも外国語=英語 (アメリカ英語), 世界=アメリカという短絡な図式がある。アメリカ人はアメリカ=世界と思っているのかもしれない)。

ともかく綴り方戦争は互いに対手の言い分に耳を貸そうとしない宗教戦争の様相を呈していた。綴り方論議はどうしていつも宗教戦争になってしまうのだろうか。最近の日本では「現代仮名使い対歴史的仮名遣」論争があり, 「ヘボン風綴り方対日本風綴り方」論争があった。それらの論争は学問的には収束, 乃至ある一定の方向性を打ちだすことはできた。たとえば, 「現代仮名使い」や「ヘボン式ローマ字」は表記として破綻が指摘され学問的には論破されているものの, 現実問題として一向に解決していない。綴り方問題は学術的な問題である一方, なにがその国で正しい言葉遣ひかを規定する極めて政治的な問題であるからあらうか。あるいは, ローマ時代にキケロが (俗) ラテン語の乱れを嘆いたやうに, 言語というのは学問的完成度や美しさとは別に, 勝手に乱れていくのが自然な状態だからであらうか⁷⁰。

綴りと言語を混同してはならない。綴りは衣服であるが, 同時に装飾でもある (Walter, 1994)。

IX. 9 正書法論争の特徴

正書法論争は大抵の場合, 感情的論争に発展しやすい。冷静な議論はかなり乏しく, 正書法として制定する際には, 一種の政争と化す。フランスの綴り方改革や, 日本のローマ字論, 仮名遣論争で見られるやうに, 正書法論争は一種の宗教戦争になってしまう。この論争の特徴のひとつとして, ともかく名称に固執することがあげられる。相手の主張するシステムに印象の悪い名称を与えて (レッテル張り, Stigma) 貶すことは, 一般的な対論のルールとしては論外だが, 自分の主張するシステムに芳名を与えて, なんとなくよさげに見せることはよくある。要するに印象論争になってしまって, これでは広告と違はない。

たとへば, ヘボン式は標準式と自称してゐた。日本式も, 「このローマ字こそ如何にも日本」といふ印象をあたへてよくない, といふ指摘をヘボン式論者から受けてゐた。第二次世界大戦敗戦後は, 標準式とふ名称よりはヘボン式のほうが占領軍に

⁷⁰ キケロの理想どおりだったら, 今ごろフランス語もイタリア語もスペイン語もポルトガル語もなかったらう。これらの言語はキケロの理想からみれば至るところに不整合のある非論理的な言語なのであるが。

よい印象を与える。歴史的假名遣(復古假名遣)を支持する人たちは自分たちのシステムを正假名⁷¹と呼ぶ。これらの名称はいづれも僭称といつてもよい。

このように自分たちの提唱するシステムが正しく、正書法として認めらえるべき、と信じてゐるなら、このやうに、自分のシステムにより印象をもつやうに名付けるのは当然のことかもしれない。しかし、それを認めると(いや、認めなくても)、正書法論争は、正義対正義の争ひになってしまう。正義対正義として争つてゐる限りは、宗教戦争になってしまうのは当然の帰結である。

正義の反対は悪なんかではない。もう一つの正義だ。

かといって正書法はいらないかといふと、そうは問屋が卸さない。実際問題としては取り決めがないと却つて多くの人が混乱してしまふ。正書法は真面目に付き合ふと宗教戦争の泥沼に陥り、なんでもいいや、読めればいいや、といつてみると、そのうち得体の知れない文字列になってしまう。ある程度つかず離れず、のんびり鷹揚に付き合ふほうがよいやうだ。

IX. 10 韓国語のローマ字表記

韓国の人のローマ字による人名表記で、Yi さん、Rhi さん、Lee さんといふのをご存じだらうか？ これらは全ては漢字で書くと「李さん」で、日本語でカナ表記すれば「イーさん」である人のローマ字表記である。韓国ではローマ字表記がいくつかある。最後の Lee さんは英米人風(英語風ではない)に綴つてゐる(他に朴を Park など)ので、ローマ字表記法としては考察の対象外である(全ての人名が英米人風に表記できるわけではないし、体系的な表記法がないため)が、それ以外の表記法は、ローマ字とハングルの不整合による産物である。

アルファベットは表音文字であるが、ハングルも表音文字である。お互ひ表音文字同士がから、ハングルのローマ字表記するのは簡単だと一見思ひがちであるが、実は、これは大変に難しい。どの表音文字を使ふ言語でも完全な表音的表記法ではない。といふのは、どこの言語でも表記を決めてからしばらくの間は表記と発音が一致してゐるが、しばらくたつと、表記を発音がずれてくるためだ。韓国語でも、ハングルの綴りと実際の発音が異なるトークンがいくつかある。ハングルのアルファベットに逐次翻字した場合、アルファベットの綴り字から連想する発音と実際の発

⁷¹ただし、歴史的假名遣といふ名称は正鵠を射る名ではなく、歴史のなにを指してゐるのか不明確である。歴史時代(ここでは平安時代以降に限定する)を通じて規範として通用した假名遣は定家假名遣であつて、現在、歴史的假名遣とされてゐるのは契沖の実証的文獻調査が発端である。かといつてこれを契沖假名遣といふこともできない。なぜなら後の研究の結果、契沖の説は修正を受けてゐるためである。人名を関する名称の場合は、修正を受けた時に、名が指す先が前のか後のか、曖昧になる。契沖がある年に提唱した個々の假名遣を指すのか、別の年に自説に修正を加へて発表した假名遣のことか、それらの最終版か、契沖が提唱した假名遣の理念を指すのか。正假名は僭称だから論争での名称には使へない(まだ整假名といふ方がまし、整つたといふ意味で)が舊假名といふのも「戦前」と同じく曖昧な名称なので使へない。京では応仁の亂の前が戦前である。今だって次の戦争の戦前なのだ。筆者は復古假名遣が適当な名称と考へてゐる(なにを復古したのか曖昧さが残るが)。個人的には悠久の日本語を感じさせる「としへの假名遣」といふ呼称が好きだが、僭称としての批判があるであらうことも承知してゐる。

音が異なってしまうのだ。韓国語では、日本式の解釈規則 (si はシ等) よりももっと複雑な解釈規則を必要とする。

たとへば、韓国は韓国語ではハングルをローマ字で示すと han-kuk(翻字法は ISO/TR 11941 による) であるが、韓国語は han-kuk-mal と書いて、実際の発音を表記すると han-kung-mal のやうになる。mal の m の影響で、パッチムの k が鼻音になってゐる。真理は cin-ri だが発音にしたがふと cil-ri となる。これは ri の r による逆行同化である。ハングルの綴はいずれも前者である。日本語で云へば、札幌をサツホロ/satu-horo を書いて実際には sap-poro と読むやうなものだが、日本語の場合は漢字にかくれて tu-h > p-p の変化は見えないやうになってゐる。ハングルでは全部表音文字で書くためにこのやうな変化のうち変化前(翻字)か変化後(発音)を表記するかで、だいぶ異なる。発音どほりに書くと形の整合性が崩れ、形の整合性を保たうとすると表記と発音が乖離し、解釈規則を必要とする⁷²。これはアルファベットと互換性のある単音文字を使用する言語(たとへばキリル文字やギリシャ文字)ではよくみられる。たとへば現代ギリシャ語では γγ は [gg] ではなくて [ŋg] となり、ντ は語頭の時は [d], 語中のときは [d], [nd], [nt] と発音を変へる。これをどうローマ字で表現するか。それが問題なのである。

話がそれてしまった。韓国語固有の音韻体系を表記するのがハングルであつて、それをアルファベットに転写した場合に、韓国語固有の音韻体系がアルファベットに載ってしまふが、それがアルファベットだけ見てみると違和感がある。それは丁度、日本式ローマ字で ti をチとするのに違和感があるのに近い。だからヘボン式のやうに、アルファベットの音韻体系(しばしばそれは英語を模範としてゐるが)にあはせて表記法を改変することもある。

一例をあげやう。金キムさんは、しばしば Kim と綴られるが、韓国語では、カ行 [k-] とガ行 [g-] は異音の関係にあつて、音韻としては区別されない。語頭では無声音のカ行になり、語中では有声音のガ行になる。金海金氏といふ言葉がある。これは或る金といふ姓の本貫(墓所の所在, 出身地)が金海(釜山の近く)にあることを示してゐる(日本でいふ清和源氏といふのに概念的には近いが、関係ないので省略する)。この金氏の金は語中にあるので、Gim になる。語頭では Kim だった人が語中では Gim になるのである。Kim と Gim のやうに発音に準拠した場合、語の同一性が保てなくなる(同様に日本語の連濁現象も語の同一性を阻害してゐる)。勿論、ハングルでは語中でも語頭でも同じ表記である。同一性を保つために、語頭でも Gim とすると、金さんがギムさんになってしまつて、これも都合がわるい(ただし、韓国語話者にとっては k/g などの無声/有声音はその場その場で読みかへるのでどちらでも理解可能である)。語中でも Kim にするのも、しっくりこない。

⁷²日本語も「一本、二本、三本」と漢字で表記してゐる分には形の整合性があるが、発音を表記すると、「いっぽん」「にほん」「さんぽん」とホンが前の言葉によって、p, h, b と順次変化する。

IX. 11 固有名詞ローマ字の分類

IX. 11.1 エンドニムとエクソニム

エンドニム (endonym) は、現地語・現地人が用ゐてゐる名称である。たいていは、現地由来であるが現地由来かどうかよりも、現地人が受けいれてゐるかどうかが決め手となる。たとへば地名の America は現地人が付けた名称ではないが、現在では現地人が受けいれてゐる名称である⁷³。もうひとつはエクソニム (exonym) といって、固有名に対してまったく公式でないところ (言語圏, 社会, 機関) があたへた呼称のことである。英語でいへば慣用名 (conventional name) ともいふ。同じラテン文字圏同士であれば、相手のエンドニムの綴をそのまま使へばよい筈であるが、実際はさうではない。ローマ字圏同士でも言ひ替へを行ふことがある。オランダ人が Jan(ヤン) と名乗ってゐても慣用名では John になる。もともと、人名の場合はかなり本人の申告するエンドニムが守られるが、歴史上の人物だとエクソニムが横行する。フランク王国 (現在のフランスとドイツ西部) のフランス語では Charlemagne または Charles le Grand であるがドイツ語では Karl der Groß となる。ご本人はラテン語文芸を推奨してゐたので、ラテン語で Carolus Magnus といふのも正当かもしれない。まったく無関係な英語でも Charles the Great といふエクソニムをもつてゐる。フランク王国はゲルマン人の統治であつたが、国民のほとんどはガリア人 (ローマ化したケルト人) だつた。公人になると本人の申告とは別にエクソニムが通用する。地名は歴史上の人物よりも公のものなので、地名の場合はもっとエクソニムが幅を聞かす。日本はローマ字表記すれば Nippon または Nihon だが、英語の慣用名では Japan になる。イタリア語では Giappone である。ただし、次のやうな場合はエクソニムとは云はない。英語ではパリを Paris と綴るが発音は s を発音する。パリジャンは語末の s を黙字とするので英語とは違ふが綴り自体は、英仏ともに Paris と同じである。これはエクソニムではない。同様に、東京と「トーキョー」と発音しても、北京語の漢字音で発音 (あへてカナ書きすればトンゲチング) しても、同じ漢字で書いてゐる限りエクソニムではない。

例を続ける。コペンハーゲンエンドニムで København だが、エクソニムとして独語では Kopenhagen, スエーデンでは Köpenhamn, 英語では Copenhagen となる。かういふ例はいろいろあつて、エンドニムの伊語で Firenze はエクソニムの英語では Florence となる。エンドニムのチェコ語の Praha(プラハ) は英語仏語では Prague となる。ドイツ語では Prag, オランダ語では Praag となる。ドイツ語で München は英語では Munich だが、伊語ではなんと Monaco である。モナコ公国と同じになつてしまふので、ドイツのモナコはバイエルンのモナコ Monaco di Baviera, モナコ公国はモナコ公国 Principato di Monaco と表記する。

このやうなエクソニムの存在してゐる理由は大きく3つある。一つは支配の歴史や政治的理由による。もう一つは発音の問題である。自分のことばにない音韻は発音できない。たとへばカイロは英語では Cairo と綴るが、現地のアラビア語ではロー

⁷³このことからわかるやうに、エンドニムかどうかは現在のそこにゐる人だけで決定されてしまふ。そのため歴史を通じて一貫するものではない。もし America 人が America といふ名称を受けいれなくなると America はエンドニムではなくなる

マ字翻字では al Qāhirah(Q は軟口蓋破裂音と示す) であるが英語母語の人間は正確には発音できない。それで簡略化した綴方の Cairo になったのである。第三の理由は、複数の言語にまたがって存在してある場合に、それぞれが自分たちのエンドニムを用ゐるが、それが別の言語の人からするとエキソニムになるといふ具合である。ベルギーにはオランダ語系のフラマン語とフランス語系のワロン語が共存し、地名もフラマン語の地名とワロン語の地名を二種類ある。

エキソニムは日常使ふ言語にとっては大変重宝する。たとへば、カイロに向ふ、あるいはカイロを経由する旅行者がいちいち al Qāhirah といふ綴り方(書記体系)を覚えて、発音(音韻体系)を学習することは考へにくいし、また、さうしろといつても、通りすがりの人にさやうなことができるものではない。したがって空港でも正規のローマ字の al Qāhirah ではなく、英語の Cairo が用ゐられる。ただし、この方法は実際、少しでも深く相手の言語とつきあふとすぐに破綻する方法でもある。

IX. 11.2 転写と翻字

外国の固有名を自分の言語で用ゐる時(輸入)、あるいは自分の言語の固有名を外国にむけて発信するときにはある種の翻訳が必要にある。輸入においては日本の場合は外国の固有名はカタカナになほすし、中国の場合は、適当な漢字で音訳する。逆に発信の時は、日本がラテン文字圏に発信する場合、ローマ字化して発信する。意外なことに同じラテン文字圏同士でも翻訳(変換)の問題がある。ローマ字変換する時に、もとのエンドニムの形を保つやうに翻訳するか、それとも発音を保つやうに翻訳するかにわかれる。両方とも満す場合はかなり限られる。ここではローマ字変換の問題についてとりあげある。

ローマ字変換のうち最初に試みられるものが転写(transcription)である。これは相手の言語を表音的に自国の書記系に変換するのである。探検家や魏志倭人伝(魏書東夷伝倭人条)にあるやうに、相手が云ふことを自分が聞こへたままに書くのである。相手の言語のことをまったく知らない場合でも、とにかく云つてゐることを書きとめればよいのだから、もっとも簡単な方法といへる。この方法の利点は、上の例の探検家や史書官と同じ言語を話す人間ならば誰でも同じやうに発音できることである。ただし、それは、その探検家等の言語の書記体系が完全に表音的である場合に限られる。たとへば英語では c はいろいろ発音される。探検家が [tʃ] のつもりで綴っても読む人は [s] と思ふかもしれない。また、発音を示すといふ利点は同時に欠点にもなる。Kadmon (1997) の例で示す。イスラエルはヘブライ文字を使用してをり、ラテン文字圏の人間にはなじみが薄い。イスラエルには [ˈxɛləts](あへてカナにするとヘレッツ) といふ発音をもつ地名がある。ドイツから訪れる観光客がもっとも多く、彼等のためにローマ字変換すると Chelez となり、これはかなりよく発音を転写してゐる。しかしこの綴り方は英語ではチェレッツとなつてしまふ。現在の英語には [x] がいないためである⁷⁴。それで英語用には、[x] にもっとも近い [h] で代用する。また、語尾は z だと [dz] か [ts] か曖昧なので ts に変へる。かくして Helets となる。フランス語では Chelez は [ʃele] となるだらう。ch は英語の sh と同じで、語尾

⁷⁴古英語にはあった。

は発音しないのがフランス語流である。フランス語で近い発音になるやうに書くと Rrelete となるだらうか。もし、それぞれの言語ごとに発音できるやうな綴り方を地図にしてゐたらどうなるだらう。また、それぞれを看板や標識に書くと、どうなるだらうか。標識には3言語以上で書いてはいけないといふルールがあつて、それぞれの言語で書くといふのはできない相談だが、今それを無視すると、標識は字でいっぱいになって、だいたいがラテン文字ばかりになるので、どれが自分の言語で書いてあるのか探してゐるうちに通りすぎてしまふだらう。この問題を解決するのは容易ではない。エキソニムにしても、それぞれの言語ごとにエキソニムがあるといふことはかはらない、また、マイナーな地名だとエキソニムがないことが普通である。京都は知名度が高いので Kyoto と長音符なしでも通じるが、左京区はマイナーなので Sakyōku としないと発音が表記できない。発音を伝えるといふことについても相手の言語にない音韻はどうやっても伝えられないといふ欠点ももつ。同じラテン文字圏でアルファベットの音価が微妙に異なる場合でも発音を表すためには転写しなければいけないことがある。スペイン語では、b は [β] の発音なので、Habana と Córdoba を転写したならば、Havana とか Cordova になってしまう。同じラテン文字を使つてゐるのに繁雑さはなくなつてゐない。最後に、転写は不可逆であることを強調したい。このことは転写からもとの言語の文字に再構成したい時に大きな障碍となる。カナ転写でトラックとした場合、もう元の Track だか Truck には戻れないのである。これは日本語だけでなく、ローマ字(ラテン文字)圏同士でも同じである。たとへば、Chichester といふ英国イングランドの地名をドイツ語に転写すると Tschitschiester となるだらう。これで発音はかなり近似できてゐる。しかし、もとのイングランドの地名を復元しやうとすると、Tshitshiester といふのも理論的にはありえる。英国スコットランドの首府 Edinburgh(エジンバラ)を Edinbere に転写できるかもしれないが、もう edinburgh の gh は蘇えられない。このため、転写は地名変換の「科学的」方法ではなく、「通俗的」方法であるといふ指摘を Kadmon (1997) はしてゐる。地名や固有名をてっとり速く自分の言語に置き換へるには十分だが、ちゃんと分析すると科学的な批判には耐へないものである。また、地名の場合、翻訳できるところは翻訳し(ロシア語ではソ連は СССР であるが英語では USSR と意味を翻訳してゐた)、知名度の高い地名はエキソニムで、マイナーな地名は転写で、時々どうしようもない時は次に述べる翻字方式が使用されてゐる。また、どこまでが知名度の高い名前でもどこからがマイナーなのかは各自の主観による。ある人たちにとっては有名でも、別の人には無名な地名といふのはよくある。あるマイナーな地名が有名になった場合、それがエキソニムに変化することさへある。つまり、この表記法には統一性はない。したがって、学術的に利用しようとした場合には問題になる。

翻字(transliteration)は文字対文字の置き換えである。端的に云ふと、京都(きょうと)と Kyōto と長音符をつけるのが転写で、Kyouto とカナをローマ字に変換するのが翻字である。注意したいのは転写は異なる言語間で行はれる方法だが、翻字は異なる文字間で行はれる方法である。日本語は文字として漢字、平假名、片假名、ローマ字にギリシャ文字(例、プラス α)まで使はれるが、言語の多くは単一の文字体系を使用してゐる。フランスの地名を日本語でカナ書きすることは文字は違ふが

音に従ひ文字に従ふわけではないので転写だが, 日本語のローマ字をギリシャ文字で綴りなほすことは翻字である⁷⁵. 逆にギリシャ文字の文字列を文字列としてラテン文字に置きかへたり, ルーン文字で書かれた文献を音ごとにではなく, 文字ごとにラテン文字に置き変へたり, キリル文字を音ではなく文字としてラテン文字に置きかへたりすることは翻字である. 翻字はこのやうに異なる文字体系への移植である. しかし, たとへば, チェコの Praha はローマ字なのでローマ字圏で使用する限り (例. 英語の文中においても) 翻字する必要はない, といふか英語に翻字するといふ概念自体がなりたたない. この考へ方では Chichester もドイツ語でそのまま使つてよい. København もローマ字なので英語においても København とすべきである. ここでは ø は英語の文字かどうかといふ問題は残るが, ラテン文字であるので, 「ある文字システム > 別の文字システム」が翻字であるといふ考へに立つ限り ø > oe のやうな翻字の必要はない.

翻字は完全な可逆性を目指してゐる (が, いつでも成功するとは限らない). 原理的には, もとの文字体系を知つてゐるものが翻字されたものを目にしたなら, 元の文字列を再構成できる. 翻字は音韻を示す文字の間で利用できる. カナのローマ字翻字で再構成できるのはカナまでで, そのカナが漢字を指していても漢字には至らない. つまり, 翻字は表音文字同士の間で適用できるのである. 一般的に翻字法ではエンドニムをできるだけ元の形で使用する. 翻字の保存的性格を考へるとそれは当然といへやう. 自分の言語の音韻にない音を示す文字も注音符を設けて翻字する. たとへば, ドイツ語には硬音 (hard voice) の g[g] はあるが軟音 (soft voice) の g[ɣ] (英語の giant の g) はない. そこで, 軟音の g を転写する際には, ɣ のやうに g に注音符をつけるのがそれである.

一般には注音符は意味がわからない⁷⁶ので書記から落ちてしまふことはしばしばである⁷⁷. ただし, 注音符がないと可逆性を維持できないため, 注音符の省略は翻字としての意味を著しく損ふ.

翻字では単音文字については単音文字の対照規則を用意する必要がある. 音節文字 (例. カナ) を単音文字 (例. ローマ字) については音節ごとに変換するのか一般的で, 音節をなさない「ッ」や「ウ」だけの翻字といふのはない. それは翻字ではなくて, IME 的な入力用のローマ字変換といへる.

翻字にも長所と短所があつて最大の長所は可逆性であり, 「科学的」方法とされる (Kadmon, 1997). 統一性や, もとの綴りから一意に変換できることも魅力である. また, 変換規則が音韻から独立してをり簡単なので計算機処理も容易である. このことは地図を複数の言語で表記する際に手間をずいぶん減らすことができる. 転写の場合はそれぞれの言語の音韻体系や書記体系を学ぶ必要があるが, 翻字の場合は表を準備するだけでよい. 翻字システムの欠点は注音符や“変なアルファベット (例. æ, ø, Ð, ç, č)”が一般の人にとって何の意味もないことが多く, 逆に一般の人のニー

⁷⁵そんなことが必要かどうかは別として. 例. ツジノ (TuZino) は τουΖηνο になる.

⁷⁶日本のローマ字で長音には ō や ô のやうに注音符をつける決まりがあるが, 鏡味氏のアンケートによると来日した欧米人の多くは注音符の意味を知らなかったらしい. ô はともかく ō は古英語でもラテン語でも古典ギリシャ語でも用ゐられてゐる長音符なのに... 古典教育を受けてゐないのか?

⁷⁷日本でも多くの場合, 京都は Kyōto でなく Kyoto となつて, 上線 (マクロン) が省略される (これは翻字でなく転写であるが).

ズはむしろ“らしい発音”を知ることにあるのに“らしい発音”は当該言語の音韻を学習しない限りわからないため, 「誰にとってもよいことだが, 誰にとっても十分ではない」といふことになってしまひがちである。

世の中には複数の翻字法があることが多いが(例, キリル文字は5種類くらゐのラテン文字翻字法がある(Tuzinoによる‘Transcription and Transliteration for the Cyrillic. 1p. online document’参照), どの翻字法を用ゐてゐるかで問題が発生することがある。そのため, 国連では, 単一ローマ字化の原則を推奨してゐる。これは大体において成功してゐるが, 時に対立が生じることがある。対立の根本的原因是は, 「ドナー原則」と「レシーバー原則」の対立である。「レシーバー原則」とは翻字先, たとへば日本のローマ字の例で云へばラテン文字圏側が自分たちにとって適切な変換規則を設定する権利があるといふものである。たとへば, 日本のローマ字で「カ」をrhと定義することは, どのラテン文字圏でも解釈できない規則であり, レシーバー原則に反してゐることになる。一方のドナー原則とは国連で第一義に認められてゐる原則であつて, 翻字元, 上の例でいへば日本が, 日本語のローマ字変換規則を設定する権利があるといふものである。仮にフランス人がシはchiでしょ, クはcou, オーはeauxでしょと提案したところで, それを最終的に決定する権利は日本が保持するといふことである。ドナー原則が第一に大切なのは云ふまでもないが, ドナー原則も上述のやうにあんまり突飛な主張の場合はレシーバー原則が優先される。したがつて, 次のやうな主張はレジェクトされる。

ある数学者の主張「数字がもっとも普遍的だから, カナはア行を 0n, カ行を 1n... とし, ア段を N1, イ段を N2... とすればよい, 濁音は3桁目にフラッグを立てる。撥音(ン)は 00 をする... フジサンは 63,132,31,00 となる」

ある数学者の主張2「数字がもっとも普遍的だから, アルファベットは A を 101, B を 102 として... a を 141, b を 142...」

このやうな例は計算機処理の規則としては有効でも人間が使ふ規則としては無効である⁷⁸。それに数字は文字に含まない文化(例, 英語)もある。数字が文字でないなら, 数字に変換することは翻字に該当すらしない。一般に西洋諸言語では数字への変換は文字の翻字とは見做されない。それは Encode(暗号化)である。

数字への翻字は, ほとんど考慮に値しない例だが, 真面目に考へても, レシーバー原則とドナー原則とはしばしば対立する。キリル文字では英語風 LC(Library of Congress) 式の Ш=sh, Ч=ch を提唱する英国米国のレシーバー原則と, ドナー原則を主張するロシア側の ъ, ѳ との間で対立してゐた。ロシアの主張は 1968 年に ISO では認められ ISO 9(1968) となつてゐた⁷⁹が, 英米は長らく, これを受け入れてこなかった。ISO 9 は ASCII と互換ではなく, ъ のやうな時は英字にない(LC 翻字では sh) を使用するが, 米国の LC 翻字は ASCII のサブセットで, ASCII だけでキリル

⁷⁸主張 2 は ASCII の表。

⁷⁹多くの場合, ISO は米国とは距離をとつた規格となつてゐる。例, 日本語のローマ字規則, 日本語キーボード(記号の配置は ISO) など。

文字を表現できる。LC 翻字はそのため、ASCII だけ用意すればいいので便利だが、再翻字した際に元に戻らない欠点がある。たとへば、LC の sh, ch の方法では、s+h, c+h と辨别できないと云ふ翻字規則として致命的な欠陥 (可逆性の喪失) を抱へてゐるのである。そのためか (?), 1987 年には英米はロシアの規則 (GOST1983⁸⁰) を受け入れた⁸¹。後にロシアの主張は発展し、1995 年には ISO 9 が改訂され、より可逆性に富む翻字になった ISO9 の 1995 年式と 1968 年式は、III (英語風翻字では shch) を s とするか sc とするか、拗音の IO (ju) と Я (ja) とを一文字で書くか二文字で書くかの違いがある。どちらも短かい方が 1995 式で他 30 文字は同じである。これにより sc といふ翻字に対して III Я なのか III なのかといふ曖昧さがなくなる。曖昧さの排除は科学的であるための基本である。

以上、Kadmon (1997) を踏まへて固有名のローマ字表記を解説したきた。彼は翻字の長所を強調してゐたが、最後にかう指摘する。「翻字システムは多く場合、学者によって考へ出されたものであることに言及しておきたい」。翻字システムは学者には受けがよく厳密性が高いものの、一見さんの外国人が使ふにはむづかしすぎる。同時に、同じ母語の人間にとってもそこまで厳密な綴り方は必要としてゐない場合も多い。次の例は地名ではなく人名だが、SF で有名なアシモフ (アジモフのはうが発音に近い表記) はロシア生まれで英名を Asimov と綴る。キリル文字では *Ozimov* であり、厳密翻字では Ozimov となるべきであるが、これは Asimov と違ってをり、翻字になってゐない。A と O の違いは、ロシア語ではアクセントのない o は a と発音するといふ規則があるためである。ロシア人名地名の語末の v を f として読むのは英語圏でも定着してゐるが、弱音の o を a と読むといふ解釈規則は英語話者のほとんどは知らないため、厳密翻字にすると名前の音がかなり違ってしまふ。また母音に夾まれた s は有声音の z になるので、わざわざ Azimov としなくていいし、逆にさうするより、Asimov のほうが英語として自然に見えるし、語末の v にロシアの香も残してエキゾチックに見える。以上は筆者の憶測だが、音をなるべく「らしく」伝へるといふ目的や、当該言語 (この場合は英語) として自然に見せる目的に反するため翻字は避けられることが多い。往々して翻字式は一般社会では主流になりえず、通用の規則が不明瞭が綴り方が使はれることが多い。科学的であるから、厳密であるからといって、かならずしも一般社会で有用だとは認識されないわけである。いづれにしても翻字システムが必ずしも実状にそったものではない可能があり、同じ翻字であっても、より「らしい」翻字システムに改良することはできる。

IX. 12 日本語におけるローマ字の分類

ローマ字の分類を試みる。ローマ字は表音的なものと表意 (表語) 的なものに大別できる。「ん」の m, n を区別するヘボン式 (もちろん長音はマクロンで示す) が、広く知られたローマ字綴りの中ではもっとも表音的な端成分に属する。もっとも表意

⁸⁰1968 年式 ISO 9 と同じ。

⁸¹といいながら、米国の図書館ではロシア語の本は従来どほり英語風翻字である (1997LC)。また、日本で公式の訓令式よりも我流ヘボン式が通用するのと同じで、ロシア人も固有名を英語風の LC 式やその我流で綴る傾向がある。これにはいろいろ理由はあるが、技術的に重要な理由に注音符は ASCII で表現できないことがある。多くの言語が翻字の際に ASCII に拘束されてゐる。

的なローマ字は翻字式の日本式ローマ字綴りであらう。タ行といふ音韻(つまり音の意味)を一律“t”で表すといふ点で表意主義であるからである。

表音的な端成分はまだ理論的には展開の余地がある。ヘボン式では明治時代には四ツ假名(じぢずづ)の音は収斂してゐるといふことで書きわけなかったが、表音主義に則るのならば、これらの音を書きわけなければいけない。もちろん、それは歴史的假名遣(復古假名遣)で「しじみ」と「ちぢみ」を書きわけてゐるのをローマ字で再現することではなく(それは翻字式の考へ方)、現在の発音に基づいて、音声学的に弁別できる(日本語話者が弁別できるといふことではない。日本語話者は普通「ん」の発音の違いは弁別できない)要素を弁別して記述するのが表音主義的ローマ字表記である。前に述べたやうにインドゾウとゾウのゾウは語としては同じゾウでも発音が違ふので、これを、zo と dzo といふ風に書きわけるのである。日本人は普段、日本語の音韻に従って音を認識してゐるので、このやうな音の違いは普通わからない。違いを知るためには音声学を修めるか複数の外国語をマスターする必要がある。つまり普通の日本人にはできない方法である。この表記は日本語には関心がなく、単に発音ができればよいといふ人や、日本語に興味があつて、しかも発音を細かく分析したいといふ人に向いた記述方法である。音声学的表記法といつてもいいだらう。

逆に、この方法は同じ語でも発音が違ふのなら書きわけるので、語や意味を伝えること、つまりコミュニケーションには向いてゐない。京都の人が自分は七条をヒチジョウと読んでゐるからといつて hichijou と書き、江戸っ子が自分は「火が強かつた」をシガツヨカッタ(四月八日)と読んでゐるからといつて shigatsuyokatta と書くのは、音を伝えることに貢献してゐるが意味は伝はらなくなる。

翻字ローマ字はカナ表記の問題に必ず直面する。なぜなら、翻字ローマ字はそのベースになつてゐる假名遣の短所長所をひきづるためである。「逢坂」と「大坂」の話題で述べたやうに、現代假名遣には重大な欠陥があり、たとへば長音を假名で表記する時にシステムとしておかしい挙動を示す。オの長音以外にも「オカーサン」は「おかあさん」なのに経済「ケーザイ」は「けえざい」ではなく「けいざい」になるなど表記法に一貫性がない上に、気持ちの綱である絆は「きずな」なのに、手の綱である手綱は「たづな」といふやう中途半端な例外規則がある。

この中途半端な假名遣いが、ローマ字綴りに反映されてしまふ。たとへば大地は「だいち」daiti だが地震は「じしん」zisin で、中学は tyuugaku だが世界中は sekaizyuu と、チが濁音になるとジになる。現代假名遣いにヂヅは存在しないかといふと、鼻血は「はなぢ」(表音的にはハナジ)である。「絆」は kizuna で、「手綱」は taduna になつてしまふ。「ぢ」にするか「じ」にするか歴史的假名遣(復古假名遣)においては意味から決定され、実際の発音は二の次であるが、現代假名使いにおいては役所(国語審議会)で「その都度、個別に決定する」わけである。

新日本式：なほ、この四ツ假名の濁音を表音的に自然に見えるやうにチツを ci, cu としたのが新日本式である。日本語には連濁といふものがあり、清音だった語に他の語が結合すると清音が濁音に変化する現象であ

る。例を示す。

血(ち)/ti/ 鼻血(はなじ/はなぢ) /hanazi/hanadi/
死(し)/si/ 犬死(いぬじに) /inuzini/

si が zi に変化するのには普通に理解できるが, ti が濁って zi になるのがどうにも解せない。服部氏は思ったのが発端である。これを表記として合理的に解決するために彼は, ti, tu をそれぞれ ci, cu として表記することを提案した。さすれば ci が zi, cu が zu に変化するのだから心情として納得しやすいと考えたやうだ。

血(ち) ci 鼻血(はなじ/はなぢ) hanazi
死(し) si 犬死(いぬじに) inuzini

私見では, この表記は現代語の音韻と音声表記の折衷案としては有効と認める⁸²が, 正書法としては容認できない。四ツ假名が変になるのは連濁以外にもある。たとへば「脅す/odosu/」の同語源の語で「怖じる/oziru/odiru/」, 「出る/deru/」と「出づ/izu/izu」のやうにダ行の活用に zi がはいつてくる。服部氏は濁音の問題の所在が清音にあると思ってチツを変更したのだが, それが間違いではないか。濁音の問題は清音の側にあるのではなくて, 濁音それ自身にあるといふのが私の見解である。ザ行は z で表記してゐて, 音声学的にも [z](ジは除く) と多くの日本人は思つてゐるが, 実際には [ʒ] であつたり [dʒ] であつたりとガ行([g] と [ŋ]) のやうに音声学的には安定しない行である。むしろ出現頻度からすれば [dʒ] のほうが主流であつて, 表記としては z ではなく dz にすることもできる。服部氏はチツを変更するのではなくて, ジズのはうを dzi, dzu と—あるいはザ行全部を dz に—変更すべきだつたかもしれない。さすれば,

血(ち) ti 鼻血(はなじ/はなぢ) hanadzi
死(し) si 犬死(いぬじに) inudzini

となつて表記の上では新日本式と同等(?)の心情的納得が得られると思ふ。ただし, 例外の設定は理論的に整合性の高い日本式の美点のひとつを損ふ。もちろん, ザ行全てを dz に変更することもあり得るが, ただし日本式のよさの一つは幹になる子音が一字として簡潔に示されることにあるから二字にすることも美点の一つが損なはれる。二字表記は dz に限らず, tsu が「トス t・su」なのか「ツ ts」なのかはつきりしなくなる欠点と同じ欠点をもつ⁸³。また, z はもともとのギリシャ語の音価として [z] といふよりは [dʒ] または [ʒd] であつて, z=[z] といふほうが錯覚なの

⁸²同様にヘボン式は現代語の音声学的表記の土台(拡張が必要)として有効であることを認める

⁸³ゆゑに介音 y, w はできるならないほうがよいが, それらは半母音字なので ts, dz, st, ps, pf よりは弊害が小さい

だから、一々音価を替へることなく、ザ行は表記としてはzのまま、音素としては[z],[dz]からなると示すのみで事たりると考へる。

現代仮名遣いは、表音的仮名遣い風であるが厳密に表音的仮名遣いではなく(もし完全に表音主義であれば「日本語わ、こーゆーこと」になってゐたであらう)、表語的な例外がある。しかも表語主義的には破綻してゐる。翻字ローマ字は表語表意主義に基いてゐるのであり、その主義を更に強めるためには同じ表語主義の復古仮名遣(歴史的仮名遣)を翻字の規範にすることになるだらう。しかし、復古仮名遣には困難が多い。復古仮名遣は整然と日本語の文法規則を反映してゐるものの、現代人は弁別してゐない音を弁別した綴り方になってをり、正しい仮名遣かどうかを確認するためには辞書が必要になる不便さがある。最初から教育で復古仮名遣を教へておけばたいした面倒ではないが、戦後教育で育った人には敷居が高い。

このローマ字システムは田中館愛橘の云ふ「萬葉論」に該当するとふ批判もあるかもしれないが、少なくとも和語の復古仮名遣に関する限り、「萬葉論」に陥いることはない。それは文献資料から解明し得る総体⁸⁴としての日本語の最遡及点に位置してゐるためである。つまり、これ以上は「語源主義」・「萬葉論」的に追求することができないといふことを意味してをり、表記に曖昧さはない。しかも現代の発音体系・音韻に照らしても、理解不可能なほどの逸脱はない。

和語の復古仮名遣は実際、取り組んでみるとたいて困難ではない。やっかいなのは字音仮名遣(当時の漢字の音のカナ表記)である。地名人名はたいて漢字で書かれてゐるので、そのローマ字表記では字音仮名遣は必須になる。これは簡単な辞書か表があれば解決するが、ローマ字表記する際に、古代の漢字音をいちいち調べるといふ手間があり、しかもそれが現代の我々にとって実利的な意味はない⁸⁵といふ実用的な欠点がある。実利的な意味がないからこそ、逆に古代の日本人との連続性を確保できるのである。実利絶対主義においては文化はない。表語表意主義的ローマ字論の理論的極北として歴史的仮名遣翻字(復古仮名遣翻字)の日本式ローマ字が存在することは明記を要する。

IX. 13 秩父丸と群馬

戦前の話。秩父丸事件といふのがある。日本の船に秩父丸といふのがあった。北米航路の豪華客船。竣工は1930年、これをヘボン式ローマ字でChichibu-maruと表記してゐたが、1938年に内閣訓示にしたがひ、訓令式(近衛)のTitibu-maruに表記を改めたところ、英語の俗語で乳首をtitを示すことを指摘され、みっともないので、鎌倉丸に変へたといふ話(正確には、もともと鎌倉丸はあったので、第二鎌倉丸。ただし第二は省略・忘れられてゐることが多い)。ヘボン式支持者のなかには、これをもって日本式・訓令式系統を嗤ふタネにすることが多い。

⁸⁴総体とふは言語を用ふる上での完全性を備へてゐることを示す。たとへば上古の音韻については今もって部分的に理解できてゐるに過ぎず、解明された語は僅かで、しかも異論(8母音系 vs 4母音系等)があり言語として用ふるだけの整備状況にない

⁸⁵和語の場合は語のなりたち(語源や母音交替)について理解が深まるとふ利点がある。それは云へば字音についても漢字音韻への理解が強まる利点はある。

たしかに、もともとの Chichi はフランス語で「上品な」といふ意味がある。これは英語ではないけれど英語ではカクテルの名前になってゐるので、多少は理解できる人も多いだらう。わからない場合は意味がないとことになって悪い意味にもならない。それからすると、Tit はかなり格下げの感はある。しかし、これをもって日本式・訓令式系統が劣つてゐるといふのは、宣伝手段としては一般受けするかもしれないが、説得術としては低級の部類に属する。なぜなら、同様のことは、どのローマ字表記においても起りえるからだ。同じ論法で自説が破壊されかねない。たとへば、タケシ Takeshi は Take shi(t) となつてしまふ(米語では語末の t はしばしば消失/elision/する)。タケシはクソな名前なのか？ そんなことはない。群馬もさうだ。群馬はヘボン式では Gumma と綴る)が、gumma といふのは梅毒の末期症状でゴム状の足が膨れあがつた状態を指す。日本語ではゴム腫といふ。だったら群馬といふ地名は、日本式に Gunma と綴りなほすのか？ それとも、群馬といふ地名をやめて、上野(こうずけ/かうづけ)とでも再命名するのか？ 野球選手で Fukudome といふ人がゐるが、これは英語圏では印象がわるい。ヘボン式にしたところで、かかる問題からは逃れられない。英語ではないが、アラビア語で中村(ナカムラ)とはどういふ意味になるか辨へてゐるのか？ あるいはアラビア語圏に無関係な一般市民が知っておくべきことだと主張するのか？

ちなみに、鎌倉丸 No.2 は第二次大戦中にアメリカの潜水艦によって撃沈された。おそらく、秩父丸のままであつても撃沈されたであらう。

IX. 14 私の推薦するローマ字：復古假名遣翻字の日本式ローマ字綴

ローマ字は前述のやうに言語や表記に興味のある人は必ずといっていいほど興味をもつテーマである。最初は名前や地名の綴り方に疑問をもったり、こだはることがキッカケになってゐるやうである。たとへば、海が好きな島さんが自分を Seama と自称するなどがその例と云へる。ローマ字を英語モドキとして解釈する人は、自分の名前や地名を英語風に創氏改名するところに帰結するが、言語そのものに興味をもつ人は日本語全体として整合性のあるローマ字体系を考へるに至る。彼等はたいてい一家言あり、研究家(研究者ではない)はたいてい独自のローマ字規格表を作つてしまふ(であるから論議が発散して一向に収束しないのかもしれないが、笑)。合拗音や滅多に使はない「スイ」とか「トゥ」に対するローマ字を考へたりするのがそれである。

私も御他聞に洩れずして、私なりのローマ字論がある。私は復古假名遣(歴史的假名遣)⁸⁶で翻字する日本式ローマ字を支持する。この方式は私のオリジナルではもちろんなく、明治5年の黒川眞頼が百人一首をローマ字で記述したのが初出と思はれる。また、南部義籌(よしかず)のローマ字にも近い(これをより簡略/統合してゐる)。個人的にこの方法を支持する理由の第一は「美しさ」である。とはいふものの「美しさ」はある程度は人によりけりで、「美しい」と思ふ人には説得力をもつが、さうでない人はさう思はないだけなので、合理的な理由も述べる。この方法にももち

⁸⁶ いはゆる旧假名。私は名称としては通時的假名遣 diachronic orthography あるいは傳世假名遣がいいのではないかと考へてゐる

ろん問題もある(別項参照)だらうし完璧なものではないが、これがもっとも日本語の歴史と構造をよく反映したローマ字の書記体系であると考へるためである。シは方言ではなく標準語の範疇においても [ʃi]([ç]) だったり [si] だったり、時に [θi] だったりするものを十把一絡に shi のごとき特殊音で代表させることはできない。さらに現代仮名遣いよりも表語性・歴史性の高い復古仮名遣を翻字の規範としてゐる⁸⁷。復古仮名遣は音よりも通時的な語を表記してをり、今の発音に準拠してゐるのではない。今の発音に準拠した仮名遣ではないので、ヘボン式のやうな表音的な書記方法はそぐはない。1200年前の「真実」をローマ字にする時に、ヘボン風に shinjitsu と表記するとシを shi, ジを ji, ツを tsu のやうに発音していたかのやうな表現になる。しかし、文字は即ち音を示すのではない。これまで述べてきたやうに音には歴史がある。シは昔、チのやうな音だったかもしれないし、ジもあやしい。ツも昔はトゥであった。昔と一口にいつてゐるが、時代時代によって、それぞれ異なつてゐたし、中央(当時は平城または平安の京など畿内)と地方ではまた異なつてゐた。セをシェのやうに発音する人も今もつてゐるかと思へば、昨今の東京の一部の人にみられるシをスイ/[si] のやうに発音が変化しつつある。このやうに音は変りゆくものであるが、字はさうではない。さういふ色々な音をそれぞれの時代で代表してきた仮名に対して今の発音で shi だの ji だの tsu だのといふ日本語の音韻構造にそぐはない特殊な文字を与えることは復古仮名遣の通時的連続性を阻害するもので賛成できない⁸⁸。日本式は日本語の通時的に共通する構造を反映してゐるので復古仮名遣を翻字する書記体系として相応しい。

IX. 14.1 表記の保存的特性

発音は歴史と地域を通して連綿と変化しながら伝はつていくが、表記はそのままの形で伝はつていく。表記は基本的には変化しないのであり、これを保存的といふ。また、発音は漸移するが表記は漸移せずに、変化する時は飛躍的に変化する⁸⁹。いはば、発音はアナログ、表記はデジタルと云へるだらう。表記が文字符号としてデジタルで示されるのは偶然ではない。発音をデジタルで記録したと持つてゐるもの(CD, MP3 等)は音波をデジタルで記録しただけである。tu と tsu の間の音声はあつても、tu と tsu の間の表記はない。表記には tu と tsu しかない。そして、表記は意識的に書かれるので、無意識の tu から tsu への変化は表はされない。一方、音声は無意識に変化していく。また、文字は教育を受けた層により使用され、彼らは歴史意識や言語感覚を重視するので、伝統(歴史)に反する表記、意味論的に不整合な表記を好まない。文字の多くは文語なので(昔ほどさう)一層保存的である。

話がはかばかだが、イタリア語の話をする。イタリア語はラテン語の子孫であるが、clāvis → chiave(key), qui → chi のやうに発音が大きく変化した。しかも、イタリア語が成立した時には自分がラテン語の子孫だとは思つてゐなかつた。だから、ラテ

⁸⁷ ま、理論的極北と云へる。

⁸⁸ ハ行はもともと両唇音のファ行であつた(今は両唇音はフだけに残る。更には p パ行であつた、ハ行転呼音)。このため復古仮名遣翻字と云ふからには、ハ行の子音は f や ph などが望ましい、とふ意見もあるかもしれない。それは正当な意見であるので後で考察する。

⁸⁹ これを進化論的に、発音の漸移説—表記の断続平衡説と位置づけることができるかもしれない。

ン語と繋がり乏しく、逆に発音に忠実な綴り方が採用された。歴史のない表記法は表音式にならざるを得ない。イタリア語においては、ユリウスは本来のラテン語の Iurius でも、子音の i を j に改めた Julius (英語、仏語ほか大部分の言語における綴り方) でもなく、Giulius である。Japan も元々は Iapania であるが Giappone となる。発音にあはせるために、わざわざ G の字を足してゐる。これは、口語ラテン語 (俗ラテン語) からイタリア語になる過程で、di, gi, j (子音の j は日本語のヤ行頭子音。ただし当時は子音の j と母音の i を書きわけなかった。文脈で区別してみた) が硬口蓋化によって同じ音 [ɟ] に変化したためである。イタリア語と兄弟関係にあるフランス語、スペイン語、ポルトガル語でも似たような変化が起きた。J について云へば、もっとも最初に変化したのはスペインで、スペインでは dji が [ɟ] になり、現在は [ç][x] まで変化してしまった。フランス語とポルトガル語は [ɟ] になった後、[d] が落ちて [ʒ] になった。種子島時代の葡語は [ɟ] で現在は [ʒ] である。イタリア語は [ɟ] のままである。たとへば、英語で Good day にあたるラテン語の挨拶は下記のやうに変化した。

ラテン語 (対格)	Bonum diem
(主格)	Bonus dies
スペイン語	Buenos dias
葡語	Bom dia
イタリア語	Buon giorno
フランス語	Bonjour

ラテン語の挨拶は正式には対格で受ける。それは “I hope good day to you” の文型の省略だと考へられてゐる。しかし口語ラテン語では格が混乱してゐたので、参考のために主格も掲載した。

これを見てわかるやうにスペイン語やポルトガル語では dias, dia がラテン語の dies, diem に由来してることが一見してわかるが、音韻変化してしまひ、変化にあはせて綴り方を変へたイタリア語とフランス語からは giorno, jour が dies に由来することがわからなくなってしまった。イタリア語だけについて云へば、di 由来の [ɟ] も gi 由来の [ɟ] も j 由来の [ɟ] もみな同じ gi の綴りにしてゐるので、語源がわからなくなってしまう。

ひるがへって、日本語は平安時代以降、連綿として日本語としての連続性を維持してゐる。発音もイタリア語ほどは変つてゐない。イタリア語ではラテン語との繋がりを綴り方に示さうと思つてもできない。日本語は平安時代との繋がりを表記に示すことができる。なんとめぐまれてゐるのだらう。我々の歴史性、祖先との繋がりを強化するためにも、表記として採用すべきは表語的な復古假名遣であり、そのローマ字表記も復古假名遣をベースにした日本式ローマ字翻字が望ましいと考へる。

IX. 14.2 文字は第一に語を示すのであって音はその次

日本式は読めない (ヘボン式だって読めないのであるが) といふ意見もあるが、それについてはこれまで反論を述べた通りであるので、ここでは西園寺公望の逸話を

紹介したい。西園寺は国際的に署名する時には Saionzi と日本式に綴ってゐた。お付きの人が『zi と書いて「じ」とは読めません』と注進すると西園寺は「読めぬ者は読まぬでもよろしい」と一蹴したさうである。プラトンが Plato と自署⁹⁰する時に「それでは英米人にプラトーと読めません。プレイトーになってしまいます」と云はれても困ってしまふだらう。

この立場では相手がどう読もうと自由で、相手に読み方を強制することはしない(もちろん訊かれれば答へるが)。ローマ字はあくまで語を綴りとして示すものであつて発音を示すものではない。ラテン文字世界ではアルファベットはいろいろな読み方をされるので、それぞれが自分たちの言葉で読みたいやうに読めばよいといふのが主張である。逆に、自分の名前の綴りが、自分が今ゐる土地で、どう読まれるかは本人が把握しておくべきことと考へる。竹さん (Take) は英語圏ではテイクとしか読んでもらへない、伊達さん (Date) は英語圏ではデイトにしか読めない。それを把握するのは個人の責任範囲である。逆に、もしある人がある国で定住して、現地化したいのであれば、それはその時に、その人の名前の綴り方を現地風に変更すればよい(しなくてもよい、さういふことは個人の裁量)。コミュニケーションは究極的にはアルファベットの綴を紙や砂の上にでも書いて筆談すればよいと筆者は考へる。

また、巷間ではヘボン式⁹¹ばかりだから、いまさら日本式は少数派で支持するのは愚かであるといふ意見もあるが、自分は理学者であるから、数が多いから正しいといふことには納得がいかない。ヘボン風が主流なのはそれが正しいからではなくて、その使用者がローマ字の意味をよく理解してゐないからかもしれないのだ。

閑話休題。表音的仮名使いにおける「ソージャ」は現代仮名使いでは「そうじゃ」となり、復古仮名遣(歴史的仮名遣)では「さうぢゃ」になる。これは「さうだ」に由来する語である。「ソージャナイ」は「さうではない」に由来する。これをローマ字表記で示すと下記のやうになる。

表音的(ヘボン式写音)	ソージャ	sōja	ソーダ	sōda
現代仮名(訓令式翻字)	そうじゃ	souzya	そうだ	souda
復古仮名(日本式翻字)	さうぢゃ	saudya	さうだ	sauda
表音的(ヘボン式写音)	ソージャナイ	sōjanai	ソーデハナイ	sōdewanai
現代仮名(訓令式翻字)	そうじゃない	souzyanai	そうではない	soudewanai
復古仮名(日本式翻字)	さうぢゃない	saudyanai	さうではない	saudehanai

翻字式なので、漢字假名を廃止する意思はない。翻字のベースには假名遣があるので、假名遣を知つてゐる(つまり、漢字假名を使へる)ことを前提としてゐるので、理論的にこの方法で漢字假名を廃止することはできないためである。日本語の文献をどうしてもラテン文字化しなければならない時に用ゐる。さて、復古仮名遣(歴史的仮名遣)は火事は「くわじ」、月を「ぐわつ」のやうに記すので、kwa/gwa 等の合拗音の表記は必要である。これを「ぐわ」は gua, 「くわ」を qua としてはと思ひ、自分の名前の綴りを taqumi と號した。しかしよく考へてみると qu-/gu-の方式

⁹⁰Platon, Plato の相異は主格か呼格かの違ひ

⁹¹正確にはその亜流で一貫してゐないものを十把一絡にヘボン式といふのは問題がある。

は不要に q を使用してをり, 他の可能性を奪ってゐる. 更に調べてみると日本語学では Q を促音の表記に使ってゐる (声門閉鎖音の拡大解釈?) ことを知った. クワに qua を宛てることは無駄に q の可能性を塞いでゐるのみ故, 従来通りの gw-/kw- を支持する⁹². 日本語の長音は復古假名遣では二重母音として表記されるかハ行転呼音になるので, 長音の問題は生じない. たとへば, 大坂は Ohosaka であり, 逢坂は Ahusaka である. また, 地名に多い漢字は字音假名遣で表記し, それらにも基本的には長音はない⁹³. たとへば, 九州はヘボン風綴り方では Kyushu (真正ヘボン式では Kyūshū. Kyushu はキュシュ. 訓令式では Kyūsyū) となるが, この方式だと九州はキウシウなので Kiusiu である.

IX. 14.3 Y と W 日本式へのささやかな不満

なほ, 私は日本式を支持するが用字としては些細な不満がひとつある. ヤ行や拗音を示す子音文字は y よりも j の方がよかったのではないかといふことだ. j は英語ではヂの子音 (仏語葡語ではジ) であるが, もともとヤ行の子音 (もっといへば i が子音になったもの) で, 英仏葡語以外のヨーロッパの言語では j はヤ行の子音であった. 一方の y は英語では i の異体字で語尾に使ふ文字である. たとへば, study が複数形になると studies になるのはもともと単数形は studi で, それに複数形語尾の -es がついただけだからである. それで, 語尾に i が来た時には y にするといふ正書法があったため, studi は study として綴られた. 複数形の時は i は語中になるのでそのまま studies なのである. ラテン語では, y は yū (ユー) と呼ばれ, 英語とほぼ同じ名称であるが音価は [y] (ドイツ語の Hütte ヒュッテの音) と異なる. 仏語では igrek, 伊語も igreco, スペイン語も i griega とロマンス諸語では全て「ギリシャの i」といふ名称をもつ. そして, もともとのギリシャ語では y は Y で名前は ypsilon, 単純な u といふ意味で, 小文字は υ と記した, 音価は [y] でオリンパス Olympus はオリュンパス, システム system はシュステムのやうに発音された. この読みと音価は独語に保存されてゐる. y の音価はいろいろあるが, もともと close front rounded vowel の音価で 'iu' が融合した母音である. 前舌は硬口蓋を促進するが円唇はむしろ硬口蓋を阻止する働きがある. 硬口蓋化はむしろ j の方が関係が深い字母と云へる. 端的にいふと j のほうが半母音 [j] として素性がよい. それを考慮すると拗音の表記には j が向いてゐるだらう.

この古典主義的な試みも, w の前には挫折する. w はラテン語には存在しないし, u は母音なので, それに対応する子音の v (V は厳密にはローマ時代には存在しない/U と区別されてゐない. 彫刻の際の簡便性から U も V も V として表記されることが多かった. cf. BVLGARI) は, 現在では多くの言語で [v] といふ有声唇歯音に変化してしまつてゐる (ドイツ語では無声唇歯音 [f]). 介子音としては, どうやっても w を使

⁹² 匠を日本式の本則 takumi に反して q を用ゐて taqumi と綴る理由のは 1 つは失意の時を救つて呉れたローマの文化的遺産に敬意を表してである. ローマ人は k は用ゐない.

⁹³ -ng の韻尾をウで転写してゐるので, それには uu の連母音がある. 中国はチュング (ウ) ゴクなので, Tyung'goku または Tyuugoku となる. -ng 韻尾は日本語には結局入らなかつた音なので, これは表記の必要がないかもしれない.

ふ他ない. ヤ行だけ j にしてワ行は w のままといふこともあり得るだらう. IPA ではさうなってる⁹⁴.

それでもあへて y と w を廃すことを試みる. 最初に思いつくのは y のかほりに j, w のかほりに v を用ゐる方法である. V は [v] のイメージがあるが, 日本語には [v] はないので, この際気にしないでゐるのも一つの方法である. ただし, 「ヴァイオリン」のやうに V を [v] としてとっておきたい人もゐるだらう. 次に, y のかほりに i, w のかほりに u の母音をあてる方法がある. これは母音と子音の混同で望ましくないが, y[j] も w[w] も半母音・半子音といふ微妙な立場であり, [j] や [w] の半母音としての側面を強調したものと云へなくもない. ただし, 日本語の CVCV といふ構造から, i/u と母音が続く場合は拗音なのか, 母音連続なのか区別できない問題が発生する. たとへば, 「ちゃん」と「ちあん」の区別ができなくなる⁹⁵.

例	従来の日本式	y>j w>v	y>i w>u	「'」で区切る	y>i + 「'」
たまちゃん	Tamatyan	Tamatjan	Tamatian	Tamatian	Tamatian
治安	Tian	Tian	Tian	Ti'an	Ti'an
ひゅん	Hyun	Hjun	Hiun	Hiun	Hiun
悲運	Hiun	Hiun	Hiun	Hi'un	Hi'un
地球	Tikyu	Tikju	Tikiu	Tikiu	Tikiu
地気宇*	Tikiu	Tikiu	Tikiu	Tiki'u Ti'ki'u†	Tiki'u
諏訪木	Suwaki	Suvaki	Suuaki	Su'uaki	Suwaki
具合	Guai	Guai	Guai	Gu'ai	Guai
友愛	Yuuai	Juuai	Iuuai	Iuu'ai Iuu'a'it	Iuuai
裕也	Yuuya	Juuja	Iuuia	Iuu'ia	Iuuia
こわい	Kowai	Kovai	Kouai	Ko'uai	Kowai
こうあい*	Kouai	Kouai	Kouai	Kou'ai	Kou'ai
くわし(菓子)	Kwasi	Kvasi	Kuasi	Kuasi	Kwasi
くわしい	Kuwasii	Kuvasii	Kuasii	Ku'uasii	Kuwasii

† を付した文字列は音節全てを区切った.

この場合は, 母音連続の場合は「'」で音節を区切るといった対策が必要になる. 「格子」kousi と「子牛」ko'usi の例のやうに, 日本語をローマ字表記する際には音節の区切をあたへてやる必要がしばしば生じる. たとへば, 井上は Ino'ue としないと ou が長音のオーを表記してゐるやうに見えるためイノーエとイノウエとの区別ができない⁹⁶. w>u の立場では ue が we になる可能性があるために更に区切を

⁹⁴単に IPA ではさうなってるだけで, IPA は字母の代表的な音価を決定する機関ではない. IPA では, もっとも代表的と思はれる音価を選らんで音をあててゐるのは確かであるが.

⁹⁵明治から昭和前期(敗戦まで)では, 「っ」「ゃ」などの小文字は使はなかった. それでも「ちゃん(チャン)」と「ちあん」は判別可能だが, 「チャン」と「チャン*」は判別不可能である.

⁹⁶これは平假名でも同じで, イノウエと綴った場合, イノウエ「伊能衣*」とイノウエ「井上」と二種類の可能性がある.

あたへて Ino'u'e としなければならない。同様に、桔梗屋は Kikiou'ia となる。氏家 Uziie(復古假名では「うぢいへ」)は $y > i$ の立場では、Uzi'i'e とする。ie がイエになるためである。その立場では「いや」は i'ia, 「いや」は ii'ia⁹⁷。病院(Byouin)は Biou'in, 美容院(Biyouin)は Bi'iou'in。いっそ、「'」をゼロ子音として定義したほうがいくらかである。しかし、†「友愛」のやうに全て母音字連続について音節を区切ると文字列として相当にうるさく見える。全ての音節について区切ると論外にうるさい。Su'be'te'no O'n'se'tu'ni'tu'i'te Ku'gi'ru'to' Ro'n'ga'i'ni U'ru'sa'i(案外、読みやすいかも?)。ローマ字表記は音節やモーラの区切がはっきりしないので書くのも読むのも難しい。

変な折衷案として、頭子音の y と w は書くが、介音(拗音)の y と w は i と u に変へる、といふ方法もある。たとへば、「ちゃん」を tyan と書くと、 t と an が y で切りはなされてゐるやうに見えて読みづらいが、tian ならば一連のものとして読み込める。単に、 y の字の形の問題である。 y はベースラインの下にまで足が出てをりして目立つためである。頭子音ならば目立つほうが望ましい。しかし介子音で目立つと音節の区切りを誤解する。介音に限って $y > i$ とするなら目立たず、二重母音的になって介音の表現には望ましい。しかし、この方法でも、母音連続に対して適宜「'」を入れてやる必要がある。たとへば、病院は Biou'in, 美容院は Biyou'in, 美王印*は Bi'ou'in となる。 y を加へ頭子音と介音の辨別を立ててゐるので、「'」の数が若干減る。この方法では Y と W を廃することはできない⁹⁸が、可読性には一定の貢献をするだらう。ちなみに、字音假名遣では iu (州 siu) と yu (宗 $syuu$, 取 syu) を辨別してゐるのでこの方法を適用するためには更に工夫が必要となる。

また、この方法ではシュとシュウが、 siu , $siuu$ のやうになり、字音では siu もシュウと読むので長音がうまく書き示せない⁹⁹。ここで、シュを sy , シュウを siu とすることを検討する。 y は $[iu]$ と $[y]$ (ヒュッテ Hütte の $ü$) の音を示すことが多いので、それを援用するのである。シャ シ シュ シェ ショは sia , si , sy , sie , sio となる。シュウは siu となる。この方法ではシュといふやうな拗音の1モーラは日本語ではあまり頻度がないので、 y を目だたなくすることには貢献してゐる。しかし、この方法はウ段の音を直音(u)と拗音(y)で書きわけてゐるところに問題がある。つまり、段の破綻であり、日本式の行と段の整合性がここでは失なはれる¹⁰⁰。たとへば、 $si+V$ を列挙してみると、 sia , si siu sie sio シャ, シ, シュウ, シェ, ショとなる¹⁰¹。直音と対応してゐない。

結論としては、 y を排すことはむづかしい、介音は子音字または専用の半母音字

⁹⁷ 必要以上に繁雑になってゐる気がするかもしれないが、日本語は音節文字で表記するのが一番簡単で、単音文字で表記するとどうしても複雑になる。

⁹⁸ 別に怨みがあるわけではない。i greca(ギリシャの i) と呼ばれる y を、むしろ愛してゐる

⁹⁹ これは母音連続の際にモーラの区切が自明でないためである。シュウを $si'u$, シュを siu , シュウを $siu'u$ とすれば書き分けられるが、モーラの区切りはできるだけ self-evident であるべきである(そんなこといひだすとローマ字では不可能であるが)

¹⁰⁰ 実際の言語が行も段も破綻してゐるのならそれでもいいかもしれない。ただ、日本語は行も段も破綻してゐるとして捨てるには忍びない有律性を備へてゐる。

¹⁰¹ si でなく sii ならシイとなり、 siu シュウと並んでもおかしくないかもしれない。しかし、さうすると直音のはうがおかしくなる(a , ii , u , e , o)。最初の i が硬口蓋化を示し、次の i で母音のイ段を示すわけである。つまり、日本語の i は硬口蓋化させつつ、イも発音するといふ二つの役割を担つてゐることがわかる。

で示すべきである, といふことになる.

IX. 14.4 変則日本式 ジャ=Zja は親へボン式? 実は反へボン式

上で半母音のヤ頭子音は y よりも j のほうが素性がよいと述べた. ローマ字表記で拗音やヤ行を j とすることは表記それ自身としては何の問題もないが, へボン式との関係では非常に問題になる. へボン式では「ジ」「ヂ」及びジャ・チャ行の頭子音を j としてゐる. これは英語の j は [dʒ] であるためだ¹⁰². そのため, ヤ行の頭子音や拗音の介音に j を使ふ(ここでは j 型日本式といふ)とへボン式と完全に非互換になる(j 型日本式かへボン式かで j の音価が全く異なる). たとへば, シュのつもりで日本式の syu と書いてあってもへボン式で syu はないので誤読の怖れはない. ところが jama は j 型ではヤマだがへボン式ではジャマだ. どちらの表記であるかによって示すものが全く違ふことになる. だから, 簡単に j 型日本式を導入するわけにはいかない. そこで, 問題のある「ジ」「ヂ」及びジャ・チャ行の頭子音に限って, y のかほりに j を使ふことにすると下記のやうになる.

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ジャ行	じゃ zja	じ z(j)i	じゅ zju	じえ zje	じょ zjo
チャ行	ぢゃ dja	ぢ d(j)i	ぢゅ dju	ぢえ dje	ぢょ djo

ここで用ゐてゐる j は半母音 [j] といふ意味でも解釈できるし, へボン式のジの頭子音 j を転用したものだと解釈可能である. へボン式ではジャ行とチャ行を区別しないが, 区別したい時(たとへば翻字あるいは語頭/語中の書き分け)にこれを使ふとよささうだ. 「純」を Zyun と書くことに違和感を覚える人でも Zjun だったり Djun だとまだ違和感が少ないかもしれない. とすると, この表記は親へボン式なのだろうか? 実はさうではない. 日本式とへボン式は解釈に背反はなく, jun でも zyun でもどちらでもジュンをいふ呼みを引き出せる. ところが, zjun とか djun と表記すると, j はもはやへボン式の [dʒ] ではなく, 硬口蓋化の音価を担ふ介音 [j] になってしまふ. ドッジボールはへボン式では Dodji Bōru だが, 上の表で解釈すると, ドヂボールとなって解釈にも背反が生じる. この点で, zj-,dj- といふ表記はへボン式との折衷案に見えて, 実はへボン式をとりこみつつ否定するといふ表記なのだ.

日本式が介音に j を用ゐず, y を用ゐてゐるのは, 結果としてへボン式を許容してゐる(共存できるシステムしてゐる)ことにほかならない.

IX. 14.5 歴史と現在

また, 復古假名遣を持ち出すのであれば, ハ行の頭子音が果して h でいいのかといふ問題も発生する. 平安時代から戦国時代ではハ行は [ɸ] であり, その前は [p] だつ

¹⁰²現在の日本語では「ジ」「ヂ」及びジャ・チャ行は同じ音韻になってをり, 表記としては区別しても発音としては区別しない. 発音は語頭では [z][ʒ] の近似音) となり(例: 時価「じか」は [ヂカ]), 語中では [dʒ][ʒ] の近似音) となる(例: 鼻血「はなぢ」は [ハナジ]) 詳しくは「子音」の項の細目「ジと j」を参照されたい.

たと推定されてゐるため¹⁰³である。日本式は行内の整合性を重視してゐるので、行を規定する子音が一つに決定すればよい。たとへばハ行の声母(頭子音)を p, や ph で受けることも可能性としては考へら得れる。p だとパ行(現在の)と衝突する。日本式では他の行と衝突することを認めてゐないため、p は不適當である。ph であれば、後に再生するパ行 [p] と矛盾しない。綴り字からも似てゐることを暗示させ得る。この考へ方は検討に値し、日本式の理念は行と段の整合性にあることを踏まへてゐるが、介音 (w, y) 以外の子音で digraph になってゐるところは理念からは外れる。また、現在の音韻と相当に異なる字母をあてることは現代人には躊躇させる。もちろん、過去の音韻には近いかもしれないが、現在と過去どちらも完全に満す表記は存在しないため、過去と現在のどちらをどういふ理由で優先すべきか、一定の指針が必要になる。たとへば、復古假名遣は簡単は規則で假名から現代の発音を算定できるので現代語の表記としても遜色はない。表記については現代・歴史(過去)の対立はなく、復古假名遣の歴史的一貫性を重視して表記として採用されるべきと考へた。なんでも古いほうがよいといふのではない。ローマ字表記では、ハ行の頭子音をなににするかで現代と歴史との対立がある。ここでは、行と段の整合性を保持する限り、現代の音韻に相応しい頭子音をあてる、といふ補助規則を導入する¹⁰⁴。したがって、新しく生れた行については新たに頭子音を考へる(例: パ行, ファ行)が、行ごと、段ごとに変化してしまつたものについては現行の音韻で最も妥當な頭子音を配置する¹⁰⁵、ことにする。これに従ふと、過去のハ行であるパ行やファ行は現在のハ行に吸収され、現在のパ行ファ行は新しくできた行と考へ、現在のハ行は h を声母(頭子音)となる。歴史を通じて完全な表記系は存在しないため、これは妥協の結果であるが、行としての整合性は日本式の重要な diagnosis なので、そこは譲れない。また、h と p は随分違ふ発音にも思へるが、P-Q 循環する子音で述べたやうに、それほど違ふ発音でもない。音声学や日本語の音韻史などの學術知識がない場合でも、想像を逞しくすれば理解可能と考へられる。

IX. 14.6 外来語の表記と新しい発音

ローマ字論はしばしば外来語の表記に心を砕いてゐる。各ローマ字論に差がつくのはたいてい外来語の表記である。外国語の音韻体系・正書法は当然日本語のそれとは異なる。外来語は微妙な位置にある。外来語は日本語であるといふ時点で日本語の音韻体系に従つてゐるが、もともと外国語であるので元の言語の音韻体系の影響が残つてゐる。これを日本語の音韻体系のために構築したローマ字体系に無理矢理あてはめるのは、どうしても齟齬が生じる。しかし、ちょっとまってよく考へてほしい。普通の日本語では、漢字、平假名、片假名、アルファベットと複数の文字体系がある。たとへば復古假名遣(歴史的假名遣)であっても、日本語は平假名で書き、外来語は片假名で表音的に記すことにより、音韻体系の違ひをうまく表記できる。たとへば、復古假名遣の「かう」では「コー」と同じ音を示すが、同じ「かう」を片假名

¹⁰³ cf. 旗はパタパタするのでパタと云ふ。琉球語では花はパナと云ふ。

¹⁰⁴ 表音主義の人からみると、これがもっとも重要な規則なのかもしれないが。

¹⁰⁵ ゆゑに、研究の結果、仮にウ段は歴史的にはœだったといふことがわかつてても変更はしない。段全てが移行してゐるためである。

で『「カウ」ボーイ』と書けば, ‘コーボーイ’と読まれることはない. 複数の文字体系がエンベロープになってゐるのである. ローマ字にはそれがない. 全てを同じ体系で処理しなければいけないやうな錯覚がある. しかし, 文字が示すのは音ではなく語なので, 文字列は語を想起さしむればそれで用は足る. たとへ日本式ローマ字と英語やドイツ語, フランス語を同じローマ字で並列しても, その語を知ってゐれば正しく発音できるだらう. たとへば, Minami Centrea(南セントレア), Romantic Kaidô(ロマンティック街道)など. しかし, アルファベットの文字列の中に, 部分的に体系が異なるものが混つてゐて, 弁別するのが若干面倒になるのは否めない. おそらく, これがヨーロッパの諸言語, とくにフランス語が, 同じヨーロッパの言語が外来語として侵入することにしばしば強く反対する理由であらう. フランス語の音韻体系の文字列の中に, 英語やらドイツ語の文字列が入ってくると, それらを弁別しなければいけない. それは読むのが大変であるとときに, 自国の言葉が混乱する原因にもなる. 英語は(他のヨーロッパ諸語と違い), 基本的にどんな外国語であってもアルファベット表記された時点で英語風に読む方針なので, 逆にこのやうな問題は生じない.

音韻体系の異なる文字列を音韻の異なることを含めて記すために, 英語やドイツ語イタリア語の本では, イタリックに変へたり(日本語でいふ平假名/片假名の弁別に相当する), ‘引用符’で括ったりして弁別してゐる. ローマ字でも同じやうにすることでもうまく対応できるかもしれない. Mori build(森ビル), 南セントレアは Minami ‘Centrair’?

「スイ」とか「ティ」「トゥ」で示される [si] や [ti], [tu] の表記は文部省学術用語集にならって区切記号を用ゐて区別する(学術用語集では s'i や t'i, t'u としてゐる)方法を採用する. 東欧諸語のやうに変音符をアルファベットに付加することも可能である. たとへばチェコ語では š, č, ˘ がある., 区切記号を用ゐるよりも, むしろ, このやうが一文字一音価となって見通しがよいが ASCII から外れるので, 現時点では見送る.

ただし, 「'」は音節の区切符合として使ふ(拳一を Ken'iti など)ので, 一つの符合に複数の意味をもたせるのは避けるべきである. たとへばナ行のイ段「ニ」はサ行イ段「シ」と同様に硬口蓋化し他のナ行とは別の子音をもつてゐる. 硬口蓋化しないナ行イ段はサ行イ段「スイ」にならって強いて假名書きすれば「ヌイ」になる. これを「スイ」s'i にならって「n'i」と表記すると音節の区切りとしての ken'iti の「n'i(ンイ)」と弁別できなくなる. このやうな事態にはほとんど遭遇しないと思はれるが, 理論としては論理的整合性があることが重要である.

ひるがへって, 「ヌイ」と「ンイ」は大体において文脈で区別できるので表記を変へることなく『「'」は注意して読め』といふサインだけにとどめることも可能である. この場合は「'」は一つの意味しか持たないが, かういふ広すぎる定義はあまり有用ではない. また, ロシア語(キリル文字)のローマ字翻字では「'」は軟音(硬口蓋化した音)を示す符合なので, 日本のローマ字の「'」が s'i のやうに硬音(硬口蓋化しない音)を示す符合にすると反対の意味になる. 余所の言語にあはせるのには限度があるから, これは強制力を持たない. たとへば, 日本語以外は全て余所の言語であるから, 全ての言語に不都合なく文字を使ふには, 余所の言語と違ふ文字を使

ふしかない。しかし、それではそもそもローマ字表記の意味がない。諸外国のローマ字翻字はあくまで参考に留めるべきである。もちろん論理的に似たやうにできるならさうすべきである。

そして、符合に複数の意味を与へないといふ命題は生きてゐる。同名異物 (ホモニム/homonym) を避けるのは学問の基本であるから、音節の区切りとは別の符合のうが望ましい。あるいは区切り符合の方を別の文字にする (たとへば「**‘**」) か。キリル文字の硬音符のラテン文字翻字符合は「**"** (正確には**”**)」なのでこれをもらへばよいと考へる。s*"*i, t*"*i, t*"*u, z*"*i, d*"*i, d*"*u のやうになる。ASCII のトークンに「**‘ ‘ ”**」の類を用ゐることは計算機処理では評判が悪いが、単に処理が繁雑になるだけで、適当にエスケープシーケンスを埋め込めばよいだけで、あまり深く考へる必要はない。なほ、拗音は日本式ローマ字の五十音図を理論的に拡張すればよい。

この方法にしたがへば、「チケット」は *tiketto* (チケットとせずわざわざチケットとするくらゐだから、「ticket」のはうがいいのではと思ふが)、「スィーティー」は更に微妙。

IX. 14.7 音図

✓ 直音 (開口呼) で清音

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ア行/’/	あ a	い i	う u	え e	お o
カ行/k/	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
サ行/s/	さ sa	し si	す su	せ se	そ so
タ行/t/	た ta	ち ti	つ tu	て te	と to
ナ行/n/	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ行/h/	は ha	ひ hi	ふ hu	へ he	ほ ho
マ行/m/	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ行/y/	や ya	—	ゆ yu	(イエ)ye	よ yo
ラ行/r/	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ行/w/	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo

—は理論的に存在し得ない字/音である。ye は現代仮名使いはもちろんのこと復古仮名遣ひにおいても存在しない字である。仮名が成立する前にア行の「え」に同化したためである。もしこれを強ひて字を当てれば「いえ」となる。萬葉仮名では、「江」「曳」「要」「延」「兄」「枝」が当てられてゐる。平假名の「え」は「衣」の草書に由来し音韻論的にはア段の e である。一方、片假名の「エ」は「江」の傍に由来しヤ行の ye である。この表記が成立した時、既に e と ye が混乱してゐたことがわかる。これを書きわける際は、平假名の ye は「イ」と「エ」の合字や、「江」で代用する方法が提案されてゐる。片假名の e は、衣の冠だけ抜粋して「**ヱ**」とする方法が考へられる。学術的研究は別として、正書法としての復古仮名遣では e と ye を区別しないので、これらの表記は古文の翻字など純

粹に学術的なものに限られるが, ローマ字がそれに対応した転記表を備へてゐることは古典の保存のためには重要である.

現在の日本語で標準とされる発音では「し」/si/は [ɕ] を子音として持つが巷間においては [s] を子音にすることも多い (敢てカナ書きすれば「スイ」と同じ音). 「せ」/se/については [ɕ] を子音をする方言もある (古語の発音が保存されてゐる). 標準とされる発音のうち, 行を規定する音声学的音から異化したものは下記のとほり; 「ち」/ti/は [tɕ], 「つ」/tu/は [ts], 「ひ」/hi/は [ɕ], 「ふ」/hu/は [ɸ], 「に」/ni/は [ɲ] をそれぞれ子音として持つてゐる.

√ 直音 (開口呼) で濁音

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ガ行/g/	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ザ行/z/	ざ za	じ zi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
ダ行/d/	だ da	ぢ di	づ du	で de	ど do
バ行/b/	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
パ行/p/	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po

現在の日本語の標準とされる発音では, ガ行子音はガ行鼻濁音 [ŋ] を異音として持つ. 標準とされる発音では鼻濁音は語中にのみ表はれる. ザ行子音は [d͡z] のほうが主流で [z] を異音として持つ. 更に, ‘標準発音’では, 「じ」/zi/と「ぢ」/di/は [d͡z] または [z] の子音を持ち, 「づ」/du/は [d͡z] または [z] の子音を持つ.

√ 開拗音 (齊口呼, 硬口蓋化音)

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
カ行/k/[kʲ]	きゃ kya	—	きゅ kyu	きえ kye	きょ kyo
サ行/s/[ɕ]	しゃ sya	—	しゅ syu	しえ sye	しょ syo
タ行/t/[tɕ]	ちゃ tya	—	ちゅ tyu	ちえ tye	ちょ tyo
ナ行/n/[ɲ]	にゃ nya	—	にゅ nyu	にえ nye	にょ nyo
ハ行/h/[ɕ]	ひゃ hya	—	ひゅ hyu	ひえ hye	ひょ hyo
マ行/m/[mʲ]	みゃ mya	—	みゅ myu	みえ mye	みょ myo
ラ行/r/[rʲ]	りゃ rya	—	りゅ ryu	りえ rye	りょ ryo
ガ行/g/[gʲ]	ぎゃ gya	—	ぎゅ gyu	ぎえ gye	ぎょ gyo
ザ行/z/[z]	じゃ zya	—	じゅ zyu	じえ zye	じょ zyo
ダ行/d/[d͡z]	ぢゃ dya	—	ぢゅ dyu	ぢえ dye	ぢょ dyo
バ行/b/[bʲ]	びゃ bya	—	びゅ byu	びえ bye	びょ byo
パ行/p/[pʲ]	ぴゃ pya	—	ぴゅ pyu	ぴえ pye	ぴょ pyo

✓ 合拗音 (合口呼, 円唇化音)

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
カ行/k/[k ^w]	くわ kwa	くゐ kwi	—	くゑ kwe	くお kwo
サ行/s/[s ^w]	すわ swa	すゐ swi	—	すゑ swe	すお swo
タ行/t/[t ^s]	つわ twa	つゐ twi	—	つゑ twe	つお two
ナ行/n/[n ^w]	ぬわ nwa	ぬゐ nwi	—	ぬゑ nwe	ぬお nwo
ハ行/h/[h ^w /ɸ]	ふわ hwa	ふゐ hwi	—	ふゑ hwe	ふお hwo
マ行/m/[m ^w]	むわ mwa	むゐ mwi	—	むゑ mwe	むお mwo
ラ行/r/[r ^w]	るわ rwa	るゐ rwi	—	るゑ rwe	るお rwo
ガ行/g/[g ^w]	ぐわ gwa	ぐゐ gwi	—	ぐゑ gwe	ぐお gwo
ザ行/z/[z ^w]	ずわ zwa	ずゐ zwi	—	ずゑ zwe	ずお zwo
ダ行/d/[d ^z]	づわ dwa	づゐ dwi	—	づゑ dwe	づお dwo
バ行/b/[b ^w /β]	ぶわ bwa	ぶゐ bwi	—	ぶゑ bwe	ぶお bwo
パ行/p/[p ^w]	ぷわ pwa	ぷゐ pwi	—	ぷゑ pwe	ぷお pwo

✓ 特殊音 (アルファベットの本来の音価にする為には"を用ふ)

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
サ行/s/[s]	—	スイ s"i	—	—	—
タ行/t/[t]	—	テイ t"i	トウ t"u	—	—
ナ行/n/[n]	—	ヌイ n"i	—	—	—
ハ行/h/[h]	—	ヘイ h"i	ホウ h"o	—	—
ザ行/z/[z]	—	ズイ z"i	—	—	—
ダ行/d/[d]	—	デイ d"i	ドウ d"u	—	—
* バ行/b/[b/β/v]	ヴァ va	ヴィ vi	ヴ vu	ヴェ ve	ヴォ vo
* ブア行/β/[β]	ブア va	ブイ vi	ブ vu	ブエ ve	ブオ vo

スイやトウといふ假名表記について、スイは [si] の音声を指示してゐると考へられてゐるが、現代仮名遣いに従つてゐる限り、[swi] と [si] のどちらも表し得る。復古仮名遣であれば、[swi] はスヰ、[si] はスイと書きわけられる。現在の日本語においては [si] と [swi] は別の音韻と見做されてゐないやうに考へる。[swi] を厳密に現代仮名遣いで表記したい場合、「スイ」(例、スイッチ)と表記されることもある。その場合は [sui] との辨別が不可能になる。また、スウォッチ (swatch) のやうな例もある。同様にトウも実際には指示対象となる音韻がはっきりしてゐない表記の一つである。[tu], [twu], [tou] の3通りある。スイと同じく、[tu] と [twu] は現代仮名遣いで表記してゐる場合は辨別できないし、おそらく別の音韻とは考へられてゐないだらう。[tou] はトにウを軽く沿へる音で、トウシューズなどに例が見られる。これはフランス語から假名転記すればトウなるはづであるが、トウだと2音節になり原語の1音節から乖離するためか (speculated), トウと表記されることが多い。この小文字の「ウ」は「そうね」などにも見られる。このやうに特殊音は注意が必要である。

外来語の表記(例: ヴァイオリン)等で「ヴ」行が設定されてゐるが, 多くの日本語話者は有声唇歯摩擦音 [v] を発音できずに, 有声両唇音の摩擦音 [β] か破裂音 [b] として発音してゐる. 翻字のためには必要であるが音声学的な実体はともなはない(参考*ブァ行). 英語風に気取って云ふ人の多くは [β] である. 意識せずに云ふと多くは [b] になる. [β] も [b] も中世から現代の日本語では /b/ の異音である.

✓ 特殊音の拗音

理論的には特殊音の拗音も成立する余地があるが, 日本語として弁別され得ないものも多く, 假名書きも実際にはあやしい.

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
タ行/t/[t ^(j)]	テヤ t"ya	–	テユ t"yu	テエ t"ye	テヨ t"yo
タ行/t/[t ^(w)]	トワ t"wa	トヰ t"wi	–	トエ t"we	トヲ t"wo
ナ行/n/[n ^(j)]	ネヤ n"ya	–	ネユ n"yu	ネエ n"ye	ネヨ n"yo
ナ行/n/[n ^(w)]	ヌワ n"wa	ヌヰ n"wi	–	ヌエ n"we	ヌヲ n"wo
ハ行/h/[h ^(j)]	ヘヤ h"ya	–	ヘユ h"yu	ヘエ h"ye	ヘヨ h"yo
ハ行/h/[h ^(w)]	ホワ h"wa	ホヰ h"wi	–	ホエ h"we	ホヲ h"wo
ダ行/d/[d ^(j)]	デヤ d"ya	–	デユ d"yu	デエ d"ye	デヨ d"yo
ダ行/d/[d ^(w)]	ドワ d"wa	ドヰ d"wi	–	ドエ d"we	ドヲ d"wo

✓ 撥音・促音等

撥音「ん」音素 /n/ は常に n で示す. 「ん」の後に母音, 半母音が来る時は, ' で区切る(例, 健一 ken'iti, 翻訳 hon'yaku). 促音は子音を重ねて示す(例, いった, itta). どうしても表音的にしたい場合は, [...] や '...' で括る.

IX. 15 カナ表記

本稿はローマ字を紹介する文章であるが, 翻字式となるとカナ表記の特性について振れずには済ませられない. 現代仮名遣いの欠点は非常に明確で, これまででもしばしば述べたので, ここでは歴史的仮名遣(復古仮名遣)の欠点(字音は覚えにくいといった習得の困難さではなくて表記としての理論的欠陥)を考察したい.

xxx 未完成

「はは」はもともと「ばば」に近い音だったが, 「ふあふあ」となり「はわ」となった後に, 「ちち」との連想で「はは」になった. 復古仮名遣では, 語中の「は」は「ワ」になるが「はは」については例外で, 「ハハ」を読まなければいけない. 復古仮名遣

では規則的にカナから現代語の発音が導出できることになってゐるが、若干の例外も存在する。

「なほ」(人名)とした場合、読みが「ナオ」なのか「ナホ」なのか本人に訊かないとわからない。「大穂」(歴：おほほ、現：おおほ)と「おほほ」の区別がつかない。

ハ行の場合、ハの頭子音が保存されるのが語頭の場合に限る。語頭以外ではハはワに、それ以外のヒフヘホはイウエオとなり零子音になる。漢字音(字音)の場合は漢字一字で一語とされるが、それが問題になる。たとへば、交付は「かうふ」となるが発音は「コーフ」であつて、「コーウ」ではない。それは付の「ふ」が語頭であるためである(正確には形態素頭といふべきか)。大原は「おほはら」だが、「オーワラ」にはならない。假名書きやローマ字表記の場合、漢字音かさうではないかは自明ではない。しかも、甲斐は「かひ」と書いて「カイ」と読む。同じ漢字音語頭であつても、場合によっては転呼音になる。

一般に復古假名遣では「あう」「あふ」は発音は「オー」で現代仮名遣い表記では「おう」となる。たとへば、「候」は「さうらふ」と書いて、発音はソーロー sōrō, 現代仮名遣いでは「そうろう」sourou と表記する。近江も「あふみ」と書くが、「オーミ」である。しかし、「かふ(買ふ)」は kahu と表記し、発音は「コー」ではなく(関西はコー)、「カウ」である。

竹内・武内は「たけうち」(takeuti)と綴る。「けう」といふ“eu”の綴りは、「けふ(今日)」や「らいてう(雷鳥)」の eu > [jo:] (yō, you) のやうに「たきょうち」(他境地?)とはならない。「たけ・うち」を意味的に区分され、その区分を越えて音韻変化はしないためである。ここで、「たけ」と「うち」は形態素を作つてみると云へる。漢字の場合は漢字一字ごとに形態素(正確には独立形態素)になることが示唆されるが、ローマ字やカナ表記では形態素の区切が明確にならない。「たけ うち」のやうに分ち書きすると、今度は文節の区切をごっちゃになつてしまふ。また、助詞も分ち書きする場合は「たけ うちに さう いった」のやうにブツ切りの表記になつてしまふ。しかも、それらの区切には階層性があるのに、表記ではどれも「_」と同列である。階層性とは具体的には、文節の区切、助詞の区切(拘束形態素の区切)、独立形態素の区切のやうにより細かい要素からなりたつてゐることを指す。これを假名で明示的に書けば「たけ・うち-に さう いった」だらうか。ローマ字であへて表現すれば、「Take'uchi_ni Sau Itta。」あるいは「TakeUchi'ni Sau Itta」と形態素の区切を明示する必要がある。分離記号は今適当に決めた。この階層性を表現すれば、「あふ」「オー」の問題も「さうらふ」SauRahu/Sau'rahu, 「買ふ」KaHu/Ka'hu のやうに辨别できる。単純にハ行が区切になつてゐるのではないことに注意されたい。同様に七浦(nanaura)もローマ字では NanaUra のやうに何らかの区切を明示して、「ななうら」となるやうにするべきである。さもないと「ナノーラ」になつてしまふ。

現代仮名遣いにも表音性に問題が残る。現代仮名遣いでは「竹内」問題は回避できるが、「七浦」と類似する問題「菜ノ浦」問題が発生する。現代仮名遣いでは「アウ」は「アウ」のままの規則はないが、「オウ」は「オー」となる規則は復古假名遣を引き継いでゐるからだ。すなはち、「菜ノ浦」(Nanoura)はそのままでは「ナノーラ」になつてしまふ。区切ることが必要である。これは、「菜ノ浦」といふあるのかないのか定かではないマイナーな地名だけでなく、「こう思う」といふ、よくある文言で

も発生する。「こう思う」は kou omou. 「こう」は「コー」だが、「思う」は「オモウ」であって、「オモー」(重?)ではない。同じ問題を抱える語句には事欠かない。端的には「問う」は「トウ」であって「トー」にはならない(それじゃバレエか空手)。「買う」(復古假名遣では「かふ」)は現代假名遣いでは kau をコーとは読まないで、セーフだが(「七浦」問題の回避)。「請う」「沿う」「問う」と、五十音の表にしたがって検証できる(同様のことは復古假名遣のアウにも云へる)。ナ行、ハ行、マ行は該当なし(ハ行「屠る」は苦しい)だが、ヤ行はある。「酔う」(You)は「酔うた」といふ連用形ウ音便では「ヨータ」(Youta)となって矛盾はないが、終止形連体形の「酔う」は、「ヨー」ではない(それこそ酔っぱらいだ)。

「こう」「問う」をローマ字で翻字する時には kou と tou となるが、kou が長音(2 モーラ 1 音節)で、tou はそのまま 2 音節 2 モーラといふのは表記の上では辨別されない。表音的ローマ字では「こういふことを問う」は kōyūkoto o tou とに書きわけられる。表音的ローマ字の利点の一つは母音連続の時に形態素の区切を明示できたことになるといへる。

xxx 未稿

IX. 16 誰のためのローマ字か

ローマ字論は誰のためのローマ字かをよく考へなければいけない。一見さんの外国人のための地名表記のローマ字であれば表音的ローマ字のほうがよい。統語論的整合性は、その言葉を学び使用するものにとっては重要だが、一見さんには、てつとり早く音を伝えればよい。それはいつてしまへば「斎藤寝具」だらう。英語が世界でもっとも通用する言語であり、我が国もそれに倣ふべきだと考へる人は英語式を推奨するであらう¹⁰⁶。ただし、それはヘボン式とは違ふはずだ。ヘボン式には子音と母音のシステムが違ふので、もしも英語風の子音の用字を規範にするのであれば母音も英語風にするほうがよいためである(アは a でなく u, イは i でなく e/ee, u はユーだから、ウは u でなくて oo, エは e でなく i, エイなら a, オは o でなく a)。母音はなるべく省略する。日本はまるでアメリカの属国のやうであるが、英語風にすることにした以上、今さらそんなことは気にしてはいけない。逆に、母音を独伊西葡風にするのなら子音もそれらにあはせるがよい。それぞれの言語の音韻の特性として書きわけできない音価が生じるが、この場合は適当に胡麻化すしかないであらう。たとへばドイツ語ではサとザ、イタリア語ではザとツァの書き分けが面倒で、スペイン語にはそもそもザの音はない、といふ問題がある。ポルトガル語風の表記では日本語を音声学的にままた正確に表記できる(ただしロマンス語にはハの音はないので、全て f で代用する? Feique monoditari)。だが、皮肉なことに、ここまでしても日本語を知らない人が正確にローマ字綴りを発音することは無理であらう。

ここで再び、誰のためのローマ字かとふ問題に還ってくる。日本に興味があつて日本に来る外国人なら、日本語の音韻体系を覚えてもらふより仕方ないであらう。日本語はローマ字で記されることはほとんどなく、平安時代の和漢混交文以来、漢

¹⁰⁶ 言語による統治の歴史を考へると現在の、どこかの言語を規範することは自国の自立性を脅かす危険を感じる。

字假名混じり文で表記されてきたわけだから, 更に日本に興味のある人には, ローマ字を忘れて假名と漢字を覚えてもらふしかないであらう. これはたとへば, フランスに興味のあつてフランス語を使ひたい人はフランス語の綴り方と発音を覚えなければいけない, フランス語の単語と文法規則を覚えなければいけないといつてゐるのと何ら変はりがない, 正当な主張である. 興味がない人にはなにを言つても詮方ないし, 興味のない人に対してわざわざ綴り方を彼等の言語風に変へてやらねばならぬ道理はない. そもそも興味のない人はアメリカ人かもしれないが, フランス人であることもあるだらうし複数の言語にまたがるであらう. 英語風であるといふことは同時にフランス語風ではないといふことである. 逆に外国では, ご当地のアルファベットの音価で日本語のローマ字が読まれるのは, 至極当然であつて, 自分が思つてゐるやうにローマ字が読まれるなどと思つてはならないし, その外国やその国語に敬意をはらふなら, 自分のローマ字綴りが, 当該言語でどう読まれるかくらゐは知っておくのが礼儀であらう.

逆に, 日本語のためのローマ字表記といつても, いったん成立した体系はほかのものにも転用されるに決まつてゐる. いくつも規則をつくることは繁雑になるからだ. でも, さうなると本来の目的と違ふので, いろいろ不満もでてくる. そこで, 新たに目的にあつた表記体系を構築する. つまり現在のローマ字の混乱がそれである.

xxx 未稿

IX. 17 イタリア語風ローマ字 (私案)

参考としてイタリア語風ローマ字 (私案) を提示する.

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ア行	あ a	い i	う u	え e	お o
カ行	か ca	き chi	く cu	け che	こ co
サ行	さ ssa/sa	し sci	す ssu/su	せ sse/se	そ sso/so
タ行	た ta	ち ci	つ tzu/zu/zzu	て te	と to
ナ行	な na	に gni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ行	は fa/!a/'a	ひ fi/li/'i	ふ fu	へ fe/!e/'e	ほ fo/!o/'o
マ行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ行	や ia/ja	–	ゆ iu/ju	(イエ)ie/je	よ io/jo
ラ行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ行	わ ua/wa	ゐ ui/wi	–	ゑ ue/we	を uo/wo
ガ行	が ga	ぎ ghi	ぐ gu	げ ghe	ご go
ザ行	ざ dza	(じ gi?)	ず dzu	ぜ dze	ぞ dzo
ダ行	だ da	ぢ gi	(づ dzu)	で de	ど do
パ行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
バ行	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
キャ行	きゃ chia	–	きゅ chiu	きえ chie	きょ chio
シャ行	しゃ scia	–	しゅ sciu	しえ scie	しよ scio
チャ行	ちゃ cia	–	ちゅ ciu	ちえ ce	ちよ cio
ニャ行	にゃ gna	–	にゅ gnu	にえ gne	にょ gno
ツァ行	つぁ zza	つぃ zzi	–	つえ zze	つぉ zzo

まづ, イタリア語には「ジ」の子音に相当する [ʒ] を示す文字列はない. 日本語でいふと「ジ」は「ヂ」で代用することになる. また, za, zi, zu 等は, ザ, ジ, ズともツァ, ツィ, ツとも読める. イタリア語では有声音/無声音の対立は絶対的なものではなく, z に関する限り異音の関係にある. 単語ごとと地方ごとに読み方が異なるが, イタリア語としてはどちらの発音でも大きな問題にはならない. また, s は母音に挟まれると有声音 [z] になる. 場合によっては有聲化を防ぐために ss のやうに綴る必要がある. ハ行の子音に一番近いのは, f であるが, 帯気音 (これもイタリア語にはない) として表す方法もあり得る. ギリシャ語の帯気音をイタリア語話者が発音する時, ハ行に聞こえるためである. イタリア語には帯気音はないし, 帯気音を示す語はないので, あへてや「'」として示してみたが, おそらく使用実績はない. 「!」は強く母音を発声するといふ含意で用いたが, 約物の使いかたとして間違っている. 「'」はギリシャ語の古典教育を受けたものしか理解できない符号である. つまり, ハ行はハ行としては表記できないのである. また, 拗音の際に, i+V の文字列が発生するが, 日本式の Y と W の項で述べたやうに, 「ちゃん」 cian と「ちあん」 cian のやうな区別ができなくなる問題が発生する. それを避けるためには, 音節を cian, ci-an のやうに区切る必要がある.

「し」の子音は標準とされる日本語では「さ」とは違ふことが云はれてゐるが, 実際には同じことも多い. 同じ場合には下記表になる.

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
サ行	さ ssa/sa	し ssi/si	す ssu/su	せ sse/se	そ sso/so

日本語では整然としたカ行ガ行がイタリア語風にするとちくはぐになってしまふ。これはイタリア語音韻の特性をひきづつてゐるためである (c の硬口蓋化)。日本語ではまるで別人の美智子と美紀子がヘボン式とイタリア語風とで逆のパターンを示すのも面白い。

\	ヘボン式	イタリア語風
美智子	Michiko	Micico
美紀子	Mikiko	Michiko

IX. 18 オランダ的ローマ字

IX. 18.1 蘭学式ローマ字

江戸時代は鎖国してゐたが、吉宗以降には洋書輸入が医術など技術分野に限ってに許可されるやうになると蘭学といふ分野が盛んになった。蘭学は主に医術の学問であつたが、技術が常に技術思想を伴ふやうに、蘭学も単に西洋医学ではなく、西洋医学を中心とした西洋文明の学であつた。その成果の一つとして蘭学式ローマ字がある。下記は大槻玄沢の蘭学階梯による。このやうなローマ字表記は、蘭学のみならず国学者や薩摩藩主島津斉彬のやうな外国に関心のある武家にも伝はつてゐた。なほ、ウ段が oe で示されてゐるのは、オランダ語の u は [y] であり、日本語のウに近いの oe だからである。それでもオランダ語の oe は円唇の [u] であつて、日本語の平唇の [ɯ] とは異なる。なほ、ここでは oe は œ で示す。強調しておきたいが、大槻玄沢は後にはウを oe でなく u で表記することを提唱してゐる。日本式の祖といつてもよい。

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/œ/	エ/e/	オ/o/
ア行	あ a	い i	う œ	え e	お o
カ行	か ka	き ki	く kœ	け ke	こ ko
サ行	さ sa	し si	す soe	せ se	そ so
タ行	た ta	ち ti	つ tœ	て te	と to
ナ行	な na	に ni	ぬ noe	ね ne	の no
ハ行	は fa	ひ fi	ふ fœ	へ fe	ほ fo
マ行	ま ma	み mi	む moe	め me	も mo
ヤ行	や ja	—	ゆ joe	(エ) je	よ jo
ラ行	ら la	り li	る loe	れ le	ろ lo
ワ行	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo
ガ行	が ga	ぎ ghi	ぐ goe	げ ghe	ご go
ザ行	ざ za	じ zi	ず zœ	ぜ ze	ぞ zo
ダ行	だ da	ぢ gi	(づ dzœ)	で de	ど do
バ行	ば pa	ぴ pi	ぷ poe	ぺ pe	ぽ po
パ行	ぱ ba	び bi	ぶ boe	べ be	ぼ bo

蘭学階梯によると、蘭語の si, se, ti, tœ は厳密には日本語のシ, ス, チ, ツとは同じでないとして明記されてゐる。筆者の大槻玄沢は、蘭語と日本語との発音のずれを認めた上で、このローマ字表をつくった。このことは単純に発音を写す表記ではなく、日本語の) 体系に則したローマ字表を企図したと考へられるかもしれない(杉本つとむ氏の考察による)。

IX. 18.2 オランダ語風ローマ字

上の表では拗音についての記述がなかった。これを現代のオランダ語の音韻にもとづいて補足してみる。なほ、上の大槻玄沢のものとは矛盾してゐる箇所がある。

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/œ/	エ/e/	オ/o/
サ行	しゃ sja	し sji	しゅ sjœ	せ sje	そ sjo
タ行	ちゃ tja	ち tji	ちゅ tjœ	ちえ tje	ちょ tjo
ナ行	にゃ nja	に nji	にゅ njœ	にえ nje	にょ njo
ハ行	ひゃ gja	ひ gji	ひゅ gjœ	ひえ gje	ひょ gjo

カ行やマ行など他の拗音もこれに倣って j を挿入すればよいと思はれる。ただし、蘭語では sj は英語の sh と同じ [ʃ] で、tj は [tʃ], nj は [ɲ] である。

他に注意すべきことを列挙する。厳密に云へば、オランダ語の u[y] は拗音のイユとは異なっている。[y] は円唇のウの口をしてイと発音する要領である。g は蘭語では [x] となる(強ひてカナ書きすれば強いホの子音)。ch も [x] となる。大槻玄沢はワ行の頭子音を w としてゐるが、現代オランダ語では w はドイツ語と同じやうに [v] の音である。ワ行にピッタリくる子音字はない。強ひて云ふなら v か。これは [f] と [v] の中間的な音で、日本語ではファ行に聞こえる。

日本語のオウを ou のやうに翻字した場合には蘭語では [au] となる。現代の日本語ではあまりないが、復古假名遣に多い、eu と綴ると [ø] となる。これはドイツ語の ö と同じ音である。könig, göte など。日本語では吐き気のする時のオエーに聞こえる。これらの読み方を禁止するにはトレマを用ゐる。öü とすれば、[au] とならず、[oy] となる。eü とすれば、[ø] ではなく [ey] となる。

オランダ語には日本語と同じく長音があり、それは母音の重ね(ダブリング)で示される。たとへば、英語の boat は蘭語では boot であり、発音も [bo:t] となる。

IX. 19 変音符付日本式ローマ字(思考実験)

假名は基本的には清音だけの文字で、濁音や半濁音は濁点・半濁点で表記してゐる。ローマ字は基本的にアルファベットの枠内で用字を決定しなければいけないが、変音符をつけることで用ゐるローマ字の数を減らし、より構造的に明確なローマ字体系を構築することができる。これは社会一般に通用すべきものとして提案するのではなく、一種の思考実験である。

ラテン文字は、歴史的経緯によって有声音/無声音の対立の別が別文字になってゐるか、有気音/無気音といった違いは文字にはあらはれてゐない。そこで、各言語を

ローマ字表記するには、アルファベットの文字数の枠内で適当に用字を当ててみる(中国語の B は無気音の p であって有声音の p ではない. P は有気音の p.). それでも駄目な場合は、文字に符号(変音符)を付け加えて音を辨别してゐる. それは丁度、日本語の濁点や半濁点に近い. 日本語のローマ字表記もこれにならって考へてみる.

行	カ	ガ	サ	ザ	サ [°]	タ	ダ	ハ	パ	バ
用字 1	k	ĸ	s	š	š̌	t	ť	p̌	p	p̌
用字 2	ǧ	g	ž	z	ž	ď	d	b̌	b̌	b

用字 1 は無声音を主に、用字 2 は有声音を主にした.
サ[°] はチャ行を指す. ナ行, マ行, ラ行は有声音しかない.

点なし・濁点・半濁点の関係が無声音, 有声音の対応を完全には一致してゐないため, 強引な対応になってゐるところがある.

IX. 20 変音符付ヘボン風ローマ字 (思考実験)

ここで云ふヘボン風といふのは、音韻を表記するのではなく、一々の音について辨别しやうといふ姿勢を指す. ヘボン式で書きわけた, シ shi, チ chi, ツ tsu, ジ ji, フ fu 等について変音符を使って表現しようといふのが、この項目の趣旨である.

音	シ	ジ	ツ	チ	ニ	フ	ホ	ヒ
子音の用字	š	ž, ĵ	ts, c	č, tš	ñ, ñ	f, f̌, f̂	x, ȟ	š, ȟ

この表記法はポーランド語やチェコ語, スロバキア語, エスペラントのアイディアに由来する. たとへば, [j] はポーランド語ではš, チェコ語やスロバキア語, それにキリル文字の翻字規則の国連式および ISO9 ではš が用ゐられる. エスペラントではs である.

変音符は文字の種類を削減するためには、一種類に絞ることもできる.

IX. 21 Tokyo は日本語のローマ字表記か英語か

Tokyo は日本語のローマ字表記か英語か—という議論がある. 地名の項で Cairo はエジプトの首都のアラビア語表記ではなくて, 英語(あるいは欧米での通用)標記だという話をした. 同じことは東京 Tokyo にも云へる. 規則に忠実なヘボン式でも近衛訓令式でも Tokyo にはならない. Tōkyō と Tôkyō である. 当用仮名ずかいの翻字では Toukyou であり, 復古仮名遣の翻字では Toukyau となる. それが Tokyo となるのは, 端的に云ってしまへば英字新聞で Tokyo となっているからで, 英語圏で字音符が付かないためだ. 英語圏では Dvořák は Dvorak になる. これを日本語ではドボラックのように聞こえる. しかし原語(チェコ語)から日本語に直した場合には

ドボルザークとなる。ドボルザークは作曲家, ドボラックはキーボード配列改良論者である。もちろん別人だが名前として同じである。米国の印刷物では, このように字音符が省略されることが多い。欧州の印刷物では字音符は残される。それは欧州の言語のほとんどが字音符を使い, 拡張ラテン文字 (øとかæ, œ) を用いているからだ (もちろんキリル文字圏やギリシャ文字圏は除く)。

これまで私を含め多くの人は Tokyo は日本語のローマ字綴り (変則的な) だと思っていたが, 実は英語表記だと思ったほうがいいのではないか。この考へに従へば, 外務省のパスポート方式も道路標識も, 英語表記をしているのであって日本語を標記しているのではないということになる。もっとも, それらの標記を英語として読んでも, もとの日本語とは似ていないトンチンカンな音の配列にしかならないことは日本人にとっては問題だらう—伊達 (Date) はデイトのように。さらに, 長音問題—「浩三」が Kozo 「小僧」のようになってしまうことも問題である。外国語で満足にさういふものは表わせる筈がないのだから, 当たり前といへば当たり前であるが...

Tokyo は英語表記だと割りきってしまえば, Dong-Jing とか Tong-Gyeong と書くことも可かもしれない。それぞれ北京語と韓国語表記ある。たとへば諸外国の均衡は大きく移動すると, そのようなこともありえるかもしれない。しかし, このように相手にあわせて変えていてはキリがない, というか振り回される。それはマッピラだというのは私の意見である (しかし, 欧州では国境附近の街では帰属が代わるたびに街の名前が変ってきたというところが多い)。

相手が勝手に自分たちの使いやすい呼称を用いるのは, 既成事実としてある場合は仕方ない場合が多い。英国人はドイツを自称の Deutchland と呼ばずに Germany と呼んでいる。フランス人は armani と読んでいる。アルマーニはもともととはドイツという意味ではない。ドイツの昔の一部族の名前にすぎない。薩摩といつて日本を指すやうなものだ。でも, フランス人にとっては長年, ドイツの薩摩が日本だったのだ。外国に自称通りに呼べと強制することはできない。しかし, こちらから迎合することはないのではないか, というのが私の意見である。

逆に, かういふことを考へてみればよい。日本が中国の街の全てにもとの名称と全く関係のない日本語名称を与へていたら, 中国人はどう思ふだらうか, 侵略の意図ありと思はれても仕方ないだらう。日本の地名にまったく関係のないロシア語の名前が与へられていたら, よい気はすまい¹⁰⁷。日本は頼まれもしないのに, わざわざ, ある特定の国の言語の表記をしているのである (といって, その言語の話者にも発音できない表記であることがお笑いだが)。自分たちが使いやすい呼称はあくまで, 低レベルにどどめるべきである (首都などの著名な都市や観光地など)。

ところで, ショーン・コネリーのショーンは Sean と綴る。スコットランドのゲール語の綴り方である。一方, 映画シェーンは Shane と綴る。実は同じ名前である。シェーンも, もともととは Sean だったが, 後参の移民ゆゑの立場の弱さで (筆者の憶測), 名前を英語風に綴りなおしたのである。Sean の英語表記といったらいいのだらうか。本人に落度はない, それどころか正義と勇気の人物であるのに西部をさす

¹⁰⁷ ちなみに, ポルトガルの歴史地図には, 16 世紀にポルトガルが支配した地域として, ブラジルやマラッカ, ゴアに加へて西日本も含まれてゐる。それを根拠にポルトガルが西日本の領有権を主張することはないだらう。むしろ過去の反映を大きく見せたい心境なのだらう。ポルトガルの枠組では信長はポルトガルの代官なのかもしれない

らう幸薄い人, それが Shane である. Sirakawa と云っておけばよいものを, 自分から Shirakara を綴る, 私はそこに同じく Shane の悲哀を見るのである (ゲール語の Sean は硬口蓋化により [s] が [ʃ] になっているのに表記は s のままだとふことも同じである).

IX. 22 真正英語式ローマ字

前述したやうにヘボン式は表音式ではない. ヘボン式は英語の音韻で区別してゐる子音を英語風に, 母音は独伊西葡風に記述したもので, 表音式といふのは, 音声学的に弁別できる音を違ふ文字で記述することである. であるからここで述べる真正英語式は表音式ではなく, 英語で弁別してゐる音の子音母音も含めて英語風に記述することである. 似非英語と考へればよいだらう. たとへば硬口蓋化した ni と硬口蓋化してゐない ni とは音声学的には区別される (伊語では gni と ni, 葡語では nhi と ni.) けれども英語では区別しないから英語式表記では区別しない.

英語のアルファベットは表音的ではなく, 不規則でどう発音するかの決まりがない, と信じられてゐるが, それは誤りである. もっとも単純な規則はラテン語であつて, イタリア語は多少の例外的規則 (ci, ce, chi, che 等) がある. 独西葡も大体簡単に多少例外的な規則があるくらゐだが, 英語は異常に繁雑である. 繁雑であるといふことは規則がないといふことを意味しない. 英語はフランス語以上に繁雑なので一見不規則に見えるだけだ. もっともノルマンフレンチ起源の語はそれがノルマンフレンチ起源と知らない場合は不規則といつてもいいかもしれない.

英語の母音の音価は, 文字の前後関係で異つた音価を示す. たとへば man, mac, mad のやうに閉音節 (子音で終はる音節) の母音は本来の音価, この場合は「ア」に近い音を示すが, mania[meinia], making[meikin] のやうに開音節 (母音で終はる音節) の場合は「エイ」といふ英語のアルファベットの読み方 (A はエイ, I はアイ) で読まれる. make, made は, 最後の e が黙字であるから閉音節のはずであるが, アルファベット読みがなされる. 日本語で伊勢を ise と綴れば, ice と同じなつて, 「アイス」のやうに発音されるのはこのためである. 伊達も date と綴れば, 「ダテ」とは読まず, 「デイト」になるだらう. これらは大母音推移の所為であるが, この語は大母音推移の前は開音節であつたわけで, 今も開音節として発音される. 最後の e を閉音節ではないことの符号にしてゐると考へれば, アルファベット読みに納得がいく. madam の最初の a は一見開音節に見えるが, 音節に区切ると mad·am であつて, 最初の a は閉音節の母音になる. だから [mædəm] になる. このやうに音節の区切位置によつて発音が異なるのは面倒であるが, 逆にいふと音節がわかれば発音は基本的には一意に決まる.

日本語を表記するのに英語の音節を理解しなければいけないのは話が違ふ気がするが, 英語式なのであるから当然英語の音節の知識は必要である. 日本語は全て開音節だが, もちろん日本語の音節は関係ない. 英語の音節の基本は, まづ, 二重母音を示す複合母音 (ou, ay, ai, ui, ie, ea 等) を分綴してはいけない. 二重母音は日本語のカナ表記を見た感覚では 2 音節に感じる (マ・ウ・ス) が, 英語 (mouse) では一つの母音であり, [au] は [a]+[u] ではなく [a] の形で発音を開始して [u] の形で終はる発音

で「アウ」とは似て非なる音である。次に, $-CC-$ の文字列は $-C \cdot C-$ に分かれること。 $-V_1CV_2-$ の音節は V_1 が弱い (はっきり発音されない) 母音なら $-V_1 \cdot CV_2-$ になり, V_1 が強い (アクセントがあるかはっきり発音される) 母音の場合は $-V_1C \cdot V_2-$ となる。強音節と弱音節とで母音の発音のされ方が異なるから, アクセントがどこにくるか, ストレス (強勢) の知識は必要である。開音節でも弱音節であれば英字読みではなく曖昧母音 [ə] になる。 $má \cdot jor[meiðə]$ は接尾語がつくと分節がかはり, $máj \cdot es \cdot ty[mæðəsti]$ になるが, アクセントの位置がかはると $ma \cdot jór \cdot i \cdot ty[mæðərəti]$ と ma の a は曖昧母音になる。

英語音節の簡便判別法: まづ母音に印をつける。

第一母音の前に子音がある場合は, その子音は第一母音につく。

2 母音に挟まれた子音は後の母音につく。

子音が2つ以上の場合も基本的には後の母音に付けるが

習慣的に不可能な場合 (英語音韻で許されない重子音) は

分解して, 前と後の母音に付ける。その場合にもなるべく

後の母音につくやうにする (三重子音以上の場合)。

例: $maken > mAkEn > ma \cdot ken$

$aspen > AspEn > a \cdot spen$ (spV は英語音韻として可能な故)

$algebra > AlgEbrA > al \cdot ge \cdot bra$ (lgV は英語音韻として不可, br は可)

また, 音価がころころ変はるのは母音だけでなく子音も後続の母音によって音価が変はるので注意が必要である。 g は i や e の音の前で硬口蓋化して j と同じ音 [ʃ] になるので, ギのつもりで gi , ゲのつもりで ge としないやうに注意。合拗音 (グウィ, グウェ) みたいになるが gui , gue としなければいけない。 s も sio といふ綴り方では時に, sho のやうに発音される。 i が前の s を硬口蓋化するためである。 i そのものは硬口蓋化を示す符合になり発音されない。このやうに特に硬口蓋化には注意しなければいけない。なほ, $sion$ (たとへば紫苑のつもりで) は上述のとほり [ʃən] (shon) の発音になるが, $zion$ (たとへば字音のつもりで) は s が有声になっただけだが [ʒən] でも [zion] でもなく [zaɪən] である。 $tion$ (知恩院のつもりで) も [tʃən] どころか [ʃən] の発音になる。ややこしいが, これらの知識が身につけば準備は整ふ。

英語では基本的に開音節の時はアルファベット読みになるので, a はエイ, i はアイ, u はユー, e はイー, o はオウ (オーではない) に対応させることができる。閉音節の時は独伊西葡風だが若干変異があつて, a はア, i はイ, e はエだが, u はウではなくてアに対応させることができる。ウは英語では oo で表現するしかないだらう。まとめると

母音	a	i	u	e	o	oo
閉音節 (拉語風)	æ	i	ʌ	e	ɑ	ɔ:
開音節 (英字読み)	ei	ai	ju:	i:	ou	u となる。

発音記号の紹介の記事でかういっては変だが英語に関して云へば, 発音記号よりも Webster や American Heritage のやうなアメリカの辞書が示す独自形式の発音記号のほうがわかりやすい (POD など英国の辞書の多くは IPA)。それは英字の読み

を $\bar{v}$ とし, ラテン語風の母音を単に v (v は母音の意)で示すのである. これと曖昧母音があれば大抵の単語の母音発音は表記できる. しばらく自分で発音の表記に使用してみると使ひ勝手がよいことに気がつく. 私は昔, 英字読みする母音を大文字, ラテン語風の読みを小文字で発音を表記してゐたことがある. けっこう便利だった. 本の文字にそのままアクセント記号を打てば(強勢に線を引く), 英字読みかラテン語読みか類推できる. ただし, かういふ表記の便利さは英語に限る. 伊独西葡語ではアルファベットの読みかたにはたいてい一種類で, それさへ知ってゐれば単語の読み方はわかる. だから発音記号はいらない. 仏語も発音はアルファベットの音価の他に特殊な複合母音され覚えれば発音自体はわかる. 問題はどれが黙字で, どういふ時にリエゾンするかであつて, 発音記号はあまり助けにならない. 日本語もカナさへ覚えてしまへば発音記号/ローマ字はいらないのと同じである. 発音記号が本領を発揮するのは音を細かく論じる時と多言語環境で発音を表記しなければいけない時である. 二言語間ならまだなくても可能だが, 多言語になると統一の表記システムがないとどこの言語でどこの言葉の音を示してゐるのか繁雑になる. Xavier はザビエルなのか, サビエルなのか, シャビエルなのか, それともグザビエルなのか, ゼィヴァなのかかもしれないが.

さて, o はアメリカ英語では特定の子音の配置でアになり(正確には $[a]$. hot は $[\text{hat}]$. ただし, この音がアに対応させられるかは微妙である. どちらかといふとオの口をしてアと云ふに近い), イギリス英語ではオとなり, ややこしい. 英語の場合, 子音はどの方言でも大体共通してゐるが母音はまちまちだから, どの方言を模範とするか最初に決めておかなければいけない. 複合母音はまた特別の発音をされるので, 注意が必要である. ou は多くの場合, アウだがオウのこともある. au は逆にオーで, ei/ey はアイかエイ, ie はイーで ai/ay はエイ. eu はユーで, oa はオウに対応させられる. 二種類候補があるものはどちらで読まれるか一意に決定しないので使つてはいけないし, 母音の連続により結果的に複合母音に見える文字列は二重母音してしまふが, それでいいか注意が必要である. たとへば Queen の歌にある Teotoriatte(手を取りあつて)は eo と ia が二重母音化してゐる. oshieoidaki(教えを抱き)は $ieoi$ が四重母音(?) になって英語では発音できない[これらの例は(猪塚・猪塚, 2003)による]. それを避けるためには半母音の y や w を適宜挿入することが必要である. たとへば上野(うえの)は $ueno$ と綴ると ue が二重母音(多分, $[ju:]$)になり「ウエ」とは異なつてしまふ. ひとつの解決策として uye と表記すれば $[jujenou]$ (ユイエノウ)と読める. wooyenno がもつともウエノに近いだらう. 英語(式ローマ字)ではいくつかの可能な綴り方, 読み方がありえるので, それにも注意が必要である. たとへばオメンと綴りたくて $women$ と書けば英語話者なら誰でも $[wimen]$ のやうに読むに決まつてゐる.

例として佐藤(さとう)を英語式ローマ字で綴ってみる. Sato では a も o も開音節になりアルファベット読みになる. そのためセイトウのやうに聞こえる. 開音節でアに対応させられる母音はないので前半はどうしても閉音節にしなければいけない. Satto と綴ると sat.to に区切られるから $[\text{sætou}]$ になる. Sutto では sut.to に区切られるから $[\text{sætou}]$ となる. 須藤(すとう)は Suto ではシュートウになつてしまふので, Sootto になる. 斎藤(さいとう)は Sito でいい, 死闘みたいだが, 最初の i は開音節

なのでアイに対応するためである。死闘(しとう)は Sitto または Seto。また、開音節でアに対応させられる母音はないと書いたが、たとへば佐藤(さとう)で前半が弱音節なら e が曖昧母音 [ə] の音価を示すから、アに対応させられないこともない。その場合は「さとう」は Setó になる。まるで瀬戸さんみたいだが気にしてはいけない。ただし、Seto と綴った場合(アクセントがないことに注意)、英語では最初が強音節になり、シートウになってしまうので、やっぱり失敗である。瀬戸(せと)は Setto または Set(最後のオは無視)となる。

ところで、佐藤を Satto と書くと既存のローマ字ではサットと tto と促音(「いった」の「っ」にあたる音。ローマ字ではヘボン式系統・日本式系統ともに itta という風に子音を重ねることで表現する)として読んでしまふのが促音は英語にはないのだから、英語式ローマ字で表現できない。「居た」と「云った」は同じ 'itta' になる。長音は母音に r と付けて対応するか、二重母音で近いのを宛てる。東京はトウキョウと見倣して Tokyo (そのまま)。

音節は前から区切られるのではなく、単語全体ないし後から区切られるので注意が必要である。たとへば, site は開音節なので [sait] (あへてカナ書きすればサイト)だが, situate は sit·uate になるので [sitfueit] スイチュエイトになる。このやうに音節の区切りは日本語話者には判別が難しい上、日本語は一語が英語に比べて長くなる傾向があり、英語式になほした時に音節の区切りを正確に把握することは更に難しくなる(英語は長い音節の語を好まない)ので、なるべく母音は省略(無声化した母音)し、分けれる語は分けて書くことが重要になる。倉敷は「クラシキ」だがクに母音は不要と考へ、シの音節が難しいので分けて krashy-kee か。新橋は普通にヘボン式で綴ると Shimbashi となるが、音節は shim·ba·shi になるため、シンベイシを意味することになる。そのため Shimbasshy とする。横浜は Yokkohamma か。Yokko-herma でも可。町田はヘボン式で Machida と綴られるが、Mac Hida 「マック ハイダ」のやうに音節が分かれてしまふので、Machda とする(ch に母音は不要との考へ)か Matchieda(mat·chieda と分節)で表記することになる。ただし前者は ch が [tʃ] にならずに [k] になってしまつてマックダになる可能性がある。薩摩は satsuma ではセイチューマ/サトシューマ? になるので, suttooma にする。suts-mar でもいいかもしれない。北海道は hokkaido とするとホッケイドウになるので, hokkido(hok·kido) とする。先程の耕平氏は kauhay か。筆者の名ツジノタクミは Ts'-jean-no Tuck-me, Ts'Gieno Tuckmee? 基本的にアメリカ人が原住民の部族や地名を表記したやうな綴りになる。

英語式ローマ字を実践するためには、英語の音韻体系を理解してゐなければいけない。それは極めて当たり前のことで、英語式ローマ字なのに英語を知らなくても書けるわけではない。英語式ローマ字は日本式ローマ字における綴り字と発音の一部変則的な関係(ti と書いてチなど)以上に繁雑で理解が困難である。それは繁雑な理由が日本語とは関係のない英語の音韻体系の知識を要するところにある。かつ、出来上がったものは当然ながら日本語をまったく不完全に示したものである。なんだか日本語が破壊されていくやうな感じがするのは筆者だけではないだらう。しかし、英語式の前提として日本語のことは考へないことにしてゐるのだから、ここに来てそんなことは気にしてはいけない。

なほ、私自身はこの方法を日本語を表記する方法としては反対だし、不可能だと考へてゐる。ただし簡便法として日本に興味がないが息むなく日本の地名を発声しなければいけない英語話者に伝達する手段としては有効だらうと考へる。また、日本語話者が英語の音韻体系を学ぶためのエクササイズとしてはおもしろいと思つてゐる。それでも、こんなローマ字綴り方が聊かでも公の場で使はれることは父祖と子孫に対して恥づかしく思ふ。

IX. 23 ヘボン式ローマ字およびポルトガル式ローマ字の擁護

上述の論では、ヘボン式ローマ字についての批判が含まれてゐたが、だからといってヘボン式ローマ字は根本的にまちがつてゐるといふことではない。ヘボン式ローマ字は英語の子音の枠組の範囲内で日本語の音声を記述するのに適してゐるし、音声学的に必要な弁別を加へ、かつ、日本語の音節性を尊重した記述法(上述の真正英語式を参照。完全に英語式記述だと日本語の音節構造は破壊されるが、ヘボンはさうしなかつた)を構築したヘボン氏の業績は高く評価せねばならない¹⁰⁸。また、同様に、室町後期のポルトガル人のローマ字も高く評価される。自分の言葉の発音の変遷は自分の言葉では記述しにくい(もちろん、韻文や音声学的な当時著作による記述もあるが)彼らのローマ字があつたからこそ、室町〜江戸時代の日本語の発音についての手掛りが得られるのである。

IX. 23.1 発展ヘボン式(私案)

さて、ヘボン式ローマ字は音声学的な弁別を与へるのに便利な道具であるが、一般的な音声学としては更に辨別できたほうが望ましい。たとへば、ジズ(zの系統)とヂヅ(dzの系統)を弁別してゐないところが弱点の一つである。現代日本人はほとんど区別できないから区別しないといふのも一つの考へ方であるが、今は音声学的な記述を与へる簡便法としての利用方法を考へてゐるので、弁別するための方法を考へる。

これまで知られてゐる簡便法として、[j]をSと[z]をZ、[ɸ]をFとするものがある。これを借用すれば、サシスはsa, Si, su, ザジズはza, Zi, zu, タチツはta, tSi, tsu, ダヂヅはda, dZi, dzuとなる。ハヒフはha, hi, Fuである。大文字を他の用途(固有名の語頭など)に使へぬ欠点はあるが、発音を簡便に記すには適してゐる。これは英語風といふよりもIPA風といったほうがいいかもしれない。もし大文字を使はないのなら、シはshiだが、ジはzhiとし、チはtshi, チはdzhiのやうになる。英語ではジは、zhiと表記せずにjかgeとギの硬口蓋化で示すし(それでもgeはヂに近い[ɟ]なのだけど。ここではジとヂを書きわけることが重要なので、gをジの子音としてみる)。tshiといふ表記もないだらう。zhがshの有声音だからといふのは英語風でもあるが全体的にIPA風かもしれない。キリル文字のローマ字翻字では、[z]の硬口蓋化音[ʒ]を示す文字はzhで翻字される。chは何と読むのか英語の中でもい

¹⁰⁸ 実際、英語の母音は方言差が著しいので、英語式にするとしても、どれ(どの地方発音)を基準にするかでまた悩む結果になったかもしれない。

いろいろあり過ぎるので用ゐるのは混乱を招くが、ヘボン式を発展的継承するのであれば「チ」の子音には ch で當てるのが妥當である。

j は英語本来の音価の [ɟ] として、ヂの子音として用ゐることもできるし、ジヂを区別しない時に用ゐることもできる。発音としても「ジ」の文字は、現代日本語では [ʒ] ではなくて [ɟ] となつてをり、ジヂは表記としては基本的には「ジ」¹⁰⁹だが、音価としては「ヂ」に収斂してゐる¹¹⁰。ジヂまとめて ji とする場合は現行のヘボン式表記と矛盾しないが、その場合でも音声学的にはジヂを区別できる表記が必要である。ヂを ji とした場合は、ジは zhi とすべきだらうし、ジのはうを ji にする(フランス語や葡語のやうに)なら、ヂは dji となるだらう。ji をヂジの区別をしない現行の使ひ方をそのまま採用するなら、ジを zhi とし、ヂを dgi で受けることも考へられる。ここでヂを dji にしてもよいが、さうするとジに ji を連想しやすいので避けるべきだらう。shi-zhi との対応からすれば、ヂは dzhi または dshi が音声学的には望ましい。チに ch を採用するのであれば、C の有声音の G を借用して、gh とするのが妥當かもしれないが、これは後述の古英語風 gh と衝突する上に、[ɟ] を gh と示す英語の例を筆者は知らない。dh は that の th の音を示すのに一般的に英語圏で使はれてゐるのでここでは使へない。上記のうち、もっとも妥當な案は dgi である。英語に存在し、文字数が長くない。

ズは zu, ズは dzu で表記できるが、ジヂと同じくズヅを区別しない時の表記法は別に考へなければいけない。候補に xu を考へたが、x は ch と同じくいろいろに読めるので却下される。

他に硬口蓋化した二の音もヘボン式では弁別してゐないが、音声学的にはシが shi になるのと同じくらゐの重要度がある違ひであつて、弁別が必要である。ポルトガル式に nhi が適当かもしれない。子音に付加される h は硬口蓋化を示すといふやうな統一性を与へられる。ただし、英語の h はいろいろな使はれ方をするので、音声学的な符号以上の意味はない(gh, wh, kh, ph, th など)。古典的なラテン語の翻字規則では、また IPA では h は有気音を示す符号をして使はれる [p^h] ので、これと衝突する。日本語でも稀に有気音を扱ふ時があるので、硬口蓋化を示すために h を用ゐることは有気音の表記を妨害することになる。個人的には硬口蓋化の音符には j を用ゐる方が望ましいと考へるが、ヘボン式の継承・発展のためには h にすべきと判断する。

二とくれば次はヒである。ヒの子音 [ç] はドイツ語にはある(例. könig, ich)が、英語にはない音で、英語では [k] に聞こえるが、だからといってヒを ki で示すとカ行は破綻するので絶対に採用はできない。ここでは、あくまで音声学的に妥當な表記を考へてゐる。ヘボン式はヒを「ki」と表記する愚をなさず、「hi」で表記してゐる。これはこれで悪くはないが、喉音の h の he[hi:] と硬口蓋音である日本語の「ヒ」は異なるので辨別したい。が、英語にない音なので表記に苦しむ。日本語のヒーは英語の he ではなくて、どちらかといふと she のやうに聞かれてしまふ(彼と彼女を間違へたら、えらいこっちゃ)。

¹⁰⁹例外も多く、鼻血は「はなぢ」

¹¹⁰英語では j, g はどちらも [ɟ] で、仏語ではどちらも [ʒ] である。イタリア語には [ɟ] しかない。葡語には [ʒ] しかない。どうも音声学的には [ɟ] と [textyogh] はどちらか一つに収斂する傾向があるやうだ。

もし、ホの子音を x(IPA では [x] は軟口蓋摩擦音, ドイツ語の auch のホ) とするならば、その硬口蓋化した音といふことで、xh とすることができるのだが、生憎、x は ks/gz だったり、s/z だったり、[j] だったり安定してゐない。それを見越して x を用ゐるかどうかは即断できない問題である。それに xh ってなにか一見してわからない。ヘボン式の子音は英語式といふ原則に大きく外れる¹¹¹。あるいは h の硬口蓋化と考へて hhi とすることも不可能ではない。たとへば、kohhi はコッヒになりかねないが、この綴り方を遵守するならコッヒなら Kohhhi になる¹¹²。また、英語風の綴り方に、[x] を kh で翻字する例がロシアにはある(オホーツクは Okhotsk)。また、kh は古典ギリシャ語のラテン翻字では χ だったが、現在のギリシャ語では [x] で前舌母音 (i,e) の前では [ç] となつてゐる。これを借用すれば、ヒは khi, ホは kho となる。

ところで古英語の gh の音価は [x] と [ç] (英語としては同じ音韻) を指した (night 「ナヒト」, cnight 「クナヒト」 (knight), brōghte 「ブローハト」 (brought))¹¹³。これを無理¹¹⁴に適用してヒを ghi とすることも可能性をしては考へられよう。kh か gh が妥当な表記といへる。ただし、kh も gh も英語風の翻字で k や g の帯気音として使はれる (アラビア語やサンスクリット等) ので、どちらを採用するにしても表記としてどこかの英語風表記と衝突することは避けられない。

なほ、フの子音は [f] ではないが、ヘボン式の考へ方に基づいて fu で表記する。両唇音と唇歯音とを辨別することはヘボン式を発展させるためには必要ではないからである。音声学的には、ph や wh としておいたほうがよいかもしれない。

ヘボン式とポルトガル式(室町時代の)は、チをどちらも chi と表記し、ツを tsu と tçu, 英ジが ji で、葡ヂが ji のやうに結構用字が似てをり体系を混乱させない利便性がある(ただし、シは shi と xi で異なる。また室町時代はセは xe(シェ/she)であつた)。イタリア語の gni を導入すると、そこだけイタリア語風になって混乱する。たとへばイタリア語でシは sci となる。ポルトガル式やイタリア式は力行を普通 c で受けるが c は硬口蓋化してゐて、相手(葡語伊語)の都合でいろいろになる欠点がある。葡語式は ca, qui, cu, que, co となり、伊語では ca, chi, cu, che, co となる。力行はタ行に比べると音声としては統一性が高いのに表記の上では統一性がなくなる。また、葡語ではクィとキ、クェとケの表記上の弁別はできない(qui を qi, que を qe に統一すれば対応できる)。ゲルマン語(英蘭独)では力行は k で受けもち、これは硬口蓋化しないので、日本語の力行も全てで統一できる。日本語は概して英語よりは葡語伊語の音韻体系のほうが近いが、力行はゲルマン語風に表記したほうが適してゐる(とはいへ、葡語伊語では k を普通使はないといふだけで、k が [k] の音価だから齟齬は生じない)。かうして考察すると、ヘボン式はよく発音を表はしてゐるのがわかる。残念ながら英語を連想させてしまつて英語風に読まれる嫌ひがあるが、結局

¹¹¹ もつとも、子音は英語式といふ原則を遵守すれば現在のヘボン式が到達点となつてそれ以上はない。それ以上はある意味、英語風の音声学的な拡張といへる。

¹¹² イッヒッヒ

¹¹³ 厳密に云へば古英語では niht, cniht, brōhte と綴つた。それは日本語のタ行では [t][ç][ts] を同じ音素と見なされてゐるやうに、[h][x][ç] は古英語としては同じ音素と見なされたためである。g の挿入はその 3 音が同じ音素(音韻)ではなくなった時に生じた。そして最後は弱化により [ç] は音を失ない gh はただの黙字になり [x] は [f] に転呼した。

¹¹⁴ 古英語のこの音韻だけを抜粋するのは無理がある

どうやっても日本語に興味や知識がない人は, それぞれの言語風を読む. 日本語を学ぶ人だけが正しい発音がわかる. それに, この種のローマ字は発音を論じる簡便法として考へてゐるので, 外国語話者への伝達は論点の逸脱である.

発展的ヘボン式 (案)					
行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
あ行	あ a	い i	う u	え e	お o
か行	か ka	クイ ki	く ku	け ke	こ ko
き行	キャ kya	き kyi	キュ kyu	キエ kye	キョ kyo
さ行	さ sa	スイ si	す su	せ se	そ so
し行	シャ sha	し shi	シュ shu	シェ she	ショ sho
た行	た ta	ティ ti	トウ tu	て te	と to
ち行	チャ cha	ち chi†	チュ chu	チェ che	チョ cho
つ行	ツア tsa	ツイ tsi	つ tsu	ツエ tse	ツオ tso
な行	な na	ヌイ ni	ぬ nu	ね ne	の no
に行	ニヤ nha	に nhi	ニュ nhu	ニエ nhe	ニョ nho
は行	は ha	ヘイ hi	ヘウ hu	へ he	ほ ho
ひ行	ヒヤ gha	ひ ghi†	ヒュ ghu	ヒエ ghe	ヒョ gho
ふ行	ファ fa	フィ fi	ふ fu	フェ fe	フォ fo
ま行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
や行	や ya	—	ゆ yu	(イエ)ye	よ yo
ら行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
わ行	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo
が行	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ざ行	ざ dza	じ (ぢ) ji	ず (づ) dzu	ぜ dze	ぞ dzo
* ざ行	ざ za	じ zhi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
だ行	だ da	(ぢ dgi)	(づ dzu)	で de	ど do
ぱ行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
ば行	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo

ザ行は二種類用意した. *ザ行は翻字用の表記で, ザ行は表音的なザ行である. ヘボン式の精神からいへば表音的な表記のほうが正統だらう. ザ行を dz で受けてゐるのには理由がある. ザ行はしばしば, 特に語中で [dʒ] の音声になってをり音声の表記としては dz が近い. 語頭であれば [z] であるので, 語頭のザ行だけ z とすることもできる. なほ, 日本語としては z と dz を区別してゐない. 拗音は j, 音声記号では [dʒ] が該当する. したがって, ji はジヂ両方の発音を指す. 現代日本語ではチジは同じ発音だから. 他に, ジを ji としてヂを dji にする方法や, 逆にヂを ji としてジを zhi とする方法もあるだらう. ここでは翻字用のヂに dgi を用意した. †のうち ch は音声学的には tsh のほうが望ましい. gh は古英語風の案で, キリル文字の翻字のやうに kh と表記する案もある. ここではより英語風といふことで古英語風の表記を採用した. なほ, 古英語では長

音も表記し, 日本語を表記するには相性がよいと考えられる. それでも古英語には拗音を導く介子音 *y* のような存在はない. *y* は *i* の異体字で, 語末にだけ表れる (not studi, but study, and studies) と綴字法を考慮すると, 介子音の *y* は英語としては, はなはだ irregular である.

IX. 23.2 通用ヘボン式—その強さの源

世の中のローマ字はヘボン式系統が席卷してゐる. これまで述べた厳密なヘボン式は鐵道省系のものだけで他はいろいろである. ここでは色々なヘボン系 (風) と総称して通用ヘボン式と呼んでゐる. 通用ヘボン式は強い. 定義が広いせいもあるが, 世の中のローマ字はほとんど通用ヘボン式といつてもよい. この通用ヘボン式に対して日本式系統支持者は, 欠点を指摘してきたが一向に衰えることはない. 戦前には日本式系統が有利に関心を寄せてきた人も高かった (柿本, 2003) ことと考えると, 占領政策¹¹⁵や国語政策・技術革新¹¹⁶などの影響も考えられるが, ここでは別の原因説を提起したい.

ヘボン式 (通用) の強さは雑種の強さである. ヘボン式の勝利は, いいかげんさの勝利である. 原理主義とは反対の方向を向いてゐるところである. ヘボン式はどこが雑種か? まづ母音と子音の体系の不調和にある. 英語風の子音に伊語風の母音を配置してゐる. 純系ならイタリア語風に全部まとめるか, 全部英語風にまとめるかするだらう (真正英語式ローマ字参照). 原則の徹底といふことでは後退してゐる. 表音的といいながら, これまで述べてきたやうに, 表音性が徹底してゐるわけではない. シ, チ, ツ, フは区別して表記してゐるのに, ヒ, ニは区別してゐない. 調音点の違いといふならば, それらは同行の他の音に対して解剖学的に優位な調音点の違いを示す. また, 語頭のザと途中のザを区別しないのに, 唇音の前の「ン」とそれ以外の「ン」を区別してゐる. 「ン」について云へば, 唇音とそれ以外は区別してゐるのに, 語末や鼻母音については区別してゐない. このやうにヘボン式は表音としても不徹底である. 真正ヘボン式では長音を表記したが, 通用ヘボン式では無視する. 無視すると困る人もゐるので, その時は *H* を付加する. 大矢が *Ohya*, オヒヤ? になることもあるが, そんなことは気にしない. しかも, かういふ *h* の使い方は英語にはない. このやうに理論的にはメチャメチャなのが通用ヘボン式である. メチャメチャなのは理論家からは欠点とされるが, 世間に広がるには, 実は, メチャメチャなことは大きな魅力である. Perl といふメジャーな計算機言語は, 文法がメチャクチャだが, それに対して, かう云はれてゐる.

Perl is messy because the world is messy.

言葉の messy さは世界の messy さの反映だといふわけである¹¹⁷. 世界は messy なのか? ある意味さうかもしれない. しかし, 完全にメチャクチャではない. 世間や

¹¹⁵ 黒船直後はヘボン式でそれから日本式が起り, 敗戦後は再びヘボン式となった. 日本は関係する外国の影響を自ら取り込む傾向がある.

¹¹⁶ 日本語ワープロの普及以降, 国字ローマ字論を検討する必要がほとんどなくなった.

¹¹⁷ 筆者個人は Perl はあまり使はない. といふのは後でプログラムを読み返して見て, Perl は messy なので, なんて書いてあるか理解に時間がかかるからだ. 個人的には後で読みなほしても理解しやすい, Python のほうが好みである.

自然を考へてみればよい。世間や自然は、ある意味でメチャメチャなところがある。いつ雨が降るかもよくわからない。世間の動向はコロコロかわる。かといって、まったくのランダムではない。まったくのランダムであつたらなら、なにも人間は対処できないので、社会も科学も発展しなかつたらう。まったくのランダムではないけれど、ギチギチに法則的ではない。これが世間であり、自然である。ここに人間がなにかするスキがある。人間がなにかしらできるので、社会なり科学なりが成立しうる。言語もさうだ。言語学は文系の物理学とも云はれ、厳密な科学的法則が通用するとされてゐるが、それでも例外は多い。法則的あるいは科学的な表記を採用したとしても、かならず、その表記では矛盾してしまふ言葉が存在するし、さういふ言葉を駆逐したとしても、別に表はれる。言葉といふものはさういふものだ。言葉は自然だから。表記は、完全に法則的であつては言葉が硬直するが、完全にメチャメチャ(無秩序)であつたら表記する意味がない。ヘボン式は適度にメチャメチャ、適度に秩序がある。もとのカナがまったく復元不可能なほどメチャクチャではない。それでゐて適度に表音的、ところどころ例外的綴(ch,ts,sh,f,mb)があつて異国情緒(米国情緒)と音声学情緒を楽しむにはもってこいで、なんとなく英語らしい雰囲気を楽しむことができる。そこには深いものはないので、なににせよ研究すると表記に不満をもつやうになるが、もともと「らしさ」を楽しむだけのもの。理論的に破綻してゐるとか日本語としてしておかしい、英語としてもおかしいといふ批判はあたらない、もともと浅はかなものだ。真実、英語を身につけたいなら通用ヘボン式に留まってゐてはダメだ。日本語の表記とか異邦人が日本語学習を志す場合は假名漢字表記になるし、音声表記を極めたいなら IPA になる。音韻表記を極めたいとか、発音はどうでもよいのでとにかく翻字だけといふ極め方もあるだらう。なににせよ極めたい人には通用ヘボン式はまことに不備である。不備は、裏返せばある程度は満してゐるといふこと、不備さゆゑに通用(とりあへず使ふ、いいかげんに使ふといふ意味)にはもってこいである。通用ヘボン式が日本を席卷するのは、その正しさにあるのではなくて、そのいいかげんさにあるのである。

IX. 24 日本のローマ字表記が統一されないわけ

日本のローマ字表記が統一されない理由はいろいろある。縦割りの省庁や、これまでのローマ字表記の蓄積があるので、簡単には変へられないなど。しかし、最大の統一されない理由は、統一しなくてもなんとかなるからだ。どんな表記法であつても、そんなに困るわけではない。多少は困るかもしれない。それはつまり、大部分では困らないといふことである。給料が半額になることに比べればなんでもない。ましてや片腕をなくしたり、子供をなくすことに比べるとなんでもない。もちろん、条件がある。それは表記法が表記法である場合に限る。表記法の名に値しないものは実用上、運用困難なので、すべからく廃止または改良されるであらう。

パスポートで長音表記を無視することがしばしば話題になるが、だからといって、パスポートの通用ヘボン式表記が表記法の名にもとるわけではない。長短の区別をしないのは音韻論表記としては致命的だが、ある人物をある人物と特定するといふ目的においては、長短の無視など他の制約条件に隠れて大きな問題にはなりにくい。

たとへば、長短を区別しても同音の人もゐる(耕作, 晃作, 幸作等々)。漢字の用字違ひによる同名の場合もあることを考えると長短の区別は数ある不確定要素の一つとなってしまう(もちろん、長短を区別してほしいといふ本人の要望はよくわかる)。ある個人と特定するといふ意味においては、パスポート式はそれなりに有効である。同様に、地名のローマ字表記でもしばしば(特に道路交通標識)で長音符が省かれるが、これも利用者(多くは外国人であらう)にとって本質的に困ることはない。鏡味明克氏の調査(鏡味, 1997)によれば、67人の外国人にとってが長音符がなくて困った人はわづか9名といふ¹¹⁸。外国人は地名のローマ字の正確な発音やローマ字綴にも増して、未知の事々があるので、長音符のあるなしなどは些細なのかもしれない。特に、長音符なしの表記で、衝突してしまふことは稀である。衝突といふのは、どちらか判別できないことで、地名の例でいへば、オーサカとオサカが同じ看板に記載されるやうなケースである。たいていの場合は、オーサカの近くにオサカ/Osaka/といふ地名がないので、看板に書いてあるのがOsakaでもŌsakaでも困らない。もちろん、全国の地名で見れば大阪と小坂は長音符なしでは衝突するし、これ以外にも、飯野と猪野、飯田と井田、渡島と大島、小野と大野、緒方と大瀧と枚挙に暇がない。しかし、実際にこれらの衝突で勘違いが起きる場合は少ない。ないとは云はないが、かういふ可能性の低い衝突を切って捨てるのが長音表記無視の立場である。そもそも長音を理解してゐないかもしれない外国人にわざわざ知らない記号を付けて混乱させないといふことも長音表記無視の論点でもある。長音を知らない人に長音記号をつけても無駄であらう。日本人だって長音符を知らない人がゐる。長音符付きの表現はOhsasaと思つてゐる人も多い。メゾン一刻といふ漫画で、「豆蔵」とふ居酒屋と「マ・メゾン」といふレストランを聞き違ふ例があつた。これはかなりありさうにない状況だが、起きてしまった勘違いは詮方なし。

確かに、長短の別を表記したほうが有効性は高まるが、結局、真正ヘボン式では英字で表現できない(長音符: マクロン)ことがネックになつてゐる。そして、長短の別を表記せずとも、絶対的に困るわけではない。では翻字にしてはどうか、といふ意見もある(筆者がさうである)が、それは意見であつて定説でもなければ実績もない。

通用ヘボン式では撥音を、唇音かさうでないかで「m/nと書きわけろ」派と「常にn」派にわかれる。西洋のスペルに対する考へ方からすれば、スペルが一文字でも違へば別の語になるが、東洋の諸言語では日本以外でも、いろいろな表記法があり、アルファベットひとつの違ひは全体としては大きな問題にはなりえない(それ以前に、西洋人の感覚からして、おかしいことが一杯ある)。もちろん、さういふスペルのゆらぎが西洋人に、ある種のいいかげんさを感じさせることは否めない。しかし、ローマ字はもともと、普段使ひのものではないし、いろいろな表記法が林立してゐるので、なかなか統一できない(政府が独裁的強権でもつて強制しない限り)。

¹¹⁸ この調査結果はおもしろい。外国人にとっては長音も撥音も促音もどうでもよいといふことになつてゐる。一般の外国人を基準にローマ字を考へると、日本語の原形を留めない可能性がある。学者や宣教師などの特に熱意のある外国人は歴史的に違った反応を示してゐる。どうでもいいのは、無知あるいは無関心だからかもしれない。

IX. 25 日本のローマ字表記が統一されない深層

前項では日本のローマ字表記が統一されない理由は、統一しなくても困らないから、と書いた。しかし、統一しなくても困らないが統一したほうが利便性が増すのであれば統一するほうに移行するのが自然である。さうではなく統一されないからには統一を拒む理由があると考へるのが学徒の姿勢として自然である。筆者は学徒である。ここでは、個々の事例に特有の事情を捨象して、大局的な背景を探る。

日本には統一されないものがローマ字以外にいろいろある。ここでは特に言葉に限定して例示すると漢字がある。字体と字音である。

漢字の字体には大きくわけて常用字体系 (いはゆる新字体¹¹⁹) のものと康熙字典体系 (いはゆる旧字体) のものとあり、常用漢字として常用字体系に統一されてゐるやうに一見 見えるが、常用漢字表に掲載されてゐない所謂表外字は逆に康熙字典体を採用するやうに政治的に決められてゐる。いはゆる旧字体は消滅したわけではない。これは戦後の国語改革で生じた不統一に起源があると思はれがちだが、それ以前に書写体と説文解字系の字体との不統一としてあったことで「最近」に始まったことではない。書写体が常用字体につながり、説文解字系の字体が康熙字典につながる¹²⁰。2系統あったわけである。更に、漢字には異体字があつて、常用字体とも康熙字典体とも違ふ異体字がいろいろある。このやうに漢字の字体については歴史的に複数のシステムが並立してゐる。

字音についても複数のシステムが並立してゐる。大きなものは呉音と漢音である。知らない熟語を呉音で呼ぶか漢音で呼ぶか (あるいは訓で呼ぶか) しばしば悩むところである¹²¹。しかも、同じ熟語であっても文脈によって呉音で呼んだり、漢音で呼んだりと呼みわけする。システムを成さないが慣用音や唐宋音などの変則的な呼び方がある。遣唐使により漢音が導入され、天平 (平城京の御代) ~ 平安時代には漢音化が推進されたが結局、呉音は残ったし¹²²、呉音の出番は漢音のそれをほぼ折半してゐる。統一しないと不便といふのならローマ字の統一以前に漢字音の統一を主張すべきだが、むつかしいからか、それともあまりにも身についてゐるせいか、あまり漢字音の統一を主張する人はゐない。

他にもいくつかあげる。近世以降は漢字假名混じり文 (和漢混交文) が主座を占めたが、それ以前は漢文と和漢混交文 (あるいは純粋な假名文) が棲み分けをしてをり、並立してゐた。現在においては、いはゆる当用かなずかい (新假名) と いはゆる旧假名が並立してゐる。旧假名はかなり少数派だが、これは置いておいても、新假名であっても不統一で混乱した表記がある。一つは、ある語句を漢字で書くか、假名で書くか一定してゐないことである¹²³。検索の手間を考へると一定してゐるほうがよ

¹¹⁹ ただしこの呼称には問題がある

¹²⁰ したがって、常用字体を新字体と呼ぶことは書写体の伝統を踏まへると不適当である。問題があると上の脚注で書いた次第

¹²¹ 中国語では北京語なら北京語として1系統、上海語なら上海語として1系統である。これは2系統あるのではなく、ある方言では1系統といへる。また、韓国語は日本語の漢音とほぼ起源を同じくする漢字音1系統である。

¹²² それ以前には「止」をト、「居」をケと呼ぶ古韓音があつたが、これは「と」の元の漢字が「止」であることに残つてゐるくらゐである。埼玉の稲荷山鉄剣銘「ヲワケ」で有名

¹²³ この遣ひわけにより、漢字が多い字面では、假名を増して全体の黒密度を下げ、逆に漢字が少ない字面では重要語句を漢字にして黒密度を上げ、全体として適当な黒濃度にするといふワザが使へ

いと考える人がかなりある¹²⁴。

外来語のカナ表記も混乱してゐる。Mail はメールではなく、メールのほうが主流だが、main はメインのほうが主流であり、二重母音の表記も一定してゐない。また、英語では二重母音であるにもかかわらず、カナ書きでは短母音になってしまつてゐるもの、つまり、ローマ字呼みのカナ書きさへある。また、これは根強い、が決して主流にはならない表記法だが、聞こえたやうに書く・できるだけ近いカナで音写する派もある。これは特に英語の外来語で多い。ラテン語やイタリア語などではあまりカナで表記に揺れがない。英語に特有の複雑さでカナ表記には混乱がつきまとう。英語だけに限らないが外語は日本語の音韻体系では正確に写しとれないので、できるだけ正確にカナで転写するといふのは際限がない。で、外来語の表記はますます混乱にいたる。

言葉はクリアカットできない代物であるが、日本語の表記システムはどれもかなり複雑である。音韻が単純なのと対照的である。おそらくこれが日本語の深層なのではないか。日本語のせいにしてはいけない。日本では言語以外にも複数のシステムが並立することがよくある。土木学科と農業土木学科、機械工学科と農業機械科、経済学部と農業経済学科... 農学部ばかり例にあげたが¹²⁵他にも、似た事業を違ふ組織建てでやってゐるといふことはよくある。日本といふ文化は統一といふことを実は好いてゐないのではないか...

話はかはるが政治史の話しよう。平安時代には摂政・関白といふ制度があり、権力が2分化した。後に院政といふものができて3分化した。しばらくして鎌倉幕府ができて更に権力の系統ができた。4系統の権力構造(大きく見ると朝廷と幕府の2系統に分類できる)は結局江戸時代まで続き、明治になってやうやく単系統になる。これらの複数系において、実質には権力を掌握してゐる人間は単一系だが、だからといつても他の系が消滅することはなく、撲滅されることもなく、細々かもしれないが連綿と残った。

最後は宗教である。欽明天皇の時に佛教が百済から公傳された。いろいろ曲折はあったが日本は民族として、国として佛教を受け入れることにした(あるいは、なった)。普通ならそれで日本古来の自然崇拜は一層され(西洋世界で、キリスト教以前の多神教が目に見える形では残つてゐないやうに)、佛教1つに統一された筈である。しかし、さうはならなかった。日本古来の自然崇拜は滅びることなく、中国傳來の道教や佛教と相互に影響し合ひつつも、どれかに統一することなく、それぞれが独自の形を保ちつづけた。

これらから帰納するのは危険であるが、日本の文化は深層として、統一を嫌ふところにあるのではないか¹²⁶。統一を嫌ふといつても混乱して、まったくもってどう

る。これがなくなつてしまふのは逆に困るが

¹²⁴一定してゐない語句はリストを用意して等価とみなすといふ計算機処理をすればいいだけの話と思ふが... 検索エンジンではさうなつてゐるだらうし、Unix 的な環境では正規表現が使へるので等価をみなす処理が簡単に行なへる。しかしワープロではできない、できても使ふ人が理解できないことが多い。で、さういふソフトや人の要望にあはせることになる...

¹²⁵農学部で他の学部を重複するのは無駄もあるが意味もある。農業特有の事情を他学部ではほとんど考慮しないため自前でやるしかないといふ事情がある。

¹²⁶明治～昭和前期は日本としてはめづらしく(おそらく外圧により)統一を価値観としてゐたが同時に対外的には戦争ばかりであつた。どれだけ関係あるかの評価はむづかしいが。

にもならないほど混乱することはあまりなく, 適当に加減して調整してゐるやうにさへ見える. いはば多様性を愛するといへようか. この synthesis がどこまで通用するか愉しみである.

IX. 26 IPA 風ローマ字 (試案)

ここでは, IPA の表におほまかに区分されてゐる程度の発音にしたがって書きわけけるローマ字を考察する. 上述の発展へボン式と考へ方は同じだが, 子音の用字は英語ではなくて, IPA¹²⁷を参考にする. しばしば問題になるのは, [ʃ], [tʃ] の書き方である. [ʃ] を S と [ʒ] を Z, [f] を F とする方法は上で紹介した. 今回は大文字を使はないで表記する. [ʃ] は [s] の強く硬口蓋化した音で, 調音点が [s] から出てしまったものであるが, 一般に硬口蓋化は [sʲ] のやうに表現するので, これを借用することとする.

表 1: IPA 風へボン式 (案)

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ア行	あ a	い i	う u	え e	お o
カ行	か ka	き kji†	く ku	け ke	こ ko
サ行	さ sa	し sji	す su	せ se	そ so
タ行	た ta	ち tji†	つ tsu	て te	と to
ナ行	な na	に nji†	ぬ nu	ね ne	の no
ハ行	は ha	ひ khi†	ふ phu†	へ he†	ほ kho†
マ行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ行	や ja	—	ゆ ju	(イエ)je	よ jo
ラ行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ行	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo
ガ行	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ザ行	ざ za	じ zji	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
ダ行	だ da	(ぢ dji)	(づ dzu)	で de	ど do
パ行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
バ行	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo
キャ行	きゃ kja	—	きゅ kju	きえ kje	きよ kjo
シャ行	しゃ sja	—	しゅ sju	しえ sje	しよ sjo
チャ行	ちゃ tja	—	ちゅ tju	ちえ tje	ちよ tje
ニャ行	にゃ nja	—	にゅ nju	にえ nje	によ njo
ツァ行	つぁ tsa	つぃ tsi	—	つえ tse	つぉ tso
フャ行	ふぁ pha	ふぃ phi	—	ふえ phe	ふぉ pho

¹²⁷ただし, IPA は音声を示す記号 (それを文字をいふなら文字) であっても, 言葉 (意味) を記すと
いふ意味での文字ではない.

tkji は強く硬口蓋化してゐるならば付加する. ほとんど舌が動かない子音の m のイ段ミも硬口蓋化してゐるが, これは硬口蓋化してゐないと思って j は付加しない. チは tji と tsji の2案考へられる. tsji のほうが [tʃ] をより忠実に表現してゐるが, tji であっても [tʃ] と解釈できないことはない. チにおいてはより顕著で dji は [dʒ] の出発点的綴である. dji, tji の案には文字数を増さない利点がある. この案では tji, dji を採用した. ハ行はむつかしい. 口蓋音 (ヒ, ホ) から考察する. ヒの子音は IPA では [ç] で, 忠実に文字にすると, cs となるだらうが, この綴で [ç] と読むことは難しい. [h] の調音点が硬口蓋に前進した考へて, hji または jhi で示すことも可能である. ホにいたっては私はアイデアが浮ばなかったので, h で代用することも考へた. 一案として, k の帯気音 kh でも代用できないことはない. ドイツ語で [ç|x] の発音を示す ch は k の帯気音 kh をローマ人が ch と翻字したことに由来してゐる. ここでは kh を採用した. 両唇音フは唇歯音の f を両唇音として代用するか hw も不可能ではない. IPA の [ɸ] はギリシャ語のローマ字翻字 ph であるが, p の帯気音は [ɸ] とは随分異なる印象をもつ人も多い. p の帯気音 ph が変化して摩擦音化したものが [ɸ] なり, t の帯気音 th が摩擦音化して [θ] となるのはある意味必然で, ホ [x] についても軟口蓋 k の同様の变化 kh を採用したので, ここは ph を採用する. ただし, 綴り方は感覚的なものが支配する世界なので, 違和感を覚える諸氏も多いだらうと思ふ.

IX. 27 通用ヘボン風翻字 (案)–もっとも広まりさうなローマ字案

現在の日本人でローマ字表記をする際に用途として多いものの一つは翻字であらう. そして, 現在もっとも親しまれてゐるローマ字はヘボン式系統 (風) のローマ字である. ヘボン風とは何か定義が微妙だが, ここでは「し」を shi, 「じ」を ji, 「つ」を tsu 「ふ」を fu とするものとする. 「ん」の表記や長音の表記はいろいろだが, ここではそれらを一緒クタにして通用ヘボン風表記とする. このもっとも親しまれてゐる通用ヘボン風ローマ字で, もっとも広範囲に使はれてゐる現代かなづかいを表記 (翻字) することをここではとりあげる. なぜなら, 通用ヘボン式を使ふ人は, ローマ字表記とは假名を翻字することを思つてゐる人も多く含まれるためである¹²⁸. たとへば「きょうこ」といふ名前を綴る時に, Kyouko と綴りたくなる. 発音としては「キョーコ」だから, 本来のヘボン式 (真正) では Kyōko である. 長音符「ー」をつけるのが大変だから略して Kyoko とすると, 虚子 (きょこ), 強硬 (きょうこう), 虚構 (きょこう) と区別がつかなくなる. 無意識にそれを避けたものだと思はれる. 実際は, 翻字だけかといふとさうでもない. 三洋電気は Sanyo と綴ってなんの違和感もないし, 京都も Kyoto と綴る (これらは長音を無視した不完全な音表記であり, もちろん翻字でもない). だが, 左京区は Sakyou-ku と書くたくなるし, 佐藤を Satoh と自称する人もゐる.

なほ, ここでは「通用」として親しまれるかどうか, 感覚的に親しめるかどうかだけを問題にし, 原理や整合性は第三義的な価値しか置かない. 理論的に正しい (自分が設定した原則にあつてゐる), といふことはここでは意味がない.

¹²⁸ 計算機の日本語入力のローマ字システムは代表的な翻字. ただし, これは自然言語表記としての価値はほとんどない. 「い」を xi や li で表記するのはアルファベットの使ひ方としてかなり乱暴.

現代かなずかいのカナ表記をローマ字にする際に困ることがある。そのひとつは「ぢづ」の表記である。一方のヘボン式(真正, 通用を含め)には「ぢづ」の表記はない。なぜなら現代日本語(標準語)において, ジとヂ, ズとヅはそれぞれ同じ発音(語頭では [dʑi] と [dʑu], 語中では [zi] と [zu])になってしまい, 音の対立(差異)がないためである。そもそもローマ字は音にしたがってアルファベットを宛てたものであり, 音に違いのない「ぢづ」に対しては「じず」と同じアルファベットでよく, 特別の表記は必要ないのである。実際, ヘボン式ローマ字(真正・旅券式・道路式)では「ぢづ」となるところは「じず」と同じ表記, すなはち, ji, zu で表記することになってゐる。しかし, 翻字は違ふ。翻字はある表音文字体系(ここでは假名)を別の表音文字体系(ここではアルファベット)に一对一で置換することであり, 假名で書きわけてゐるものはアルファベットでも書きわけなければならない。今こころみてゐるのは翻字であるから, 「ぢづ」を「じず」から書きわける表記を提示しなければならない。

最初に重要なことは, ヘボン式(真正)の j は [dʑ] の発音, 強いて云へば「ヂ」の子音である。であるから, ヘボン式を立てて, 「ローマ字かな対応表」を作成したなら「じ」がなくなって「ぢ」が「じ」を包含するやうにならなければならない。しかし通用では ji はもっぱら「じ」を表記することになってゐる。これは皮肉なことにヘボン式愛好家が求めてやまない英語風 [dʑ] ではなく, あへて云へばフランス語風の綴字である。フランス語では j は [textyogh] の音価をもつてゐるからだ。もし英語風といふ原則を重視するなら, ji は「ぢ」で「じ」は zhi(英語のフランス語 j の音価表記やロシア語キリル文字の英語翻字ではさうなつてゐる)とすべきだし, ジをフランス語風に ji と表記するなら, シも同じくフランス語風に chi としたくなるが, さうはなつてゐない。このやうに通用ヘボン式は音価に原則もなく, ぱっと考へて, らしいのを宛てただけだが, 今は通用を立ててゐるので, このやうな原理とか整合性は問はない。したがって, 「ぢ」の子音をどう表記するかが問題になる。

「じ」が ji であるから, 「ぢ」は dji とならうか。「ち」が chi であるから「ぢ」は chi の有声音にしたいところだが, そんな都合のよいアルファベットは見当たらない。あへて挙げれば c/g に基づいて ghi となるが, 通用として誰も「ぢ」とは読めないであらう。おそらくは感覚的には「ぎ」と読める人が多いだらう。英語においては gh は発音上やっかいな綴りで, enough では [f], through では黙字(silent), ghost では [g] といろいろなので, 通用を愛する人も避けるだらう。通用は感覚的に納得できることが最重要なので, gh は却下される。

先に「づ」にとりかかる。「もちづき(望月)」はパスポートヘボン式では mochizuki であるが翻字の際には「づ」を「ず」zu を書きわける必要がある。これは感覚的には簡単で, 「つ」を tsu と書くことから, dzu が連想される。また英語には dz とは普通綴らず, ds(例 Harrods)と綴ることから dsu でもよいだらう。英語では d が有声音なので, 後続の s も自然に有声音になつてしまふ。音声学的にも ds で破擦音を示すのなら, d と s は一体なので, 前者が有聲になれば後者も有聲になつてしまふ。もし前者が有聲なのに後者が無声音でゐたいならば, それは破擦音ではない。別々の音 [d·s] となる。少し英語風の嗜好では dsu となるが, おそらく通用の感覚としては dzu が大勢を占めるだらう。ここでは dzu を採用するが, dsu もまた可能な綴りであ

ることを強調しておく。結局、「づ」がこのやうに dzu または dsu となるので、「ぢ」は必然的に dji となる。

次に「ん」の表記をとりあげる。これは真正ヘボン式(およびそれをほぼ正確に踏襲した鐵道省式)では、唇音の後は m, それ以外は n となつてをり, パスポート式もさうしてゐるが, 道路式ではいつでも n である。通用としては「ん」の表記は n でよく, m/n の使ひわけは一部の意識の高い人にとのみ通用してゐるにすぎないと思はれる。「ん」を一律 n とする感覚が一般的なのは, 音声としては3種類, あるいは6種類だとしても, もともと日本語の音韻として「ん」は一つだからなのと, 道路標識に「ん」が n で表記されてゐるところが大きいだらう。

通用ヘボン風翻字表(案)

行\段	ア/a/	イ/i/	ウ/u/	エ/e/	オ/o/
ア行	あ a	い i	う u	え e	お o
カ行	か ka	き ki	く ku	け ke	こ ko
サ行	さ sa	し shi	す su	せ se	そ so
タ行	た ta	ち chi	つ tsu	て te	と to
ナ行	な na	に ni	ぬ nu	ね ne	の no
ハ行	は ha	ひ hi	ふ fu	へ he	ほ ho
マ行	ま ma	み mi	む mu	め me	も mo
ヤ行	や ya	—	ゆ yu	(イエ)ye	よ yo
ラ行	ら ra	り ri	る ru	れ re	ろ ro
ワ行	わ wa	ゐ wi	—	ゑ we	を wo
ガ行	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
ザ行	ざ za	じ ji	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
ダ行	だ da	ぢ dji	づ dzu	で de	ど do
パ行	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
バ行	ば ba	び bi	ぶ bu	べ be	ぼ bo

長音は, 本方式は翻字であるから, 假名をそのまま綴ればよい。ただ, h で長音を示す(例. 佐藤を Satoh)方式も, 通用を基準にするといふ本方式の精神からすれば当然包含しなければいけない。翻字は, 方式の前提として, もとの假名にもどり得なければならないが, h で長音を示すと, オ段については元の假名表記にもどれなくなる。といふのは, オウ型の假名づかいが, オオ型の假名づかいが辨別を失つてゐるためである。他の段, たとへばウ段だと, 「yuh=ゆう」「shuh=しゅう」など, 一意に假名が限定できる。オ段だけ戻れないのは不都合なので, その際は, もとの假名表記は「オー」だと仮想的に考へることにする。たとへば, Ichiroh はイチローであり, Satoh はサトーである。もし, Ichirou, Satou と表記したなら, 「いちろう」「さとう」と假名に復元される。

IX. 28 現代かなずかい用ヘボン式翻字の長音 (案)

現在, ローマ字綴でデファクトスタンダード¹²⁹になってゐるのはヘボン式の系統であるが, 鐵道省規約は別として道路標識もパスポート¹³⁰も長音が無視されてゐるのが欠点である. だから, h を母音に付加して長音を表記といふドイツ語やイタリア語的な綴り方が自然発生したりする. 本項では, これを積極的にとりいれ, 体系化して長音表記を試みたい. 純粋に理学的には oo でも uu でも, それが正しい綴り方なら, 奇妙に感じるのはあくまで感じるだけのことで, 慣れの問題もあるだらう. それでも人間の感覚によい印象を与へる綴り方を研究することも重要である. 今回は, 感覚を重んじて現代かなずかい用の翻字規則¹³¹の長音に対応した改良を試みる. 云ってみれば道路やパスポートでは, 書かうと思へば打字できる ō とか ū を書いてくれない¹³²ので, 無理矢理 ASCII の中に押し込める試みと云へよう. 現代かなずかいの翻字をわざわざ考へるのは, 地名や人名でローマ字表記されたものを日本語として解釈する際には, 假名に直してから, それに相当する語を探すためである. 最初の假名に変換する段階で, オノ (小野), オーノ (大野) の違ひがわからない事態は日本語の処理には不都合だからである.

カナ	羅馬	例
ああ	aa	おかあさん (おかーさん) Okaasan
いい	ii	飯山 (いいやま, イーヤマ?) Iiyama
うう	uw/uu	裕司 Yuwji, 夕飯 Yuwhan/Yuuhan, 裕也 Yuuya, 友愛 Yuuai, 地球 Chikyuw
ええ	ee	ええかつこしい (エーカッコシー) Eekakkoshii
えい	ei	経営 (けいえい, ケーエー) Keiei
おう	ou	耕平 (こうへい, コーヘー/コーヘイ) Kouhei, 幸三 kousou
おお	oh	大原 Ohhara, 大屋 Oh-ya, 大通り (おおどおり) Ohdohri 郡/氷 Kohri, 遠い Toh-i, 多い Oh-i

uu/uw は次の音節が母音・半母音の時は uu, それ以外は uw となる.
ハ行の促音は hh ではなく kh で表記する.

結局, 現代かなずかいで, 長音を書きわけるのはオ段だけなので, 書きわけはオ段だけである. Kaasan なんて, gaaden のやうで頼もしくさへある¹³³. 同じ母音の

¹²⁹de facto はラテン語 fio (E. be done, become, take place) の奪格で, 「さうなってしまった」といふ意味で「やったもの勝ち」「規制事実」の「事後承認要求」に近い概念で筆者は心からは賛成しない. 「さうなつてゐるから認めなさい」といふ哲学を認めると改善や改良は無意味なものになってしまう.

¹³⁰オに限つて oh としてもよいといふ例外処置が認められてゐる.

¹³¹もっとも, カナの翻字規則は日本式にはあつても (ISO3602), ヘボン式系統にはない. 過去, ヘボン式論者が拠所とした表音主義といふ概念は翻字を認めてゐない.

¹³²パスポートの処理が多言語対応してゐない計算機で行ふのだつたら, ASCII か EBCDIC で対応してゐる英字 (英語で用ゐるラテン文字) に還元しないといけなだらう. 役所の戸籍計算機がカナしか使へないといふこと以上に前近代的な話だが, 結局, 最終的には一番重要なことは一番底辺の計算機にあはせることになる.

¹³³全く感覚的な話

digraph で一般に奇異に感じる人が多いのはウ段とオ段であらう。裕司を Yuhji, 耕作を Kohsaku と書く人が多いことから, それが云へる。aa や ii には奇異さを感じないのはどうしてだろうか。逆に oo¹³⁴ や uu はどうして奇妙なのだろうか? ¹³⁵

「ええ」の例は無理に作らなければなかった。「ええ」は通常は2音節で, —「わかりましたか?」「ええ」—のやうな場合に使はれる。「わかりましたか?」「エー」だと, わかったのか, わからないのか, わからない。エ段の長音は現代かなづかいによれば「えい」と表記するためである。ちなみに, 経営は Keiei となって母音が4つも続き, 感覚的には見苦しいが, 現在かなづかい的にはどうしようもない¹³⁶。

ともかく, オオやウウの長音¹³⁷に対して安易に h や w を当てると, 光一 kohichi=コヒチ? のやうに次の音節が母音や半母音の時に融合して, h の場合はハ行に, w の場合はワ行になってしまふ。「おおや」はも「ohya おひや(?)」になるし, 友愛「ユーアイ」は Yuwai/Yuhai となって「ユワイ/ユハイ」になってしまふ。裕也「ユーヤ」を Yuwya とするなら, まぎらはしいがワ行に拗音はないのでからうじて辨別可能だが, Yuhya だったら「ユヒヤ」になってしまひかねない。更に次の音節がハ行だったら, 融合して促音が生じてしまふ。大原のやうに「おお oh」の次に「はら hara」が来ると, 「オツハラ」(ショウスケさん?), 夕飯は Yuhhan となって「ユツハン」になってしまふ。だから多くの人は混乱しさうな場合は, 光一=koh-ichi または koh'ichi のやうに区切文字¹³⁸を当ててゐる。「遠い」「多い」は「い」だけ一音節しかないが, Toh-i, Oh-i の様¹³⁹に区切る必要がある。ウ段は uu の digraph でも許容できないこともないと思ふが, digraph は感覚的に望ましくないと思ふ人もゐるだらう。ユーヤも Yuuya は望ましくないといふのであれば Yuw-ya か Yuh-ya とする方向で考へるべきだらう。Yuwya の場合には前述のやうにワ行拗音はないので, 「-」や「'」は省略であるが, 友愛は Yuw-ai, Yuh-ai, どっちにしても「-」か「'」が必要である。夕飯 Yuwhan のやうに, w と h がくつついて見える語もあって, それらは, you when のやうにも見えるが, yuhhan よりは感覚的¹⁴⁰にはよい(筈だ。どうしても英語風にしたい場合は前項を参照)。音に近さからすれば, u に h を付けて長音を示すよりも, w を足すほうが感覚的¹⁴¹には合致するためである。また, 次の音節が母音・半母音(+ハ行)の時は uu で示すといふ規則(繁雑であるが)を足せば「-」「'」は不要である。uu と uw は後によって綴りを変へるが同じ音価といふことに

¹³⁴個人的感覚的には Oono は奇妙だが, Toono はそれよりは奇妙ではない。Oo が変に感じるのか? ゴーンを Goon と翻字したのを見るとグリーンと読めてしまふ(感覚的には)。oo は英語では「ウ」なのでその連想が強いのだらう。

¹³⁵長音を母音のダブリング(doubled vowels)で表記するのは感覚的にカッコわるいからかもしれないが, われわれの日本語はさうなつてゐるのであるから, 私にはそれを認めるほうが建設的に思へる。女王は Jo'oo。

¹³⁶字音假名遣でも Keing'eing となってどうしようもない

¹³⁷okaasan も感覚的に変だ, iiyama も感覚的に変だと思ふ人はアアやイイも加へてもらひたい。

¹³⁸修正ヘボン式では区切り文字は「-」となつてゐる。「'」は日本式系統でよく用ゐられる区切り文字。「-」で区切る場合は中央区 Chūō-ku のやうな形態素の区切と併用できない欠点がある。cf. Chuw-oh-ku, Chuh-oh-ku

¹³⁹この綴は復古假名遣(歴史的假名遣)の「とほい」Tohoi, 「おほい」Ohoi とほんほど差がない。

¹⁴⁰この項は感覚にのみ頼つた話で, まったく論理的な必然性は見えてこない(知らないだけで, 論理的必然性があるのかもしれないが)。h は喉の摩擦音で口を大きく開くから o や a に近く, u と w はほとんど同じ口の形の母音と子音の違いといへば, ちょっとは論理的かもしれないが。

¹⁴¹上と同じ

なる。友子(ユーコ)は Yuwko だが、友愛は Yuuai, 夕御飯は Yuwgohan だが、夕飯は Yuuhan とするのである。

ただし、促音化のほうは、ハ行の促音の綴り方を変更することで対応できる。オッハラの場合は Okhara のやうに、h の digraph ではなく、kh で促音にすればよい。オッハラといふかなづかい自体、あまりないので問題は目立たないかもしれないが...

現代かなづかいを捨てれば(もともとヘボン式は発音を示すもので假名を示すものではない)、オ段の長音は全て ou とすることによって母音重複を回避できる。「エー」は ee なのに、ei を記すやうに、オーは全て ou とすると決めてしまえばよいわけである。あるいは、「おお」と受けるローマ字は oa とすることもできる。「大原」は Oahara, 「大屋」は Oaya, 「大通り」は Oadoari, 「郡/氷」は Koari となるが、「遠い」、「多い」は長音の次に母音が来るので toa-i, oa-i と綴らないと、「とあい*」toai, 「お会い」(オアイ)になってしまふ。「ドア」、「コア」、「芋洗い」等の語では Oai, 「どお*」(ドー)doa, 「こお*」(コー)koa, 「いもおらい*」(イモーライ)imoarai と再翻字の更に間違った翻字になってしまふので、do'a, ko'a, imo'arai 等の「'」「-」が必要になる。感覚的には、これらは美しくない。区切り文字を使ひたくなければ、母音連続の時に限って、oo に振り変へる、といった繁雑な規則が必要かもしれない。「大通り」は Ohdohri(ō = oa の場合は Oadoari) だが、「大矢」は Ooya, 「遠い」は Tooi のやうである。

IX. 29 長音表記の逆転的発想：長音が主(案)思考実験

ローマ字表記はナニ流にするかで異論はあるが、長音表記はむづかしいといふことに関係者の異論はない。ここで逆転の発想をする。長音表記はむづかしいといっていたが、母音字は長音を基本として、短母音を特別とするのである。

たとへば、「中央」は Tyuo/Chuo, 「交通」は Kotsu/Kotu でいい(以下、この話題はヘボン式流の適用が多いと思はれるので、ヘボン風表記のみを記載する。原理自体は日本式系統にも適用可能ではある)。短母音はどう表現するか考へる必要がある。一案として、後続の子音をダブリングさせる時は短母音とすることとした。英語風ローマ字と結果は似てくるが、発想はまったく異なる。子音のダブリングは促音の表記と同じなので、促音の表記を別に考へなければいけない。促音の時は q を付加することが案としてある。これは声門閉鎖音を示し、促音時の停止を示す。語末の母音は後続の子音がないので、ないものをダブリングさせることはできないため、別の表記を考へる必要がある。q は促音で使用してゐるので、aq とすると、「あっ」となってしまふため、別字が必要である。x を検討してみる。h の方が音が弱くてよかったのだから、長音の h(Ohno) と完全に衝突するので避けた。黙字としての x の使用はフランス語に例があるが、ローマ字表記の利用者側原則(あまり変な音価をあてないこと)¹⁴²に反するかもしれない。別案として、その音節の子音を後につけることで短母音を表記することも考へられる。順行同化の弱化と勝手な理屈をつけるこ

¹⁴²これを同様に、母語話者の原則(母語話者が表記を決めるべき)があつて、母語話者の原則が普通は利用者の原則に勝る。ピンインはこの例。ただし、あまりに変なローマ字は母語話者の原則であつても利用者の原則が優先される。

とができる。首都は Shuttot となる。しかし、これは簡単に破綻する。大野は Onon となってオーノンになる。X のやうに現在のローマ字で音価をもってゐない字を短母音の標識にするしかない。記号は音価がないので、Ono' のやうに「'」で表記することも考へられる。ここではそれを採用する。全ての短母音を「'」で示すことも考慮に値するが、表記が繁雑になる。促音として q を感情的に受けいれられない場合は 3 重子音にしてもいいかもしれないが、3 重子音にすれば、自動的に前の音節は短母音になってしまい、長音+促音の表記ができなくなる。現在の日本語では思ひつかないが、コーッタは表記できない。Kotta はコタ、Kottta はコッタとなる。q を採用するなら、コーッタ (凍った?) は Koqta となる。Q は大変便利なのだが、ここでは 3 重子音を採用したとして議論する。また、全ての母音字を長音を原則とするか、長音の多い u と o だけにするかは議論の余地がある。後舌母音だけ長音を原則とするわけである。uo だけ長音とするなら「大通り」も Odori, 「地球」は Chikyu でいい。しかし、aiueo で統一がとれなくなるので、ここでは全ての母音を長音とすることにする。

まとめると、

- aiueo はアイウエオの長音アーイーウーエーオーを示す。
- 短母音を示すためには後続の子音を重子音にする。
- 語末の時または後続の音節が母音のみの場合は「'」を語末に置く。
- 促音は三重子音となる (前の音節が短母音だとして)。

ユウコは Yuko だが、ユコは Yukko, ユッコは Yukkko となる。「東京」は Tokyo だが「京都」は Kyoto' となる。「大奥 (ōoku)」は Ookku' となる。「女王 (joō)」は Jo'o となる。「ぼっちゃん (botchan)」は Bottchan 「いった」は Ittta' となる。「横浜」のやうに全て短母音からなるものは, Yokkohhamma' となる。この表記だと長音がないと文字長がかへって長くなる。母音連続の際の長音短音の書きわけについては、oi はオーイーだが、オーイは oi' でオイは o'i' となる。

短母音にするための後続子音の二重化は同じ文字ではなく、字を変へたほうが可読性が増す。その場合、どの字は相応しいかは議論の必要がある。基本的には閉鎖音・破裂音がよいだらう。破裂音+摩擦音の組合せになると、融合して破擦音になるので工夫が必要である。また停止の感覚を表現するには調音点が喉側か唇側にあるものがよく、硬口蓋や歯茎は避けたほうがよいだらう。調音点はあまり離れてはいけない。また、促音は本来の子音を重ねる。なほ、本来のヘボン式では ch の促音は tch, j の促音は dj である。

- カ行 (k) は c, 閣下は Kackka'.
- ガ行 (g) も c, 滋賀は Shicga'.
- サ行 (s, sh) は c, マサは Macsa'.
- ザ行 (z) は g, 風は Kagze, ゴザは Gogza'.
- タ行 (t, ch) は p, 「また」は Mapta, 「行った」は Iptta, 「ぼっちゃん」は Boptchan.

- ダ行 (d, j) は b, 飛騨は Hibda', 赤道は Seckibdo, ドッジボールは Dob-djiboru'.
- ナ行 (n) は m, 粉は Komna'.
- ハ行 (h,f): h の時は k, オハラは Okhalra'
f の時は p, 祖父は Sopfu'.
- パ行 (p) は k, 一杯は Ikppai'.
- バ行 (b) は p, 鯖は Sapba'.
- マ行 (m) は b, 駒は Kobma'.
- ラ行 (r) は l, ハラは Halra'.
- ヤ行 (y) は 「'」, 嫌は I'ya.
- ワ行 (w) も 「'」, 沢は Sa'wa.
- 語末も 「'」, Kyoto'.

大坂 Osacka' 北海道 Hockkaido 神戸 Kobe' 筑波 Tsuckupba' 釧路 Kucsiro' 十勝 Tockapchi' 稚内 Wackkamnai' 網走 Apbacsilri' 加藤 Kapto かあちゃん Kachamn ゆうこ Yuko ゆこ Yucko' ゆっこ Yuckko' 札幌 Sakppolro' 室蘭 Mulrolramn 九州 Kyushu 本州 Homnshu 信用 Shimn'yo 屎尿 Shimnyo 神妙 Shinmyo 近藤 Komndo 佐藤 Saptō
 実際は長音の頻度はオとウに多いので、オとウだけ別にしてもよいが、かなり表記がむづかしくなるだらう。

個人的には、これらの表記はモーラに不整合をもたらすので日本語を表記する方法としてお勧めしない。

IX. 30 フランス語風ローマ字表記

フランス語は意外と綴り字と発音との対応は明確で、英語のやうに暗記するところは少ない。これは綴り字から発音を起こす場合であつて、発音から綴り字を起こすことはかなり難しく、暗記を要する。「綴り字⇒発音」は一義的に決まるが、「発音⇒綴り字」(dictation)は簡単ではない。逆は必ずしも真ならず。

フランス語ではアは a, イは i, ウは ou, エは é, オは o となる。u はユで、アクセントのつかない e は曖昧母音 [ə] となる。ただし、ou は円唇のウなので日本語の平唇のウとは異なる。ユも日本語のユ [ju] ではなく [y] なので本当は違ふ。y は i[i] と同じく扱はれる。digraph(二重字, 母音連鎖)は変った発音になるので注意が必要である。有名なところでは oi はオイではなくワ [wa](françoi フランソワ)。ai はアイではなくて、エ [e] になるので、アイとしたい場合は ai と、トレマといふ分音符を i の上に載せる。ei も同じく [e] になるので、エイとしたい場合は ei とする。eu, oeu は [ø] か [œ] になる。

カ行は ca, qui, cu, que, co となる。ガ行は ga, gui, gu, gue, go. サ行は基本的には頭子音は s だがシは chi または ci, セは ce か se で表記する。ちなみに、母音に挟まれた s は [z] の発音になるので注意が必要である。ザ行はヘボン式と同じで, za, ji, zu, ze, zo. タ行頭子音も t だが, チとツはフランス語にはないので, tch, ts で表現するしかない。ナ行頭子音も n だが, ニは gni(湿音の n), ハ行はフランス語にはない。

横浜を普通のローマ字で Yokohama と綴るとヨコアマ (横甘?) と読まれる。近い音を探せば、頭子音は r か rr となる (Paris はパヒ?)。ハ行をみなファ行と考へて、f で表記してもいいかもしれない。横浜は Yokofama あるいは Yocofama となり、発音はヨコファマになる。ファとハが同じ f になってしまうので、ローマ字から假名への逆変換ができなくなるが発音の近さを重視すればかうなる。ラ行は l で受けもつ。w はフランス語では用ゐないので、ワ行は ou+V で表現する。合拗音はしたがつて、S+ou+V である。グワは Goua となる。開拗音は S+i+V になる。y は i と同じなので、y でもよい。その場合は、ヘボン式と大きく違はない。ミヤは mia(mya) となる。シャは cha である。湿音化した l は ll と綴られ (葡語や南仏語/オック語では lh), ヤ行に近いので (正確には l の調音でヤを発音する [ɥ]), ヤ行は ll で示すこともできる。

長音はないが、aux や eaux でオの長音を受けもたせることができる。ウの長音は eux, our である。変則ヘボン式でオーを oh とするやうに、フランス語風では or としてもよい。

フランス学の篠沢 秀夫教授 (クイズダービーで有名だった) は Chineausahoix, Hydeault と綴ってをられる。この方法では、シズエは Ciseuillet のやうに綴られる (他にも綴り方あり)。まづ、母音連続は発音しづらいのでシズエをシズイエ (Sizuye) のやうに再綴りする。イエは ille なので、これを充当した。フランス語の辞書を引いて、あまり変な意味になってゐないことを確認する。

IX. 31 ギリシャ文字による日本語のローマ字表記

とタイトルにあるが、ギリシャ文字はローマ字ではないので正確には「日本語のギリシャ文字表記」といふべきかもしれない。ベースとなるギリシャ文字はローマ字と違って基本的にはギリシャ語だけに用ゐられる (数学や物理学の分野での記号的用途別として)。ローマ字は諸言語に適用されてゐるので、各々の字の発音が一概には決定できない問題をもつてゐる。ギリシャ文字は、ところが、ギリシャ語だけに使はれるので文字の発音は必然的にギリシャ語に準拠しなければいけない。だから、字の音価は一意に決まり混乱も議論—綴り方戦争のやうな—もないやうに思へる—

しかし、ギリシャ語は長い歴史をもつてをり文字の音価が時代によって異なつてゐる。今は現代なんだから古典式の発音は忘れてよい、といふ主張は、もしギリシャ語はあまり有名でない言語であつたなら十分通用する意見であるが、古典ギリシャ語はローマ帝国のギリシャ征服以降、連綿として西洋世界に受けつがれてゐる。日本も西洋の影響を受け、例外ではない。たとへば、 β は古典式ではベータ [b] だが、現代ギリシャ語ではヴェータ [v] である。 δ も古典式のデルタ [d] と現代式の Ddelta[ð] とでは異なる。そこで文字の音価を古典式に求めるか現代式に求めるかで二通りの考へ方がある。

IX. 31.1 古典式ギリシャ語準拠の日本式音韻転写規則

✓ 直音 (開口呼) で清音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/v	エ/e/ε	オ/o/o
ア行/'/	あ α	い ι	う v	え ε	お o
カ行/k/κ	か κα	き κι	く κv	け κε	こ κo
サ行/s/σ	さ σα	し σι	す σv	せ σε	そ σο
タ行/t/τ	た τα	ち τι	つ τv	て τε	と τo
ナ行/n/ν	な να	に νι	ぬ νv	ね νε	の νo
ハ行/h/χ	は χα	ひ χι	ふ χv	へ χε	ほ χo
マ行/m/μ	ま μα	み μι	む μv	め με	も μo
ヤ行/'/	や ι̂α	—	ゆ ι̂v	(イエ) ι̂ε	よ ι̂o
ラ行/r/ρ	ら ρα	り ρι	る ρv	れ ρε	ろ ρo
ワ行/'/	わ υ̂α	ゐ υ̂ι	—	ゑ υ̂ε	を υ̂o

✓ 直音 (開口呼) で濁音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/v	エ/e/ε	オ/o/o
ガ行/g/γ	が γα	ぎ γι	ぐ γv	げ γε	ご γo
ザ行/z/ζ	ざ ζα	じ ζι	ず ζv	ぜ ζε	ぞ ζo
ダ行/d/δ	だ δα	(ぢ δι)	(づ δv)	で δε	ど δo
バ行/b/β	ば βα	び βι	ぶ βv	べ βε	ぼ βo
パ行/p/π	ぱ πα	ぴ πι	ぷ πv	ぺ πε	ぽ πo

v は古典期以前は [u] だったが, 古典期には [y](hütte のユ) になってをり, [u] は古典期には ov で表記した. しかし, ov がいつも [u] かといふとさうは限らない. 単語によっては ov は [ou] だったり [o:] だったりもする. ここでは日本式の単純化の精神に則って, ウ段は v で受ける.

この表では, 頭子音が半母音のヤ行ワ行は母音として扱ってゐる. その際には ya は [ia] の二重母音, wa は [ua] の二重母音としてゐる. ヤをイアと区別するためには, 古典的にはトレマ (F: tréma, E: diaeresis) を使ってヤを ια とし, イアを ι̂α とする方法があつて, それは現代ギリシャ語でも引き継がれてゐる. トレマはフランス語の使ひ方と同じだ (例: naïve => ネーヴ, naïve => ナイーヴ). ローマ字で「原因 (ゲンイン)」を gen'in とするのに似てゐる. これをトレマを用ゐれば genin となる. このやうにトレマは音の区切りを明確化する働きがあつて便利だが, ここでは用ゐない. 日本語は母音の連続が多いため, トラマを導入すると多用する結果になり書記が繁雑になるためである. 日本語での母音連続はほとんどの場合, 二重母音にはならないため, 母音連続でも二重母音にならないと決めておいたほうが煩はしくない, また母音連続の多い日本語の特性を重視することになるためである. 母音連続の例をあげる. 「王を追おう (オーオオオー)」は ωo ow (復古假名遣では「わうをおはう」となり全然母音連続ではない. これはトレマを使へば, vaüvöo öχav. 後述する表記では v̂avv̂o oχav), 「教えをいだき」は οσιεο ιδακι となる.

今回, 提案する方法ではイアを ια とし, ヤを ι̂α または ι̂α で示す. 前者は古典ギリシャ語に例はないが, 二重母音であることを示してゐるつもりである. この tie bar は IPA では破擦音など調音点が2種類あるものを示すのに用ゐてをり, それを

二重母音を示すのに援用した。後者の grave は古典期には音程が下るアクセント記号であって二重母音とは何の関係もない(ギリシャ語は母音連続は基本的に全て二重母音になる)が, 現代語ではアクセントがない, 弱音であるといふ意味で用ゐる(アクセントが音程アクセントから強弱アクセントに移行した)。これを無理に解釈して最初の ι が弱い, α にすぐ移行する, といふ意味にこじつけた。こちらのはうが我田引水の程度が強いので避けたいが, tie bar は手書きならともかく, 計算機上では困難な場合が多いので簡単な grave も用意した。下書きのイオータ ι もあるが, これは長母音に書かれるもので, しかも読まない(「おほさか」と書いて「おおさか」と読むやうなもの)ので, これを借用することは避けた。

さて, ヤをイヤの二重母音として表現する考へ方を使ふと拗音表記も同様になる。たとへば, キヤは $\kappa\iota\alpha$ (kia), または $\kappa\iota\alpha$ (kia) のやうになる。

IX. 31.2 現代式ギリシャ語準拠のヘボン流単音転写規則

現代ギリシャ語は古典期の発音から若干ずれてをり, 数学などで古典期の発音に親しい日本人(やその他の人)には奇妙に見えることがある。

✓ 直音(開口呼)で清音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/ου	エ/e/ε	オ/o/ο
ア行/’/	あ α	い ι	う ου	え ε	お ο
カ行/k/κ	か κα	き κι	く κου	け κε	こ κο
サ行/s/σ	さ σα	し σι	す σου	せ σε	そ σο
タ行/t/τ	た τα	ち τσι	つ τσου	て τε	と το
ナ行/n/ν	な να	に νι	ぬ νου	ね νε	の νο
ハ行/h/χ	は χα	ひ χι	ふ χυ	へ χε	ほ χο
マ行/m/μ	ま μα	み μι	む μου	め με	も μο
ヤ行/’/	や για	—	ゆ γιου	(イエ) γιε	よ γιο
ラ行/r/ρ	ら ρα	り ρι	る ρου	れ ρε	ろ ρο
ワ行/’/	わ ουα	ゐ ουι	—	ゑ ουε	を ουο

✓ 直音(開口呼)で濁音

行\段	ア/a/α	イ/i/ι	ウ/u/ου	エ/e/ε	オ/o/ο
ガ行/g/γκ	が γκα	ぎ γκι	ぐ γκου	げ γκε	ご γκο
ザ行/z/ζ	ざ ζα	じ ζι	ず ζου	ぜ ζε	ぞ ζο
ダ行/d/ντ	だ ντα	(ぢ ντι)	(づ ντου)	で ντε	ど ντο
バ行/b/μπ	ば μπα	び μπι	ぶ μπου	べ μπε	ぼ μπο
パ行/p/π	ぱ πα	ぴ πι	ぷ που	ぺ πε	ぽ πο

δ は [ð] に変化してゐるので, [d] は δ ではなく $\nu\tau$ で表記する。これだと, 伽陀(カダ)と神田(カンダ), 幹太(カンタ)は $\kappa\alpha\nu\tau$ のやうになって区別がつかないが(現代ギリシャ人は区別しないため困らない), 日本語表記用にカダ $\kappa\alpha\nu\tau$, カンダ $\kappa\alpha\nu\nu\tau$, カンタ $\kappa\alpha\nu\tau\alpha$ として区別する。

β は [v] に変化してゐるので, [b] は β ではなく $\mu\pi$ で表記する. $\nu\tau$ の時と同じやうに, 芝居 (シバイ), 心配 (シンバイ), 新灰? (シンバイ) が $\sigma\iota\mu\pi\alpha\tilde{i}$ となつてしまふが, それぞれ $\sigma\iota\mu\pi\alpha\tilde{i}$, $\sigma\iota\mu\tilde{\pi}\alpha\tilde{i}$, $\sigma\iota\mu\mu\tilde{\pi}\alpha\tilde{i}$ として書きわけける.

母音連続には注意が必要である. 現代ギリシャ語では [u] は v ではなく, フランス語と同じやうに ov となる. これは古典期からさうであつた. 更に現代語では el, ol, vl, v は全て [i] の発音になる. al は [e]. ω も o と同じで [o] である. 現代ギリシャ語に長音はない. もし al でアイと読ませたいならば, フランス語と同じやうにトレマを使って $\alpha\tilde{i}$ とする. このトレマを使って分音するのも古典期と同じである. 前項の日本式の考へ方とは逆に, この方法では現代ギリシャ語の立場に立つて, 母音連続は断わり (トレマ) がない限り, 二重母音として読むことを原則とする. 「王を追おう (オーオオー)」は $Oo\ddot{o} \ddot{o}o$ となる. 「教えをいだし」は $\sigma\sigma\iota\ddot{e}\ddot{o} \ddot{i}\nu\tau\alpha\kappa\iota$ となる.

IX. 32 ローマ字表記 revisited

いろいろやってわかつたことは日本語のローマ字表記はいづれも難しいといふことだ.

これだけで終つてもいいのであるが, それもナンなので少し付け加へる. 表記法としてそれなりに成立してゐるものは, それぞれ, それなりの根拠をもつてゐる. 互いの方式を批判してたりするが, それぞれに立脚点異なるだから, あまり建設的な討論にはなりにくい.

ちやうど伝統を守ると気張つてゐても, 自分の都合のいいところで上限を設定して威張つてゐるに過ぎない (大河原 遁著: 王様の仕立屋 第19巻)

に近いところがある.

この引用はスパゲッティをフォークで食べることについてのものである. スパゲッティはフォークで食べるのが伝統的だと見做されてゐるが, 実際はフォークで食べる歴史は浅く, もともとは手掴みで食べてゐたといふ歴史がある. 真に伝統的であらうとすれば, 手掴みで食べるべきといふことにもなりかねない. が, 普通は, フォークでスパゲッティを食べるところまでが「伝統」で, それ以前の手掴みは「伝統」と見做されない¹⁴³. それぞれが, 「自分の都合のよいところで (伝統についての) 上限を設定」して伝統を守つてゐる」と「威張つてゐるに過ぎない». ただ, それが悪いものとは云へない¹⁴⁴.

それぞれのローマ字表記では, 自分の都合のよいところで, 表音なり伝統なりの上限を設定し, それをもつて, 表記が優れてゐると誇つてゐるに過ぎないところが

¹⁴³ 「伝統」の多くは歴史的に古い (たとへば日本国号誕生爾来といった) ものは少なく, 日本の歴史——たとへば魏書東夷伝倭人条以来 1800 年弱, 欽明天皇以来 1500 年, 天武天皇以来 1300 年強——の歴史に比して, かなり最近のことが多い. たとへば神前結婚式の制度化は明治開国後のことで, 基督教式に感化を受けた影響が高い.

¹⁴⁴ この論で気になるのは, いろいろな人がそれぞれ伝統の上限を設定するとしても, フォークを伝統の上限とする傾向は大きいのではないかといふことである. それは既にフォークが伝統になつてしまつてゐる先入観のためかもしれないが, もし, さういふ先入観がなくても伝統の上限とする事象にある傾向があるなら現在との対比から伝統の上限を「客観的に」設定することはできないだらうか.

ある。たとへば、ヘボン式で、唇音 (pbm) の前の「ン」と m とするところを重視する一派がある (むしろこれが真正ヘボン式なのだが)。英語に慣れ m と n の音の違いに敏感になれば、Tenmabashi ではなく、Temmabashi としたくなる。m 系のヘボン式ではこれを実現してゐるのだ、と主張するかもしれない。が、m と n が違ふやうに g と ng も違ふので、標準的な日本語¹⁴⁵のガ行鼻濁音 (語中のガ行が鼻濁音になること) も、それだと書き分けなければいけなささうである。たとへば、Sagami (相模) が Sangami のやうにである。が、これはサンガミ? (三が見?) に見える。サンガミと綴るためには Sanngami とでもしなければならぬかもしれないが、このやうな議論はほとんど聞いたことがない。m と n だけ区別して、他は区別しないわけである。ここに、恣意的な「上限」が設定されてゐる。ここではヘボン式を例にしたが、どの表記法でも、恣意的な「上限」が設定されてをり、同様の批判は可能である。比較的 consistent な表記法もないわけではないが、今度は人気といふ別の要素で問題があつたりする¹⁴⁶。

肝心なのは自分の立脚点に自覚的なところ、その立脚点が妥当かどうか確認することである。いいかへると、自分が「上限」を恣意的に設定してゐることを自覚することと、その設定した「上限」がそれなりに蓋然性をもつかどうか検証する習慣をもつことである。

X. Postscript あとがき：私のローマ字綴り名前の由来

私が始めて英語研修といふものに参加して実際にアメリカ人と話すやうになった。その時、アメリカ人講師が私の名前の当時のヘボン式綴り Tsujino を見て、一瞬ためらった後、ツジノと言った。その人だけでなく、他のアメリカ人も私の名前は読みにくさうだった。トスジノと聞こえる読み方もあつた。私の名前がアメリカ人に読みにくいことはうすうす知つてゐたが、その疑惑はサンフランシスコで決定的になった。ホテルの人が私の名前を見て「もうしわけありません。私には読めません (もちろん英語で)」といったのだ。ヘボン式は英語風の綴り方と思つてゐた私は「えーどうして英語人に読めないの?」。母音が綴り通りに読まれない (斎藤 Saito がセイトー、佐藤 Sato もセイトー) といふことは承知してゐたが、子音も読めないのは思ひもよらなかつた。それでヘボン式とは何ぞや、といふ私の探索がはじまつたのである。

探索の結果、自名の表記として日本式をベースにした表記法を採用することにした。日本語は音韻的には簡単なのだから、tsu といふ読めない表記よりも、just-meet ではないにせよ acceptable なトゥといふ発音を欧米人に連想させる tu で代用したほうがましといふことである¹⁴⁷。なほ、私自身は大学の四回生の時まで日本式ロー

¹⁴⁵ 実は京言葉にはガ行鼻濁音はない。

¹⁴⁶ 人気が低い=価値が低い、わけではないが、自然言語として人気が低いものが標準になることはむづかしい。また原理的には正しくても人気ないことには原理以上の意味があるかもしれないので注意が必要である。

¹⁴⁷ TuZino を「チューザイノ」(英語風) と読まれやうと、「トゥシーノ」(西語風) と読まれやうと、「トゥチーノ」(伊語独語風) と読まれやうと私は accept する

マ字綴りで Tuzino と表記してみた¹⁴⁸. なんのことはない, 単に昔の表記に戻っただけのだ. 大学院以降は, 院試の時に事務の人が Tsujino で登録してしまった (それくらゐへボン式は普及してゐる) し, 「こちらのはうが一般的といふか国際的だと思った」といふか, 当時は関心が高くなかったので, そのままにしてみた. 就職した時にもローマ字綴りを通知した筈はないのだけれど, 名簿には Tsujino と登録されてゐた. 名簿は現在では TuZino として再登録してある.

ギリシャ語がわかる読者諸兄は, TuZino を見て, $\tau\omicron\upsilon\acute{\zeta}\eta\nu\omicron\nu\omicron\varsigma$ / $\tau\omicron\upsilon\acute{\zeta}\eta\nu\omicron\nu\omicron\varsigma$ (Zeno/ゼノンの属格, 「ゼノンの (門弟? 子孫?)」意) を連想させるかもしれないが, それは全くの偶然である. それによれば辻野 匠は $\tau\alpha\acute{\alpha}\kappa\mu\iota\alpha\ \tau\omicron\upsilon\acute{\zeta}\eta\nu\omicron\varsigma$

XI. 発音記号の表記方法 (L^AT_EX による)

XI. 1 付 L^AT_EX における発音記号表記

L^AT_EX を使えば IPA の発音記号を楽に記述でき, しかもとても綺麗な品質で印字できるといふ長所をもつ.

もちろん, Mac や Windows の非 L^AT_EX 環境でも発音記号の印字ができるやうである. 詳しくは, IPA の Web Page の

<http://www2.arts.gla.ac.uk/IPA/ipafonts.html>

を見よ.

さて, L^AT_EX における IPA 発音記号は東京大学の福井 玲教授によって開発された TIPA (TEX IPA or Tokyo IPA) で実現されてゐる.

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/computer.htm>

TIPA の実力は, 福井氏はこれを用ゐて「世界音声記号辞典」(三省堂)を作成したことからわかるやうに, 出版に使用できるだけの高品質である.

てっとり早く TIPA を使ひたいといふ人は, 福井氏による下記の簡潔な記事が参考になる.

<http://www.tug.org/TUGboat/Articles/tb17-2/tb51rei.pdf>

¹⁴⁸ さらに話はややこしくなるが, 大学一回生の時に第二外国語としてドイツ語を習った時に, いちびって Zuzino としてみた (よほど Z が好きだったのか) ことがあった. ドイツ語ではこれは [tsutsino] と読み, ツジノではないが, イタリア語では語頭の z は清音 (正しくは, 語ごとに違ふ) で, 母音間の z は濁音で (正しくは, 語ごとに違ふ) となり, [tsudzino] とめでたくツジノとしたつもりであった. もちろん, 一部の好事家以外にわからなかったのと仮名が違ふのに同じ Z になるのは非合理なので廃止した.

XI. 2 TIPA のインストール

$\text{\TeX}$ システム ($\text{\LaTeX}$, $\text{\texttt{teTeX}}$ 等) がインストールされてゐることを前提として説明する. TIPA のソースファイルは CTAN のサイトから TIPA をダウンロードすれば手に入る. たとえば,

```
ftp://ring.aist.go.jp/pub/CTAN/fonts/tipa.zip
```

あるいは前述の福井氏のサイトからダウンロードできる.

```
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/tipa
```

得られたソースを展開する. ソースは, スタイルファイル群とフォントファイル群とドキュメントからなるが, Unix 互換環境なら, それぞれについて操作する必要はなく, Makefile の変数 PREFIX を自分の環境にあはせて変更し

```
# make install
```

とするだけでよい.

Unix の make が使えない計算機環境では, 展開したファイルを下記の福井氏のサイトに記述されてゐるやうに, $\text{\TeX}$ がインストールされてゐるディレクトリーにコピーすればよい.

```
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/tipa-install.htm
```

XI. 3 主な記号

XI. 3.1 子音

```
[kj] \textipa{k\super{j}}
[j] \textesh
[ç] \textctc
[z] \textctz
[g] \textscriptg
[ʒ] \textipa{Z} or \texttyogh
[ɕ] \textdyoghlig
[dʑ] \textctdctzlig
[ɖ] \textdctzlig
[tʃ] \texttreshlig
[ts] \texttslig
[tɕ] \texttctclig
[ts̺] \t{ts}
[θ] \texttheta or \textipa{T}
[t̚] \textrtailt
[ð] \dh or \textipa{D}
```

$[n]$ `\textltailn`
 $[ŋ]$ `\ng` or `\textipa{N}`
 $[N]$ `\textscn` or `\textipa{\;N}`
 $[ç]$ `\c{c}`
 $[ϕ]$ `\textphi` or `\textipa{F}`
 $[pf]$ `\t{pf}`
 $[ɾ]$ `\textfishhookr` or `\textipa{R}`
 $[l]$ `\textrtail`

XI. 3.2 母音

$[ɑ]$ `\textscripta` `\textipa{A}`
 $[æ]$ `\ae` ash, もと asc. OE に由来.
 $[Λ]$ `\textturnv` or `\textipa{2}`
 $[ɪ]$ `\i`
 $[ʊ]$ `\textturnm`
 $[ü]$ `\"\textturnm`
 $[ə]$ `\textschwa` or `\textipa{@}`
 $[ɐ]$ `\textrhookswa`
 $[ɛ]$ `\textepsilon` or `\texipa{E}`
 $[ɜ]$ `\textrevepsilon` or `\texipa{3}`
 $[ø]$ `\o`
 $[œ]$ `\oe`
 $[ɔ]$ `\textopeno` or `\textipa{O}`
 $[ʊ̯]$ `\textsubring{\textturnm}`

XI. 3.3 Misc

$[_]$ `\texttoptiebar{ }` or `\t{ }`
 $[_]$ `\textbottomtiebar{ }` or `\t*{ }`
 $[:]$ `\textlenghtmark` or `\textipa{:}`

参考文献

- 安藤貞雄 (2002) 『英語史入門-現代英文法のルーツを探る』, 開拓社. ISBN: 4758923043.
- 荒木一雄 (監修)・近藤健二・藤原保明 (1993) 『古英語の初歩』, 英潮社, 232 頁. ISBN: 4268001867.
- 荒木一雄 (監修)・水島喜喬・米倉 綽 (1997) 『中英語の初歩』, 英潮社, 259 頁. ISBN: 4268002766.
- エーリヒ＝アウエルバッハ・小竹澄栄 (訳) (2006) 『中世の言語と読者』, 八坂書房.
原典: Erich Auerbach, 1958, *Literatursprache und Publikum in der lateinschen Spätantike und im Mittelalter*, FranckeVerlag, Bern, ISBN: 489948726.
- Bauer, Laurie and Trudgill Peter eds. (1998) *Language Myths*: Penguin, pp.189. 邦訳 言語学的にいえば, 町田 健監訳 水嶋いづみ訳, 研究社, ISBN: 9780140260236.
- Bradley, Henry (1904) *The making of English*: Palgrave Macmillan, pp.216. 邦訳 英語発達小史 寺澤芳雄 (訳) 1982 岩波文庫 ISBN:4003365917.
- Carr, Philip・竹内 滋 (訳)・清水あつ子 (訳) (2002) 『英語音声学・音韻論入門』, 研究社, 166 頁. ISBN: 4327401315.
- 篠沢秀夫 (2002) 『フランス三昧』, 中公新書, 242 頁. Chineausaioix, Hydeault, ISBN: 412101624.
- Dangel, Jacqueline・遠山一郎 (訳)・高田大介 (訳) (2001) 『ラテン語の歴史 (Histoire del a langue latine,1995)』, 白水社 (クセジュ), 176 頁. ISBN: 4560058431.
- Diringer, David (1968) *Alphabet*: Hutchinson. ISBN: 0090676416.
- 福田恒存 (1950) 『私の國語教室』, 新潮社, 中央公論社, 文藝春秋社. ISBN: 4167258064(文春文庫版 2002).
- 国際音声学会 (編)・竹内 滋 (訳)・神山孝夫 (訳) (2003) 『国際音声記号ガイドブック-国際音声学会案内-』, 大修館書店, 320 頁. Handbook of the International Phnetic Association, 1999, ISBN: 4469212776.
- Gelb, Ignace J. (1952) *A Study of Writing*: Univ of Chicago Press (Phoenix Books). ISBN: 0226286061.
- Gimson, A. G. (1980) *An introduction to the pronunciation of English (3rd ed)*, London: Edward Arnold.
- Guiraud, Charles・有田 潤 (訳) (2003) 『ギリシャ文法 (改訳新版)[Grammaire du grec, 1967]』, 白水社 (クセジュ), 174 頁. ISBN: 4560058687.

- 橋本進吉 (1950) 『古代日本語の音韻に就いて 他二篇』, 岩波書店.
- 服部四郎 (1979) 『音韻論と正書法 (新版)』, 日本語叢書, 大修館書店. ISBN: NA.
- Herman, Jeseoph・新村猛 (訳)・国原吉之助 (訳) (1971) 『俗ラテン語 (La latin vulgaire, 1951)』, 白水社 (クセジュ), 140 頁. ISBN: 4560054983.
- Humez, Alexande and Nicholas Humes (1981) *Alpha to Omega — The life & Times of the Greek Alphabet*: David R. Godine Publisher, pp.207. ISBN: 1567921019.
- (1985) *A.B.C et cetera — The life & Times of the Roman Alphabet*: David R. Godine Publisher, pp.275. ISBN: 087923587X.
- 市川三喜・松浪 有 (1986) 『古英語・中英語初歩』, 研究社. ISBN: 4327400823.
- 稲垣 徹 (2003) 「TeX と世界の文字」, URL:<http://www.lg.fukuoka-u.ac.jp/~ynagata/doc/font.pdf>, 1-49 頁.
- 猪塚 元・猪塚恵美子 (2003) 『日本語音声学のしくみ』, 町田 健編: 日本語のしくみの探る シリーズ 2, 研究社. ISBN: 432738302.
- 逸見喜一郎 (2000) 『ラテン語のはなし通読できるラテン文法』, 大修館書店, 292 頁. ISBN: 4469212628.
- 岩本 一・Sandra Lanara (2001) 『コミュニケーションのための音声学—イギリス英語とアメリカ英語』, 評論社. ISBN: 4566057410.
- Kadmon, Naftali (1997) *Toponymy, the lore, lows and language of geographical names*: Vantage Press, pp.333. ナフタリ カドモン著, 2004, 「地名学 地名の知識・法律・言語」国土地理院技術資料 (財) 日本地図センター 388p. ISBN:4889461418, ISBN: 0533135311.
- 鏡味明克 (1997) 「日本の地名標識におけるローマ字表記の問題点」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 第 48 巻, 1-7 頁.
- 柿本重宣 (2003) 『なぜ言葉は変わるのか—日本語学と言語学へのプロローグ』, ナカニシヤ出版, 173 頁. ISBN: 978-4888486378.
- 上西俊雄 (2004) 『英語は日本人教師だから教えられる—アルファベットから教える英語教育私案』, 羊泉社, 190 頁. ISBN: 4896918053.
- 風間喜代三 (1979) 『言語学の誕生—比較言語学小史』, 岩波書店, 233 頁. ISBN: 4004200695.
- 金田一京介 (1976) 『日本語の変遷』, 講談社学術文庫, 203 頁. ISBN: 4061580906.
- 小林正憲 (2005) 「流音について—R と L の言語学」, 『四天王寺国際佛教大学紀要』, 第 40 巻, 149-169 頁.

- 小泉 保 (1978) 『日本語の正書法』, 日本語叢書, 大修館書店. ISBN: 4469220191.
—— (2003) 『改訂 音声学入門』, 大学書林. ISBN: 4475018633.
- 小松英雄 (1981) 『日本語の音韻』, 日本語の世界 7, 中央公論社. ISBN: NA.
- König, W (2005) *Atlas Zur Deutschen Sprache*: Deutscher Taschenbuch Verlag, pp.256.
- 河野六郎 (1994) 『文字論』, 三省堂, 161 頁. ISBN: 4385355878.
- 窪蘭晴夫・太田 聡 (1998) 『音韻構造とアクセント 中右 実 (編) 日英比較選書』, 研究社. ISBN: 43272601X.
- 馬渕和夫 (1993) 『五十音図の話』, 大修館書店. ISBN: 4469220930.
- Mackinnon, R. (1971) *Gaelic—Teach yourself books*, London: The English Universities Press, Ltd., pp.324.
- Man, John (2001) *Alpha Beta: How 26 Letters Shaped the Western World*: John Wiley & Sons. ISBN: 047141574X.
- 松本克己 (1998) 「流音のタイプとその地理的分布—日本語ウ行子音の人類言語学史的背景」, 『一般言語学論叢』, 第 1 巻, 1–48 頁.
- 松澤善好 (2004) 『英語耳—発音ができるとリスニングができる』, ASCII. ISBN: 4756145272.
- Morwood, James (1999) *A Latin Grammar*: Oxford, pp.194. ISBN: 0198602774.
—— (2002) *Oxford Grammar of Classical Greek*: Oxford, pp.270. ISBN: 0195218515.
- 中島文雄 (2005) 『英語発達史 (改訂版)』, 岩波全書. Published firstly in 1951, ISBN: 4000218808.
- 中尾俊夫 (1985) 『英語学体系 11 音韻史』, 大修館書店. ISBN: 4469140619.
- 野中 泉 (2005) 『英語舌のつくり方—じつはネイティブはこう発音していた!』, 研究社. ISBN: 4327440841.
- 大野 晋・柴田 武 (編) (1977a) 『岩波講座 音韻 (日本語 5)』, 岩波書店, 485 頁.
—— (1977b) 『岩波講座 文字 (日本語 8)』, 岩波書店, 450 頁.
- Posner, Rebecca・風間喜代三 (訳)・長神悟 (訳) (1982) 『ロマンス語入門』, 大修館書店, 361 頁. The Romance Languages A linguistic introduction, ISBN: 4469211087.

- Pullum, Geoffrey K.・William A.Ladusaw・土田 滋(訳)・福井 玲(訳)・中川裕(訳) (2003)『世界音声記号辞典』, 三省堂, 349頁. Phonetic Symbol Guide, 2nd ed.1996, ISBN: 4385107564.
- Roach, Peter (2001) *English Phonetics and Phonology: A Practical Course/Student's Edition*: Cambridge Univ Press, 16th edition. ISBN: 0521786134.
- Robinson, Andrew (1999) *Story of Writing*: Thames & Hudson. ISBN: 0500281564.
- Rockwood, W. B.・岩本 忠(訳) (1987)『インド・ヨーロッパ諸語の展望』, 三修社, 333頁. ISBN: 4384047320.
- Sacks, David (2003) *Letter Perfect—The marvelous history of our alphabet from A to Z*: Broadway Books, pp.397. formerly titled as *Language Visible*, ISBN: 0767911733.
- 斎藤純男 (1997)『日本語音声学入門』, 三省堂. ISBN: 4385345864.
- 城田 俊 (1995)『日本語の音』, ひつじ書房. ISBN: 4894761580.
- 島岡 茂 (1974)『フランス語の歴史』, 大学書林, 183頁. ISBN: 4475015677.
- 高津春繁 (1992)『比較言語学入門』, 岩波書店, 286頁. ISBN: 4003367618.
- 竹林 滋・斎藤弘子 (1998)『英語音声学入門』, 大修館書店, 第改訂新版版. ISBN: 4469244244.
- 田中美知太郎・松平千秋 (1951)『ギリシャ語入門』, 岩波全書, 324頁.
- 田中館愛橘 (1885)「本會雑誌ヲ羅馬字ニテ發兌スルノ發議及ヒ羅馬字用法意見」, 『理學協會雑誌』, 第16巻, 105–132頁.
- (1936)「La Phonétique Japonaise au point de vue Phonologique et son Application à l'Orthographe Nationale (音韻学ヨリ見タル日本語ノ音声ト正字法)」, 『田中館愛橘論文集 Kuzu no Ne』.
- Tatuoka, H. and H. Yamada (1996)“On the theory and practice of the Romanized Writing System for Japanese”, *Research bulletin of the National Center for Science Information System, Japan*, Vol. 8, pp. 27–74.
- 東郷正延 (1966)『ロシア語のすすめ』, 講談社(新書). ISBN: 4061154958.
- 築島 裕 (1986)『歴史的仮名遣い—その成立と特徴』, 中公新書, 194頁. ISBN: 4121008103.
- ウド＝フリース・大泉昭夫(訳) (1998)『チョーサーの言語入門—音韻論・韻律論・形態論』, 開文社出版. ISBN: 4875715722.

Walter, Henriette (1994) *L'aventure des langues en occident – Leur origine, leur histoire, leur géographie*, Paris: Editions Robert Laffont, S. A., pp.588. エンリエット ヴァルテール著 平野和彦訳 2006, 西洋言語の歴史, 藤原書店.

渡辺 実 (1996) 『日本語概説』, 岩波書店. ISBN: 4000260022.

—— (1997) 『日本語史要説』, 岩波書店. ISBN: 4000260111.

山田秀男 (1981) 『フランス語史』, 駿河台出版社, 173 頁.

山田尚勇 (2002) 『日本語をどう書くか—入力法および表記法のヒューマン・インターフェース学入門, SCCS Technical Report no. 1999-2-03』, 中京大学 情報科学部.

柳田征司 (1993) 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』, 武蔵野書院. Not Obtained, ISBN: 4838601387.

Zino, Song (1990) 『言語学への招待』, 南雲堂. ISBN: 4523300534.



